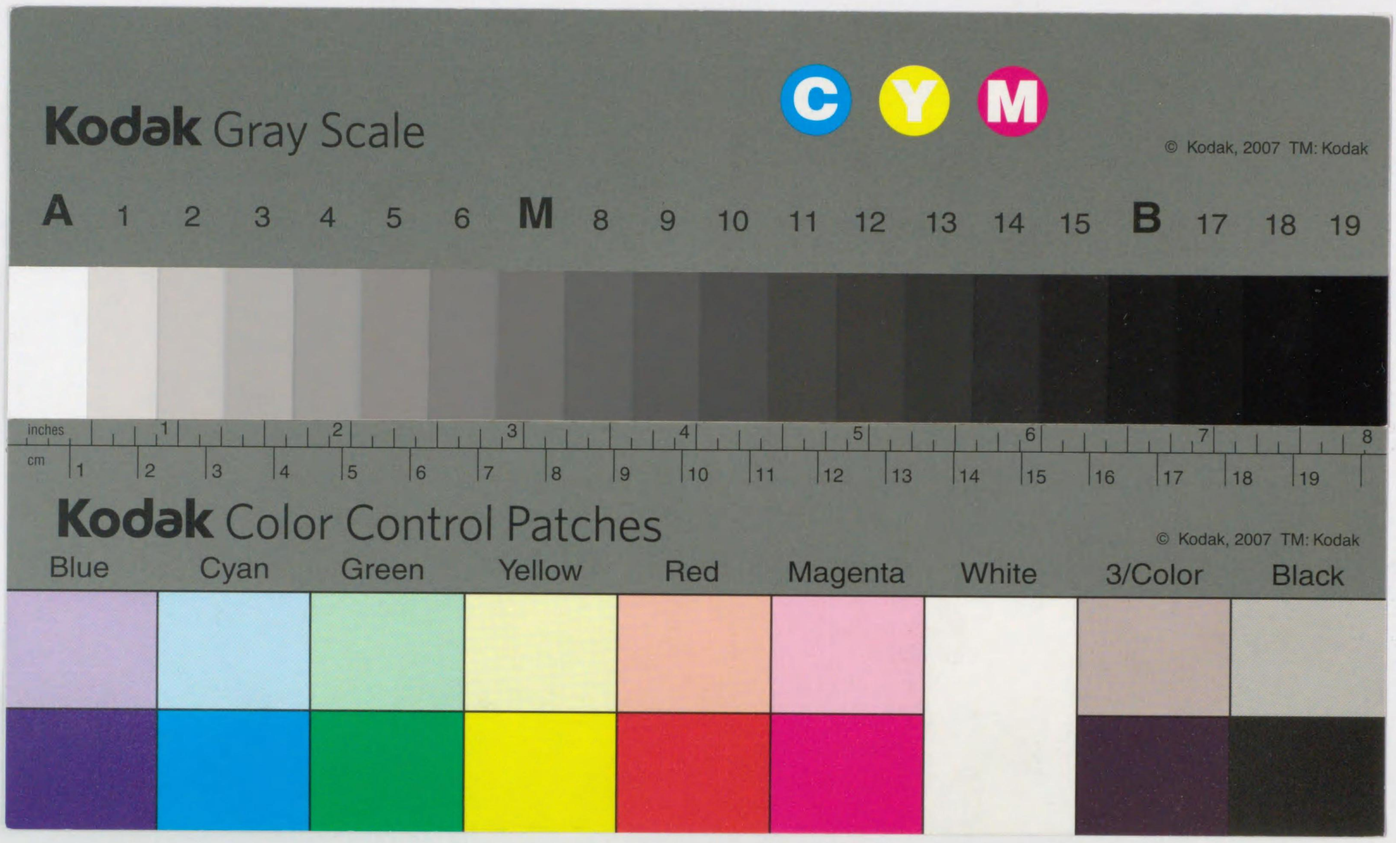

593
593-8
12005015267 06

大日本地誌大系

26 近江國輿地志略下

蘆田伊人編

雄山閣版

593-8

大日本地誌大系 近江國輿地志略下卷例言

一 本卷には、近江國輿地志略百卷の中、第四十九卷より第百卷までを收錄し、且卷末に、租稅編一編と、寒川辰清の自序とを附收したり。

一 租稅編は、本書上卷の例言にも記したる如く、普通の流布本には之を缺き、辰清の校本と思はるゝものにのみ收められたるものなり。之に因りて考ふれば、辰清が後に本書を修正の際、之を除きしものなるべし。而して校本の凡例に、特に租稅につきての一節あり。之によれば、その編に記載せる各村の草高は享保初年のものとあれば、卽ちその頃の調査に係れるものなるべし。

一 辰清の自序は、右の校本の卷首にのみあるものにして、本書編輯の由來を知るに足るものなれば、合せてまた附收したり。

一 其他本書の校訂、體裁、並に細目錄等のことは、凡て上卷の例に依れり。

一 本卷は舊刊地誌大系所收のものを再刊せるものなり。

昭和五年四月

蘆田伊人識

先考彝德院辰清之墓

君諱辰清別號梅墅自稱鐵心忠肝居士本姓忠邨以元祿丁丑十一月七日生于京城膳所本多侯家臣寒川辰成養之以其子妻之承襲其業曰水右衞門一男名維清一女養勢州龜山侯家臣伊藤氏名由伊君仕本多下總侯主膳侯忠良含章服勤幽淑二侯甍異之親禮甚篤曾因侯命作近江輿地志一百又六本以進呈復述四民本傳武射必用等現行于世元文中有事故黜適攝寓于唐金氏恒看離騷至與雞鶩爭食鳧雁啄粱藻慨嘆以數之又看韓子說難深感其懷矣元文己未六月二十四日病而歿唐金氏之館享年四十又二葬于難波瑞龍寺知寺某公諡曰彝德院

男　維清泣血稽顙勒
友人　天　珠　子謹誌

近江國輿地志略卷之四十九

臣　寒川辰清編輯

甲賀郡第一

夫以甲賀郡の名久し。【日本紀】の天武紀に、鹿深に作る。【續日本紀】には、甲賀に作れり。【日本姫世記】【鎭座傳記】及【鎭座本緣】皆以甲可に作る。【油日神社緣起】曰、聖德太子、誅守屋、勝照四年戊申卯月日、當國有行幸、因勝軍之因緣、先郡號甲賀云云、臣按するに、油日社の緣記は、僞說のみにて、論するにたらず。勝照といへる年號、日本になし、いづれの年號にや、太子を行幸と記す、笑べし。甲賀の名、何そ此時に始るべきや。虛僞もつとも甚し。【續日本紀】聖武天皇紀曰、天平十四年二月庚辰、始開恭仁京、東北道通近江國甲賀郡云云、【朝野群載】曰、天曆十年六月十三日、太政官符、近江國、應以散位從七位上甲可公是茂、令追捕部內凶黨事云云、凡此郡の地勢、略扇子の形に似たれり。南廣して、北狹し。南は伊賀國界信樂・燒尾・油日山に接し、坤は山城國裏白嶺乃土の山に隣、西は栗太郡の界に連る。乾は野洲郡の界櫻山に交り、北は蒲生郡の界に竝。艮も亦蒲生郡に接す。東と巽とは、伊勢に續く。東は伊勢國界於岐須山薦野に至り、巽は同國界鈴鹿山に隣。

○甲賀山　夫とさす處なし。甲賀一郡の山は、凡て甲賀山なれば、最初に出す。【四海太平記】に、永正十年二月十九日、將軍義尹公は、河端將監知綱の計にて、辛崎より船にて、矢橋に着、夫より甲賀山に假の御所をしつらひ、安座なし奉ると云云。佐々木高賴も新將軍家に打まけ、甲賀山に籠り、佐々木義弼も信長に打まけ、甲賀山に隱る。凡此郡山深く、谷幽にして、守據によし。

【夫木集】　人　丸

秋くれはかふかの山に立霧を、海とも見つる波たたなくに

○信樂莊　この邊は山深して、信樂の山を歌仙多く詠せり。【續日本紀】には、紫香樂の字に作る。信樂莊八村と云は、宮町・勅旨・神山・小川・多羅尾・柞原・黃瀨・牧村、以上八村也。朝宮・野尻は信樂の外村なり。其餘は皆八村の端村なり。【保建大記】曰、信西素善天文推步、當白虹貫日、入奏曰、將有變速避之、直奔南都踰信樂山、又見星變、謂我不免乃生埋土中、信賴遣前出雲守源光保、索而獲之斬首

(石堂山)

梟京師云云、今何れの處にや、詳ならず。信西は藤原光憲と號す。剃髪して圓空と號し、後信西に改む。進士藏人實兼か子なり。【平治物語】に云。少納言信西宇治路へかゝり、田原の奥大道寺と云所領にぞ行にける。石堂山の後、信樂の峯を過、はるかにわけ入と云云。【百練抄】に曰、信西信樂山に於て自害すと云云。臣按するに、是等の說を以て見る時は、信西か墓信樂の中に有の義なり。然れどもなし。墓は山城國大道寺村觀音堂の前道の傍にあり。【山城名跡志】に曰、石堂山・信樂皆近江なり。大道寺より寅卯に當て、其路三里有。然は彼塚は江州に有べきを、今此所にある事、平治に異也。古老云、光保塚を穿つて、信西を具して京に歸るに、此所に至て息絶て死す。仍首を捕て歸る。其骸を此處に埋むと云。此說的實なるべし。

【續後撰集】　源　重之

春立とほとや經ぬらん信樂の、やまは霞にうつもれにけり

【續古今集】　中務親王

今よりや外山の色もかはるらん、秋風さむししからきの里

【金葉集】　隆　源

都たに雪ふりぬれは信樂の、まきの杣山あと絶ぬらん

【詞花集】

きのふにもあられ降しか信樂の、外山の霞春めきにけり

【新勅撰集】　藤原頼氏

しからきの杣やま櫻春毎に、いく世宮木にもれて咲らん

【新後撰集】　隆　祐

しからきの外山の末の時鳥、たか里近き初音成らん

【續後撰集】　通　民

たつねみんけふも霞は信樂の、外山の紅葉色や增るゝと

【續後拾遺集】　承　覺

なるかみの音も遙にしからきの、外山を過る夕立の雲

【新後拾遺集】　頓　阿

里人は衣うつなり信樂の、外山の秋や夜さむ成らん

【六帖】　よみ人しらす

信樂の峯立ならす春霞、はれまも物を思ふ比か

(土田山)

な

【新六帖】　爲　家

雨過る外山の松の木蔭より、しからき笠そ見え隱する

【壬二集】　家　隆

しからきの外山の奥に聲す也、埋れかはる槇の雪おれ

【夫木集】　但馬守經政

冬さむみ槇の葉しろく霜さへて、朝さひしかる信樂の里

○黄瀨村　是栗太郡大鳥居村の北に當れるの村にして、牧村より十八町あるなり。

○法國寺　黄瀨村に在。淨土宗。

○無量寺　同村にあり。同宗。

○西念寺　同村にあり。同宗。

○内裡野　黄瀨村に有。村よりは巳午の方にして、八九町四方許りの郊原也。山を土田山と云。土俗或は寺野とも云り。相傳、聖武天皇遷都の地也と。臣按するに非也。

【續日本紀】曰、聖武天皇天平十四年秋八月癸未、詔曰、朕將行幸近江國甲賀郡紫香樂村、己亥行幸紫香樂宮、庚子行幸紫香樂宮、同十五年七月癸亥行幸紫香樂宮、同十月壬午東海・東山・北陸三道二十五國調庸等物、皆令貢於紫香樂宮、乙酉皇帝御紫香樂宮、爲奉造盧舍那佛像、始開寺地、於是行基法師等率弟子等勸誘衆庶、十一月丁酉、天皇還恭仁宮、車駕留連紫香樂、凡四月焉、同十六年十一月壬申甲賀寺始建盧舍那佛像、體骨柱、天皇親臨手引其繩、癸酉、天皇幸甲賀宮云云。是を以て知べし。土人の寺野と云は故あり。甲賀寺の跡なれば也。今に礎等處々に殘れり。土中を穿ては、多は古瓦を得る事有、甲賀寺の瓦なるべし。何の日此寺廢せしにや、詳ならず。【續日本紀】始には紫香樂宮に行幸と記し、後には甲賀の宮に幸すとあれば、土地各別のやうにきこゆれど同し事なり。紫香樂の行宮を轉して、甲賀寺となし玉ひしより、後の行幸の時は、外の行宮なれば、甲賀宮としるせる成べし。此地佛を鑄たるしるしに、今に鍛冶屋跡なと云處、此傍に有。黄瀨村の農工次郎九郎といへるものあり。彼か先祖此大佛の事にあづかりし者也といひ傳ふるなり。

(寺野)　(甲賀寺)

○信樂川　黄瀨、牧村の中間を流れ、西に轉し、栗太郡へ流出、大戸の瀧となり、黑津川となる。詳に黑津川の條下に出す。

○牧村　黄瀨村の東に有、勅旨村より十八町有。牧或は槇の字に作る。然れども天智天皇の御時近江國に牧を置せ

玉ひし事、【日本紀】にあれば、此國牧村の名多くあるも理なり。やはり牧の字なるべし。

○天滿天神社　牧村に在。祭神菅丞相の靈也。德治三年是を勸請す。祭禮毎年四月初の卯、五月五日、宮町村・黃瀨村の產土神なり。

○天德寺　則天滿宮の別當なり。松壽山天德寺と號す。天台宗。

○永仙寺　同村にあり。淨土宗。

○妙樂寺　同村にあり。同宗。

○眞行寺　同村にあり。天台宗。

○車野　牧村より勅旨村へ行兩村界に在。相傳、聖武天皇の御車を立置し地なりと云。

○車塚　車野にあり。小き塚なり。今印に櫻の木一株あり。土俗或は家隆塚ともいへり。いかなる故と云事を知らず。栗太郡富川村にも家隆の松といふあり。家隆が信樂を歌に詠し玉ふ事は、多く【壬二集】に見えたり。此邊巡行の事もありしにや、覺束なし。家隆は壬生の二位と號す、權中納言藤原光隆卿の二男なり。嘉禎二年十二月廿二日、病によつて出家、七十九歲、法名佛性、同三年四月九日薨す。八十歲。

○岩倉藥師堂　牧村にあり。

(家隆塚)

○本土嶽(モトツチ)　牧村より一里あり、乃ち伊賀近江の國界也。

○勅旨村　黃瀨村の正南に在。牧村より半路有。長野より十五町あり。土俗てりし(ヒイ)村と呼り。訛なり。此地も黃瀨村と同しく、陶器を出す事、土產の條下に記す。相傳、廢帝此地にましく〳〵て、勅の旨ありけれは、つゐに村の名とすと云。臣竊に按するに、廢帝の保良の都と云は此地か、ほらと號する地有。廢帝の事跡あり。村の名といひ、旁此地なるべきにや。若又都を建へき土地にあらずと云說もあるべけれども、畢竟廢帝は都の名のみ許なり。廢帝は天平寶字三年に位に卽、都を保良に遷せしは、天平寶字五年なり。天平寶字八年には帝位を廢せられ玉ひしかば、漸に三年の間なり。【續日本紀】曰、廢帝天平寶字五年冬十月、遷都於近江國保良、甲子行幸保良宮云云、是なるべし。但し、勅旨と云處諸國に多く在、信濃、上野にも勅旨といへる處ありて、牧なり。八月の駒牽に古は牽上りしこと【拾芥抄】に見えたり。然れは此勅旨も牧につゐての名にや、近邊に牧村あれば、かたがた以て牧に付ての名なるべし。

○天滿天神社　勅旨村に在。社僧光源寺と云。

○玉桂寺　同村にあり。眞言宗。本尊地藏。行基の作也。

○保良舊都　土俗相傳、玉桂寺の上の山の御墓は、廢帝の御墓なり。かひこの保良と云。相傳、廢帝此地に棲止し玉ふ。古昔は岩窟の洞あり。廢帝の御製に

しからきや外山の奥に住居して、かひこの洞に我ありとしれ

此歌を、椿の葉にしるして、信樂川へ流し玉ふと云。窟今崩れて跡かたもなしと云。臣按するに、勅旨村一邨其餘の村までも、古の都の時は、みな保良といひし成べし。かひこの洞とは、例の土俗の誤にして、保良といふより岩窟有し成べしなとゝおもひ、岩窟も今はなしと云成べし。或は云

しからきや外山の奥に住居して、われこの洞にありとしるべし

廢帝の詠なりといへり。此歌得たりとす。保良都の事前に詳に出せり。

(かひこの洞)

○神山村　柞原より一里在。江田村・長野村は當村の枝村なり。からやま村と云。

○牛頭天王社　神山村にあり。

○法藏寺　同村に在。淨土宗。

○篠(サヽ)峰　神山村より一里半在。伊賀近江の國界也。

○江田村　神山村の枝村なり。柞原村より十二町在。

○淨土寺　江田村にあり。淨土宗。

(からやま村)

○長野村　神山村の枝村なり。柞原村より十八町在。今此村にて磁器を出す。土俗專、信樂燒と云。

○天滿天神社　長野村に在。

○法輪寺　同村に在。淨土宗。

○常勸寺　同村に在。同宗。

○小川村　江田村の南に在。柞原村より十八町有。

○淸光寺　小川村に在。淨土宗。

○大廣寺　同村にあり。眞言宗。

○近衞殿塚　大廣寺界內にあり。土俗相傳、近衞基家公の塚なりと云。臣按するに、近衞家に基家公と云なし。大織冠二十五代深心院基平公の男に、關白左大臣家基公と號せるあり。是なるべし。弘仁年中の近衞家にて、當時の家久公より、十六代以前なり。相傳、近衞家基公信樂に蟄居の事あり。多羅尾氏は其時の落胤なりと云。臣此事を近衞家に相尋奉るといへとも、知れず。蓋信樂は其時代の所領なりと云。家基公は、淨妙寺とも、高山寺とも謚號あり。永仁四年六月十九日薨す。三十六歲なり。

○古城址　小川村に在。峯廣さ二町に壹町許。是多羅尾道可の城跡なり。道可は天正年中のものなり。道可の事は栗太郡に出す。

(信樂燒)

○信樂越　是小川村より伊賀國丸柱村へ越るの路也。或は丸柱越とも云。近江國勢田橋本より、國界迄九里半、國界より伊賀國上野へ四里半。（丸柱越）

○多羅尾村　小川村の南東にある村なり。小川村より一里半あり。應仁二年七月、大納言義視江州多羅尾に移り、九月三日多羅尾御立あつて、石山に參籠と【續太平記】に見えたり。

○高宮權現社　多羅尾村に在。

○淨願（願イ）寺　同村に在。淨土宗。本尊阿彌陀。慈覺大師の作也。

○平樂寺　同村に在。眞言宗。本尊不動明王。

○不動寺　同村に在。本尊石像の不動。

○龍泉寺　多羅尾に在。【重編應仁記】に出。

○於土岐越　是多羅尾村より東の方、伊賀國西山村へ越るの路なり。其路おとき峠を經、故に於土岐越の名あり。勢多橋本より國界へ十里、國界より伊賀國上野へ二里有也。於土岐嶺は、伊賀・近江の國界なり。多羅尾村より行程一里。（乃土越）

○野殿（ノトノ）越　是多羅尾村より、山城國野殿村へ越るの路なり。乃近江・山城の國界なり。多羅尾村より一里あり。是等【續日本紀】に所謂十四年二月庚辰、始恭仁東北の道を開、近江國甲賀郡に通すと、是なるべし。

○朝宮村　杉山村の西に在。黃瀨村より四里、野尻村より三十町許行程あり。杉山村へも三十町許在。此朝宮村に、上下二村あり。朝宮村の坂の上に湯屋谷と云處在。其上を登る事五町許に嶺あり。是山城・近江の國界なり。湯屋谷より朝宮村へは二里半あるなり。（湯屋谷）

○三所大明神社　朝宮上村にあり。

○誓光寺　同村に在。淨土宗。

○仙禪寺　同村東谷の奥にあり。岩谷山仙禪寺と號す。岩屋あり。毎月朔日に護摩を修す。本尊十一面觀音。春日の作。

○牛王社

○稻荷社　俱に朝宮下の村に在。

○德源寺　同村にあり。淨土宗。

○古城址　同村領に在。何人の居城と云事を不知。或說に赤松滿祐伊賀責の時、しばらく接止すといへり。

○裏白峠越　【山城名勝志】に越白越に作れり。是朝宮村より山城國宇治田原鄕之内、奥山田村へ出るの路なり。勢多橋本より國界へ七里、國界より山城國宇治へ六里なり。此裏白峠、山城近江の國界なり。少々嶮なりといへとも、牛馬荷を負て往來す。是も【續日本記】に恭仁東北の道を開、近江國甲賀郡に通すと云もの、是なるべし。

○野尻村　朝宮村の西に在。栗太郡富川村の南に當り、谷筋に路あり。嶮難にあらず。牛馬も通へり。富川村より行程一里。枝村を桶井村と號す。

○大宮權現社　野尻村に在。

○本覺寺　同村に在。淨土宗。京一心院の末寺なり。

○桶井（オケ）村　野尻村の枝村なり。富川より十八町在。此村の笠神の森下の川を甲賀・栗太兩郡の界とす。界のこと、栗太郡富川の條下に詳にしるす。

○光明寺　桶井村に在。淨土宗。京一心院の末寺なり。

○柞（ホ）原村　上中下三村あり。中野村・田代村・畑村・杉山村は皆枝村なり。朝宮村より一里ある也。【今昔物語】に近江國栗太郡に大なる柞の樹あり。此園五百尋有。其國の志賀・栗太・甲賀三郡の土民此木によつて、日あたらず、田畠作る事なし。其郡々のもの是を患へて、帝に奏す。帝掃守の宿禰を遣て、此木を伐倒さしめらる。夫より田畠富饒なりと有。臣按するに、【今昔物語】には栗太郡に在とあれども、時世の沿革にて、郡の古今かはる事珍らしからず。疑らくは柞原と云時は、昔の柞の樹ありし處なるべし。

○牛頭天王社　柞原村に在。

○眞德寺　同村にあり。淨土宗。

○中野村　柞原村の枝村なり。

○來迎寺　中野村に在。淨土宗。本尊阿彌陀、春日の作。

○蓮華寺　同村にあり。本尊藥師、行基の作。地藏菩薩は惠心の作なり。

○杉山村　柞原の枝村なり。柞原より十五町あり。

○光岸寺　杉山村にあり。淨土宗。

○畑村　柞原の枝村なり。柞原より一里ある也。

○春日大明神社　畑村にあり。

○田代村　柞原の枝村也。柞原村より一里半在。

○極樂寺　田代村にあり。淨土宗。

○宮町村　勅旨村の西に在。牧村より坤なり。黃瀨より十五町あり。

○飯道寺山　宮町村に在。始は餉山と號す。

【金葉集】に讀人知らず

近江にかありといふなる餉山、君は越けり人とねくさし

然るに飯道寺草創以後、金奇（ヒカリ）山と號す。土俗は飯道寺山と呼り。麓より十八町登る。膳所より勢多へ二十九町、勢多より枝村へ五十町、枝村より大鳥居へ二里、大鳥居より黃瀨へ一里、黃瀨より宮町へ十五町、宮町より飯道寺（山餉）

へ十八町なり。

○飯道寺　飯道寺山に在。役行者の開基也。和銅年中金勝寺安願和尚の弟子安受(ゾイ)和尚中興す。安受の弟子を重受と云。相繼て法相宗たり。重受の弟子を安峯法印といふ。安峰專修驗道をつとむ。七百年以來梅本院・岩本院・大峰・當山方・三寶院御門主の先達を勤め、每年金峰山に入の緣を以て、其時始めて山號を改、金奇山飯道寺と號す。五院あり。五大尊を表すと云。五坊は所謂梅本院・岩本院・古菴室・鳥居坊・水本坊也。今梅本・岩本の二院のみ住僧あり。此五院の内に亦坊在。梅本院内戒乘院・岩本院内西方院・古菴室院内智積院・行滿房・壽命院・不動院・驅性坊・鳥居坊院内金剛院・法乘院・壽量院・定泉坊・水本院内化城院・常樂院・大願坊・常應院・實觀坊・松壽院

○本堂　本尊藥師如來、日光、月光、十二神將竝に阿彌陀佛、不動明王、役行者の像等安置す。

○護摩堂　本尊不動明王。

○如法堂

○十一面觀音堂

○辨財天社　寺の中央に在。寺僧云、當地主の神也と云。非なるべし。

○飯道權現社　寺僧云、是熊野三山の權現にて、女人の高野山に准すと云。臣按するに、祭神素盞烏尊なり。飯道神社は【延喜式】の神名帳に見えたり。近江國甲賀郡八座の中の式内の社也。【三代實錄】曰、元慶八年三月廿七日戊子、授近江國從五位上飯道神、從四位下云云、是なり。かく古來の神社成しをいつしか、浮屠氏の爲に合せられて、兩部習合の社となつて、飯道寺といはねは知る人なし。嗚呼古實の妄失する事恨さらんや。辨財天を以て却て地主と稱す。若地主をいはゝ、此神社成べし。【國史實錄】にも飯道の神と載て、權現の名を云ず。況女人の高野山といふ事、兒女子の戲言なるべし。抑此宮山を餉山と號せし事も、この飯道の神ましますゆへの名なり。當村を宮町と號せしも、此神社によつてなり。古を好君子意をこゝにつけざらんや。

○山王權現社

○白髭社　飯道山西の麓にあり。

以上飯道寺の界内にあり。一山天台宗にて、比叡山の末寺也。御朱印二百石、信樂宮町高六百五十石の内を寺領とす。臣按するに、六百五十石俱に飯道神の社領なるべし。何れの日にや廢して、其内二百石殘りて、寺領と成御朱印あるなるべし。每年正月三日柴燒大護摩あり。正月四日西の山麓、白髭の社におゐて、柴燒大護摩執行す。三月三日諸人群集す。七月梅本・岩本二院金峰山へ入峯し、九月五日飯道寺へ歸る。則其日飯道權現の神前におゐて、柴燒大護摩あり。最笈渡の式法あり。

○法性寺　宮町村にあり。淨土宗。本尊阿彌陀。惠心作也。

○西光院　同村に在。淨土宗。觀音の像あり。相傳、これ光明皇后の守本尊也と。

○鵜飼駿河守城址　宮町村に在。駿河守は甲賀士廿一家の内なり。

近江國輿地志略卷之四十九　終

近江國輿地志略卷之五十

臣　寒川辰清編輯

甲賀郡第二

○檜物下庄　石部・柑子袋・平松・針・夏見・吉永・三雲・妙感寺・岩根・朝國・正福寺・菩提寺・東寺・西寺等の諸村を云。臣按するに、檜物はもと遺邇野の字にて、【日本紀】に出たり。往古蒲生郡遺邇野につゝき、此邊も遺邇野の中なりしゆへに、檜物庄と云。詳に蒲生郡檜物庄の條下に載す。この故に蒲生郡にある檜物庄をさして、檜物上の庄と云。當郡にある檜物庄をさして、檜物下の庄と云なるべし。

○石部村　甲賀・栗太二郡の堺なり。今東海道の驛次なり。栗太郡草津驛より三里なり。石部と號する事は、石部の神社あるを以て號せり。

【夫木集】　長　明

伊勢へ下りけるに、うち過て、いし部の原といふ所

にて、とも待ほとに、風いたくふけは、馬よりおりて、
よもきの中によりふして。
横田山石部か原のよもきふに、秋風さむく都戀し
も

閑齋詩

指來石部山、青嶂翠巒間、砂磧疊堆去、曾無草木看

○正一位吉御子大明神社　石部に在。社六尺四面、升形作。界内六百十八間巡。祭神未詳。油日大明神を、勸請する處なりと。其言に曰、油日大明神は大已貴命・伊弉諾尊。猿田彦命なり。如意輪觀音・摩利支天・勝軍地藏の垂跡也。平野蓮華所の氏神なり。百九十年餘以前石部驛次になりしより、石部の下の町五町の產土神とすと云。臣按するに、此地に限らず、土俗の言虛妄の說多くして、採用するに足らす。【大和姫世記】曰、倭姫命度坐時爾阿佐加潟爾多氣連等祖、宇加乃彦之子吉比女、次吉彦二人參相支云云、爾旦吉姫地口御田幷麻園進云云、或書曰、石部驛所祭二座、上號吉彦大明神社、下號吉姫大明神云、是を以て見れは、【倭姫世紀】にいへる處の神なるべし。油日大明神の事は、油日の條下に出す。祭禮每年四月二の酉の日なり。

○上田大明神社　同村に在。土俗相傳、當社は嵯峨天皇の御宇、上田蓮淨・大塚善生長者二人、奏聞を經て千手觀音・十一面觀音の兩堂を草創す。其時の鎭守たり。織田信長の兵火に、寺院烏有となる。幸に鎭守の社のみ殘れり。今の上田の社是也。本地虛空藏菩薩。祭禮每年四月五日。石部上の社と號すと云。臣按するに、上田蓮淨大塚善生と云者知らす。若實に此者あつて、かゝる寺院を草創し、宮をたつる事有とも、其ものゝ名をとつて神號とすべきいはれなし。惣て虛僞の言成べし。此社は【延喜式】神名帳に載る所の、甲賀郡八座の中の、石部鹿鹽土の神社と云是なるべし。祭神吉比女成べし、事は前の條下に見えたり。石部上の神社と號せしをとなへ失ひ。上の字をつくる成べし。

○善隆寺　同村に在。石部山善隆寺と號す。淨土宗。金勝東坂阿彌陀寺の末寺也。天正元癸酉年、覺譽的應和尙の開基。本尊阿彌陀如來は傳敎大師の作なり。始當驛の町裏にあり。地利宜からざるを以て、貞享元甲子の年、今の地に移す。是則石部右馬允平家淸が屋敷跡なり。此善隆寺も、家淸が草創也と云。

○眞明寺　同村にあり。淨土宗。金勝阿彌陀寺の末寺也。嶺譽蓮幸の開基。慶長二丁酉の年の建立なり。當寺地は、青木右衞門佐屋敷跡なりと。青木右衞門佐は、信長の家人紀伊守一矩初勸七郎と云。此子成べし。一矩は後越前

丸岡の城主となれり。子を右衞門佐と云、是なるべし。

○明淸寺　同村に在。一向宗。西本願寺の末寺なり。

○蓮淨寺　同村に在。一向宗。東本願寺の末寺なり。

○淨現寺　右同斷。

○西福寺　右同斷。

○立石川　水源は金勝東坂村の山間より流出。川下石部板橋川へ流、野洲川に入。金勝東坂村より此川に傍て石部に出る路甚だ近し、山間迷やすし。且云ふ立石川と號する事は、川の半に大石二つ竝び立ゆへに此名あり。

○西寺村　石部驛の南にある村なり。此東に東寺村あり。土俗是を、南都の都の時の、東寺・西寺也と云。非なり。若南都の東寺・西寺をいはゞ、東大寺・西大寺をこそ云べきに、何ぞ遙々と此地までに及んや。或はいふ。滋賀の都の時の東寺・西寺なりと云說も非なり。桓武天皇延曆十三年。都を今の地に移す。平安城是なり。西寺村常樂院は、元明天皇の草創。東寺村長壽寺は、聖武天皇の草創也。【水鏡】【一代要記】及【歷代皇記】を按するに、延曆十五年東寺を創、藤原伊勢人を以、造東寺の長官とすと見へたり。【帝王編年記】に曰、延曆十五年東西の兩寺を建立し、東西兩京の鎭護とすと云。是を以て考ふるに、帝都鎭護の東西兩寺ならば、一時に草創すべきに、此の如く元明帝と、聖武帝と、時代かわれり。唯同じ如き二の伽藍並び建ゆへに、西の方に在を西寺と云、東の方に在を東寺と云成べし。

○常樂院　西寺村にあり。阿星山常樂院と號す。土俗の所謂西寺是なり。緣起一卷あり。按するに、緣起に金肅菩薩の靈地、元明天皇の草創、行胤上人の再興にして、七堂の大伽藍なりと云云。然れども、近世衰微頹敗して、纔に一觀音堂及寶塔一基を存す。

○本堂　其營造甚美飾畫棟彫梁、既に千有餘歲を經、略攝津國天王寺釋迦堂の形に似たり。相傳、今の觀音堂は古昔の釋迦堂也。本尊觀音、脇立二十八部衆、俱に運慶の作る處也。廿八部衆は那羅延堅固天・大辨才天・密迹金剛・大梵天王・摩醯首羅王・帝釋天王・東方天・金色孔雀王・毘樓勒叉・摩和羅天・毘樓博叉・滿善車王・神母天・五部淨天・難陀羅王・迦樓羅王・緊那羅王・阿修羅王・金大王・乾闥婆王・婆迦羅王・金毘羅王・滿仙王・摩候羅王・散脂大將・畢婆迦羅王・婆藪仙人・風天雷電なり。此觀世音の像、本阿星山頂の精舍にあり。中世阿星山の堂舍灰燼となりて、自餘の財寶了遺なし、ひとり此觀音の像、炎の中より躍り出で、今の本堂（古釋迦堂）に來りて、全く存する事を得たり。爾來、此堂の本尊とし、釋迦の像は寶塔に安置すと云。

○三重寶塔　釋迦如來の像を安置す。此事前に詳なり。今の寶塔は、應永五年釋延慶が再興する所なり。

○石寶塔　本堂の左、數十歩にあり。相傳、往古剃髪を釋迦堂の下土中に埋む。是を望者あるに因てなりと云。中世釋迦堂を轉して、觀音堂とするに依て、髪を堂下に納る事を禁し、此石塔を建て塔下に納ると云。

○山整權現社　本堂の左に在。何れの神と云事をしらす。

以上常樂院の界内に在、什物多し。細字の法華經一箱有、紙の天地四寸長さ一尺許其微細いまだ見ざる處なり。卒爾として是を見る時は、只墨を以て縷を引が如し、詳に是を見る時は、則文字甚鮮明なり。其奥書に曰、應永二十四丁酉年五月十二日、甲賀郡常樂院施入之、執筆道智比丘、三十三歳、四十五日書焉云云、紺紙金泥の法華經弘法大師の筆なり。龜山院の官符、其略に曰、水天供可令勤修給、右少辨時淵奉之、西輪院御房云云。沙門勸進の狀、世尊寺行尹の筆跡なり。釋迦八相の圖、傳教大師の畫なり。彩色十六羅漢、晃殿司の畫なり。赤鬼の假面二つ、一つは角あり、一は角なし。俱に運慶が作なり。相傳、古昔正月十三日夜及十五夜土人件の假面を被り、夜叉の形を摸し、炬火を把て相交逐走し、堂の前後を巡行す。是を鬼走と云。何れの日か此事退轉す。蓋追儺の遺事なるべし。今西輪院寺の事に預る。古昔の坊舍の殘れるなるべし。天台宗比叡山の末派なり。臣一日此地を巡覽するに、棟傾き軒破れ、甚頽破に及びぬ。猶他日の荒廢料知せられ、故蹟の形なくならん事悲にたへたり。

○東寺村　西寺村の東八町許に在。西寺村の條下に載す。

○長壽寺　東寺村に在。阿星山長壽寺と號す。土俗の所謂東寺是なり。聖武天皇の開基。金肅菩薩の靈地。清和天皇の再興なり、往古は大迦藍なりと。いま纔に一堂を存す。本尊地藏菩薩像は、行基法師の彫刻する處なり。阿彌陀佛像一體は、染殿后亡母追福の爲に安置せらるゝ處なり。胎金兩部の曼荼羅、傳教大師の畫なり。觀經曼荼羅、惠心僧都の筆なり。十王の圖十幅及涅槃の像一幅、顔微之が筆也。源頼朝の壽永二年二月廿四日檜物莊許多の田を以て寺供に充るの一通あり。源尊氏の一通あり。延德三年六月十四日、惠林院義村の一通、相模守貞時の一通等あり。赤鬼の假面あり。相傳、此假面は西土より傳來する處なりと。當寺にも、古昔は西寺村常樂院と同じく、鬼やらひ有。養老年中より始りし事といへり。今は兩寺とも絶てなし。當寺に狩野柳園筆樺櫻の畫一幅あり。六條黄門有慶卿の和歌載て有。此畫舊樹の形なりと云。先君雄山

公、名木の絶にし事をなげかせ給ひ、舊臣三松郡大夫晴蓬、寒川水右衞門辰成をして、其舊樹の形を考索がさしめ、狩野柳園に畫しめ、六條黄門有慶卿に乞て、和歌を求め、當院に收しめ玉ふ處也。

【歌枕】　菅原光俊

近江なる檜物の里のかば櫻、花をばわきてをる人もなし

此歌【夫木集】にも入れり。一説下句ちらぬは花のとちめなりけりと云。但此下句【新六帖】歌に

ひつ川の岸に匂へるかば櫻、ちらぬは花のとちめなりけり

ともあり。

○聖武天皇塔　長壽寺界内にあり。

○柑子袋村　石部驛の東にあり。

○博知大明神社　柑子袋村にあり。

○地藏堂　同村に在。極樂寺と號す。

○慈念寺　同村に在。東本願寺派。

○光林寺　同村に在。西本願寺派。

○養林寺　同村に在。相傳、青木民部城地なりと云。按するに、青木は紀伊守なるべし。民部とは家違べし。民部は美濃所産の人にて、後に青木法印と云。秀吉公に仕し人なり。

○菩提寺村　柑子袋村の北に當り、横田川を隔て川の北にあり。相傳、古昔金勝山菩提寺と、圓滿山菩提寺と、南北三里を隔て建、金勝山今存在せり。圓滿山は廢して今は村の名とのみなれり。

○菩提寺　菩提寺村に在り。始蓮華庵と號し、一小菴なり。禪宗黄檗派なり。享保九甲辰年今の寺地に移し、舊號の圓滿山菩提寺を採て、妙蓮華峰菩提禪寺と號す。妙蓮華峰の額は、普明院の宮の御筆なり。此寺地も古昔菩提寺の舊地にあらず。古昔の阿彌陀寺の舊蹟なり。

○阿彌陀寺の舊蹟　則今の菩提禪寺の地これなり。古昔甲賀の四個寺と號し、金勝山に菩提寺あり。當村に又菩提寺あり。東坂村に阿彌陀寺あり。當村に又阿彌陀寺あり。東坂の阿彌陀寺は今にあり。當村の阿彌陀寺は廢絶す。

○菩提寺の舊蹟　今の菩提寺より三丁許西にあり。今に礎等存在す。六間四面の堂の跡の礎石なり古昔。甲賀四個寺の其一として、金勝山菩提寺と對隔の寺にて、圓滿山菩提寺と號し、俱に良辨僧正の開基として、金勝山を大菩提寺と稱し、當寺を小菩提寺と號すと相傳、往昔此寺講堂の柱木蟲の喰たる歌【新古今集】に載たり。

しるへある時にたにのけ極樂の、道にまとへる世の中の人

界内に三十六坊ありしと云。今田畑の字に多し。石燈籠の臺石、普會塔の臺石等近き比までありしを、悉く今の菩提寺の地へ引移。

○良辨山　今の菩提寺より五町許西に在。此山に良辨僧正の坐禪石あり。皆往古菩提寺の舊跡なるべし。こゝを以て。彌、良辨の開基といふ事疑なし。良辨の事は、石山寺の條下及人物の卷に出ず。

○八王寺社（ヂヤ）　菩提寺村一村の產土神なり。

○川田大明神社　同村に在。

○西應寺　同村に在。東本願寺末寺なり。

○正念寺　同。東本願寺派。

○平松村　柑子袋村の東南にある村也。土俗相傳、松尾明神鎭座の地なり。藤原頼平領知の地なるゆへ、松尾の松の字を採、頼平の平の字を採て、平松と號すと云。此說信用するにたらず。平松の名は既に久し。

○平松大明神社　平松村にあり。祭神松尾大明神也。祭禮毎年四月未の日。相傳、文德天皇御宇に此平松村に兵衞尉藤原頼平と云者あり。山城國松尾大明神を信仰し、毎年社參す。或時大明神土人の小兒に託して、此地に鎭座すとの玉ひ、其夜頼平も亦靈夢を蒙る。此旨趣朝廷に奏し、攝政太政大臣藤原良房、大納言大伴善男勅使として、仁壽三年癸酉八月十八日造營始り、同年十一月十八日山城國松尾より勸請し奉る。松尾の松の字をとり、頼平の平といふ字を採用して、平松と號す。則勅使大納言大伴善男卿の名付玉ふ處なり。今美松と云神木あるも、此時より始て生せりと云。此說信用しかたし。

○美松（ミヂ）　平松村にあり。神木なりと云。

○南正寺　同村に在。平松山南正寺と號す。天台宗。本尊藥師佛。

○針村　平松村の東に在村なり。

○少林山法音寺　針村に在。略記曰、普國山觀音寺、瓦金山報恩寺者、聖德太子之開基、聖武天皇御造營、中興天龍夢窓國師二世大義禪師也、觀音寺・報恩寺十六坊、界内繫兵火爲烏有退轉矣、伽藍之佛像悉採集而法音寺之界内、右二箇寺爲一寺焉、京北妙心寺派下僧安全偃石首座再興之、號少林山法音寺、則妙心寺末寺也、因玆以偃石首座爲中興開基也、本尊十一面觀音像、聖德太子御作達摩像、俱太子御作、聖德太子十六歲像自所彫刻也云云、門内に不動明王の石像長五尺七寸、弘法大師の作也。靈驗あらた也。地藏菩薩の像長六尺五寸、行基の作。聖武天皇寄進し玉ふ處なりと云。

○西光寺　同村に在。淨土宗。金勝東坂阿彌陀寺の末寺也。

○西敎寺　同村に在。一向宗。京佛光寺の末寺なり。

○敬應寺　同村に在。一向宗。東本願寺の末派なり。

○飯道大明神社　同村に在。祭禮四月二の午の日。祭神素盞烏尊なり。土俗相傳、釋安受（ヤス）普國山觀音寺に住せらる。其後山居の志ありて飯道寺へ移る。其時針村の飯道大明神安受を、岩洞に供養せらるゝ事あり。夫より安受を、人みな貴みける。此神飯を持道を踏わけ玉ふにより、飯道大明神と名つく。吉永の社をもへつい殿と申。亦、岩洞の寺號をも、飯道寺大權現と名づけ奉ると云云。

○天神社

○十六善神社

○二宮權現社　俱に同村に在。鎭座の年紀來由等未詳。

○夏見（ナツミ）村　山夏見、里夏・見あり。南にあるを山夏見と號し、北にあるを里夏見と號す。夏見は鄕の名にして、順〔和名抄〕に出たり。今其疆域詳ならず。

○金光山光明寺舊蹟　山夏見村に在。今其地を彌勒堂と號す。相傳、往古金光山光明寺と號し、本尊は彌勒佛也。塔中に盛福寺・極樂寺とてあり。元龜の頃迄は、彌勒堂（彌勒堂）として其形ばかり殘りありしに、元龜年中炎上す。今は其跡を彌勒堂とのみ號して、堂一宇もなし。堂奥などといへる遺址もあり。此光明寺も比叡山附屬の寺なりと云。

○菅堂（スガノ）　同村にあり。福壽山觀音寺と號し、飯道寺附屬の寺なり。天滿天神を守護神とす。故に菅堂と號するにや。詳ならず。

○夏見大明神社　同村に在。正一位夏見大明神と號す。祭神詳ならず。

○了如寺　同村に在。禪宗。（一本附箋に了音寺淨土宗。とあり）

○正福寺村　夏見村・針村の北に在村なり。

○正福寺　正福寺村に在。大乘山正福寺と號す。人皇四十五代聖武天皇の御宇、良辨僧正の開基にして、七堂伽藍の靈場なり。塔中淸壽寺・金剛寺・永嚴寺等あり。本尊大日如來金肅菩薩の作なり。其後兵火に繫て。悉烏有となる。人皇百十一代承應の頃、舜（シユン）譽上人絕たるを興し、廢せるをついて、一宇の草堂を建て、易行念佛の道場とす。今の正福寺是なり。

○常福寺　同村に在。雲乘山常福寺と號す。本尊彌勒佛。土俗の林寺（林寺）といふものは是なり。

○岩根村　正福寺村の東南にあり。善水寺の舊記には、岩根の鄕としるせり。岩根の中にも、四個村あり。所謂東

村・西村・内田村・花園村なり。總高千三百石許の地、民家三百軒許あり。【名寄】に東宮の御歌あり

春のくるけふをも我や忘るまし、花園森の霞まさりせは

此花園村を詠せる歌なり【山城名勝志】曰、建武丁丑比丘尼聖宗喜捨江州岩根、淺國兩庄、永充佛國禪師供養之用云云、式部大輔資業歌に

我君につかへまつらんこけの下、岩根の村の萬世までに

【家集】　家　隆

咲出る岩根が嶺の藤がつら、春は過れと來る人もなし

寛治元年大嘗會の歌　匡　房

岩根山やま藍にすれるをの衣、袂ゆたかにたつぞ嬉しき

【良玉集】に永保元年大嘗會歌　大貳實政

久しさのしるしなるべし色かへぬ、岩根の山の松のみとりは

○善水寺　岩根に在。岩根山善水寺醫王院と號す。元明天皇の御宇、和銅年中の草創、國家鎮護の道場として、和銅寺と名つく。開基は何人と云事を知らず。延曆年中傳教大師當山に居住あり。時に桓武天皇御惱あり。大師則醫王善逝の法を修し、香水を献せしに、御惱忽平愈有、叡感の餘り比叡山草創の時、當寺を以て比叡最初の別院となし玉ふ。勅して善水寺と名を賜。爾來世々の勅願所。鎌倉頼朝卿以來代々將軍家の祈願所也。元龜二年信長の兵火にかゝつて、烏有と成。本堂は幸にまぬかれたり。其後は山麓の農民是を守り、或は諸家の僧徒寓居す。天和年中より東叡山の末寺となり、日光御門主の御支配となれり。除地高廿六石餘、境内三百五十一間に百二十間、地方一町八反八畝七歩、木尊藥師如來、傳教大師の作。本堂は延文五年庚子三月炎上。貞治五年丙午五月建立す。今の本堂是なり。

○大師堂　元三大師の像則大師の自作也。此堂は正德三年癸巳秋建立。是古昔大師堂の跡に建處なり。

○觀音堂　本尊丈六の正觀音。慈覺大師の作なり。堂は元祿九丙子年建立。同十五年壬午六月十八日、晝夜常念佛を修む。

○地藏堂　石像。享保五年庚子秋小堂を建。

○六所大權現社　所謂天照大神・八幡大神宮・山王權現・熱田明神・鹿島明神以上六所なり。今の社建立の時代詳ならず。延文五年元龜二年の炎上幸に殘る。

○八所大權現社　詳ならず。

○稻荷明神社　元祿年中に建立。觀音堂の鎮守なり。

數丈の大石あり。石上に古松樹あり。樹下にこの社在。

○仁王門　仁王像は傳教大師の作也。

○鐘樓　是古昔の鐘樓跡なり。寛文年中東愚法師鐘を鑄、樓を建、東愚法師は久我家の人にて、當寺に寓居せるものなり。

○岩根山　或は石根山にも作る。

【家集】　俊　成

行末を思ふも久し君か代は、岩根の山の峰の若松

○百傳池　もゝづての池と訓ず。善水寺本堂の東にあり。岩根の池といふも是なり。

【萬葉集】第三

百傳の岩根の池になく鴨を、けふのみ見てや雲かくれけむ

【堀川次郎百首】　右　近

汲て知る人もあらしな思ふこと、岩根の池の言し出ねば

【夫木集】　公　朝

くちなしにいかて匂はん百傳の、岩根の池の山嬬喜の花

【草菴集】　頓　阿

かくとたに岩根の池にせく水の、深きにつけてもらしかねつも

○思川　岩根山麓東より西に流るゝ川在。相傳て思川と云。源は山溪の滴水松尾村の邊にて川となり、下流して岩根を通り横田川に入。土俗或云、源もなく下流もなし。よつて此歌ありと云。　よみ人しらず

近江かた石根の前の思川、かは上もなし川下もなし

或云、

近江なる人を松尾の思川、水上もなく川下もなし

此歌代々の撰集にも見えず。土俗の傳ふる處のみ。且當國の思川を、歌仙の詠ずる處いまだしらず。

○不動寺　岩根東村に在。清涼山不動寺と號す。本尊不動石像、本尊の左の脇に銘あり。建武元年三月七日卜部左兵衛入道充乘是を作。土俗傳教大師の作也、と云ものは大に非なり。今黄檗山萬福寺閑松院の末寺なり。往古は善水寺の寺中なりといへり。此寺は善水寺の境内つゞき二三町東北にあるなり。

○常永寺　同村に在。玄龜山常永寺と號す。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。開基等詳ならず。門内に地藏の小堂、辨天の小社在。是は元祿十五年壬午建る處なり。

○貴船大明神社　東村民家より南に在。社地を三大寺と號す。本社左右の脇に天照大神宮・山王權現社・韋駄天社等あり。延曆元壬戌年造立。

○別所社　東村民家より北に在。山林の中にあるなり。祭神詳ならず。

○諏訪大明神社　同所に在。

○牛頭天王社　東村民家より東の方、山林の中にあり。相傳、寶龜元庚戌の年此地に、鎭座ありと云ふ。天文十三甲辰年社造立す。

○正榮寺　岩根西村に在。岩根山正榮寺實相院と號す。文明年中堯譽上人の開基。淨土宗、安土淨嚴院の末寺なり。門内に觀音の小堂あり。寶永年中の造立也。門外に辨財天社有。延寶年中建立なり。

○高倉大明神社

○白鳥大明神社　二社俱に西村民家より、四五町西にあり。二社相雙て在。建武甲戌の年社造立す。

○長福寺　岩根内田村民家の北に在。内田山長福寺と號す。花園村正法寺の末寺なり。本尊毘沙門天。今纔に一小堂のみあり。

○正法寺　岩根花園村に在。佛生山正法寺と號す。本尊阿彌陀。惠心の作なり。造立の年紀祥ならず。淨土宗。羽田村光明寺の末寺なり。

○花薗寺　岩根花薗村に在。本尊釋迦如來。禪宗。石崎山瓦屋寺の末寺なり。福生山花薗寺と號す。相傳、往古は花薗村の北に高山有。相傳。此山に此釋迦堂并坊舍十二院あり。玆に因て今に山を十二坊山といふ、文安五戊辰の年、堂舍を今の地に移す。其後滅亡す。往古は善水寺の別院なり。延寶年中瓦屋寺中興香山和尚中興として、此寺亦禪宗となる。

○牛頭天王社　同村民家の北に在。鎭座未詳。

○三雲莊　吉永村、三雲村、妙慼寺村を云。

○吉永村　夏見村の東南にある村なり。

○南勝寺　吉永村に在。長谷山南勝寺と號す。禪宗、京北妙心寺の末寺なり。本尊十一面觀音。春日が作なり。良辨僧正の開基。爾來宗旨を論ぜず。正保・寛文・天和・貞享、知春・宗仁・自閑住職し、相續して禪宗と成。

○正一位吉永大明神社　同所に在。祭神四座吉永大明神・牛頭天王・稻荷大明神・飯道權現也。

○古城址　吉永村の山に在。三雲氏の古城也。三雲氏は

關東上杉の餘流小山田源内左衞門行定、永正の比、江州へ來り、庄の典膳が智養子と成、三雲の庄を領し、三雲氏と稱す。行定の子三雲對馬守定持、其子を新左衞門賢持と云。佐々木承禎に仕ふ。此山眺望甚佳景なり。相傳、水口岡山へ此城を引と云。

○三雲村　吉永村の東南にあり。

○永照院　三雲山永照院と號す。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり、相傳、聖武天皇の御宇、行基の開基也。中興顔譽珍阿和尚、大檀那三雲典膳が家臣三雲修理也。

○龍樹大明神社　同所に在祭神詳ならず。

○上乘寺　同幡村に在。觀音山上乘寺と號す。禪宗。洛北妙心寺の末寺也。五十年以前木食廻道和尚の開基なり。或は三雲山と號す。

○天照大神宮　則觀音山の中にある小社也。此地は古昔日雲の宮なるべし。【大和姫世記】曰、活目五十狹茅天皇垂仁四年乙未遷淡海甲賀日雲宮、四年奉齋云云、是は上古は神鏡禁裏に坐して、天皇と床を同じうし玉ふ。崇神天皇に至て、神威を恐れさせたまひ皇女豐鋤入姫をして齋奉しめ玉ふ。大神の御教にしたがひ國々處々に、大宮所を求玉ふ。此日雲の宮も、其一所也。日雲を今は三雲と云。音の轉訛せるなり。

○妙慼寺村　吉永三雲村の西南に在村なり。

○妙義大權現社　妙慼寺村に在・祭神未詳。妙義大權現は。上野碓氷郡に在。今按ずるに、庄典膳も先祖は上野也。小山田行定も本國上野なり。父子の内にて件の上野の妙義を勸請せられたるものにや。

○妙慼寺　同村に在。雲照山妙慼寺と號す。本尊觀世音永平三世禪宗。後天龍寺派と成。今は洛北妙心寺の末寺なり。萬里小路藤房卿の開基なり。臣按ずるに、藤房卿は後醍醐天皇の賢臣なり。萬里小路宣房の子なり。天皇沈湎して度なし。婦人の言に從ひ、政紀日に弛、功臣封を得ずして上をうらむるもの多く、天下の亂近きにあり、藤房しば〳〵諫て用られず、一日楠正成に會して云、艶妻方處して四聰壅杜す。是をせんすべを知らず。正成の云臣が如きは溝壑に甘心せんのみ。藤房の云、桂流の水足を濯へし、岩嶺の雲骨を埋むべしと。俱に泣て別、建武二年三月十九日冠を挂て、遁世し玉ふ。【大平記】曰、藤房は侍一人召具して。北山の岩藏と云處へ赴れける。爰にて不二房と云僧を戒師に請して遂に多年拜趨の儒冠を脫て十戒持律の法體に成玉ひけりと云云。遁世以後の事諸說紛紜たり。【禪林諸祖傳】に、京北妙心寺の第二世授翁宗弼は藤房の事なりと書しは、一向に虛僞の說たり。

水戸源義公の御撰【大日本史】の藤房の本傳及【吉野拾遺】等に、後村上天皇吉野に御座し時、牧童或僧の書を洞院左衛門督實世に傳。書中に一首の歌あり。實世藤房の手跡たる事を言上あり。帝諸方の關吏に詔して、物色し玉へども求得す。其後畑六郎左衛門時能越前鷹巣山にて、一人の僧に逢。時能藤房の顔面に似たりと云を以て、新田義助少將藤原行實と俱に、鷹巣山に入て求れども見えず。石上に一首の歌あり。行實藤房が手蹟たる事を知て、遍く尋れとも見えずと。義助後吉野に來て言上すと載られたり。【異本太平記】に藤房遁世の後に侃山子と號し、諸國を行脚し土佐に行時、風波の難に逢、船覆へり溺死すと記す。此說正當たるべし。土俗相傳、藤房都を退て丹波に隱れ住れしに、畑六郎尋まかりしに障子に、

住あらす跡を昔の人とへは、嵐や庭のまつにこたへん

としるし置て、越前へかくれ玉ふ。畑六郎又尋參りしに、こゝも又浮世の人の問來れは、奥山ふかくやど求て

と殘し置て、此三雲に住玉ふに、又尋こえしかは、

世のうさをよそに三雲の雲ふかく、照月かけや山住の友

と、よみ玉ひ書殘し給ふ障子、近き比まで在しに、一時の灰燼と成て、今はなしと云。藤房遺愛の四株の櫻、其しるしのみ殘れりと云。此說最信用しがたし。【佐々木家記】に曰、江州東の郡三雲庄山南の奥に一村あり。中に妙感寺あり。六角殿文明年中に妙感寺に居住す。中村豐前守も居住すと云々。

○常照寺　同村にあり。淨土宗、安土淨嚴院の末寺なり。

近江國輿地志略卷之五十　終

近江國輿地志略卷之五十一

臣　寒川辰清編輯

甲賀郡第三

○朝國村（アサクニ）　三雲吉永村の東北に在。岩根よりは南東にあたる。中間に川あり。【山城名勝志】に、萬年山眞如禪寺開山佛光無學禪師の碑の銘に、建武丁丑比丘尼聖宗喜捨江州岩根淺國之兩莊。永充佛國禪師供養之用云云、

○觀音寺　朝國村に在。朝國山觀音寺と號す。本尊十一面千手觀音。弘法大師の作。北條時賴の開基也。

○時賴の小塔　觀音寺に在。觀音寺時賴の開基なるがゆへに、此の塔を設るといふ。

○廣野山　朝國、下山兩村の間に在。地藏の石像一體あり。松一本在。土俗是を地藏が松と云。此山朝國山の、山頭に相つゞけり。方六町許、高さ十一丈許、南の方の山下は横田川なり。古歌に横田山と讀るは是歟。

早過よ人の心も横田山、緣のはやし陰にかくれて（也藏が松）

○檜尾影の岩　廣野山に在。上にある岩を云。亦下にある岩を斗岩と云。

○柏木莊　相傳、往古は柏木村、大寶寺村、清水村とて、三村ともに東街道の順路成しに、慶長年中街道變り、西の方の柏木村、大寶寺村の二村は、北脇村と合して一村となり。清水村は植村と合し一村となる。夫故北脇村を本村とすといへり。柏木莊十六村は、柏木・北脇・林口・宇田・植村・酒人・清水・大寶寺・泉・上山・中山・下山・松尾・名坂・畑・八田也。今清水・大寶寺・柏木の三村なくなりて、十三村となれり。是に下田堂村等を加へて柏木莊と云【東鑑】に治承四年十二月一日己卯、左兵衛督平知盛卿率數千官兵、下向近江國、與源氏山本前兵衛尉義經其弟柏木冠者義兼等合戰、義經以下棄身忘命雖挑戰、知盛卿以多勢之計、放火燒迫彼等館幷郎從宅之間、義經義兼失度逃亡云云、則柏木冠者は、此柏木の莊を領せし人なれば、彼館も此邊にあるべけれども、今詳ならす。

○下田村　岩根の東にある村なり。

○慶圓寺　下田村に在。一向宗。西本願寺の末寺也。

○八田村　下田村の東にある村なり。

○下山村　朝國村の東に在。八田村の正南に當れり。

○十善神社　下山村にあり。祭神詳ならず。
（一本の附箋に、下山村に九品寺淨土宗。瑞巖寺禪宗あり。以上二ヶ寺は上山村なるべしとあり）
○西養寺　同村に在、淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。
○法念寺　同村に在。一向宗。蒲生郡内池村宗照寺の末寺なり。

（伴の谷）

○中山村　下山村の東北に在。土俗或は中山村畑村をさして、伴の谷ともいへり。
○卅八社明神社　中山村に在。何れの神〻を祭にや、未詳。
○智善院　同村に在。天台宗。比叡山の末寺。則三十八社の社僧なり。
○誓福寺　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。
○西光寺　同村にあり。
○良德寺　同村に在。
○東光寺　同村にあり。
○畑村　中山村の東北にあり。
○天狗堂　畑村にあり。
○山王社　同村に在。二社あり。西山王、東山王と號す。祭神日吉の神なり。
○溪蓮寺　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。
○若王寺　同村に在。淨土宗。右溪蓮寺の末寺なり。

（社神の暦）

○上山村　畑村の東南にある村なり。
○牛頭天王社　上山村にあり。
○玉臺寺　同村に在。禪宗。黄檗山萬福寺の末寺なり。
○善正寺　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。
○堂村
○天神社　堂村に在。祭神菅丞相の靈也。鎭座の年紀詳ならず。社壇に一尺許の圓石あり。參詣男女祈願の吉凶を占んと欲して、禰宜に此事を乞へば、禰宜神前にて其言を高く唱、吉なる時は、輕くあがり。凶なる時は磐石のごとくに重し。其奇特いちじるし。近國の男女參詣甚多し。界内に觀音堂在。觀音作未詳。
○慈幸寺　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院末寺なり。
○松尾村　上山村の南にあり。
○八幡大神社　松尾村に在。
○五郎王神社　同村に在。是を暦の神社と云。五郎王とは、土俗の所稱なり。暦の八將神は、素盞嗚尊の子、五男三女を表せる也。然れば五男を合せ祭れるものか、詳ならず。
○願隆寺　同村に在。松尾山願隆寺と號す。天台宗。本尊藥師如來。傳教大師の作。即大師の開基なり。元龜の兵火に繫て、寺院悉烏有となる。其後再興して、今纔に本堂・鐘樓堂觀音堂あり。比叡山延暦寺の末寺なり。本堂に額あり。享保十三年輪王寺宮、願隆寺の三字を染筆し給ふ。
○松尾川　源三ツ。一は思川の下流。詳に岩根思川の條下に記す。一は伊勢國菰野山に出、西に流れ、北に轉じ、又西に折、大泥原の坤を遶て流れ、曲折して前野村の東を過、田村川と合し、水口驛及宇田村の南を經て、横田川と成。一は伊勢國於岐須山の間より出、西に流れ、鮎川村を經て一流となれり。
○名坂村　松尾村の南にあり。
○大池寺　名坂村に在。禪宗。京北妙心寺の末寺也。龍護山大池寺と號す。本尊釋迦如來。行基の作也。寺も亦行基の開基。中興妙心寺派文嚴和尚なり。
○林口村　名坂村の南西にあり。
○天照大神宮　林口村に在。
○西方寺　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺也。
○北脇村　林口村の北西にある村也。
○若宮八幡宮　北脇村に在。相傳、右大將源頼朝卿勸請し玉ふ處なり。祭禮四月二の申の日、八月十五日也。近村九村の產土神なり。界内に山王の社あり。社家柏木氏の記に曰、當社八幡宮は、源頼朝上洛の時、此山王の社地へ、鶴岡の八幡宮を勸請し給ふ。神田七十五町を寄附し玉ひし後は、以來中世飛鳥井家柏木の庄を領し給ひ、尊敬他に異にして、山中黨・伴の黨の士專ら渴仰せり。然るに織田信長神田を奪ひてより衰へ、慶長年中長東大藏水口岡山の城に籠りし時、合戰あまたゝび、社殿また兵火にかゝり、今纔に其形のみ存せり。
○十善神社　同村にあり。
○天神社　同村に在。
○神護寺　同村にあり。眞言宗。江戸護國寺の末寺なり。
○淨福寺　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。
○永正寺　同村にあり。淨土宗。水口大德寺の末寺なり。
○本行寺　同村に在。日蓮宗。京立本寺の末寺なり。
○飛鳥井殿寓居遺址　北脇村にあり。相傳。文明年中飛鳥井雅康柏木村に居住し玉ふ事あり。此近村は飛鳥井家の所領たるの故なり。其後柏木村も北脇村の中に入て、今柏木村といふ處なし。夫ゆへ其時の飛鳥井家の所領分を、今柏木の莊と云。今當村に柏木・大寶寺など號せる地あり。是雅康居住の遺址也。馬場の跡など號する處、いま田畑の名と成、八幡宮の社人柏木氏のもの、毎年正月飛鳥井家へ年始の禮を勤む。その古雅康卿柏木の稱號を玉ふといへり。雅康卿は雅親入道榮雅の養子也。實は弟なり。二樂軒と號す。臣按ずるに【重編應仁記】曰、文明二年

庚寅冬十二月廿七日、後花園院崩御、其比飛鳥井大納言藤原雅康卿、江州柏木といふ處に閑居ましましけるに、上洛せられけれども、程過ければ、御追善にも逢玉はず、泣て歌あり

立かへる君もなき世に咲梅の、花の上まて哀れとそ見る

同書曰、東山殿の御臺所大方殿、伊勢へ御下向あり。文明十一年の比、飛鳥井雅康入道二樂軒は、洛湯の亂を遁れて、江州甲賀郡柏木の里に閑居し玉ひ、花に吟じ月に嘯て。世にあづからず居玉ひけるが、其山莊へ音信させ玉ひつる近隣に御旅宿あり。二樂軒とりあへず

世をいのる君か心の誠にて、内外の神も惠みそふらん

御臺所御返

世を祈る心を神のうけぬとも、此言の葉に更にこそ知れ

○鶯塚　同村に在。相傳、飛鳥井雅康卿秘藏し玉ひし鶯死して塚につくといへり。田畠の中に小さき塚二あり。其中間三十間許へだてり。

○宇田村　北脇村の南に在村なり。

○延命神社　宇田村にあり。

○八幡社　同村に在。

○唯稱寺　同村にあり。淨土宗。安土淨嚴院の末寺也。

○極樂寺　同村にあり。右におなじ。

○植村　宇田村の北西に在村なり。

○酒人村（サカヒト）　植村の南にあり。

○園養寺　酒人村にあり。天台宗。比叡山延曆寺の末寺なり。本尊觀音。甲賀順禮の札所なり。

○持寶寺　同村に在。天台宗。栗太郡立入村西隆寺の末寺なり。

○泉村　酒人村の北に在。【扶桑拾葉集】烏丸光廣卿東路の記に曰、泉といふ處にて

夏の日のゆくてにぬるき風よりも、泉と聞は涼しかりけり

○八幡神社　泉村にあり。

○泉福寺　同村に在。泉福寺延命院と號す。天台宗。比叡山延曆寺の末寺なり。本尊地藏菩薩。長二尺四寸運慶作なり。朝の作。脇士不動・毘沙門。長二尺六寸座像。定

○淨品寺　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。

○岩坂村　高山村の北横田川の南に在村なり。

○横田川　或は横手川に作る。源四。一は伊賀國柘植山の間に出、五反田村、和田村の東を經て、和田村の西に至る。一は伊勢國鈴鹿山間に出、櫟野村の南を經て、田堵野村の北を過、二流一と成、一は神山大澤山の間に出て、西に流れ大久保南市場の北を經て、野尻に至て一流と成、北に轉して横田川となる。一は田村川・松尾川の末流宇治河原村の北に至て合して、一流となり、直に北に流、山上川と合し立入村の東に至て、分て二流となる。此川南にあつては守山川といひ、北に在ては野洲川と云。皆横田川の事なり。光廣卿【東路記】云、横田川を渡るとて

名もさうきすくなる世にも横田川、渡るに濁る習と思へは

（守山川）（野洲川）

○山直卿　土俗過つて山尾の卿といふ。山直卿の名は順か【和名抄】に出たり。

○倉田莊

○水口驛　林口村の東に在。本名美濃部村と云。今は水口町とのみ呼へり。東海道の驛次なり。【江家次第】公卿勅使進發の條下に、到甲賀驛宿、國司供給。すとあるは、此驛の事也。一條禪閤兼良公京都の亂を避て、水口へ退散ありし時、雨に逢て作られし詩に

（美濃部村）

憶得三生石上緣、一菴風雨夜無眠、今朝更下山前路、老樹雲深哭杜鵑

林春齋詩

甲賀郡中途不窮、郵程日々向西風、今田地子何沈陸、水口行船朱晦翁

垂加翁詩

甲賀郡中水口邊、日雲秋晚意茫然、寥々宿禰千年迹、行客空思神誨傳

○天滿天神社　水口郭内に在。相傳、往昔菅相公筑紫へ左遷の後、公達自帝都の住居成かたく、所々に離散し玉ふ。淳茂公此地に來りて、美濃部村に居住し、其後歸洛の日一子を此地に殘し玉ふ。今の美濃部氏の祖是也。天慶年中菅公の木像を彫刻し、此地に祭玉ふ。今の天神社是なりと云。神主石王中務が【神略記】に見えたり。祭禮毎年六月十三日。

○水口城　往古より城あれども、此地にあらず。岡山の古城と號する處其地也。當地は寛永十一甲戌年小堀遠江守をして、新に築しむ。山岡主計頭しばらく相守事あり。天和二年加藤内藏介明友を此地に封し玉ふ。明友石見國吉永より、爰に移て初て水口の城と號し、明友を城主の列に加へ玉ふ。明友は加藤左馬介嘉明の嫡孫也。明友の子を越中守明英といふ。元祿八年五月封を下野の國壬生に移す。鳥居伊賀守忠救を此地に封し玉ふ。正德二年鳥居氏を以て下野の壬生にうつし、加藤和泉寺嘉矩を爰に

復封し玉ふ。嘉矩は明英の子也。爾來加藤氏相續して、爰に居玉ふ。

○岡山古城址　今水口城の東十町許に在。是古昔の水口城なり。西の麓より本丸に至つて、四町許、是を追手といふ。東の麓より本丸に至つては三町五十一間、是を搦手と云。此北麓に至て二町廿一間也。山頂の本丸方十二間。二の丸三十二間半に廿一間。西の丸廿四間に廿三間。三の丸三十五間に十七間。總巡り廿七町三十間今に其形あり。今は當城主の山林と成て在。此地鈴鹿山の西、横田川の東要害の地也。天正十三乙酉の年、中村式部少輔一氏城を築。天正十八寅年駿河國田中の城へ移る。增田右衞門尉長盛爰に在城す。文祿四年乙未大和國郡山へ移る。長束大藏少輔正家在城す。關ヶ原の役正家民屋の男女老少を捕、以て質とし、城内に置。正家美濃に趣き、弟伊賀守をして守らしむ。關ヶ原の軍敗れ正家逃還。時に池田備中守兵を以て圍、既にして相和し、則彼質を散し城を開て、池田台命に依て城を廢しけり。

○水口御殿跡　水口町南の方二町四方許の地あり、是なり。四方に堀あり。慶長九辰年東福門院御旅館の爲に、御代官林傳右衞門建之。今は其跡のみ在て、土俗は古御殿とのみ呼へり。

（古御殿）

○大宮大明神社　水口にあり。所祭神五座、所謂大巳貴命・素盞烏尊・稻田姫・武甕槌命・經津主命也【延喜式】神名帳所載、水口神社是也、祭禮毎年四月二の申日、神主石王出雲守、

○大岡寺　同岡山の麓に在。龍王山大岡寺觀音院と號す。白鳳年中の草創。行基の開基也。本尊十一面觀音、長三尺餘。則行基の作也。相傳、甲賀三郎兼家守本尊なりと。往古岡山にあつて、坊舍六院繁昌の靈地成しに、天正年中中村式部少輔一氏初て、城を岡山に築くが故に、寺院を水口の驛中に移す。然後享保元年又寺院を舊地岡山に移す。今の大岡寺是也。天台宗。比叡山延曆寺の末寺なり。俗呼で、岡の觀音と云ものは、古城岡山の麓にあるをもつてなり。

（岡の觀音）

【羅山文集】曰、余一見緣起、甚卑俚不足云焉、曰昔甲賀三郎兼家與兄太郎次郎共遊衆山、兼家入高懸山窟射殺鬼輪王、時太郎次郎陷穴掩。兼家化爲蛇、其窟通信州水葱松原焉、妻子大悲立此堂吊之、經三十年出自松原乃歸、不知已爲蛇軀而問故家、家人甚恐、不敢近也、見者皆驚走、兼家甚愧憂之、夜入寺蟠堂板之下、以觀音力、故脫復本身、漸得歸家、妻子一惟一驚、終而甚悅且悲且泣握手共爲夫婦、父子如故、於是太郎次郎聞之懼遂自殺、三郎果爲甲賀郡之主、嗚呼觀音何爲者哉、彼徒之欺誑民俗者至于此耶、嗚哉叱哉云云、邑按ずるに、甲賀兼家が事載て【伊賀地志】に有。少似て大に異也。詳に人物門に出す。かゝる怪異の事にはあらず【百練抄】に、天仁二年二月十六日、三男義明の事によつて、義綱鬱憤、今夜東國に赴く。公家追討使を遣す。廿五日爲義近江國甲賀郡におゐて、義綱を尋得たり。義綱大岡寺におゐて出家すと載たり。此寺にての事なるべし。土俗傳云、鴨の長明發心して、薙髮するの地なりと云り。長明が【海道記】に、墨染の衣かたしき旅ねしつ、いつしか家を出るしるしにといへるは、當寺におゐて發心の時の事なりとぞ。大岡寺の額は、享保九年林丘寺元瑤の宮の御筆なり。

○諏訪大明神社　大岡寺の境内に在。大岡寺の鎭守なりと云。

○八幡社

○神明社

○牛頭天王社

○大臣社　若水口の宿禰を祭るにや。

○秋葉社

○辨財天社

○稻荷社　俱に悉く水口に在。

○大德寺　水口に在。淨土宗。京知恩院の末寺なり。開基詳ならず。相傳、往古は禪宗なりと云。寺領廿九石餘、元和年中の御朱印也。其時代の住僧三河國にて、東照神君の幼童の時、書法を敎へ奉りし人なり。故に此時寺領を寄附ありと云。三河國法藏寺の住僧後に此に住せし成べし。神祖幼童の時書を習ひ玉ふは三河國法藏寺の住僧なり。

○心光寺　同所に在。淨土宗。京知恩院の末寺なり。

○眞德寺　同所に在。則大德寺の末寺なり。

○眞福寺（正イ）　同所に在。右同末寺なり。

○西明寺　同所に在。右同末寺なり。

○松元寺　同所に在。右同末寺なり。

○極樂寺　同所に在。淨土宗。同所心光寺の末寺なり。

○圓福寺　同所に在。淨土宗。則善福寺の末寺なり。

○蓮花寺　同所に在。一向宗。伊勢國一身田高田門跡の末寺也。

○西蓮寺　同所に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。

○本正寺　同所に在。日蓮宗。京立本寺の末寺なり。

○慶圓寺　同所に在。一向宗。京東本願寺の末寺なり。

○杣之莊　三大寺六村、矢川七村、新宮九村、池田村・高山村・市原村・野出村・六牧（ムマキ）村・馬杉（マスギ）村・高峰村・和田村をい

ふ。相傳ふ傳教大師延暦寺を草創せんと欲し。此地に村をもとめ、杣入し玉ふ。故に號とす云。

○三大寺六村　三大寺村・牛飼村・山上村・杣中村・内貴村（ナイキ）宇治河原村をいふ。六村とはいへども、内貴村に西東北の三村在。

○三大寺村　相傳、此村に古昔三箇の大寺在。因て以名ずくと云。所謂三大寺は道德寺・藥王寺・飯道寺なり。今其跡未詳。

○三大寺大明神社　三大寺村にあり。祭神未詳。社僧あり。龍王山三大寺本學院と號す。比叡山摠持房の末寺なり。當社の祭禮毎年四月二の申の日なり。

○圓光寺　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。

○牛飼村　三大寺村の東南にある村なり。

○上宮　牛飼村に在。祭神未詳。

○下宮　同所に在。

○榮林寺　同村にあり。法藏山榮林寺と號す。水口心光寺の末寺なり。

○立泉寺　同村に在。法華宗。京立本寺の末寺なり。

○鳳來寺　同村に在。本尊藥師如來。

○福泉寺　同村にあり。本尊觀世音。

○地藏堂　同村にあり。

○杣中村　牛飼村の東南に在村なり。

○勝手明神社

○牛頭天王社　俱に杣中村にあり。

○西德寺　同村に在。淨土宗。市原村西願寺の末寺なり。

○福量寺　同村に在。眞言宗。京泉涌寺雲龍院の末寺也。

○東光寺　同村に在。天台宗比叡山の末寺なり。

○山上村　杣中村の東南に在村なり。

○廣德寺　山上村に在。瑞應山龍花院廣德寺と號す。天台宗。比叡山延暦寺の末寺。本尊靑面金剛不動明王木像。傳教大師の作也。土俗の所謂甲賀の庚申是なり。相傳、往古太甚繁昌の地にて、坊舍一千坊在しとなん。今に谷々の字に、其舊名殘れるもの多し。其略記に曰、大寶元年正月七日庚申の日申の時、庚申の告ありしより、人多庚申の奇特を知。抑金成山廣德寺は、桓武帝の御宇延暦二年傳教大師建立の靈地也。一度皈依して信心を起さば、大願叶はずと云事なし。久和元年三月日と記せり。事長きゆへ是を記さず。始金成山廣德寺と號す。近世瑞應山と改號す。庚申の事、本朝に流來する事久し。垂加流の神道に、庚申傳と云口訣あり。其傳は庚申は幸神也。幸神は猿田彦命なり。故にかのえさるの日を用ゆ。三猿を置も此理なりといひ、七種の菓子等の事まで悉傳あり。佛法に

は、靑面金剛とす。臣按ずるに非なり。臣が友井澤長秀【俗說辨】をあらはし、庚申を猿田彦とするは、牽合附會なりと記せり。垂加門人跡部光海翁の說に、井澤長秀が說は誤れり。神道の庚申傳を知らざるが故に、かくの如く云り。庚申はいかにも猿田彦の神なりといふ。光海翁の說も誤なるべし。庚申の夜の遊といふ事は、朱雀院の天慶二年八月廿二日より始れりと、【王代一覽】に記されたれども、此も誤也。是より以前【菅家文章】の第四に、庚申の夜所懷を述といふ詩あり。六十二代村上天皇天暦七年十月十三日內裡にて、庚申の御遊有と、【古今著聞集】にも記せり。或は庚申とは老子の道也。庚は金也。申もまた金氣の方也。是道家修養の事より起といへり。【杭仁和郎記】曰、庚申甲子事、修仙家崇尙之、甲陽木而主生、應肝魂也、庚陰金而主殺、應肺魄也、仙家欲煉氣爲純陽、而魂魄常存於舍、故守之也、且甲子在六旬爲始、庚申在六旬爲終、修煉家以此爲要日云云、【酉陽雜俎】には庚申の日三尸人の過を云。七度庚申を守れば、三尸滅すと記し。【太平廣記】には彭祖は三屍の姓、常に人中に居て其罪を伺ひ察す、庚申の日に至て上帝に籍す。故に仙を學ぶもの、三屍を絕へしといふ。【太上感應編】にも。此事を記す。大に同しく少しき異也。【下學集】には、盜賊此夜利を得る夜也。故に諸人眠らずして夜を守とあり。【拾芥抄】に【庚申經】を引て書り。【太平廣記】の說に似たれり。【佛祖統記】には、西王母漢の武帝に敎へて、三尸を解脫せしむるより始ると載たり。【列仙傳】【古今醫統】【琅耶代醉】【遼生八箋】等にも記しあれども、事同じき故煩しくしるさず。【西宮記】淸輔【袋草紙】【榮華物語】【大鏡】【本朝文粹】等に、庚申の夜を守る事を載たり。【祖庭事苑】に、庚申は佛經に出る處にあらず。道家より出とあり。【僧史略】に、庚申は佛道に非ず、道士の邪法也と誡たり。【群談採餘】及許星州が詩、柳子厚が文集にも、庚申を守る文あり。とかくに庚申は佛道にもあらず。本より神道に會てなき事なり。又諸國に在所の庚申堂皆以て攝津國天王寺の支配となる。此ゆへは、俗說に大寶元年庚申に靑面金剛天王寺に天降り玉ふ。是最初なるが故也といふ。臣古曆を以てこれを推に、文武天皇の大寶元年は辛丑の年にて、庚申の年にはあらず。【元亨釋書】天王寺の條下にも、庚申の事見えず。太子の【御手印記】にも、庚申の事なし。【御手印記】とは、一に【本願緣起】と名くる聖德太子の作書なり。旁いぶかし。後世の事成べし。

○八幡社　同村にあり。

○地藏院　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。

○天德寺　同村に在。眞言宗。
○北内貴村　水口驛の南西にあり。
○川田神社　北内貴村に在。所祭春日大明神也と云。【延喜式】神名帳に、所謂近江國甲賀郡川田神社是なり。
○天滿天神社　同村に在。
○養福寺　同村に在。淨土宗安土淨嚴院の末寺なり。
○西内貴村　北内貴村の南西にある村なり。
○天滿天神社　西内貴村にあり。
○西福寺　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。
○東内貴村　西内貴村の北に在。
○福照寺　東内貴村に在。天台宗。信樂飯道寺の末寺也。
○法泉寺　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。
○宇治河原村　岩坂村の東、横田川を隔て在。
○天神社　宇治河原村にあり。
○永昌寺　同村に在。天台宗。
○矢川七村
○森尻村　虫生野村の南東に在村なり。
○矢川大明神社　森尻村に在。祭神未詳。社僧あり。矢川寺淨清院と號す。天台宗。比叡山延曆寺の末寺也。
○天王社　森尻村に在。祭神未詳。
○深川村　森尻村の南東に在村なり。
○八幡社　深川村にあり。
○常福寺　同村に在。天台宗。森尻村矢川寺の末寺也。
○鹽野村　市原村の南にある村なり。
○鹽池　鹽野村に在。一間四方許の沼池也。自然と潮の滿干あり。今此潮を汲取て、浴湯となし、疾病を癒すもの多し。鹽野村と號する事も、此鹽池在によつての名也。此鹽池は、弘法大師此村に鹽なきをあはれみ、獨鈷を以て、穿出し玉ふ處なりと云。臣按ずるに、弘法大師此邊遍歷の事は有べし。鹽を穿出す事はいぶかし。【琅耶代醉】に冀の河東・安邑・晉州・雲中・雁門に鹽池あり。靈州に七の鹽池。慶陽に大小の鹽池。會州・寧夏等にも、大小の鹽池ある事を記せり。【木草綱目】及【五雜俎】皆鹽池ある事をしるせり。是等も皆弘法大師の、穿出す處なるべきにや。笑に絶たり。土俗弘法の奇特を稱さんとて、却て弘法を恥かしむ。弘法泉下に恨を含べし。當國伊香郡菅並洞壽院山號を鹽谷山と云。其山に鹽池あるが故の名也。
○天神社　同村に在。
○諏訪明神社　同村に在。
○長樂寺　同村に在。淨土宗。水口大德寺の末寺也。
○瀧坂寺　同村に在。天台宗。森尻村矢川寺の末寺也。
○杉谷村　鹽野村の南にある村なり。

○息障寺　杉谷村にあり。岩應山不動院息障寺と號す。比叡山延曆寺の末寺なり。本堂の坤三十六町山頂に十丈許の大石あり。長一丈三尺七寸不動の像を彫刻す。傳敎大師の作也。相傳、傳敎大師叡山を開基せんと欲し、此山に柚取し玉ふ。此山に大池在。大蛇捿て人を惱す。大師爰に於て、禁龍の法を修行し玉へば、龍蛇も飛去失ぬ。それより柚取して、材木を多く伐出し玉ふ。池原延曆寺と號するは、是なりと云云。
○扇石（イハ）　息障寺の界内に在。扇の形に似たり。相傳、傳敎大師禮拜せし時、扇を置し石なりと云。
○蓮華石　同所にあり。蓮華の形なり。
○正福寺　同村に在。壽龜山正福寺と號す。本尊觀音の像は、聖德太子の作也。禪宗。京北妙心寺の末寺なり。
○勢田寺　同村に在。觀景山道場院と號す。淨土宗。水口大德寺の末寺なり。
○金藏寺　同村に在。歌谷山神護院と號す。淨土宗。水口大德寺の末寺なり。
○松安寺　同村に在。淨土宗。勢田寺の末寺なり。
○氣多大明神社
○妙見社
○牛頭天王社
○天滿天神社
○八王子社　俱に同村にあり。
○稗谷村（ヒエガヒ）　東内貴村の東に在村なり。
○稻荷明神社　稗谷村にあり。
○山王權現社　同村にあり。
○安樂寺　同村に在。青雲山淨光院と號す。天台宗。比叡山延曆寺の末寺なり。
○惠心寺　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。
○葛木（カツラキ）村
○寺莊（テラシヤウ）村

近江國輿地志略卷之五十一　終

近江國輿地志略卷之五十二

臣　寒川辰清編輯

甲賀郡第四

○新宮九村　龍法師村・柑子村・磯尾村・野田村・野尻村・新宮上野村・倉治村・虫生野村・多喜村を云。

○龍法師村　倉治村の東に在村なり。

○内保越　或は屋毛尾越とも云。是龍法師村より、伊賀國内保村へ越るの路也。【油日明神の縁起】に曰、聖德大子内保を作り玉ふ。故に名づくと云、誤也。臣按ずるに、【伊賀地志】に曰、宇都可社は内保村に在。【延喜式】神名帳に所謂伊賀二十五座宇都可社是也、宇都可を誤て、内保と云と云云。是を以て見れば、【油日の縁起】虛僞なり。其うへうつほは、穴穂の皇子に始りたる事、國史に顯然たり。厩戸皇子に、起らさる事明也。武夫たるもの武器の事理とくと存べき義なり。水口より此國界へ三里半在。

○柑子村　龍法師村の南にある村なり。

○櫻大明神社　柑子村に在。祭神日吉の神也。望月村島元重勸請する所也。社僧圓通寺。天台宗。比叡山延暦寺の末寺也。

○清福寺　同村に在。天台宗。延暦寺の末寺なり。

○崇福寺　同村に在。淨土宗。多喜村稱名寺の末寺也。

○藥師寺　同村に在。淨土宗。京都知恩院の末寺也。相傳。傳教大師延暦寺建立せんと欲し、此地に入て材木を求む。故に此邊を總て柚の莊といへり。傳教大師柚入をせしより、柚の莊と云義未著明、則其時に開基する所也と云。本尊藥師佛。脇士は不動、毘沙門なり。土俗云。傳教大師此地にて、わが立柚に冥加あらせ給への歌を詠ずと云。非也。此歌は比叡山にての詠なり。

○古城址　同村に在。相傳、望月氏代々居城の地也と。望月村島元重といふ者あり。元重が子を望月重晴といふ。剃髪して小森入道沙彌源廣（深イ）と號す。源廣子を望月佐渡守重章といふ。重章子を望月小森重義と云。重義元龜年中織田信長の爲に亡さるといふ。臣按ずるに、【伊賀地志】に、信濃國望月の諏訪源左衞門尉源重頼一男を望月信濃守重宗と云。二男を諏訪美濃守貞頼と云。三男を望月隱岐守兼家と號す、後近江半國の主と成て、甲賀近江守と稱し。晚年伊賀守に成と記せり。其族類成べし。

○磯尾村　杉谷村の南西に在村なり。

○野田村　龍法師村の北に在村なり。

○野尻村　池田村の北に在村なり。

○新宮上野村

○倉治村　新宮上野村の東に在村なり。

○十禪師社　倉治村にあり。

○善願寺　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺也。

○虫生野村　東内貴村の南にある村なり。

○九社大明神社　虫生野村に在。祭神未詳。

○山王權現社　同村にあり。

○東光寺　同村に在。天台宗。比叡山延暦寺の末寺也。

○永福寺　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。

○淨福寺　同村に在。同宗。同寺の末寺なり。

○多喜村　野出村の東北に在村なり。或は瀧村に作る。中村式部少輔一氏は佐々木山崎の餘流にして、此地の產士也。始瀧孫平次と號するは、此故の名也。甲賀廿一家也。瀧氏の先祖は、敏達天皇の皇子井手左大臣橘諸兄公の末孫也。平宗盛の首を討し、橘右馬允公長といへるも、瀧氏の祖先也。又佐々木盛綱の臣に、橘三橘五兄弟とて、盛綱と俱に、藤戸の渡を渡せしも、瀧氏の祖先なり。

（甲賀廿一家）

○稱名寺　多喜村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。正觀音の像は、毘首羯摩の作なり。

○池田村　龍法師村の東に在村なり。

○檜尾大明神社　池田村に在。祭神未詳。社僧檜尾寺文殊院と號す。天台宗。比叡山延暦寺の末寺なり。

○地藏院　同村に在。淨土宗。多喜稱名寺の末寺なり。

○金龍寺　同村に在。天台宗。比叡山延暦寺の末寺なり。

○西念寺　同村に在。淨土宗。

○極樂寺　同村に在。淨土宗。

○高山村　西内貴村の西にある村なり。

○市原村

○野出村　池田村の南に在村なり。

○馬杉村　多喜村の南に在村なり。【油日の縁起】に曰、聖德太子靈教のとく、篦竹を剪玉ふ時、馬を杉の木に繫ぐ、今の馬杉是なりと云。今庄といふ地に、老杉樹在。是なりと云。

○矢篦山　聖德太子矢篦を剪玉ふ處と云。俱に【油日の縁起】に見えたり。或は太子山ともいふ。【油日の縁起】は孟浪荒唐の言なり。信ずべからず。

○貴龍明神社　馬杉村に在。相傳、此地に惡蛇ありて、村民を惱す。天元年中橘敏保朝臣に詔あつて、此惡蛇を殺さしむ。其功によつて、此地を敏保朝臣に賜る。敏保朝臣

此地は太子の舊蹟なる事を思ひ、太子の靈を祭て、貴龍大明神と號すと云。

○守屋塚　太子山の西十町許に在。守屋の連の塚。在べき理なし。後人の僞作成べし。

○高峰村　馬杉村の東にある村なり。

○和田村　高峯村の北にある村なり。

○五反田村　和田村の東南にある村なり。

○儀峨莊　五村あり。新城・中村・上田・小里・今在家也。東西四十町南北五十町餘なり。中に川あり。松尾、田村兩川の末なり。儀峨氏は佐々木家にて名ある士也。【太平記】に載せたる儀俄平井といへるも、此地の士なり。

○新城村　水口美濃部村の東にあり。

○八幡社　俱に新城村に在。

○春日社　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺也。

○永福寺　同村に在。水口の十餘町東也。江戸の方へ行路の左にある大岩也。土俗是を岩神と云。幼兒を必連來て、此岩を拜せしむ。拜する幼兒必長壽堅固なりとて、近村近鄕より來るもの多し。

○灸塚（ヤビツ）　同村に在。水口の驛を出はなれ、江戸に行時右の方にある小塔是なり。山口但馬守水口の御城在番の時、灸治供養と號し是を建るると云。如何なる故と云事を知らず。石面に南無阿彌陀佛の字を書す。

○小里村　新城村の東に在。俱に東海道の大路也。

○東前寺　小里村の東にあり。本尊藥師如來。土俗是を峰の藥師といふ。（峯の藥師）

○寶善寺　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺也。

○今在家村　小里村の東にあり。

○稻川　今在家村領界にあり。川幅三間許、源蒲生郡駒月村より流れ出るなり。

○卽翁了心居士碑　稻川の岸に在。竪三尺七寸五分、横一尺六寸外規也。內規は何れも二寸劣れり。厚五寸なり。山口志兵衞重成者勢州人也、本姓住山氏、幼名盛治號三左衞門、其父甚左衞門吉久、仕飛驛守蒲生氏鄕、領鈴鹿郡住山村、娶小川左京之女生一女、三男、長曰內記也、盛治者其弟也、氏鄕移封奧州、吉久又從之、盛治及十八歲來江府、事修理亮山口重政、慶長十八年、重政及嫡子伊豆守重信有故忤旨、竄于武州入間郡生越（ナコセ）龍穩寺、盛治辛勤竭力奉之、同二十年、攝州難波役重政重信屬掃部頭井伊直孝於河州若江、重信一番合鑓先獲首級、其身亦被創、寇兵追至、盛治亦從其役、與同僚兩三人擊退來鋭、負重信歸陣、重信得免重政而沒、重政嘆盛治戰功拔群、卑感書山口氏及其諱字、且授家紋、於是盛治改稱山口志兵衞重成、亂平之後重政赴高野山、欲至南海、使盛治事雅樂頭酒井忠世、寛永五年重政遇赦歸江府、仕幕下、采邑依舊、同七年歸仕重政、同十二年重政易簀、次男修理亮弘隆嗣其家、重成勤仕如故、正保四年、弘隆奉台命守江州水口城、重成從行、水口土山之間水乏、行人苦渴、重成開山麓、淸泉涌出、盛夏不涸、堀井于稻川、疊石爲甃、大爲行旅之便、承應三年五月十六日、重成病死、年六十九、號卽翁了心、其後經年土崩石傾、其子志兵衞山口重主、頃間追其志、畢修覆之功、依价者請記父之履歷、固辭弗措乃述其大槩、作一絕示之

從役難波揚勇名、稻川療渴本源亨
淸泉日夜流不盡、洗出忠心一寸誠

延寶己未之冬整宇主人春常法眼林直民識
孝子山口志兵衞尉重主建焉

○夷社　今在家村にあり。

○淨土寺　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺也。

○儀峨中村　水口の巽、十八町に在村なり。

○十二社權現社　儀峨中村にあり。

○淨福寺　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺也。

○千光寺　同村に在。楊柳山千光寺と號す。本尊千手觀音座像。長三尺二寸。脇立廣目、增長の二天廿八部衆。行基の作。當寺又天平勝寶元年行基の開基也。相傳、往昔は西住坊・備前坊・福生坊・新坊・中坊・常在坊・伊豆坊・圓聚坊世尊院等の十坊あつて、所領三十餘町。今の中村寺領成しと云。甲賀郡六大寺の一なりしに、天正の兵火に、堂舍悉く烏有と成て廢亡す。今漸本尊脇立等の像安置す。近江順禮廿七番、甲賀順禮廿三番なり。比叡山延曆寺の末寺也。水口驛より東十餘町、大路の傍岩神の前より川を渡り、南行三町山の半腹に此寺あり。佳景の地なり。

○牛頭天王社　同村に在。儀峨の大宮と號す。當庄の產土神なり。所祭神素盛嗚尊。祭禮每年四月朔日。（儀峨の大宮）

○上田村　儀峨野村の東に在。

○中畑村　小里村の北に在村なり。

○山王社　中畑村に在。

○長敬寺　同村に在。東本願寺宗。蒲生郡內池村照光寺の末寺なり。

○今宿村　今在家村の東にあり。

○大野村　今宿村の東にあり。

○佐治莊　神保村・隱岐村・小佐治村・平野村・伊佐野村の五村を云。分て小佐治・神保・隱岐の三村を大佐治といひ、小佐治・伊佐野・平野の三村をも、佐治の三ヶ村とも云慣（大佐治）

はせり。佐治氏は甲賀廿一家の隨一なり。

○隱岐村　當莊の西極の村也。隱岐村の内にも、打越村・砂坂村・門の内村等の小名あり。相傳、佐々木隱岐五郎の子孫此地にあり。佐々木五郎を慕ひ隱岐國へ越しに、五郎先達て卒しぬと。爰におゐて、五郎が常に持所の守本尊を取持此地に歸り、大岡寺に納めしよりして、後隱岐村と號すといへり。五郎義清は、源三秀義の五男也。隱岐國の鹽治判官高貞が先祖也。出雲國の龜井も此末葉なり。

○香蓮寺　隱岐打越村に在。其開基未詳。延寶八庚申年再興。本尊十一面觀音也。淨土宗。安土淨嚴院の末寺也。

○法藏院　隱岐砂坂村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。本尊阿彌陀佛。長四尺。佛工春日の作。寛文十庚戌年再興。其開基未詳。天正八庚辰年地藏堂を建立す。同郡瀧村瀧氏の守本尊地藏菩薩を移して、安置す。立像。長一尺八寸。聖德太子の作なり。

○大岡寺　隱岐門の内村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。寛文十年建立。本尊聖觀音。立像。長三尺。前に地藏尊の立像。長三尺。佐々木隱岐五郎守本尊也。隱岐國より來つて、當寺に安置す。隱岐村と號するも、是によれりと云。今按ずるに、地藏佛の謂には非ず。佐々木隱岐五郎が、領地なるの故なるべし。

○正二位大明神社　同所に在。椿山と號す。緣起に曰、古昔は住吉大明神と號し奉り、末社に伊勢太神宮。南に春日・八幡・賀茂・鹿島の諸社、西に菊水大明神、北に八王子權現。恒例の祭禮毎年卯月朔日。種々の神獻あり。神輿を菊水の社に渡御。五月五日神輿春日の社へ渡御。神人綾の笠、錦の直垂、重藤の弓、眞羽の鷹股の矢を持、二町の馬場を九度流鏑馬を射る。然るに、神領日々に衰へしに、佐々木隱岐五郎領知の時、朝廷に奏し、社を造營す。則正二位大明神の勅額を下し玉ひ、祭事怠る時なく、繁榮成しに、佐々木氏衰へて後、神社も自ら大破に及ぶと云云。下略

○神保村　隱岐村の東に在。

○長久寺　神保村にあり。其開基未詳。本尊阿彌陀佛。座像。長三尺餘。相傳、此佛像古へは、水口岡觀音の脇立成しと云。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。

○山王大明神社　同村に在。

○小佐治村　神保村の東に在。

○小佐治大明神社　小佐治村に在。祭る所三座。中殿、大巳貴命、東、伊弉諾尊、西、伊弉册尊也。或云。油日大明神を勸請する處なりと云。末社二殿在。東を風宮と云、級長津彦命級長戸邊命也。西は八大龍王の社なり。鎭座の年紀未詳。棟札に曰、文明二年庚寅卯月十九日遷宮戊時。大檀

那佐治美作守平朝臣爲氏建立云云。

○淨善寺　同村に在。其開基未詳。本尊阿彌陀佛。立像。長二尺許。春日の作也、淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。

○祐寶寺　同村に在。本尊阿彌陀佛。立像。四尺許。慈覺大師の作也。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。

○觀音堂　則祐寶寺の傍に在。開基五百年許以前よりありと云。

○虛空藏菩薩堂　祐寶寺の一町半許東に在。

○毘沙門堂　俱に傍に在。皆五百年許以前よりの開基なりといふ。

○常樂院　同村東の方に在。本尊阿彌陀佛。立像。長二尺五寸許。惠心の作也。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。

○平野村　小佐治村の北に在。

○意願寺　平野村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺也。開基未詳。佐治氏の分れ、富野彈正左衞門平野村を知行せし時、當寺を開基して、菩提所とすと云傳たり。

○伊佐野村　平野村の東南に在。

○修善寺　伊佐野村に在。本尊阿彌陀佛。立像。長二尺五寸許。淨土宗。安土淨嚴院の末寺也。開基又詳ならず。

○一色氏墓　修善寺の界内に在。相傳、一色氏某、故有て此處にて自害す。寺僧墓を建ると云。

○天神社

○八幡社　俱に修善寺の界内に在。相傳、一色氏の靈を祭り、神と稱して八幡宮とすと云。

○大原莊　高木村・高野村・島居野村・中村・上田村・大久保村・神村・相撲村・市場村・和田村・五反田村・油日谷七村、以上十八村を云。大原九村と云時は、油日谷七村を除くなり。古昔は、法勝寺領なりと、【盛衰記】に見えたり。佐々木源三秀義此邊に陣取、富田家助・平田四郎貞繼法師等と戰ひ、壬生新源次能盛に射られて、秀義戰死の地也、事は【盛衰記】に見えたり。

○高木村　隱岐村の西にある村なり。

○高野村　高木村の東にある村なり。

○島居野村　高野村の東にある村なり。

○牛頭天王社　島居野村に在。社地の山を祇園山と云。所祭の神、京東祇園の社と同じ。大原莊九村の産土神なり。祭禮毎年六月十三日夜より、同十四日午の刻まで勤之。小躍神樂踊等村民催之。相傳、古昔伊賀國川合村より、勸請すと云。故に川合祇園社とも、大原谷の祇園社とも云。社僧あり。大原山河合寺と云。河合寺は惣名にして、寺院五在。願成院・覺壽院・善壽院・祐善院・龍泉院といふ。皆比叡山延曆寺の末派なり。

○多門寺　鳥居野村に在。淨土宗。
○中村　鳥居野村の東に在村なり。
○大寶寺　中村に在。淨土宗。京黑谷光明寺の末寺也。
○長福寺　同村に在。淨土宗。
○上田村　大久保村の北に在村なり。上田三河守は、甲賀五十三家の内なり。
○常光寺　上田村に在。大慶山常光禪寺と號す。建武年中の開基。本尊十一面觀音。惠心の作。開山古航禪師。其後亂世故取失ひ。或は淨土、或は天台の僧住職す。中興幻住和尙住院してより、禪宗に復歸す。京北妙心寺の末寺なり。
○慈齊寺（慈イ）　同村に在。淨土宗。
○八幡社　同村に在。
○大久保村　中村の東にある村なり。是等も、古昔窪大藏の在し地なるべし。窪大藏の事は、栗太郡の條下に記す。
○林松寺　大久保村にあり。淨土宗。
○大日堂　同村にあり。
○藥師堂　同村にあり。
○神村　大久保村の東に在村也。
○佛生寺　神村に在。淨土宗。
○延命寺　同村に在。
○若王寺　同村に在。
○諏訪明神社　同村にあり。
○相撲村　鳥居野村の、南川を隔て在村也。相撲村の事は、坂田郡の條下に出ず。
○慶德寺　相撲村に在。淨土宗。
○八王寺　同村にあり。天台宗。
○市場村　相撲村の西に在村なり。

近江國輿地志略卷之五十二終

近江國輿地志略卷之五十三

臣　寒川辰清編輯

甲賀郡第五

○油日谷七村　油日村・上野村・須山村・野村・田堵（タト）野村・毛牧（ヒヲ）村・櫟野（イチノ）村以上を云。
○古戰場　【盛衰記】云、伊賀國山田郡の住人平田四郎貞繼法師と云ものあり、是は平家の士肥後守貞能の弟也。平家西國に落下て、安堵し給はずと聞へければ、日比の重恩を忘れず、當家に志ある輩、伊賀・伊勢兩國の勇士をもよふし、平田の城に衆會し、近江の國を打したかへて、都へ責入べしと、聞へければ、佐々木源三秀義我身は老體なれば、東國西國の軍には、子息共をさしつかはし、下向せず。ちかき程に、敵の籠りたるを聞ながら、默止べきにあらずと、國中の兵を催し集て、伊賀國へ發向す。甲賀上下の郡の輩、馳あつまつて、相從けり。秀義は法勝寺領大原の庄に入、平家は伊賀の壬生野平田に在。行程三里をば過さりけり。伊賀國の住人壬生野新源次能盛といふもの、計ひ申けるは、當國は分内狹く、大勢亂入ては、國の煩人の歎きなり。近江國へ打出て、鈴鹿山をうしろにあてゝ、軍せんに、敵よらば蒐てんず、敵健ならば山に引籠、などか一戰せざるべきとて、源次能盛、貞繼法師三百餘騎を引率して、柘植の鄕與野道芝打分て、近江國甲賀郡上野村櫨（フシ）窪篠鼻田堵野に陣取て、北にむかつてひかへたり。佐々木は大原莊油日の明神のつゞき、下野に南へ向て陣をとる。源平小河を隔て控たり。兩陣七八段には過さりけり。互に名對面して、散々に射る。死する者もあり、手負ものも多し、平家は思ひ切たりければ、命も惜まず戰ふ。源氏の軍ゆるかせなりければ源三秀義一陣にすゝんで、平氏は宿運已につきて、西海に落給ひぬ。殘黨いかでか源家を傾くべき、かけよ若黨、くめや者共と下知しける處に、壬生野新源次能盛十三束三伏よつ引かためて放矢、透間を射させて馬より落。秀義か郎等敵をもらさじと、目にかけて、しばしかためて放矢に、能盛馬より下へ射落さる。敵に頸をとられじと、乘替の童、馬より飛て下り、主の頭をかき落して、壬生野の館に馳かへると云云。【東鑑】壽永三年八月二日戊午條曰、佐々木源三秀能、相具五郎義清合戰之處、秀能爲平家被打取畢云云、此時の事なるべし。

○油日村　櫟野村の南にある村なり。油日の神社ある故に號す。

○油日大明神社　油日村に在。油日社僧【金剛寺之略記】曰、夫當社勸請之最初、人皇三十二代、用明天皇之皇子聖德太子、爲逆臣守屋追討、於大和國信貴山祈弓箭加護、時有神詫曰、近江伊勢之國界有高山、入彼山可祈、太子從神詫、上峯嶺、童子忽然而來負白羽鏑矢、翁又來以兵術之奧秘及鏑矢献太子曰、以此矢可射斬逆臣之首。吾自神代守弓箭神也、常通遊此山、太子貴敬而宣奉號通山大明神云云、神悅喜之氣色顯臈天、其形六臂兩足如意輪觀音、後摩利支天之尊容也、太子則如神詫採矢筈、時繫御馬於杉樹、此處名馬杉同所有一森、號太子山、又名矢筈山、採楯板地名楯打山、御旗製之地號旗岡。製內保地號內保、暫御座所號御所牧也、太子以通山大明神之所賜之鏑矢、誅守屋也、其後爲報神恩、勝照四年戊申卯月日、當國有行幸、依勝軍之因緣、先號郡於甲賀、爾然後天延三年丁丑七月日、嶽上有大光明、依之贈正一位油日大明神之號云云、臣按ずるに、此略記全文分明ならず。最不足採用、本朝の年號は、孝德天皇に始り。大化、白雉の後、齊明、天智の朝年號なき事十七年、白鳳、朱鳥の後、持統天皇また年號なき事十年、文武帝元年より四年に至て、また年號なき事五年、始年號を造て大寶と號せし以後、年號相續して不絕。これより先後ともに勝照の年號あることなし。また守屋を逆臣といふ事甚不當なり。先賢つまびらかに論ぜり。守屋忠あつて逆臣にあらず。守屋を殺し勝軍を賀して、郡を甲賀と名づくるの說、ます〳〵不可也。【倭姫世記】に甲可、【天武記】には鹿深、【聖武記】には甲賀【朝野群載】天曆十年の官符にも甲可に作る。しかれば甲可とも甲賀とも鹿深とも通用の假名書なり。文字の訓讀に、かゝはるべからざるの義なり。また天延三年嶽上に、大光明ある故、始て油日の神號を奉るのよし、笑に堪たり。【三代實錄】曰、元慶元年十二月三日己巳、授近江國正六位上油日神從五位下云云、元慶は人皇五十七代陽成天皇の年號なり。天延は人皇六十四代圓融天皇の年號なり。元慶元年と天延三年とは、九十七年違へり。【淡海錄】また此略記を以正說とす。謬れりと云つべし。當社に祭る神體、未詳といへども、【尾張風土記】を按ずるに、海部郡雪田(ユキイ)山西の傍有神、號油日宮、大山咋神與和子姬也云云。是を以考れば、當社も亦大山咋神と、和子姬なるにや。嗚呼社僧【金剛寺の神略記】虛僞人をまどはす事甚し。

○油日越　是を與土の越ともいふ。油日村より伊賀國柘植村へ出る路なり。土山より國界へ三里、國界より伊賀國上野へ四里半、水口より國界へ二里半、國界より伊賀の國上野へ四里半なり。

(與土の越)

○上野村　油日村の西にある村なり。

○須山村

○野村　頓宮村の東にある村なり。

○田堵野村　上野村の西北にある村なり。

○毛牧村　高崎村の北にある村なり。

○楯打山　【油日の緣起】に曰、聖德太子守屋と戰んと欲して、楯板を採の地、故に號すといふ。

○旗岡　同曰、聖德太子旗を製し玉ふの地なりといふ。

○御所牧　同曰、聖德太子誓くの御座所也といふ。よつて號すといへり。

○櫟野村　上野村の東北にある村なり。

○櫟野寺　櫟野村にあり。本尊觀音。相傳、傳敎大師櫟の生樹を以、觀音の像を彫刻す。脇侍は藥師・地藏・釋迦及田村麿の像あり。天台宗。比叡山延曆寺の末寺なり。

○圓鏡院　同村にあり。禪宗。堀田氏菩提所なり。

○阿彌陀寺　同村にあり。淨土宗。

○安國寺　同村にあり。淨土宗。

○古城址　同村にあり。瀧川氏居城の跡也といふ。

○頓宮御牧

○岩室莊七村

○岩室村　神村の北にある村なり。

○岩室明神社　岩室村にあり。祭神詳かならず。

○德原村　岩室村の北にある村なり。

○市場村　德原村の東にある村なり。

○前野村　市場村の東にある村なり。

○多樹神社　前野村にあり。別當觀音寺。每年四月戊の日祭禮あり。

○五瀨村　前野村の南にある村なり。

○大澤村　五瀨村の東にある村なり。

○頓宮村　下駒月村の北にある村なり。頓宮因幡守孝政此地を領す。孝政は御堂關白道長公の苗裔にして、此地の產土也、佐瀨土山氏は其子孫なり。此地を頓宮と云は、齊宮の頓宮ありし地なれはよへり。齊宮內親王伊勢へ下向し玉ふ時、所々に頓宮あり。近江にも勢田と、此地とに、頓宮ありしと見えたり。

○大光寺　頓宮村にあり。禪宗。妙心寺の末寺也。

○土山莊

○土山村　前野村の東にあり。東海道の驛次なり。

鶯峰先生詩に

行李東西久旅居、風光日夜憶鄕閭、梅花繫馬土山上、知是

(鈴鹿社)

崔鬼知是岨、
垂加先生詩に
過盡石邊水口中、天雲幕々氣朧々、晩來止宿土山雨、明日陰晴問老翁、

○高座田村明神社　土山にあり、祭所の神二座、倭姫命及坂上田村麿の靈也。【神略記】にいはく、正一位高座田村神所祭鈴鹿神社田村明神なり。鈴鹿社と申は、人皇十一代垂仁天皇第二皇女倭姫命なり。垂仁天皇四十五年丙子の年四月八日、甲賀の翁といふもの、倭姫の命の神靈を、今の地にまつる、倭姫命を、鈴鹿姫の命と、名つけ奉る事、口傳ありといふ。田村明神は、坂上田村麿の神靈なり。嵯峨天皇勅願の神社として、弘仁二年辛卯の冬初て、社を營建し。弘仁三壬辰の年春正月十八日於二子峯、厄除の神事あり。弘仁十三年壬寅卯月八日二子の峯より、今の地にうつし給ふと云。攝社末社二十四座。神主中島氏。社の境内九町八反三畝餘、神宮寺有云云。臣按るに、【諸神系圖】に、鈴鹿御前は、伊弉册尊を祀と見えたり。倭姫命を、鈴鹿姫といふ說いぶかし。【姓氏錄】【續日本紀】を考るに、田村麻呂は、後漢靈帝ののちにして、坂上苅田麻呂の子、嵯峨天皇の御宇の人なり。【日本後紀】曰、弘仁二年五月丙辰、大納言正三位右近大將兵部卿坂上大宿禰田村麻呂薨於栗田別業、時年五十四、田村麻呂從三位左京大夫兼右衞門督苅田麻呂子、正四位上犬養孫、身長五尺八寸、胸厚一尺二寸、目如蒼鷹、鬚編金絲、有事重身則三百十斤、欲輕則六十四斤、隨心所欲怒目轉視禽獸皆伏、平居談笑則老少馴親云云、【雜々記】に、田村麿の弓勢石中三尺を射透し、遠箭拾六町に至と云云。鳥居の額正一位田村大明神と書す。年中の祭禮多といへども、先正月十八日を以祭禮とす。【鵞峯文集】曰、田村祠宇土山東、鈴鹿山西小路通、巨盜潛蹤魑魅走、塞坂草偃將軍風。

○神宮寺　田村社の社僧なり。千手觀世音の像を安置す。田村麿在世の護持尊佛なり。延鎭和尙の作なりといふ。鈴鹿の鬼神對治の時、旗の上に顯れ、一發千箭の冥助を、添へ玉ふと記せり。例の怪異論辨に及ばずして明らかなり。

○田村川　田村神社前、森の下を流るゝ小川也。源は鈴鹿嶺より出て。下は野洲川に接合す。歩渡也。土山より八町あり。一に土山川とも云。此川上に松山在り。土俗相傳ふ。田村丸古昔鈴鹿の鬼神と戰ふ地なり。臣按ずるに、鬼神とは、かの强盜の魁首なるべし。田村丸賊を討す。賊巢穴を出て、田村丸是を打破る。賊鈴鹿に、かくれ入しときの事なるべし。

(蟹か墓)

○外白川　甲賀山谷河の下流なり。十五間の小橋を架す。【江家次第】伊勢公卿勅使進發條下曰、次就路於外白河稅、山中伊勢祇承奉迎近江祇云云承遏

○白河　橋あり。長さ拾三間。

○蟹坂　土山の東に在。高五町許。土俗相傳ふ。古昔此地に大なる蟹あつて、往來の旅人を惱す。或僧一偈を示して、成佛せしむといふ。蟹か墓と號せる墓有。垂加先生の詩に、九曲上窮逸邏行、々臨蟹坂下纏縈、凶徒暴逆絕蹤去、行路不難世道淸、被堅又執鋭、步走只橫行、吳俗爲二兵證一、土人稱二害獰一云云

【永祿十一年記】に云く、佐々木承禎臣山中丹後守秀國か楯籠、蟹坂の城を攻崩すと云云。此邊古城ありしなるべし。今その遺址未詳。山中氏は、佐々木定綱末男山中八郎頼定より相續して、鈎の役には山中十郎功有。甲賀廿一家の隨一なり。

○猪鼻村　蟹坂の東にある村なり。

○山中村　猪鼻村の南にある村なり。今按るに、此地山中氏居住の跡なるべし。山中丹後守秀國武功多き中、殊に伊勢國司具教卿との戰甚功あり。秀國の息山中山城守は、太閤秀吉公に仕へ寵臣なり。

○鈴鹿越　是東海道の順路。土山驛より、伊勢國坂の下へ出るの路なり。嶺の茶店ある地、近江伊勢の兩國の界也。土山より國界へ、二里あるなり。是鈴鹿山を越るによつて此名あり。鈴鹿山は、伊勢國に屬す。光廣卿東路の記に云、るのはなといふ、西の峠を越るに、猶有明の月も、星もあり。それより過て、河原を通るに、水聲沈々として、松風颯々ときこえけり。又峠にかゝる、其上に茶屋あり。これをさかひて南は伊勢北は近江なり。

○篠路村　山中村の東北にある村なり。

○圓通寺　篠路村にあり。禪宗。京北妙心寺の末寺なり。

○黑川村　篠路村の北にある村なり。

○山安原村　黑川村の東にある村なり。

○安樂越　山安原村より、伊勢國安樂村へ出る路なり。土山より國界へ二里、國界より桑名へ十二里。

○黑瀧村　山安原村の北にある村なり。

○青土莊　土俗青土三鄕といふ。いはゆる青土村・音羽野村・一瀨村是なり。

○青土村

○淸涼寺　青土村にあり。寶積山淸涼寺と號す。禪宗。法燈國師の開基なり。相傳、中世までは大寺たりしが、數度の兵火にかゝつて、亡失す。今釋迦の大像。大日。阿彌陀觀音。不動。毘沙門矢の像殘れり。昔の鐘樓、浴室等の遺跡

存在す。
○賀茂大明神社　同處にあり。所祭山城國賀茂の神と同じ。
○古城址　青土村にあり。相傳、頓宮因幡守孝政居城の跡なりといふ。孝政は御堂關白道長公の苗裔なり。事つまびらかに、頓宮村條下にしるす。
○音羽野村　平子村の、北東にある村なり。
○稻荷大明神社　音羽野村にあり。
○春日大明神社　同村にあり。
○妙樂寺　同村にあり。稻荷山妙樂寺と號す。南紀由良法燈圓明國師の開基。弘安元戊寅の年、建立の地。京北妙心寺の末寺なり。
○一ノ瀨村　音羽野村の、北にある村なり。土山街道往還(川田)なり。此村の山上に、石の塔あり。是をさかひ蒲生・甲賀二郡の界なり。
○一ノ瀨川　源は伊勢の山間より出て、鮎川村を過、大河原村より流來る川と合し、南に折西に轉じ、一の瀨・音羽野の間を流れ、土山の西にて、また東より來る田村川と合し、つひに下流横田川と成り、野洲川となりて、湖に入。今此川を、横田の上を略し、田村の下を略して、或は田川ともいふ。今往還の大路に、茶店あつて、田川の茶屋といふ。此一瀨川の末流ある故の名なり。
○三日出村　一瀨村の東にある村なり。
○鮎川村　三日出村の北にある村なり。
○於岐須越　是鮎川村より、伊勢國於岐須村へいつるみち也。土山より國界へ、三里半、國界より桑名へ、十里半。
○大河原村　鮎川村の、北東にある村なり。野洲川の水上、綿向嶽(嶽か鏡)の山下なり。
○大河原山　高山なり。
○鎌田舊蹟　大河原山の中、鎌か嶽(鏡掛)にあり。土俗相傳、鎌田兵衛政清居住の地なりと。屋敷の跡石垣等現に存す。此地伊勢近江の國界なり。近村の兒女子此所を稱して、天狗の捿止する所とて、甚以恐怖す。臣按ずるに、鎌田政清は、首藤權頭通清か子にて、源義朝の家長の臣也。此地に居住せし事いまだ考す。【日本中興治亂記】曰、瀧川左近將監伴宿禰一益。甲賀郡大河原人也、景行天皇後胤伴四郎儀伏資兼末葉也、木瓜二引兩家紋也云、是を以思ふに、伴氏世々居住の遺跡なるべし。地名鎌か嶽といへるなるべし。鎌掛といへるも、鎌田の事にあらざるを明し。
○大河原越　大河原村より、伊勢國菰野へ出る道なり。土山より國界へ五里、國界より桑名へ七里。

近江國輿地志略卷之五十三　終

近江國輿地志略卷之五十四

臣　寒川辰清編輯

蒲生郡第一

蒲生郡【古事記】曰、天津彦根命蒲生稻寸之祖也云云、【日本紀】天智天皇紀曰、八年十二月以佐平餘自信、佐平鬼室集斯等、男女七百餘人遷居近江國蒲生郡云云、文武紀曰大寶二年三月庚寅美濃國多伎郡民七百十六口、遷近江國蒲生郡云云、當郡もと蒲生野にて、廣き郊野なり。【日本紀】に、蒲生野縱獵(野生蒲)のことを載す。【萬葉集】には、天皇蒲生野遊獵のとき、額田の王の、作れる歌をのせたり。此蒲生野ある故に、郡にも名つけし成べし。此郡南は甲賀郡也。東は伊勢國界、千草山、水晶ヶ嶽を限り。北は神崎郡の境に隣。乾は伊崎山長命寺山に至り、西は野洲郡の界、櫻山、鏡山に接す。一郡の地勢東西長くして、南北短し。乾と巽と廣して、坤と艮との間窄迫せり。
○邇保郷　詳に野洲郡の部に載。

○小西村　當郡の南西にして、野洲郡の境にある村なり。疑らくは、小西より以下、仁保村にいたるまで、仁保の鄕の中なるべし。

○牧村　小西村の西北にある村なり。

○東中小路村　牧村の東にあり。

○西中小路村　東中小路村の南にあり。

○田中村　西中小路村の東にあり。野洲の郡界也。

○大日堂　田中村にあり。何れの作といふとを不知。傍に觀月卜西居士月山妙印大姉と云ものゝ、九重の石塔あり。當堂の開基田中氏のものゝ墓なり。此大日堂屋敷の界内二反四面あり。

○八幡社　同界内にあり。

○蓮池　則大日堂屋敷の、界内にあり。四間四方許あり。池中悉紅蓮なり。此中一莖に、二花及三花生ずるもの有。甚奇なり。土俗傳て云。天竺楞伽演說の時、生ずる處の蓮也。震旦國に有しを、弘法大師入唐して是を得、歸朝の後此地に植と云。又曰三德あり。雷除地震及難產なしと云。臣按ずるに、【舒明天皇紀】七年秋七月瑞蓮生於劍池、一莖二華云云、劍の池河内國にあり。蓮は一莖にして、一花なるを以て、五德の一と成すといへども、亦双頭の蓮花なきにあらず、宋文帝元嘉年中に、樂遊苑の天泉池に、同幹の蓮花を生ず。泰始年中に豫州の鯉湖に、竝頭の蓮花開と、【起居注】に見へたり。【詩學大成】には竝頭蓮花の詩あり。魏蜀の中令趙廷隱か花池の中に、蓮一莖を擢て、上分れて兩岐となりて、二朶の花を開。大平無事の秋なりとて、是を圖畫にもし、歌詠の者少からずと【太平御覽】に見たり。

○西出村　田中村の北にあり。

○西鍛冶屋村　西出村の東にあり。【延喜式】を按ずるに、當國の鍛冶戸のことを載せたり。其遺址なるべし

○池田村　寺田村の東にあり。

○森尻村　池田村の北にあり。

○古河村　寺田村の南にあり。

○畠中村　西出村の北にあり。

○寺田村　仁保村の東南にあり。

○大房村　畠中村の西北にあり。

○仁保村　西鍛冶屋村の東にあり。

○宇津呂莊　土田村・中村・林村・宇津呂村・八幡町・市井村以上六ヶ村をいふ。

○土田村　仁保村の北にあり。

○中村　土田村の北にあり。

○西光寺　中村にあり。龍龜山大雲院西光寺と號す。淨土宗。洛東知恩院末寺也。開山貞安上人。開基大旦那織田信長公。最初貞安能州西光寺に住し、亂を避け近江に至る。信長信敬也。西光寺を建立す。始安土城大手の前田の中に御建立。天正七己卯年十一月五日鉞始。同八年庚辰年九月成就す。然而後天正十四丙戌年豐臣秀次八幡山に城を築、安土の町を悉く引遷す、寺も又移。今の地是なり。開山貞安、姓は平氏、北條相州三浦黑沼能登守滿敎の子なり。貞安後安土に居す。信長當寺を開基せしむ。正親町院天正十三年勅願所の綸旨を給ふ。後陽成院天正十八年七月十六日亦勅願所の綸旨を賜ふ。天正十九年二月二日大雲院の勅額を賜。立額大雲院の三字を書す。高さ三尺餘。西光敎寺の横額は、安井門主の御筆也。本尊阿彌陀坐像。長五尺餘。佛工春日か作也。後光の内に、十二光佛千體佛等有。脇立觀音勢至二菩薩坐像。各二尺五寸。其外什物多し。寺領十八石。世人安土宗論の寺といふ。宗論有しは當寺なるにあらず。安土淨嚴院也。詳に淨嚴院の條下に出す。當寺安土に有し故。古天正七年己卯五月中旬の頃より、靈譽といへる、淨土宗の僧當寺に來りて、說法せしを法花日蓮宗の建部紹智大眼傳内助或傳說法の座へ出、不審を强く仕出し、後に宗論となりたる始なれば、云にや。其上貞安宗論の日每問答するによつて、かく云なるにや。

○林村　中村の北にあり。

○東漸寺　林村にあり。慧光山東漸寺と號す。洛西妙心寺の末寺なり。速源迅和尙の開基なり。本尊觀世音。像は上宮太子の彫刻する處なり。東漸寺の三字を書す横額あり。黃檗の僧高泉か筆。般若堂一宇、鎭守祠、鐘樓等あり。

○宇津呂村　林村の西にあり。

○八幡社　宇津呂村にあり。土俗相傳、寛弘二年八幡宮宇佐より此處の松に、鎭座し玉ふ。因て其松を、影向の松と號せしに、何れの日か松もかれ失し、故に其跡に、小社を建といふ。今の八幡山へ、勸請し奉る以前のことなるべし。小社を建しは、また後のことなり。

（影向の松）

○市井村　宇津呂村の北にあり。

○八幡町　大房村の北にあり。此地を八幡と號するとは、八幡鎭坐のことによれり。詳に八幡宮條下に出す。大津と八幡は、近江一國にての大邑、甚繁昌の地なり。所謂近江蚊帳は、此地の名產なり。是のみに限らず、此地の名產多く、事具に土產門に載。中ころ豐臣秀次此地に在城す。故に安土商賈競集。百工肆を竝へしに、秀次京師にうつりて後、日衰微に及。然れども、餘榮尙殘て賑し。町數六十三町あり。此町安土より、引移る者多し。故に安土の舊名あり。東の小口より三町、繩手三丁、鍵の手一丁、慈恩町

三丁、鍛冶屋町一丁、新左衞門町一丁、大工町一丁、藥師町一丁、生洲町一丁、船町一丁、鐵砲町一丁、江南町一丁、馬喰町一丁、永原町三丁、玉屋町一丁、西疊屋町一丁、東疊屋町一丁、仲屋町一丁、相町一丁、爲心町三丁、桶屋町一丁、久兵衞町一丁、魚屋町三丁、玉祓町一丁、新町三丁、小幡町四丁、本町五町、正神町一丁、池田町五丁、寺內町六丁、孫平次町二丁、此地に遊女をかくし諸八幡の淫肆とはこれなり。大津四宮町のごとし。作久間町一丁、日杉町一丁、詳に圖に出す。

○八幡社　八幡町にあり。大杉町に鳥居あり。一の堀を越し、馬場長さ百五十間、幅十五間あり。八幡社地界內東西八十五間、南北九十三間。山林長サ二百間、幅九十間餘。御本社三間拜殿三間半。四面樓門二間に三間半。神樂所二間に五間。御供所二間に二間半。御輿屋二間に三間。寶藏二間に二間半。水屋一間半四面。板橋三間に五間。鳥居橫四間高サ四間。額あり。立額八幡宮の三字を書す。持明院の筆なり。夫以當社鎭座の義は、一條院の御宇寬弘二乙巳年鎭座なりと【年代記】に載【社僧普門院の記】に曰八幡宮は、一條院の寬弘五戊申年影向ありと云。社家傳說に曰一條院寬弘二乙巳年五月八日宇津呂村の松樹に、鎭座あり。此故に今に至て、社家より每春松葉を氏子に配。蓋此遺風なり。其後比牟禮山に、宮柱太敷立て、上の社と號し。山下に神功皇后玉依姬を祭る。然るに天正十年壬午年豊臣秀次此山を城地とす。玆に因て、上の社を以て、山下におろし、下の社と成す。今の社地是なり。祭禮每年四月卯の日より午の日に至まで、四日を神事とす。卯の夜氏子數十人炬松をふり立、をとりまはる。是を卯の夜躍と云。午の日は神輿を出し、數多のねりものを出す。末社五社あり。所謂岩戸社貳尺五寸。若宮大明神社二尺五寸。百大夫社三尺五寸。大島兩大神社五尺五寸。牛頭天王社三尺四方以上也。正神主杉山河內守、神主谷大和守、社僧普門院等祭事に預る。社領御朱印高五十四石三斗餘。大畝院神天皇・神功皇后・玉依姬也。本地は彌陀・觀音・勢至なりと云。普門院は、天台山の末寺也。護摩堂、庚申堂、辨財天社等則普門院の界內にあり。

○日杉山　八幡町の西南にあり。直に八幡町のつゝきなり。高さ二町許直立にはあらず。巡二十町許。

○願成就寺　日杉山にあり。日杉山普門院願成就寺と號す。始八幡山西南の方に有しを。天正年中に秀次城を築を以、鷹飼村にうつす。其後又こゝに移す。緣起に曰、推古天皇二十七年正月上宮太子御年四十八勅を蒙り、近江國內に、四十八箇か寺を建立し玉ふに、終に

及で當寺を開基ありし故に、願成就寺と號せらる。本尊十一面觀音立像。白檀。聖德太子の作御長二尺。往古一山五十五坊あつて、寺領千四五百石も有しに、織田信長比叡山を責の時、當寺も亦滅亡して、纔に其形のみを存す。今八幡の社僧、是を兼帶す。日杉山屋敷十八間貳尺五寸に、十二間、七畝十一歩、同松木山百六間一尺に、五十間、一町七反六畝二十八歩、內屋敷七十六間四尺に三間四尺、八畝十七歩。

○蓮經寺　日杉山麓孫平治町にあり。妙法山蓮經寺と號す。妙傳寺の末寺なり。永正五戊辰年草創。佐々木彈正定賴建立。開基圓敎院日意。是甲斐國身延山久遠寺の十二祖也。此寺天正五丁丑春安土へ移。同十四年丙戌の夏安土の民家こゝにうつる。則新町におゐて、當寺を造營す。同十八年庚寅の春秀次洛に移るの日、當寺も亦京都に退く事、凡四十年。然して後寬永六己巳年永正以來の古寺たるを以て、時の奉行小堀遠江寺政一に請てやまず。終に今の地に、一寺を建、是なり。

○洞覺院　蓮經寺の南東にあり。金見山慈恩寺洞覺院と號す。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。淨嚴院境內に、二の役者あり。誓要院と云。春陽院と云。誓要院の僧一寺を建立し、本寺の號をかりて、慈恩寺と稱す。慈恩寺は淨嚴院の寺號なり。天正十四丙戌年安土より今の地に引移す。其時の住職暢蓮社洞譽永宣和尙也。界內東西十間、南北九十五間。本堂の本尊阿彌陀座像。長二尺五寸。新佛也。內佛阿彌陀立像。長三尺安阿彌の作。釋迦如來座像。長二尺一寸。同作。地藏菩薩石像。弘法大師の作。同一體聖德太子の作也。此寺安土より移る。始豐臣秀次の息女正壽院利貞童女菩提のため、荒地を寄附せしむ、今の寺地是なり。

○西方寺　日杉山の下、蓮經寺の傍にあり。緣起曰、淡海國蒲生郡宇津呂縣比牟禮山西方寺、此寺者推古天皇二十七年己卯春正月上宮太子時四十八歲奉詔巡檢畿內諸國到于淡海國、遙觀此山。比牟禮山或云笠屋山、時出五色彩雲、太子怪而命駕速到、經過山林曰、形如八葉蓮華、是彌陀觀音淨刹也、世人皆不知爲靈地、吾有願爲資逆臣物部守屋之冥福、欲建於此地精舍、是年春三月奏聞而立四箇寺、成就寺阿彌陀寺、大參寺滿願寺、其一也、古云阿彌陀寺、最明寺、淡海國有古靈地十二箇處其隱一也、太子曰、三百餘歲之後、當有西方敎主垂迹云云、一條院御宇寬弘五戊申夏五月八日八幡大菩薩影向斯地、本地阿彌陀佛也、誠聖言不惑焉、可仰可信哉、是爲擁護佛法也、自爾以降人皇八十七代寬元天皇後嵯峨院以斯寺爲現當二世勅願所、而建長年疫癘流行天下罹其災死者多矣、最明寺道崇諸國行脚之時宿此寺、爲其祈念賜彌陀尊像、三尺立像、春日彫刻、今緣像是也、往古佛像默最明寺云云、故宇津呂十三ケ村民但念彼佛耳、猶疫癘難

歇、村吏以訴公官、故自興正寺（今佛光寺是也、于時天下之祈願所也、）與彌陀尊像（惠心僧都圖畫、親鸞上人製作）十三軸 并現世利益和讃、於村會八幡宮拜殿誦之唱念佛、（今十三箇村民長者、世傳彌陀畫像村々毎月十五日集會以行之八幡宮、五月八日卽八幡來臨日也、六月十五日兩彼岸中日行之、西方寺五月十五日行之、于今不退轉、）乃疫癘止矣、現世利益頗顯然矣、（此時爲興正寺末流之寺、）當此時八幡宮誦贊念佛此寺（在八幡宮東南、其村曰馬場或鳥居下、）奏神樂、故諺曰、宮念佛堂神樂、永正七年、一亂之時、有放火、灰燼而後立寶坊、天正年中因秀次公構城廓、十九年易地、（寺移鳥屋町、）元祿十四年辛巳春移寺於今地、（日杉山下、）而爲佛光寺江州第一坊也、（俗呼云御坊或佛光寺御多屋、）自古地藏菩薩一軀（太子彫刻、）者大寶寺（上所舉四箇寺隨一也、）之本尊是也、自古至今有十三箇村民（今八幡宮祭奠之時、馬場村遺民二人爲第一之列守津呂村深井氏、小舟木村渡來氏、西方寺門人是也、故論一村今八幡府馬場村舊地也、）所尊敬、淨土眞宗之靈場也、臣按ずるに、守屋を以て、逆臣とする甚非也。

○金臺寺　寺內町にあり。寺僧の筆記に曰、當御堂は京西本願寺の末也。第十一代顯如上人當國蒲生野に御建立也。其地今に彼地にあり。其後織田信長安土山に城を築の年、御堂を安土に引移す。其後文祿元年の頃、秀次公八幡山に城を築の日、御堂も此地にうつる。境內六町、今の御堂是なり。朝鮮人來聘のとき、必旅館となる。初金臺寺と云。僧代々留守を相勤しに、故あつて、正德四年のとより。京本寺より役僧來て、輪番につとむ。御堂十二間半四面。本尊阿彌陀佛。安阿彌作なりといふ。

○正榮寺　京街道にあり。巨福山正榮寺と號す。淨土宗。淨嚴院の末寺也。開山善譽祐存。本尊阿彌陀立像。長三尺。觀音勢至、長一尺七寸。俱に春日の作也。此寺初安土にあり。天正年中今の地に引移すといふ。

近江國輿地志略卷之五十四　終

近江國輿地志略卷之五十五

臣　寒川辰清編輯

蒲生郡第二

○蓮照寺　玉木町にあり。【寺記】曰、蒲生郡八幡山蓮照寺者。東本願寺之外院也。初在本郡莊邑、而不知何人之草創、經幾春秋矣、慶長中遷諸八幡山下而後寬永中（予四世祖釋道因奉本山命、而監乎此寺矣、道因者族姓攝津人知行兼備敎戒尤至、故自四方來學者常多焉、以故本山洹泥大上人賞其功德、而許道因得法孫世々相襲、監乎此寺焉、蓋今所存之堂宇、則寬文中本郡之令小堀仁右衞門歸依道因、請朝廷而所造營者也云云、）

○善住寺　小幡町にあり。一向宗。錦織寺の末寺なり。寺僧相傳、開基詳ならず。始安土にあり。天正十四丙戌年此地に移す。本尊阿彌陀座像。長二尺三寸。惠心作也。

○寶積寺　新町二丁目にあり。如意珠山果德院寶積寺と號す。淨土宗。初安土にあり。天正十四丙戌年當地へ引移。

開山傾蓮社西譽覺祐和尙。本尊阿彌陀座像長三尺あり。

○正福寺　京街道にあり。淨土宗。京知恩院の末寺なり。愛慈山玉念院正福寺と號。【寺記】に曰、江州蒲生郡愛慈山玉念院正福寺は、往古同國安土本町におゐて、織田信長公の御建立。開山は安土宗論の元始覺蓮社靈譽上人玉念大和尙なり。上人は元上州小島の產にて、其國愛慈寺に居住す。或夜靈夢を蒙り、安土に來り正福寺に住す。其後今の地に移す。本堂七間に六間。本尊阿彌陀座像。春日の作也。古今靈驗多し云云。

○願故寺　博勞町にあり。加納山萬德院願故寺と號す。淨土宗。京知恩院の末寺なり。天正十四丙戌年開基泰蓮社寬譽圭山和尙。本尊阿彌陀三尊。惠心の作なり。

○順應寺　大工町にあり。一向宗。東本願寺の末寺なり。初は廣濟寺と號し、北の庄村に有。天文の頃武佐へ引移す。多賀村に道場あり。其道場を天正年中八幡町に今の地に移す。寬永十一年に、始て順應寺と號す。

○細江　堀はゞ十間程あり。湖水より堀通す。古八幡山城の時の外堀なり。今は商賈船の通路とす。南にある橋を、太手橋（大手橋）と云、（是古の堀の大手口なり。）其次にあるを、淸四郎橋と云、（是孫平次町筋なり。）其次にあるを、本町橋（本町筋なり。）といふ。其次にあるを、宮の橋（是八幡宮筋也。）と云、其次にあるを、靑屋橋（是樂師町より多賀北の庄へ）と云、

（津田の入江）

の通路。此堀の事詳に知難し。津田の入江といひ、古歌に詠ぜるは、此地なりと云。臣按ずるに、恐らくは非なるべし。此堀は豐臣秀次城を築きし時に、堀たる物なれば、古歌に詠べきやうなし。津田の入江と云は、總て奥の島より、此邊の入江を云なるべし。

○津田入江　此邊の入江を云。

【續後撰集】　覺盛法師

五月雨は津田の入江のみほつくし、見へぬも深き
しるしなり皃。

此覺盛法師は、津田權太夫親實と號せし者なり。織田氏の祖也。今織田氏の末孫津田を名のるは、此津田によれり。事詳に人物門に出す。細川藤孝氷りるし津田の入江もうちとけて、國もゆたかに松風そふく、此歌は藤孝公六角兩家の嗹に下りたまひ、和睦の上にてよみ給ふと云。

（比牟禮山）

○八幡山　八幡町の、西にある山なり。詳に圖にしるす。一に比牟禮山と號し。又法花峯とも呼り。土俗は八幡宮鎭座の所以を以て、直に八幡山といへり。其高さ凡百二三十間許。八幡町の山面五百十間に百間、舟木山の面三百五十八間に八十間。南津田村の山面百七十三間に百二十間、北庄村の山面二百五十間に二百間有なり。

○不動水　八幡山東の方中程に、弘法大師作の不動明王岩に彫付あり。其下にある名水是なり。此處を不動坂と云。

○古城址　則八幡山の頂にあり。相傳、天正十三乙酉年豐臣秀次是を築といふ。本丸二三の廓・埋門・石垣等損せずして、今にあり。八まん町の船入川は、其時の堀なり。大手橋等の名。今に存在。秀次を近江中納言といひしも、此ゆへなり。

○船木郷　舟木村・多賀村・北庄村・南津田村・奥島庄等を云。

○船木村　八幡の西にある村なり。日杉山も舟木村の内なれども、混雜する故に前に出せり。

（船木の天神）

○嚴淨寺　同村にあり。玉光山と號す。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。本尊阿彌陀立像。長三尺二寸。聖德太子の御作なり。脇士觀音・勢至立像。惠心の作なり。辨才天は、弘法大師の作なり。貞治三甲辰年玉蓮社泉譽西阿和尙の開基なり。

○青根天神社　舟木村の北にあり。比牟禮山青根天滿宮と號す。或は船木の天神宮と云。八幡山の南面なり。天滿宮の社僧を、香梅寺といふ。【神記】曰、人皇六十六代一條院御宇、寛弘二乙酉の年青根長者の建立。祭所の神、菅丞相の靈なり。神體は菅公束帶の木像。攝社有、吉祥天女・乙護法。祭禮毎年三月二日、五月五日。

○香梅寺　青根天神の社僧なり。本尊は阿彌陀如來。聖德太子の作也。寺は今山門の末派なり。

○本地堂　本尊十一面觀音。傳教大師の作也。外に四天王安置す。

○護摩堂　寛永十三年造立、本尊不動明王。智證大師の作なり。別に大日如來、愛染明王、毘沙門天を安置す。

○毘沙門堂　傳教大師作る處の毘沙門にして、青根長者の守護神なりと云。【香梅寺略記】曰、康永四乙酉年九月二十一日社頭再造營、住持天台山楞嚴坊僧都智遍、是時延曆寺三千之爲一院也、應永二十八年從濃州大般若經寄附、毎歲正月十二日轉讀於此經、奉祈天下安全者也、天正十八年社回祿、當天正二十壬辰年十一月二十一日社頭三造立、別當天台沙門財林坊法印、人皇百八代後陽成院賜宸翰（天神宮號、寶殿納之）、慶長二年五月二十五日從公義境内御除地、二町五反七畝（御寄附）、同三年社領六石七斗九升四合、（宮令西川右兵衛別當大智坊）寛永十三年護摩堂造立、此間社頭及破壞、正保年中慈眼大師執當喜見院賢盛法印弟子法印山秀受慈眼大師命從東都湯島來住于當院、院號改寶城院、寛文十二年寺造立、延寶六年十一月二十五日社頭四造立、拜殿鐘樓石鳥居以上氏子四ケ村、（舟木村、小舟木、上田村、八木村）境内法華嶺西南尾、（從八幡町當乾三町餘）秀次公御城内二丸下園庭在天守臺下、景致西湖水比叡山比良山、前水莖岡、（淡海公之舊跡并釣崎）津田細江、北長命寺松崎、東八幡町、南鏡山三上山、自正保年中至享保年中、法印山秀山盛山厚義山師資相續八十餘年、山盛山厚社頭寺院悉建立、享保三年日光一品公寛親王降賜色衣令旨、享保六年青蓮院二品尊裕親王降賜三緒袈裟令旨云云、

○富塚　青根天神社の、六町南にあり。青根長者の屋敷跡と號す。土俗相傳、古昔青根長者天神宮を勸請し奉る日。自誓て曰、此山朝日さす夕日さす下に楠木千本漆千桶黄金まるかせ是を埋む。末代に及、天神の社斷絶に及ばゞ、右の寶を堀出し再興すべしと。故に其處を富塚と名づく。則其地に、諏訪大明神を勸請す。今にあり。

○南津田村　舟木村の西にあり。

○八王子社　南津田村に在。祭所日吉八王子の神也。

○多賀村　八幡山の北にあり。

○興流寺　八幡山の、東の方にあり。聖德太子の開基なり。本堂は織田信長安土へ引たり。今の淨嚴院の本堂是なり。

○八王子社　同山の尾さきにあり。相傳、興流寺の鎭守也と云。

○北庄村　多賀村の西にあり。

○七池　北庄村の、裏山に在。柱礎の跡多くあり。思ふ

に、古昔阿彌陀寺繁昌の時の寺院の跡なるべし。

○渡會橋　或は渡來に作る。又渡合にも作れり。北庄村より、奥島村へこゆるの橋也。長さ五間許の、板橋なり。土俗相傳、昔此橋下に、大蛇棲止して、往來の人を惱す。鄕民是が爲に苦しみ、狛の長者及敦實親王に、此事を告る。兩將諾して、佐々木社に參籠して、此事を祈るに、あらたに靈夢を蒙り、彼橋上に到に、大蛇水上に浮出、兩眼月日の如く、其影水にうつりて、眼四あるが如し、敦實親王弓矢を取て、件の眼を射て、つゐに蛇を亡す。件の蛇の靈を祭て神とす。今橋の傍の社是なり。さて彼四の眼を射し故を以て、佐々木京極の家紋を、四目とするは此謂なりと云云。臣按ずるに、渡會橋下の水底甚深し、水色すさましく見ゆる。古昔大蛇抔の、棲止せし事はさもあるべし。狛の長者及敦實親王へ、此事を鄕民等が、賴たる事不審し、狛の長者と云もの、傳說詳ならず。されども當國金勝寺、狛坂寺の舊記を考る時は、人皇五十二代嵯峨天皇よりは、遙に以前のものと見へたり。亦敦實親王は、人皇五十九代宇多天皇第九の皇子也。是を以て、遙に時世の相違懸隔せる事をしるべし。亦狛の長者といふもの、數代相續してありしものにやと、あまねく舊記及故老の遺聞を搜求れども、かつてなし。又彼蛇の四眼を射たるより、

（とこの說目四）

佐々木家四目結を以て、家紋とすると云事笑べし。彼蛇四眼に非ず。實に兩眼のみにて、其眼光の、水にうつりて、四眼に見ゆるなれば、是を以て四目の事にはあらず。若佐々木氏蛇の目を、家紋とする事あらば、此說あることもあるべけれども、決してなし。土俗或は又曰、此時蛇を射たるの矢を、後世四目と號し、家紋四目とすと。誠に以て笑に堪たり。四目鏑の名は、忝も神代八目の鏑より起れり。何ぞ此時に始らんや。若又かりに、四目の紋は蛇眼の四なりと云はゞ、蛇の目は圓く、何ぞ方を用んや。惣て孟浪の說也。古老云、佐々木の紋四ツ目結は、本名倚懸目結と云也。鹿子くゞしの象形なりと。【佐々木社記】曰、當社四目結紋者、神秘之第一也、委細不記之云云、【新定佐々木氏家譜】定綱之譜下曰、始定器服章識爲四方目云云、定綱は佐々木源三秀義の子也。宇多天皇第九皇子を、敦實親王といふ。親王左大臣雅信を生り。雅信參議扶義を生。扶義成賴を生り。成賴出て、近江國蒲生郡佐々木鄕に居せしより、始て佐々木と號。武臣となれり。秀義は成賴よりは、五代の孫にて、敦實親王よりは、九代の孫たり。其秀義の子の、定綱が時に至て、始て四ツ目を紋とせしとあれば、旁彼蛇の四眼を表して、四目を付ると云說、甚僞也。佐々木の家譜は、佐々木二十四世の嫡孫左兵衞定賢

（仙行山・仙居山）（頃山）

が撰て、當郡佐々木社に、奉納する處の實錄也。臣按ずるに、定賢が子定明に問に、蛇目のことは、嘗以なきとなりといへり。是以彼僞をまるべし。

○道祖神社　渡會橋の傍にあり。土俗は彼水底の大蛇が靈を祭るといへり。非なり。道祖神也。

○奥島莊　丸山・奥島・白部・王濱・北津田村・中庄等の村をいふなり。

○奥島村　北の庄の西北にあり。地續に非ず。葭沼有て、間隔る。北の庄より渡來の橋を過て、此地に至る。奥津島と讀るはこゝのことも也。此奥津島山を、仙行山とも、仙居山とも云、古今仙聖此山に住と云。笠鉾といふ峯に常に住すと云。諸民此峯へはゆかず。是を片吹山とも傾山とも云。

【續千載集】に

風渡る鳩の湖空はれて、月影淸しおきつ島山

臣按ずるに、奥津島山とよめるは、こゝのことにはあらず。澳の島のことなりと聞り。然れども、しばらく土俗の說に隨ひしるす。

○王濱（ワウノハマ）村　是奥島の中にて、別也。土俗云、古昔惟喬親王此地に來り給ふと有。故に所の名とす。或はいふ、天武天皇なりと。又曰上宮太子也と、其來らせ給ふ時むべを供

（むべ）

御とす。夫より以來每年十一月むべを、禁裏へ奉献す。其佳例なりと云。臣按ずるに、【延喜式】に載する處、近江例貢に郁子と云有。蓋此事也。五の例貢ありしかども、今は悉廢して、只此郁子のみぞ、昔にかはらぬことには有ける。年によつて、郁子二献ずる事もあり、三奉る事もあるなり。則奥島村の庄屋此事に預る。禁庭より、烏目一貫文を下し給はる。彥根城主の領知なれば、井伊氏より、郁子の料米一石五斗を與、むへ田と號し。郁子をつくる田あり。事詳に土產門に載。或書に曰、昔淸見原天皇舟にて落來給ひ、三年御止住。昔は此地を勝うらと云。月の下の勝麿と云人、忠を盡す。此勝丸を後に、月上明神と祝し給ふ。今の王濱の神祠と云。此奥島に中江式部太夫と云侍、秀吉公に仕て立身すと【太閤記】に出。慶長亂に滅亡す。月下勝間と云と【盛衰記】にも出たれども信用しがたし。

○丸山村　奥島村の北にあり。

○白部村　丸山村の北にあり。

（谷現櫑）

○元富士　奥島の北にあり。施行山の向にあり。高さ村より大概一町半許、惣じて木石なし。頂上より二三間下り、大石盤石五六疊々として、其上に古松二本あり。土俗此石ある處を、權現谷と云。富士權現影向の地とす。或は云、此山先涌出して、然して後駿河國富士山いづ。故に是

を元富士と云。淺間山と云ふと云云。

○施行山　元富士の向にある山なり。直立五十五間許。細く長き山なり。大るに松茸を出す名産也。此山を施行山と號するは、或年飢饉して、飢人多く此山に入て、草木を苅取るとをゆるす。故に此名あり。

○伊崎不動堂　施行山の、北の續に在。湖岸なれば伊崎と云にや。實は伊崎那山と號す。堂は北向なり。本尊不動明王。聖德太子の作也。外に觀音の像、大黑の像あり。俱に聖德太子の作なりといふ。寺領五十石、また鬼の假面あり。什物とす。施行山より、一里許もあるべし。谷の中二里許行ば、天王山なり。此地に掉飛と號することあり。山の岸より、船の帆柱の如く、太く長さ十間許の木を、根をよく堀込立て、木の末は斜に、湖中へつき出しあり。參詣のもの、所望することあれば、土人錢を貪て、此木を走り登り、木の末より湖中へ飛込、水中をくゞりて、遙の脇に出、是を掉飛の術と云。所謂都盧の類也。掉飛の前に寺有。役行者前鬼後鬼の影像あり

○北津田村　奥島村の、南西にあり。

（伊崎那山）

近江國輿地志略卷之五十五　終

近江國輿地志略卷之五十六

臣　寒川辰清編輯

蒲生郡第三

○中庄村　北津田村の、西南にあり。

○長命寺　長命寺の山は、中庄村の西南に在。長命寺山高さ十二町餘あり。八丁許上に、長命寺あり。山下を長命寺村と云。少許民家有。本堂七間、南向。本尊聖觀音。長三尺。聖德太子の作なり。伊崎（イサキ）那山長命寺と號す。武内大臣の本願也といふ。或は伊邪耶山、又姨崎屋山に作る。寺九院あり。天台宗。相傳、觀音堂草創の日。尼此事に預る。而して後、僧尼相竝て此事に預る。然れども、二十年許以前故あつて、尼退散す。【緣起】曰前略　こゝに西國順禮所第三十一番近江國蒲生郡姨崎屋山長命寺は、聖德太子の御開基。本尊觀世音菩薩は、太子の御自作也。中略　太子萬國を、歷覽し給ひ。此姨崎屋山に來臨ましますに、一株の古木より、光明を放こと赫赫たり。太子立寄御覽ずるに、奇なる哉、その木に觀音菩薩の種子そなはり、その下に壽命長遠所願成就の文字あり。是誠に丸か、佛法興隆衆生濟度の大願成就すべき禎祥なりと、賴もしく思ひ給ひ。此靈木を以て、觀世音の尊像を製作し給ひ、此山に梵刹を建立し、安置せんと也。されども容易に刀をくだし給はんは、その恐れなきにあらず。中略　しばし觀念し給ふ所に、不思議や虛空より、如是所願成就圓滿と唱し聲を聞召て、太子奇異の思ひ深く、欣喜踊躍して、彼靈木を取て、手づから十一面千手觀音合體の尊像を刻ませ給ふ。その時當山瀑布の谷より、光明かゞやき、一寸八分の聖觀音さつたの尊像あらはる。太子渴仰の思ひをなし、頓首膝行して、迎へとらせ給ひ、件の靈木にて刻せし、尊像の御胸の中へつくりこめさせ給ふ。扨七堂伽藍を造營し、彼本尊を本堂に安置し、壽命長遠所願成就の文字を約し、長命寺と名づけ給ひける。今の世までも、此本尊を十一面千手聖觀音三尊一體と拜み奉る。誠に不思議の靈像、未曾有の道場たり。中略　人王三十九代天智天皇の御宇、當國志賀郡に都し給ひ、大宮造り事をはり。御宿願ありて、當寺に臨幸ましく、本尊を供養禮拜し、自一枝の楊柳を手折て、本堂の傍にさゝせ給ひて、詔ありけるは、朕が宿願成就せん事ならば、此柳の枝に奇瑞を見せ給へと、ふかく叡慮をこらし、丹誠を盡し給ひしに、不思議に柳の枝一夜に大木となり、翠葉風にひるがへれり。天皇その應驗の揚焉を感喜し給ひ、是より長命寺を、天下泰平勅願所となし給ふ。中略　人皇六十五代花山院御寵愛深かりし、弘徽殿の女御、うせ給ひ。中略　御なげき深かりける。或時悲花經を叡覽ありしに、妻子珍寶及王位臨命終時不隨者といへる文に至りて、忽菩提の御心を起させ給ひ、中略　麻衣禁闕をしのび出させ玉ひ、花山といふ寺にて、中略　麻衣の御姿とならせ給ひ、入覺法皇と申奉りて、佛法修行の御爲とて、紀州那智山より、濃州谷汲まで、三十三所觀音の靈場を巡幸まします。第三十一番に當つて、當寺に臨幸あり。本尊を禮拜ありて、扨天智帝のさゝせ給ひし、楊柳の枝葉、大にはびこりしを叡覽ましまして、遠きむかしの靈驗を。思食出させ、御修行の御志、いやましにならせ給ふこそ、今の世まで順禮者の唱る歌に。八千と世や柳も長き命寺、はこぶあゆみのかさしなるらんといへるも、太子の八字の文と、天智天皇の、楊柳の因緣とをとりあへし詠吟なり。天智天皇御再興の後、星霜歸りぬれば、佛堂丹青落、寶欄苔蘚生し、蔓艸道を塞き、香火まさにつきなんとす。爰に當國野洲郡仁保鄕に、賴智法橋といへる沙門あり。中略　同郡小田の神社に參籠して、道心堅固

佛法興隆の大願を、祈誓せられける。その夜の夢に、汝が所願を遂んとおもはゞ、當國長命寺を再興すべし。然ば二世の願望、悉く圓滿なるべしと、あらたに示現を蒙る。法橋歡喜の心淺からず。急ぎ當寺に來りつゝ、有緣の檀越を、あまねく勸進し、法燈の絕なんとするを腦、堂塔のすたれたるを興し玉ふ。中略。佐々木兵部丞秀義は、敦實親王の八世の御孫也。元曆元年八月伊豆國住人畠山進士家助・右兵衞尉家能家清入道といへるものども、平家の味方となり。源氏にそむく。秀義馳向ひ給ふ。時に秀義七十三歲逆徒の鋒に失玉ふ。中略。右大將賴朝死節の忠義を感じ、秀義の嫡男定綱に命じて、秀義頓證菩提の爲とて、當山長命寺を再興せらる。本堂を初、釋迦堂、藥師堂、太子堂、護摩堂、寶塔、鐘樓、二王門、四十餘ヶ所の僧房甍をならへ、造り給ひけり。時に天台座主の弟子瑞雲院尊海法印を以て、中興開山として、晨夕讀經誦呪怠慢なからしむ。右大將家自秀義の像を畫き、定綱に下さる。定綱その德澤の深きを感じ、當寺に納め、秀義を長命寺殿近州大守天岳崇瑞大居士と稱し、當國高島郡三莊淺井郡十五ヶ所を寄附して、永く寺領とす。中略。十五代佐々木尾張守氏賴遁世せし刻。中略。當寺に參詣せしに、靈夢を蒙り、感喜の餘り、三井長吏桂園院實慶法印の寫せる、法華經一部と、

（北野寺）

正宗の作の、銅炎といへる名鍔を奉納し玉ふ。中略。七堂伽藍四十餘ヶ所の僧房と〻く修覆を加へり。中略。大永六年丙戌九月十四日山門の學頭內供奉快重より、證文を當寺に贈る。當山長命寺は、天智天皇の御願所、山門西塔の別院也と、數度宣旨を蒙り。西塔の學頭連署の趣明白也。中略。正親町院元龜四年癸酉六月、當國岡山の城主乾甲斐守、織田信長公の爲に亡さる。その兵火によつて、伽藍僧舍悉く皆燒失せり。天正十年壬午一山の僧侶あまねく諸人に勸進し、堂塔を造營せりと云云。下略。【觀音靈場記】曰天皇二十七年聖德太子之建立也、本尊聖觀音、長二尺靈驗無双之靈佛而人祈延命最有驗云云、【拾芥抄】に曰、長命寺三尺聖觀音、武內大臣の願なりと云。【觀音靈場記】に又曰、江州長命寺村にある、金龜山長命寺は、又は北野寺とも號す。往昔太子の建立なりしか、淺井備前守の兵火にて、寺院ことゞく回祿せり。然れども本尊觀世音は、前弘法大師、かゝる伽藍の絕なんことを悲玉ひ、自千手大悲の像を造り安置し給ふ。初は金龜山北野寺と號せしを、その後蒲生長命の建立にて、長命寺と改といへり。中略。又蒲生郡へ來り給ふに、百歲程の老翁大師に向て

云。中略。斯所に一樹の柳あり。是靈木也。常に光明あり。汝急ぎ斯樹を切て、觀自在菩薩の像を造立せよ。我も加護せん。此翁が歲にあやかり、其尊を信じて祈る輩は、極て壽命長久ならん。我こそは此湖水に歲久き、白鬚とは我事也と告で、かき消如く失玉へり。大師驚き給ひて、御迹遙に拜み、急ぎ彼楊柳樹にて、長三尺の觀世音を一刀三禮にして作り給へり。是則長命寺の尊像なりと。云云。臣按ずるに、當寺武內大臣の本願也と云說。甚僞なり。武內大臣は人皇十二代景行天皇十六年に生れ、仁德天皇の七十八年に薨ぜり。佛法の我國に渡りしは、人皇三十代欽明天皇の御宇也。こゝを以てその僞なることを知べし。【緣起】にのする所の通り、聖德太子の開基なるべし。【拾芥抄】亦誤れり。此緣起殊に長し。その中孟浪のこと多し。故に中略。その要をとつて記す。厚譽が【靈場記】に長命寺もと金龜山北埜寺と號し。蒲生長命の再建。故長命寺と改ると云說いつはり也。金龜山は犬上郡今の彦根城のことなり。此山を金龜山と號する事は、活津彦根命降臨の地なるによつて也。そのことは詳に彦根條下に記す。その後此金龜山へ、觀音を安置せし也。彦根山の觀音とて、白阿院御幸などありしこと【元亨釋書】にも出たり。今金龜山井伊氏の城となるについて、山下に又觀音を遷し、天滿天神の社と、一所に置けるを以て、金龜山北野寺と號せり。彦根三の廓に今にあり。然るを此事を取違て、長命寺のこととす。笑べし。又蒲生長命何れのものといふ事をしらず。假に設ける人なるべし。また淺井の兵火にかかれることも虛なり【緣起】にしるせる通り信長の兵火にかゝりし成べし。又弘法大師彼楊柳にて、觀音を作るも、僞り成べし。厚譽も記せる通り、【大師行狀記】にも、かつて見へず。順禮歌の說等【緣記】の說是なるべし【淡海錄】に延命寺と云を載て、長命寺を亦載たり。延命寺と云寺なし。長命寺のことをきゝ誤り亦長命寺をものせたりと見へたり。【淡海錄】は僞書也

○閼伽井　長命寺本堂の下にあり。太子草創の時、一寸八分聖觀音の御影、此水にうつらせ給ふと云。

○六所權現石　本堂の上にあり。傳云、當寺火災にかかりし時、本尊此石に飛移ると云。

○天智天皇鞠場　本堂の西方に在。天皇御遊の處と云。

○禮拜石　山を下ること一町許にあり。觀音容姿をあらはし置給ひし石也と云。されば、今に至るまで參詣のもの、此處にて稽首禮拜するは此謂なり。

○松崎　長命寺山の西の麓也。波立る松が崎なるあし田鶴は、千代をかさぬるためし成けり。千歲ふる松か崎に

はならひつる、鶴さへあそぶ所なるらんと讀る處也と。長命寺の【緣起】に見へたり。俳士三千風か【日本行脚文集】に、津田の細江、水茎の岡、又登蓮法師が薄の菴、木の葉の沖のこなたの松が崎の木蔭と記せり。登蓮法師が十寸穂の薄の事は長明【無名抄】兼好【徒然草】に出たり。これを考るに、わたのへにまかるなり、とし比いぶかしくおもひ給へし事を、しれる人ありとき、て、いつて尋に、まからざらんといふ事あれば、此處のことにてはあらざるべし。然れどももしや、かゝるいひ傳もある事にやと、木の濱より以て、北松が崎近邊の村老に、あまたたび尋れどもしらず。しばらく此事を記のみ。

○辨財天堂　松が崎の松蔭にあり。

○三石　松が崎の磯邊にあり。長命寺の【緣起】にいはく。むかし此石の間より一つの梵鐘うかみ出る。鐘樓を建て安置するに、人も撞さるに、おのれと諸行無常の響を出す。其後盜賊鐘を奪ひとらんとするに、少も動かず。怒てすつ。其處を鐘が淵と名づく。今此三石よりおり〳〵龍燈をあくると云云。

○瀧谷　長命寺山東の半巔に在。是往古一寸八分の聖觀音出現せし處也。瀧谷といへり。參詣の人此瀧に身をうたれて、靈前にいたる。

（鐘ヶ淵）

○不動石　此瀧の上に在。古來より傍に不動堂を建て、不動明王を安置す。

○虛空藏堂　此山の麓の濱邊、岡崎に有。相傳、昔尊海法印日毎に來て、三十三度の垢離をとり、虛空藏の御前に通夜す。靈驗少からずと云。

○天狗社　此山の西の峯に有。長命寺の【緣起】に曰、太郎坊の祠あり。一山鎭護の靈神也、その來由を尋るに、後奈良院御在位の頃、當寺に普門坊と云異僧あり。五時八教の奧義に通じ。一心三觀の秘旨に達せり。本山にて法華經を讀誦せられける。その聲淸亮にして、湖水の面十八町許隔たる、水茎の岡の濱邊までありありときこえけるとかや。或時東路や富士の高根に入月を、都の西にいつか詠むと云歌を詠し、佛法繁昌伽藍鎭護の爲に、大天狗となり玉ひき。是によつて祠を建て、太郎坊權現と仰ぎ奉る。其靈驗揚焉なりと云云。臣按るに、【山海經】曰、陰山有獸其狀如狸、名曰天狗、韓文曰、天狗形如犬奔有聲、藤原頼長【台記】曰、愛宕護山有天公飛行、所謂天公者何物乎、答曰、嘗見朝鮮鄭道傳謝魑魅文序云、會津多大山茂林、僻近於海曠無人居、嵐蒸瘴泄易陰以雨、其山海陰虛之氣、艸木土石之精、薰染融結、化而爲魑魅魍魎、非人非鬼非幽非明亦一物也、日本天狗殆庶幾于是、與中華書之木客山操似而非也、深山窮谷往々有之、其形不可見、或現大身則長人如僧、高鼻勾瓜、復小々羽化雲騰、若變作異形惱人、强字之曰天狗、蓋象惡星也【台記】作天公【明月記】作天狗【大成經】天狗神姥神而威强、其軀人身獸首也、鼻長耳長〻長獸也、左右不隨意則大怒云云、諸書に載する所此如くにして、佛法などを守護すべき者に非ず佛經の中にも天狗の佛法を擁護することいまだ見あたらず。やゝもすれば、餘りに奇異をいはんとては、天狗のことに及。愛宕護山の太郎坊、比良嶺の次郎坊の類なり。此僧の讀誦の聲十八町きこへたる事は、なしともいふべからず。釋の常安の志賀郡比良山に居て、十二佛名經を讀て禮拜修懺せし其聲、帝闕に聞ゆと云。田村丸、源頼朝、田原又太郎等其聲甚大きく遠くひゞくといへばなしともいふべからず。天狗になりたるとはいふかし。若或は天狗になりたる事あらば甚怪しき事にて、かつて貴ことなし。何ぞ祠を建て祀や。

○信長殺生場　上の平地三十間に五十間あり。【織田軍記】に曰、天正六年戊寅三月六日大臣家信長御鷹山狩として、奧島山へ取登らせ、今晩長命寺若林坊に御宿、三日の間御鷹野物數是あり。同八日安土に至て御歸城。又曰、天正八年庚辰三月十五日大臣家信長奧島山御鷹遣るべきの由にて、御船に召れ、長命寺若林坊に至て、御座を移され、五日迄御逗留。白生の御鷹羽振勝れ、希有の由承り及、方々より御鷹野見物群集す。亂取と申御鷹、是又逸物、勝れたる羽飛にて、物數仕候。同十九日安土に至て御歸城畢云云。傍に太閤秀吉の小屋場あり。

○阿彌陀寺跡　長命寺のつゞきに在。伊崎耶山阿彌陀寺と號す。南都元興寺の僧賢和の開基也。相傳、古昔南北の谷に、三百の坊宇あり。三千石の寺領ありて、甚繁昌せしに、何れのとしにか寺破滅す。【三代實錄】曰、貞觀七年四月二日壬子、元興寺僧傳燈大法師位賢和奏言、久住近江國野洲郡奧島聊構堂舍云云、是なるべし。今此地蒲生郡也。何れの日野洲郡を割て、蒲生郡に附屬する也不審。此山上に天王岩と號する石あり。上に松樹生たり。

（天王岩）

近江國輿地志略卷之五十六　終

近江國輿地志略卷之五十七

臣　寒川辰清編輯

蒲生郡第四

○岡山　長命寺より十八町あり。はなれたる小島にして。牧村の持分也。當時牧村の東忠兵衛と云もの山主也。岸至て水深く岩石尖にして、湖中の大觀絶景なり。故老相傳往古淡海公暫く居住し玉ふ也と。今に岡の屋形の跡と號する處是なりと云。臣按ずるに、【續日本紀】廢帝勅曰、其先朝太政大臣藤原朝臣非唯功高於天下、是復皇家之外戚也、是以先朝贈正一位太政大臣、斯實依我令、已極官位、而准周禮猶有不足、竊思勳績蓋於宇宙、朝賞未允人望、宜依太公故事、追以近江國十二郡封爲淡海公云云、かくはあれども、不比等の近江に捿止のこと見當り侍らず。淡海公に封ぜられしは、死後の事也。世人淡海に封ぜられしと云ふを以て、此說を附會せるなるべし。此屋形の跡と號する所は、淡海公にはあらで、遙後の足利義澄の、しばらく捿止せられし跡也。【舊記】に永正八年八月十四日公方義澄公江州岡山に逝す。年三十三と云云載たり。是を以て、いよ〳〵淡海公捿止の跡に、あらざる事を知べし。古歌に詠ずる處の、水莖の岡是也。抑水莖の岡と號することは、巨勢金岡此地に來り、此地の景色を畫んと欲すれども、絶景筆力の及所にあらずとて、筆を拋。故に水莖の岡と號す。水莖は筆の異名なればなり。今此地に、硯ヶ淵、筆が崎など號する處あるは、皆此故なりと云。臣按ずるに、人丸の歌に、雁金のさむくなるより水莖の、岡の葛葉は色付にけりと讀り。人丸は持統文武の朝の人にて、天平元年三月十八日石見國に卒せり。金岡は宇多天皇の朝の人也。此を以て水莖の岡の號金岡に始らざる事明けし。

【萬葉集】

秋風之日異吹者水莖能岡之木葉色付爾家里

【同】

天霧相日方吹羅之水莖之、岡乃水門爾波立渡

【仙覺抄】に、是は筑前のことなりといへど、うがてり。近江國水莖岡と云說是なりと【拾穗抄】に見へたり。

雁金のさむく成より水莖の、岡の葛葉は色付にけり

【新古今集】　顯昭

水莖の岡の葛葉も色付て、今朝うらかなし秋の初風

【玉吟集】　家隆

かき絶てとふ人もなし水莖の、岡のやかたの五月雨の頃

【草菴集】

五月雨の日數に增る水莖の、岡のみなとはさそさはく蘭

【續後撰集】

水莖の岡の淺茅のきり〳〵す、霜のふりはや夜寒なるらん

【新後撰集】　定家

水莖の岡の眞葛を海士の住、里のしるへと秋風そふく

【玉葉集】　爲家

いかにして手にたにとらぬ水莖の、岡への雪に跡を付らん

【續後拾遺】　前右大臣

つれもなき人に見せはや水莖の、岡の萱生の亂れ安きを

【新千載集】　行忠

代々の跡を忘れすてしや水莖の、岡の淺茅の秋の夜の月

【新後拾遺集】　常顯

水莖の岡邊の小田の村雨に、露かき分てさなへ取なり

【新續古今集】　雅緣

水莖の岡邊もしるゝやかた尾の、鷹引居ていつる狩人

【夫木集】　土御門院

水莖の岡の村萩打なひき、鹿の音ながら秋かせそ吹

【類聚名所集】　爲家

水莖の岡のみなとの波よりや、筆の海てふ名には立らん

○筆ヶ崎

○硯ヶ淵　事皆前に出たり

○蛙石　その形似れる故に名付る也。

○八疊岩　其大さをたとへて然して呼る也。然れども今見るに、三十疊許も敷かるべき程の石なり

（岡山城）

○八艘隱（カクシ）　たとはゞ船八艘許も、かくすべきほどの大岩なりとて、かくは云也。詳に圖に出せり。

○古城址　初屋形と號し。足利義澄據止してこゝに逝す。その後城とす。所謂岡山の城是也。今に石垣等あつて、城址顯然たり。相傳、永祿年中九里刑部同三郎左衛門居住と云。刑部は佐々木氏より出、九里村に產る。故家號とす。天正の初信長と戰ひ、八幡黑橋の下にて、信長の爲に討る。時に極月廿日の夜也。今に每年極月廿日の夜、炬火のごとく成火、十四五見ゆる是九里が亡魂也と云云。臣按ずるに、九里かこと【織田軍記】【佐々木日記】等に所見なし。或云、功力三郎左衛門也とも。長命寺の【緣起】には、岡山の城主乾甲斐守と記せり。孰か是なる事を知らず。九里が亡魂炬火のことは、陰火なるべし。詳に大津油坊が火の條下に記す。九里は黑橋より十三町有。黑橋とは八幡の口の板橋也。漸三四間許の橋なり。

○子安社　同所にあり。

○地藏像　同所に在。石佛也。弘法大師の作也と云。【近江拾遺】といへる書に、小島といへる遊女、大納言大伴卿を送り來りて、互に別離の歌を詠ぜし事を載たり。臣按ずるに非なり。大納言大伴卿が歌に、やまとちのきひの小しまをすきてゆかは、つくしの小しまおもほへんかも、【萬葉集】六曰、大伴卿向京上道、此日馬駐水莖水城、顧望府家、于時送卿府吏之中有遊行女婦、其字曰兒島也、於此娘子傷此易別、嘆彼難會、拭涕自吟振袖歌也、その歌に曰、やまとちは雲かくれたりしかれとも、我振袖をなけれと思ふなと云云。是を以て知べし。水莖の水城はこゝの事にあらず。（筑紫ノ）讃岐の國の事也。たまゝ名のおなしきを以て、こゝの事とせしなるべし。又俳諧士三千風の【日本行脚文集】に、津田の細江水莖の岡。亦登蓮法師が薄の菴木の葉の沖のこなた松ヶ崎の木影と云云。この登蓮が薄の庵も所在を知らず。木の葉の沖は木の濱の事なりと云。

○奥嶋　岡山の西北にあり。湖中の一島也。東西三町餘、南北十四五町あり。漁人多く此に住。その島の石を取て是をうる。己が居をほろぼすもの也と云べし。古歌に所謂澳津島山なり。往古此地に大社ありしと見へて、【延喜式】に蒲生郡奥津島神社を載たり。古昔は奥島野洲郡に屬すと見へて、【三代實錄】曰、貞觀七年四月二日壬子、元興寺僧傳燈法師位賢和奏言、久住近江國野洲郡奥島、聊構堂舍、島神夢中告曰、雖云神靈未脫蓋纏、願以佛力將增威勢、擁護國家安存鄕邑、望請爲神宮寺、叶神明願、詔許之云云、是等も行基法師の、伊勢大神宮の夢想を承りし類成べし。蓋し心の物たるは靈也。少もくもりなく、體氣と共に昏息せず。故に平生のふるまひを夢見る也。夢はくらしと註して、わけもなき事也。然れども神武天皇の比、八咫烏を得玉ひ、殷の高宗の、傳說を得玉ふ類は、正夢とて、彼如きにはあらず。夢の論【保建大記】に、栗山源助確論あり。

【續千載集】

風渡るにほの湖空晴て、月影きよしおきつしま山

【新拾遺集】　知家

ふる雪はそれとも見へすさゝ波や、寄せて歸らぬ奥津島山

○八尾大明神社　奥津島にあり。土俗云、奥津島の神社是なりと。詳ならす。

○白髭社　同所にあり。

○淺小井村　市井村の西北に在。佐々木豐浦冠者行實息淺小井次郎成實元祖也。家員、清次、清房、定房、代々在住。後孫は知らず。こゝに近代は、池田筑後守賴智同次郎左衛門忠智息孫次郎景雄代々在城し、星形の簇頭七組魁の内也。代々數度武功を顯し、名高き家也。根元は藤原秀鄕公の後胤。池田正行の孫と云。

○香庄村　淺小井村の東に在。香庄佐渡守賴輔同源左衛門賢輔代々當所に在住、星形物頭の家也。先佐渡守賴輔は、政賴公威德院にて自害の時打死す。後佐渡守賢輔入道し賢輔父子ともに甲賀に附隨て忠節を盡す。

○西庄村　香庄村の南にあり。

○佐々木莊　或は佐々木鄕とも云。今土俗專ら莊と云。佐々木莊と號することは、佐々木の社あるを以てなり。宇多源氏の佐々木を稱號とする者も、佐々木の先祖成賴と云者、此地に居ることあるを以て、家號とし、相繼て稱し來れり。佐々木莊の名甚久し。佐々木の庄、延曆寺に寄附のこと【盛衰記】に見へたり。常樂寺村に中村、慈恩寺村、中屋村此四村を云。然れども今土俗誤て、此近村は多く佐々木の庄と呼ものあり。

○慈恩寺村　西庄村の東に在。慈恩寺と號することは慈恩寺有を以て也。慈恩寺は今の淨嚴院是なり。

○安土淨嚴院　慈恩寺村にあり。淨土宗。安土慈恩寺淨嚴院と號す。安土村と云は、安土山下に在小村也。織田信長安土山に城を築て、天下の諸士を指揮するの日、此邊悉安土と呼り。安土の城沒落の以後は、皆々舊名に復す。唯當寺のみ安土の淨嚴院と號す。當寺は古昔慈恩寺威德院と云。上宮太子の創立する處也。本尊釋迦の像は、毘首羯

（院德威）

摩が作にして、長三寸餘。嵯峨の釋迦同木同作也。中古文和年中六角判官氏賴崇永歸依して、佐々木家代々の菩提所也。然して後數度の兵火にかゝつて、天正の初に至て、纔に樓門一基を存するのみ。淨嚴坊隆堯法印威德院を改、金勝山淨嚴院と名付。隆堯法印は本天台の僧にして、當國栗太郡金勝山の幽谷に蟄居して、不斷念佛を修す。寶德元年十二月十二日示寂。壽八十歲。第八世應譽明感上人の時に至て、織田信長軍旅の序栗太郡金勝山に赴き、明感に謁して武門出離の要行を問。感答て曰、佛敎區にして、各其益有といへども、武門の徒戰場に赴時は、露命且暮にせまつて、諸餘の行業恐らくは成就しがたからんが故に、我祖師源空洛東に在時、偶武門の徒來て律を問ふ時は、唯口稱三昧一行を以て懇に敎授す。然則公も復其思焉。信長感の示諭を聞て、大に信伏して感に謂て曰、吾一たび運を天下にひらかば、感を招て導師とすべしと。天正年中信長天下をしるに及て、舊盟を失はず、感を安土の城下に招て、慈恩寺に居しめ、威德院の舊名を改て、淨嚴院と號す。是感が元祖隆堯法印を、淨嚴院と號する故也。山を金勝山と呼り。是又隆堯法印久住の山名によれり。新に本堂方丈等を修飾す。本堂は多賀村興流寺の彌勒堂を引移す。剩令を國中に出し、一派の徒をして、悉末寺たらしむ。寺數都て八百餘寺也。天正年中安土宗論の寺也。惜哉。信長逆臣明智が爲に弑せられて亡滅し、末寺も多くかはつて、今存するもの三百餘寺。大本寺の格也。今洛東知恩院に隨逐す。釋迦の像一軀。長三寸餘　金佛の阿彌陀の三尊。各長五寸許。此厨子散蓮華の蒔繪也。陽茂が作の堆朱香合此二色は、後土御門院より拜受す。散蓮花は聖武天皇南都にて詔にて出來。日本蒔繪の始なりといへり。陽茂は堆朱を初て作り出せし人也。彌陀三尊の畫像相傳是は隆堯法印百日伊勢の內宮に籠りしに、九十九夜の曉、件の畫像を賜ふと見て夢覺ぬ。傍に此畫像あり。參籠せし處石を重たる處也。是に依て其時彼是と神拜のことを司りし御師を、今石重太夫と號して、相續して淨嚴院一派の御師たり。此故を以て、今に神前に至ることをゆるさるゝと云云。狩野永德筆の、信長の像。信長在世に納る所也。佐々木高賴・同高盛・織田信長の狀有。後にしるす。

久々不申通候條、御床敷候之處、御音信本望に候、御念珠送給候、寔に祝着之至に候、尙以御懇之義每々難申盡候、委細本間四郎左衛門尉可申入候恐惶謹言

八月二日　　高賴判

淨嚴坊上人御返報

就出張以使僧青銅五拾疋贈給快然之至候、猶狛孫三郎可申候恐惶謹言

五月廿二日　　高盛判

淨嚴坊上人御同宿中

こんせの坊主寺領の事昨日如申聞可相渡之候、自餘の坊主も此方え越候はゞ可遣候、無左候はゞ皆可爲缺所候成其意可申付事專一候也

十月十日　　信朱印

長谷川竹とのへ

野村三十郎とのへ

此通也

○三塚　淨嚴院界內に在。氏賴の三世佐々木滿綱その二子持綱・時綱が塚あり。【家譜】曰、滿綱舊名滿經任大膳大夫、削髮名宗岱、文安三年正月二十三日有故自殺、近江威德院號龍雲寺、【考異家譜】於滿綱及其子持綱・時綱皆以自殺書云云、是なるべし。【明智軍記】に、丹波の國土波多野中務丞・同次左衛門・同五郎左衛門、家臣河村助左衛門・野墓市左衛門・秉杢兵衛・松田儀兵衛等七人信長の命にて、當寺にて切腹のことを載たり。臣此事をとふに、院主【寺記】を考ふるに、過去帳に名もふく、亦界內に塚もなしと云。當院開山忌每年九月五日より十二日迄一七日念佛三昧の法事有。開山忌日は寶德元年十二月十二日也。然れども十二月は强寒の節、大衆の苦寒を厭ひ、遺言にて九月五日より十二日迄勸修す。是をこんせの九月念佛と云。安土宗論の事は、天正七年己卯五月中旬の頃より。淨土宗靈譽と云僧、關東より登り、安土の町にて說法す。時に法花日蓮宗建部紹智大脇傳內【信長記には傳助に作る。】兩人說法の座へ出、不審を强し宗論に及。京頂妙寺の日光・常光院・九音院・妙顯寺の大藏坊・堺油屋弟坊主諸宗誹謗の不傳などいふ者ども、遠近より馳集り、菅谷九右衛門・矢部善七・堀久太郎・長谷川竹種々取あつかへ共承引せず、南禪寺秀長老八宗兼學有髮の僧因果居士、折節安土に居たりければ、是を判者に撰まる。信長四人の士に津田七兵衛をさしそへ、警固させらる。安土淨嚴院の本堂にて、宗論す。貞安宗論に勝。滿座一同に笑ふて袈裟を剝取。宗論の事は、詳に【四度宗論記】【破邪顯正記】【禁斷日蓮義】【邪正問答集】【本朝列祖傳】【安土問答】【織田軍記】【信長記】等に見へたり。事長き故、是を贅せず。當時安土淨嚴院主厚譽臣と相好。今般臣近江國輿地志略に付、淨嚴院主甚力をいれて、蒲生郡の事を助く。音を知者といふべき也。

○中屋村　慈恩寺村の東にあり。

○小中村　中屋村の北にあり。

○常樂寺村　小中村の西に在。常樂寺は古昔佐々木社の神宮寺のよし、永祿迄相續のよし、故有て在名とす。神官木村兵部少輔定通、屋形季定公より讓を請し以來神職を司る。河内守實冬に至る迄、十六代常樂寺に在住す。屋形の簇頭を預て、應仁の亂甲賀陣まで記に出る。氏綱公御代伊庭信濃守賴隆、九里三郎左衛門尉高雄謀叛騷動の時、九ノ里が爲に一家滅亡す。木村舊城の跡、常樂寺の西南に在。

○佐々木神社　常樂寺村に在。神主佐々木左京源重儀記を作て臣におくれり。其略に曰、正一位佐々木四所太神は、第一少彦名命、第二仁德天皇、第三宇多天皇、第四敦實親王也。當社四目結の紋は、神秘の第一也。委細に是を記さず。本殿五間に三間、拜殿四間四方、樓門鳥居額は、寶鏡寺理豊の宮の御筆也。祭禮毎年四月上の午の日、その前五日丑の日より、神輿三社出。御神供は毎日午の刻。五月五日恒例の神事。三年に一度宛馬場の若宮へ、神輿出御干秡これあり、大神樂。翌日流鏑馬の規式是あり。宇多天皇第七世佐々木管領源經方の次男兵庫行定始て大神主に補せらる。是より代々連綿して、子孫相續なり。往古末社數多有。所謂行事の宮、牛頭天王等也。【鷲峯文集】に載る所と同じ故贅せず　今纔に末社二社若宮八幡、九尺寶殿也、聖宮社、三間寶殿也。今社地の界内南北二町餘、東西壹町餘也。往古社領八百石あり。天正年中佐々木氏觀音城没落して、後神領等廢す。然るに慶長五年六月東照神君上杉景勝を征せむ爲に、東奥に赴く。神君甚當社に祈ることとあり。石田三成が賊難波におこる。神君これを討、關ヶ原の捷有つて後、亦東におもむき、伊庭の御茶屋にて、遙拜有。大神主源安重を召出され、板倉伊賀守を以て、一百石の社領を寄附し玉ふ。當社の寶物沙羯羅龍王の假面二つ。龍の爪、獅子の頭、當社の位記、高木貞宗の太刀、定綱が鎧、佐々木十一世定綱と ほり付られあり。文治二年源賴朝卿自筆の額、裏に定綱としるす。林春齋筆記一卷、竹内御門主良尚親王御筆の【神記】一卷、佐々木氏嫡孫家譜一卷等あり。神前の鰐口は慶長九年東照神君の御寄進也。天下大將軍家康寄進と彫刻すと云云。【鵜峰文集】佐々木社記曰、近江國蒲生郡佐々木明神者、【延喜式】所載沙々貴神社是也、傳稱、此社祀少彦名命且奉崇仁德天皇、今不得其緣起、則未詳其由來、然少彦名命降自天以白薮皮爲舟、鷦鷯羽爲衣、隨潮到出雲國、仁德御名奉號大鷦鷯天皇、鷦鷯此云娑々岐、乃是與沙々貴通用與佐々木同訓也、此一神一帝之垂迹於玆、而并被崇信於世、則所傳稱不爲無據也、宇多天皇五代孫、從五位下左近將監源成賴、初住近江國佐々木莊、嗜弓馬、其孫源次太夫經方、初爲此社神主、其嫡男兵庫助季定爲武士、續其家業、次男行定爲神主掌社事、二流相分、其枝葉連蔓於本州、而延及於他邦者不可勝計也、蓋其皆可爲當社之氏子歟、逮鎌倉右大將領關國、而佐々木兄弟有武功、其氏族世爲江州守護、其後足利家之爲武將時、佐々木氏族又有舊勳、連襲領江州、故世々皆崇此社也、永祿天正以來、佐々木氏不能居江州、故此社荒廢矣、方今社役者之言曰、本社之外有若宮聖、凡神輿三座也、昔聞其傍末祠有行幸宮・天皇宮・夷宮・白體宮・天神・大黑天・八幡宮・萬場若宮・小山權現・日岡權現・十禪師・八王子・山田權現・賀茂宮・八神宮・船神等、今唯存其三輿而已、又曰、社内藏沙羯羅龍王面二枚、旱則雩之有効、然每出之必有死穢、鄉民皆畏之稀見焉、故深秘鎖之、又曰、貞和五年六月十九日位記曰、勅今奉授正一位沙々貴大神、其位記今猶有之、又曰、昔有神領八百石、蓋夫佐々木氏之所寄附歟、既而減損、及東照大神君之治世、偶會御駕經此地望覽當社、時暫憩於伊庭旅館、聞其所由而新賜封戶一百石、台德院殿・大猷院殿隨其舊式辱賜印章、是以修理其破壞得勤神事、每歲四月上午日及五月五日恒例祭禮、今猶不懈、想夫少名彦名命者、我國艸昧之初有經營之力、且定療病之方禁厭之法以利百姓、則其功不少矣、仁德天皇者本朝之英主也、四海太平三韓來款、其政績昭々於國史、以其共有鷦鷯之稱、并奉祀於此者良有以也、中葉以來宗源神風不行於世、群國神社或爲釋氏被混、或爲淫祠被掠、而皆失其本也、其從役者、言聾無以知之、豈不悲痛乎、聞此社秘殿有四厨子、各安神像號四所明神、傳稱、其本地者觀音・藥師・不動・毘沙門也、然則先是浮屠既有覬覦之志、然猶僅存其本緣者、又是神之幸也、遂因其請、證其所語、考其所傳以記之、以寄之、辛卯孟冬云云、

○腰越　佐々木社の東にあたり、要害の跡あり。信長公安土御安座の頃、鎌倉の腰越に准て、御番所のよし也。

近江國輿地志略卷之五十七　終

近江國輿地志略卷之五十八

臣　寒川辰清編輯

蒲生郡第五

○豐浦莊　是佐々木莊の北也。高木村・豐浦・須田村・安土村・石寺村等を云。

○高木村　慈恩寺村の傍也。相傳、往古刀匠貞宗暫此地に住して、刀劍を製す。是を高木貞宗と云。後に相模に下る。其子孫連續して、刀匠を業とす。永正天文の頃まで有。銘に威德院門前山鍛冶と記せり。威德院は淨嚴院のことなり。臣【鍛冶譜】を考ふるに、高木貞宗相模の國に行て、正宗が弟子と成。近江にて製造せしものと、甚金味かはれり。

○豐浦村　高木村の北に在。豐浦氏は七代の屋形經方公四男行實伊庭・井上・淺小井・津田・種村此後胤也。十一代の屋形信綱公へ、北條義時公より、當國一圓領納の御奉書出し時に、豐浦庄は先規より、桑峯の領のよし訴あるに依て、尾張長岡の庄を、替地に賜るよし【東鑑】に出る。

○明智日向守屋敷跡　豐浦村に有。此外貞安上人屋敷跡等あり。

○桑實寺　豐浦村にあり。所謂桑峯の藥師是也。今按ずるに、緣起二卷あり。其記は青蓮院宮遵嚴院の筆、上卷の端一段并兩卷の外題は宸筆。兩卷の間々に畫圖有。土佐刑部大輔光茂が畫なり。兩卷の奥書に、天文元年八月十七日と記し、足利將軍義植が判有。兩卷殊に長く、詞孟浪多し。その要を載。其略にいはく。江州桑實寺は、日本國の最初扶桑朝の濫觴也。天地既にわかれて後、滔々たる海上に、一株の桑の木出生せり。此木三の果を結ぶ。一は金烏と變じて、木の頂を巡る。一は玉兎と化して、枝のほとりに遊ぶ。是天下を照す日光月光の垂迹也。一は地におちて山となる。今の桑實山是也。その形八葉にして、その色紅紫を交ゆ。宛も天蓋のごとし。故に繖山（ちさんの）と云。臣按ずるに坂田郡石田村の東なる山を、繖山と云よし、【淺井家記】に見へたり。同名なるべし。上宮太子三十三歳の厄難をはらはんが爲に、千手觀音の像を、彼山の石上に安置したまふ。卽精舍を建て觀音山寺と號す。三十三所順禮の隨一也。臣按するに、此一事は觀音寺のことにして、こゝのとにあらず。いりほかなるとなり。抑。亦當山桑實寺は病卽消滅の靈場不老不死の仙窟たり。本尊藥師如來。天智天皇の御宇粟津の都に、異病おこりて病床にしづむ時に、第四の姫宮阿閑皇女病に侵され夢みして、水うみの渺々たる上に、妙音觀世音梵音海潮音彼世間音是故須本念と云波の聲あり。我此波のとゞまる處を見んとおもひ、立やすらふ上に、瑠璃の光り七方にさすと見てさめたりと。天皇奇異の思ひをなし護持僧定惠和尚を召て尋玉ふに、和尚の曰、むかしの役行者富士絶頂に上て、八方を見るに、西方にあたりて瑠璃の琵琶あり。半月の面西におつ。傍に碧羅の天蓋あり。日上にかゝれり。東に天女あつて絲竹の音をしらぶ。夫を尋てみるに、琵琶とみしは近江の湖。天蓋と見たるは、今の繖山也。天人樂を奏して座れる石をば、天樂石と名づく。辨財天は卽八大龍王の變化、湖水の下は龍宮城也。誠にしんぬ、此高天の擁護によつて、かの醫王如來出現、御惱忽に平愈あるべき瑞夢なり。天皇卽彼光のさせる處を點じて、七光寺を建立し、定惠和尚に詔して、湖上に向て臨時の法會を修せらる。龍宮城の東門粟津の磯邊に、生身の藥師如來、光明赫奕として、湖上にあらはれます。是則祇園精舍の本尊醫王善逝にまします也。彼出現し玉ふ處を、善逝が崎と云。臣按ずるに、附會の說也。膳所ケ崎正字なり。或は是世に作る。皆音の相同き によつて假用ゆ。いはんや藥師佛醫王善逝によつて、善逝ケ崎と云說甚非也。終に皇女の病、平愈するのみにあらず。民の病苦悉除す。大白牛湖中より浮出て、如來をのせ奉る。當山の磯におくりつけて歸ぬ。此處を牛打が鼻と云。こゝに梵天玉あま下て、岩駒と化して如來をいたゞきのす。善逝小身に現して、此山に飛うつり給ふ。彼瑠璃石の西に、岩駒の蹄の跡今にあり。臣按するに、是皆自然と石面に蹄に似たる跡ある也。馬蹄の殘れるにはあらず。肥後國阿蘇の石洞に石蛇といけるが如くの、石二有。攝津國林寺村に蛙石あり。阿波國勝浦には馬石あり。安藝土佐に金石あり。西土にも墨石、鏡石、鳴石、米石、麥飯石、石燕石、蛇石、魚石ありと見へて【本草綱目】【倍嶋風土記】【南海古跡記】【吳六郡紀錄】【金花游嶋】【杜嶋雜嶋】【林水錄】【吳中勝記】【翰墨彙】【金臺記聞】【三才圖繪】【海梧藤絲】【桂海虞衡志】等に多載たりまことにかゝる奇石もあれば石面に馬の足あとのやうなるも、自然とあるべし。なんぞ駒の足あとならん。本梵天若馬と化すには、尙以馬蹄なるべし。金玉の精舍を建立し。白鳳六年十一月八日定惠を導師として、藥師佛を安置し給ふ。其後豐國成姉天皇遙に此山に行幸ありて、瑠璃石上の足の跡を拜奉らせ給ひて、「三十あまり二の姿そなへたる、むかしの人のふめる跡そこれ」と、御詠歌をとどめらる。此君元明天皇也。御治世八ケ年娑羯羅龍王の女の、八歳龍女の後身。在位八年は法華の說時を表示するにやと云云。臣按ずるに、此緣起如何なる人の作にや。虛僞のことのみ多く、佛氏彼是の論はおいていはず、まづ天智天皇粟津都といふ事不審。つひに粟津の都と云事きかず。天智天皇は、志賀の大津に都し玉ふ。粟津は今の膳所城下の町の邊也。帝定惠を召て夢を問玉ふに、定惠答て曰、昔役行者富士山に上りてと云云。甚笑べし。役行者は人皇四十一代文武天皇の頃の人なり。事跡は【水鏡】【元亨釋書】に見へたり。然れば則天智天皇よりは、後代の者也。天

智帝は人皇三十九代の帝なり。こゝを以てその相違を知べし。況書といふものにおいてをや。腹を鼓して笑べし。白鳳六年十一月八日定惠を導師として、桑實寺を建立するのゝ僞なるべし。【元亨釋書】定惠が傳を按ずるに、白雉四年に入唐し、習學殆十年唐の調露元年百濟使に伴て歸る。白鳳七年九月なりとあり。然則白鳳六年に導師つとむべき樣なし。亦元明天皇桑實寺に行幸のこと、疑なきにあらず。【元亨釋書】年表に、かつてその事見へず。此年表は師練浮屠氏のことにかゝれることは、一事をのこさずしるせり。然るに此事なきは、恐くは僞なるべし。其上御製甚鄙俚の歌なり。妄作成べし。治世八年は法花說時を表示するは如何。元明天皇の御治世七年なり。八年にあらず。何を表するや。又かくいはゞ、七佛藥師を表示すとぞ云べけれ。

聖武天皇御綸旨

藥　師　寺

絁伍佰疋　綿壹仟屯

布壹佰端　稻壹十萬斤

水田壹佰町（近江國蒲生郡）

四至　東限神崎・蒲生堺并沙々木山長峰南限烏坂長峰西限五條畔北限大溝

以前捧上件物、以華嚴經爲本、一切大乘小乘經律論抄疏章等、必爲轉讀講說、悉令盡竟、限日月窮未來際、敬納彼寺、永爲學分、依此發願、太上天皇、沙彌勝滿、諸佛擁護、法藥熏質、萬病消除、壽命延長、一切所願、皆使滿足、令法久住、拔濟群生、天下太平、兆民快樂、法界有情、共成佛道、復誓後有不道之主、邪賊之臣、若犯若破障而不行者、是人必得破辱十方三世諸佛菩薩、一切賢聖之罪、終當落大地獄、無數劫中、永無出離、復十方一切諸天、梵王帝釋、四大天王、天龍八部、金剛密跡、護法護塔、大善神王、及普天率土有大威力天神地祇、七廣尊靈並佐命立功大臣將軍之靈等、共起天禍永滅子孫、若不犯觸敬勤行者、世々累紹隆、共出塵域、早登覺岸、

勅　天平感寶元年閏五月廿日

奉勅　正一位左大臣兼大宰帥橘宿禰諸兄

右大臣從二位藤原朝臣　豐成

大僧都法師　行信

○須田村

○安土村　八幡町より一里北安土山の下也。中古織田信長安土山に居城有し時は、甚繁昌して、この村を本として、此邊二三里が間の惣名を安土と呼り。今悉く舊名にかはれり。其時の町は八幡へ引移せり、事は八幡條下に記す。

○安土古城址　則安土山に在。安土山高さ二町許、迴り一里半餘、頂上に天守あり。今にその跡石垣等の跡顯然たり。本丸・二ノ丸・三ノ丸等の間數高低詳にしれがたし。家康公及羽柴秀吉・武藤助左衛門・青木加賀右衛門・中條將監・武井肥後・織田信忠・長谷川竹・織田七兵衛・森蘭丸・福岡平左衛門・市橋九郎左衛門・菅谷九右衛門・堀久太郎等が屋敷跡有。安土山の内に藥師山、笛吹尾（フエフキ）、源左衛門鼻、梅谷、あみか鼻、われ尾、永尾等など云處あり。悉く書し難し。抑此城は、織田信長下知して、惟任五郎左衛門長秀奉行す。【織田軍記】に曰、安土御天守の次第、土臺土藏の高さ十二間餘、此上に七重の天守を造らる、誠に前代未聞の經營也、先下一重は石藏の上を、土藏に用らる。二重は此上に廣さ南北二十間、東西十七間高さ十六間半これあり、柱數二百四本立本柱長さ八間大さ一尺五寸六寸或は一尺三寸四方の木也。御座敷の内材木共皆以黑漆也。此座敷の次第西十二疊敷、金の張付墨繪の梅花狩野永德に仰付られ是を畫く。同間の内御書院是あり。是には遠寺の晚鐘の景を畫く、其前段に盆山の石を居置る、次四疊敷の御棚鳩の繪是を畫く亦十二疊敷の間鷲の繪是を畫く。因て是を鷲の間と名付。其次八疊敷、奥四疊敷、鷄の子を愛する處を畫く。南十二疊敷、漢唐の儒賢を繪く。其次八疊敷、東十二疊敷、次に三疊敷、其次八疊敷、御膳を仕立る處也。次又八疊敷、右同斷也。六疊敷、御納戸又六疊敷、皆以繪の處は惣金也。北の方御土藏有。其次御座敷二十六疊敷、御納所也。西六疊敷、次十二疊敷、其次亦十二疊敷、都合御納所數七所に有、此下に金燈籠をすへ置る。三重目十二疊敷、花鳥の繪有。故に是を花鳥の間と名付。別に四疊敷御臺の間有。同花鳥の繪有。次南八疊敷、賢人の間と云。是に瓢簞より駒の出たる仙像を畫せり。東の庇の間八疊敷、十二疊敷の間上の次八疊敷、仙人呂洞賓傳說等の繪有。北廿疊鋪、駒の牧の畫有。次十二疊敷、西王母の繪有。西の座敷には繪なし。御緣二段廣緣也。二十四疊敷の御物置有。御納戸也。口に八疊敷の御座敷有。柱數都合百四拾六本是あり。四重目西十二間、繪は巖上に龍虎の戰の繪あり。南十間竹を畫く。竹の間と名付らる。次に十二疊敷に松を畫く。松の間と云。東八疊敷、桐に鳳凰の畫。次八疊に許由耳を瀧にあらひ、巢父牛を牽て歸る、兩賢の出たる故鄕の體迄一々是を畫す。其次に座敷七疊敷、繪は無して金泥ばかり引置たり。此次十二疊敷此内西二間の處に、手鞠の木を畫き、その次又八疊敷、鷹の景を畫たる故、鷹の間と名づくる。五重目繪は南木の破風口に、四疊半の御座敷あり。小屋の段とこれを云。六重目八角四方四間程あり、内外ともに外柱朱色、

内柱は金薄也。繪には釋尊成道說法の次第十大弟子唐圖有。御緣側に餓鬼を畫し、端板に飛龍を畫す。高欄擬寶珠彫物也。上七重目三間四方御座敷の内皆金泥也。外側亦金泥なり。四方の内柱に、昇龍、降龍に天人逆向の爲體を畫き、御座敷の内の繪は、三皇五帝、孔門十哲、商山の四皓、晉の七賢等を畫せられ、狹間織戸也。數六十餘皆黑漆也。内外の柱惣じて漆にて布をきせられ、其上堅地にして、黑漆に塗たり。誠以善盡し美をつくすと謂べし。

細工人の次第

上一重の金具　後藤平四郎是を彫り、京田舍の上手手傳す。

二重目より　京都對阿彌金具なり。

御大工棟梁　岡部又右衞門。

小細工御大工　宮西遊右衞門。

漆師　首刑部。

瓦燒　唐人一觀に被仰付、奈良の者に燒せらる。

御普請奉行　木村次郎左衞門。

安土山記文

古曰、太山之前難爲山、大海之前難爲水、日域六十六州之一州曰江、江左有山名曰安土、其山不在高其名高太山也、蓋夫非山之獨得名、有寬仁大度人居也、劉夢得豈不曰乎、山不在高、有仙則名、水不有深、有龍則靈、夢得之一言可並按焉、層巒之崎嶇乎上者、自然金城也、滄波之渺茫乎下者、自然湯地也、自天地開以往雖有此山、一人無識者矣、葛原帝王的々令孫、平淸盛公二十一代之華胄、前右府君者、禁庭綱紀、武門棟梁、而實天縱聖武也、先是天正四年春、一見此山、便識萬古城地、開闢洪基權輿于此矣、力士星馳揚石、工匠霧列運斧、則不終三年而其功大成矣、潛慮數百丈之石壁、千萬間之大厦、何翅力士之力工匠之巧乎、唯流出府君之一胸襟而已、目機之所巧、意匠之所巧、離婁之明、公輸子之巧、不可跂而及者也、峻宇高堂之凌碧虛者、盡奏樓魏闕極夜摩都史之壯麗兮、直欄横檻之聳翠崖者、盡奏樓魏闕之華美兮、布地礎礒者承露内潤、葺屋瓦甍者帶霜外光、西湖月之上玉階者、供府君之夜遊也、南浦雲之飛畫棟者催府君之朝吟也、颯々松風之動金鈴聲、呼萬歲山耶、紛々白雪之映珠簾影、含千秋窓耶、權門貴戸之園山戟然、遶山鱗萃也、盡是無不丹漆黝堊、寶塔之突兀出林間者、疑繪遠寺、釣艇之ノ〳〵浮蘆邊者、怪圖歸帆、瀟湘十里風景、嘉陵三百里山水、不可同日語焉、英雄豪傑之擁繡鞍出入于相府、貴介公子之飜錦袖往還于宮途、爭紅華紅葉色也、億兆民之富而驕者、鐘鳴鼎食之家也、見者反目駭汗、聞者拍手賞歎矣、江東白鷗懷惠占閑、江南梅花被化含唉、信及豚魚、威加草

木、當此旼市人歌于市、野老抃于野、行者遜路、耕者遜畔、雖堯舜民文武民、不可讓焉、加旃起王道之衰、修神社佛閣之破、續斷橋平嶮路、是故四夷献貢來復焉、八蠻解辨服膺焉、或臂俊鷹、求臣乎其幕下、或上良馬請將乎其麾下、吁策勳偉哉、鳳凰現瑞、麒麟呈祥者、非今時何旼乎、向所謂大山之前難爲山、天下之人亦將曰、安土山之前難爲山、野衲雖蓬衡蕞品、樗散陋姿嘗見此山、豈無感慨乎、卒綴卑詞者八韻、述盛擧之萬乙、伏乞咲覽、詞曰六十扶桑第一山、老松積翠白雲間、宮高大似安房殿、城嶮固於函谷關若不唐虞治天下、必應梵釋出人間、蓬萊三萬里仙境、留與寬仁永保顏、石壁嵯峨三百尺、野僧只恨不窮嶺、玉樓金殿朱雲上、碧瓦朱甍輝日邊、帝釋梵王疑在地。夜摩兜率怪離天、山名安土太平兆、武運先知億萬年、

岐下沙門南化

右此記は天龍寺妙智院の策彥和尙へ、仰付られける處に、策彥辭退せられ、濃州岐阜の南化和尙へ命ぜられ候て、然るべきのよしを申され、是に依て南化へ仰付らるに、是も再三辭退ありしを、大臣家頻に御所望ありける故、終に記上せられ畢ぬ。一說に此記は天正六年戊寅に出來すともいへりと云云。【江源武鑑】に天正のとし丁丑正月信長丹羽長秀をして。安土山を佐々木義賢に請て、而後城を築としるせるは誤也。【明智軍記】に曰、天正四年正月十七日信長卿岐阜の要害を信忠卿へ相渡され、近江國に御居城被成べしとて、日賀多山を見立所の名を改て、安土と名付て、御普請有。惟任五郎左衞門長秀は佐和山の主にて、近所の事なれば、普請頭に仰付られ、明智光秀天主建らるべきよしを申。安房の里見義弘が三重の天守を見さむらひき。又周防の山口にて大内義興も三重の天守建候き。此處は天下をしろしめさるべき城なれば、五重の天守然るべし。前かた大内の義長より角隈右京傳受致しけるを、粗書寫仕候とて、上覽にそなふ。則惟任に命ぜられ、地形を調、南北二十間東西十七間高さ十二間に材木をあつめ、二人心を盡し建立と云云。信長を弑して後、光秀則左馬助光春を大將として、荒木山城守行重・同友之允重仲・妻木主計頭範賢・四王天又兵衞政實・今峯新助泰正・三宅周防守業朝以下三千餘騎を安土城にさしむく。勢田にて山岡美作守景隆勢田橋を燒落して防戰して成らず、田上に退て、明智が勢安土に行。是より先安土城に此事をきゝ、守城のかなひがたからんことを知て、蒲生忠三郎氏鄕城中の人々を具して、己が日野城に籠る。六月四日明智左馬助光春安土城に打入。然るに光秀が山崎の敗を聞て、城を燒て坂本へ退く也。【軍談夜話】に曰、織田

信長天正四年正月城を近江の安土に築く。その時の俗の曰、此城宜しからず。前に伊庭村あり、後の安土なればなりと云云。是より先元龜元年庚申五月信長中川八郎左衛門をして、此地を守らしむと云事、【摠見記】等に見へたり。

○百々橋　惣見寺へ上る山下の橋也。

○天神社　勸請年歴詳ならず。

○觀音堂　此二は百々橋を過、惣見寺二王門に入路の左にあり。

○惣見寺　安土山に在。百々橋を過て。山門に入。山門の左右に二王を安置す。遠見山惣見寺の額を架す。建部傳内筆也。本堂の上に閣有。圓通閣と云三字の額を架す。本尊觀世音。左右に文殊普賢の二大士を安置す。佛殿の裡に信長公の像あり。此左の方に大雲院殿贈三品羽林仙巖大居士の畫像あり。是信長の嫡子信忠也。本堂の内に信長の謎の額あり。畫は狩野永徳也。その繪はそく飯べら一本、角棒一本、蚊帳一ツ、人が箕を持さし上る處なり。此謎解く樣は、へらを捨氣を直にもつてかせけは身を持上と云ことにて、安土城の廣間にかけ置、諸大名の誡にせられしと也と云。鎭守熱田大明神の社は、佛閣の東に在。當寺は信長在世に草創し、開基は正仲剛下座元禪師と云僧也。信長これを招き住持せしむ。夫より以來今に至て、代々織田家の氏族相續して住持す。座元禪師は信長の從弟也。寺今京北妙心寺の末寺也。詳に安土山の圖に載たり。

○織田信長墓　安土山古城臺の西に在。惣見寺殿贈大相國一品泰巖大居士と號す。信長は桓武天皇の後胤小松資盛末葉織田備後守信秀の子也。天文三年甲午五月廿八日生。童名吉法師天正十年壬午六月二日京師本能寺にて、逆臣明智日向守光秀が爲に弑せらる。その事跡家譜は、詳に【將軍家譜】【織田軍記】【信長記】【惣見記】【大系圖】等の諸書に見へたり。

近江國輿地志略卷之五十八　終

近江國輿地志略卷之五十九

臣　寒川辰清編輯

蒲生郡第六

○觀音寺　觀音寺山にあり。則石寺村の中なり。【略緣起】に曰、近江國石寺村觀音寺は、人皇三十四代推古天皇の御宇聖德太子の御建立、江州十二箇所伽藍の中其隨一なり。本尊千手大悲の像、長三尺。同直作なり。最靈佛なり。西國順禮三十二番なり。世人葦浦の觀音寺といふ。又は豐浦の石寺村にあり。蘆浦は蒲生なり。（臣按ずるに、葦浦觀音寺は栗太郡にあり。別寺なり。近世印行の俗書誤也。當寺をば葦浦の觀音と土俗傳云、往古八耳太子日暮に此處を過給へば、蘆原の中に人の聲あり。太子見給へば、其容異形にして、人面の如く魚鱗なり。則言て云、我前生に殺生をこのみ、湖の魚鱗をとつてこれを渡世とす。此業によつて、生を變じて此身を受たり。願はくは聖者慈悲を垂給へ。太子あわれに思召て、何を以てか汝を度せん。人魚又云。願くは此地に伽藍を建立あり、大悲の像を安し給はゞ、我忽苦道を出で、天上に生ぜんと云。太子玆に因て今の堂を建、千手の像を刻安置し給ふ。又七日の間稱名念佛して、彼が菩提をとむらひ給へば、その滿散の日天人降り太子を拜して、我生天中受勝妙樂と唱て、聖者の御修法にて今は忉利天に生ぜり。故に來て拜謝すと云て飛去といへり。案【太子傳曆】太子越近江、巡檢志賀栗本等郡諸寺、竟駐駕粟津、命左右曰、我死後五十年過有一帝王、遷都此處、治國十年矣近江國司使啓曰、蒲生河有物、其形如人非人如魚非魚、太子謂左右曰、禍始于此、又【大成經】三十五、推古天皇七年、淡海蒲生河有物、形魚人面也云云、以上は厚譽の【觀音靈場記】に見たり。臣考るに、【大成經】【舊事本紀】【名先代】曰、推古天皇二十七年夏四月己亥朔淡海國司以使言之、蒲生河有物晝夜頻浮沈、其形如人憂聲甚鳴云云、【大成經】は僞書なり用ゆべからず。悉書を信ぜば、書なきにはしかず。

○觀音城址（寺殿）　觀音山にあり。山の高さ十八町許。（これ坂を上での高さなり）直立六十間許。嶺を駒眼といふ。十方嶺とも三國嶺ともいふ。故は三ヶ國眼前に見ゆると云によつて也。三國いしとて、峯に大石あり。城跡は觀音堂の少し上にあり。相傳。觀音城繁榮の時は、觀音堂は山下に有。城沒落の後今の處にうつすと云。三國の間とて、大殿を建、諸頭よ

り集り政務を取行處、三國の間名は三國峯によるの名也といふ。御在住の殿は、其下今の堂の近邊に跡あり。東北の峯に、布施淡路守丸。東峯に太夫殿丸。同池田丸とて、跡有。古昔の通石垣礎ありの儘なり。此外登城の坂には、本坂赤坂のきざはし麓までも其儘なり。大門の跡。下馬の門、犬追物庭、七曲、臼ころはし、桑峰越、五の道、用水の池の疊石も、うごかず水は清く滿々たり。此城は元式部大輔季定より、承禎義治まで十八代年數四百有四年、寛治より永祿まで相續の舊跡なれば、殘りたる形あるも理なり。正親町院永祿十一年九月信長義昭公をたすけて、洛に赴くの日、路にて此城を攻て拔けり。義賢父子國を委て逃亡す。佐々木秀義文治の年近江國に封ぜられてより、十五世凡三百八十年にして、國除かる。佐々木の事は詳に人物門に記す。觀音山より八幡に至て、一里に餘あり。此城山蒲生神崎の郡界にして、神崎郡へ多くかゝれり。然れども蒲生郡觀音寺の城と云故こゝに載。

○石寺村　觀音寺山の麓なり。

○清水鼻村　石寺村の東にあり。

○箕作山　清水鼻の東北にあり。高さ直立五十間許。觀音寺山へ十町許あり。神崎郡の界なり。

○古城址　箕作山にあり。箕作の城といふは是なり。佐々木承禎後在城す。

○湯殿井　箕作山の麓にあり。清泉なり。

○小松寺　箕作山の麓にあり。本尊觀音。小松内大臣重盛の建立なり。相傳。此觀音幼兒の疱瘡を護り給ふと云。土俗芋を供す。疱瘡をいもといふ故なるべし。

○小松重盛公墓　小松寺界内にあり。

○岩戸山　東老蘇の北東に有。高さ廿間許。

○東老蘇村　清水鼻の南東にあり。

○福生寺　東老蘇村に有。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。

○鎌大明神社　東老蘇村に有。緣起と號し一卷有。其事甚卑俚孟浪なり。其大略を記すに曰。近江國は孝靈天皇の御宇地折て湖となりしころ、大運といふ者あり。此地に松杉等の良木をうへしに、忽に森となる。老蘇森是なり。日本武尊東夷を征す。海上惡風に偶て危し。橘姫尊の御命にかはらんと海中へ飛入たまふ。魂は飛來て、江州老蘇の森にとゝまり、女人の平産を護給ふ。龍神橘姫の海中に入給ひしに感じ、金色の鷄を頭に戴き、尊に奉る。尊吉備の武彦をして、老蘇の森にうつみ、金鷄山と名付て、今にとりのこしあり。尊東夷征伐の後、自持給ふ處の鎌を相殿として、鎌大明神と祝ひ奉る。又大運は百七十三歲まで壽をたもち、此處に住始たる人なればとて、森より三十餘町坤の方岩倉山の麓に、小祠を建祭ると云云。臣按ずるに、略記の說一々信用しがたし。【延喜式】神名帳に所謂奥石神社是なり。

○老蘇森　今其跡とて東老蘇・西老蘇の間にあり。然れども往昔は此邊悉く森にて、今の東西の老蘇村も、おいその森の跡なるべし。老蘇あるひは老曾に作る。【盛衰記】には追初に作り。【夫木集】【歌枕】等には息磯に作る。

【堀川百首】　忠房

涼しさに老その森の下なれと、夏てふことそわすられにけり

【六百番歌合】　季經

名にたてる老その森の下草も、年わかしとや二葉なるらん

【愚草】　定家

世やはゝき霜より霜に結おく、老その森の本のくち葉は

【玉吟集】　家隆

いくかへりたか名もたちぬつもり行、年も老その森の霞に

【夫木集】　經衡

はこへともつきせさりけり御調物、老その森の道の間もなく

【拾玉集】　慈鎧

聞人もおいその森の郭公、名こり露けき六月のこゑ

【同】　同

置露はをのか涙か鳴蟬の、聲も老その森の下くさ

○西老蘇村　東老蘇村の東南にあり。

○東光寺　西老蘇村にあり。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。

○西生來村　西老蘇村の東南にあり。此邊順【和名抄】にいへる西生の鄕なるべし。今唱失ひ詳ならず。

○西福寺　西生來村にあり。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。

○泡子地藏堂　西生來村にあり。石佛の地藏を安置す。土俗相傳。往古此地に村井藤竹と云者あり。妹一人有。往還に茶店を出し、旅人を憩息せしむ。或日一僧あり。此處に來り、茶店に憩しに、彼妹旅僧に深く戀慕の情を動し、旅僧の呑あませし茶を呑しに、忽孕ることあつて、十月にして男子を產す。三年の後彼女件の子を懷き川にて大

(大根洗川)

根を洗ふ。今の大根洗川と云は其故なり。旅僧あり。彼川の邊に立留て曰。嗚呼不思議なる哉此子の泣聲經文なりと。彼女是を顧に、三年以前戀慕せし處の旅僧なり。女其故を僧に語る。僧奇なりとして其子を吹に、則泡となりて消失ひ、然して曰。此西あれ井と云所の池中に、貴き地藏あり。彼子が菩提のために建べしと。水をかゆるに、果して石佛の地藏あり。これを安置す。今の地藏これなり。件の僧は弘法大師なり。夫よりしてあれ井の文字を改て生來と書。今の西生來村これなりと云。臣按ずるに、怪きを好み異なるを衒は、俗情の病なり。弘法の德をかざらんとて、却て弘法を地下に恥しむ。坂田郡醒が井にも此說とおなじ說あり。栗太郡手孕村の說みな同じ。笑にたへたり。天地の間に氣生胎生或は卵生の類ありといへども。神代以後氣生の人なし。況一碗の茶、人となるの理あらんや。

○友宣村　西生來村の西南にあり。

○御所内村　友宣村の東南にあり。土俗相傳。古昔三條院しばらく住せ給ふ。故に云と。村の古老云、天安年中までは中村と號し。民家纔にあり。其後貞觀年中惟喬親王此處におはします事あり。故に村の名を改て御所内村と號す。貞觀年中より以來、村の水帳には御所内村としるし。それより以前は中村としるす。今當村にある處の王屋敷は、彼惟喬王の暫時すませ給ひし跡なりと云。臣按ずるに、惟喬親王の事跡當國所々にあり。然れども諸記において見あたらず。是惟喬の御子は小倉王の事跡なるべし若武佐の行宮の跡には非ざるにや。【皇年代略記】曰、康安元年十二月八日寅刻後光嚴帝幸山門、依南方軍士清氏等襲來也、同日遷御武佐行宮云云、【紹運錄】曰、康安二年正月五日後光嚴帝自武佐行宮幸山門云云、是等を以ておもへば、武佐に近き地なれば、行宮ありし地にや。武佐寺をさしてかりの皇居としたる故に、行宮もやはり武佐寺をさすにや。或は曰、是廢帝の都を建られし、保良の都の遺跡なり。しかれども年月ふりしこと故に、誰知人もなしといへり。如何、後考をまつのみ。今武佐升といふは、升造此地に居住す。武佐升の事は土產門に出す。

○加茂大明神社　御所内村にあり。土俗相傳。惟喬親王勸請し給ふ所なりと云。

(出雲山)

○出雲大明神社　同村にあり。土俗云。一條院寬弘八年辛卯年三月十五日野田村の民瑞夢を蒙る事有て、村外に出て田の中を見るに、古木像あり。これ其しるしなり。靈夢には、我はこれ八雲立神、靈則素盞烏八千戈顯國王なり。この東の方の岡に住せんとす。汝よろしく崇べし。則これを祭。今其岡を出雲山と呼、出雲大明神と號し奉る。彼木像のありし田を出雲地と字す。今に野田村の神主東方大夫が田にして、除地なり。寶永七庚寅の年彼木像を拜するに、阿彌陀の像なり。四十八の後光多破損して甚舊たり。蓮臺もなく、御足もなし。あら木作りなり。亦東方大夫が家に緣起とてあり。此おもむきをしるせり。其奥書に寬弘九年子の八月とありと云云。臣按ずるに、神道に木像のことかつてなし。素盞烏の神靈何ぞかゝるいやしき夢の告に木像のことをしめし玉ふべけんや。例の本地垂迹を說んと欲し、設たる言なるべし。

○照福寺　同村にあり。

近江國輿地志略卷之五十九　終

近江國輿地志略卷之六十

臣　寒川辰清編輯

蒲生郡第七

(必佐の鄕)

○武佐村　御所内村の東にあり。中山道の驛次也。順【和名抄】に必佐の鄕の名を載たり。今必佐の名なし。疑らくは、いまの武佐にや。貝原翁の【岐蘇路の記】には、武者の文字に作れり。【堯孝道の記】に曰、武佐の宿を經て、山の前といふところを過侍るとて

月もかなあき霧ふかき足引の、山の前野のしの、めのみち

○淨宗院　武佐にあり。淨土宗。安土淨嚴院の末寺也。

○長光寺村　武佐驛の東南にあり。村つゞきなり。長光寺あるを以村の名とす。

○長光寺　則長光寺村にあり。武佐寺と云是也。武川綱の草創廐戸皇子の建立なり。緣起略に云。聖德太子老蘇森に來り、太子の夫人高階姬產に臨ではなはだ惱めり。

太子告曰、汝未知佛道、生るゝ子聖者ならん。汝身不淨也、潔齋して清淨の衣を着して、平產すべし、姫云、妾もし安產せば、君とともに力を佛法に合せ、精舍を興立し、群生を濟度すべし、若佛法誠あらば威力をしめせ。言いまだおはらざるに、金色の光耀照し來て、后の口中に入、則皇子を生り。異香四方に薫ず。姫感喜して武川綱をして、光耀の源を覓しむ。武川綱尋往て見るに、西南に距て三十餘町許。一の山麓に至る。方三尺許の石および香薫の木あり。事以聞す。姫又之を太子に告ぐ。太子の曰、此石は瑪瑙也。普陀落山にては寶石と名づく。金剛石と名づくるもの也。木は白檀樹也。與に俗間に用ゆべきものにあらず。速に白檀を以て、佛を造、石上に安置すべしと。婦人大に喜び、先武川綱をして三間の堂を石邊に作らし玉ふ。武川綱の作りし故に武佐寺と云。然して後法興元世廿一壬子の年二月十八日太子后と共に此地に來り。自精舍の事を掌り金堂及び鐘樓僧坊等を建立し。彼白檀を以高階姫等身の千手觀音の像を造り、彼寶石の上に安置し、武佐寺を改、長光寺と號すと云。是より先孝靈天皇の御宇大運と云ふ者有。則此長光寺の地に葬る。畢竟長光寺は鎌大明神の本地也と云云此緣起一卷初に老蘇森鎌大明神の事を長く載たり。其とは鎌大明神の條に記す。其引

（武佐寺）

續に此事を記せり。臣按ずるに、【盛衰記】等の書にも、當寺の來由を記せり。大略此緣起と相同じ、故に今贅せず。此緣起一卷甚鄙俚論ずるにたらず。其中殊に法興元世の年號不審也。本朝の年號は孝德天皇の大化白雉に初て、後齊明、天智の朝並に年號なき事凡十七年、天武天皇の白鳳朱雀の後、持統天皇また年號なき事十年、文武天皇元年より四年に至つてまた年號なし。五年に始て年號を建て大寶と號す。自是已後年號相續して不絕。未知法興元世の年號ある事。是虛妄なり。古人多武佐寺と云、或は武者に作り、また牟佐に作る。かゝる精舍も何れの日か廢墟して、いま纔に一小堂を存するのみ。眞言宗なり。已往の瑪瑙石今にあり。寺僧云。自天降來る物なりと。其高さ一尺許。周廻貳尺ばかり。青色の石なり。【盛衰記】には、重衡生捕れて馬淵の里をうち過て、長光寺にまいりて本尊の御前に念誦し給ふ。この寺は武川綱が草創上宮王の建立なり。千手大悲の常住の精舍、二十八部衆擁護の寺院也として、法華轉讀の聲幽に瑜伽振鈴の音淸り、中將寺僧に硯を召よせて、柱に正三位行左近衞權中將平朝臣重衡とぞしるされたる。今の世までも、其の銘かすかに殘れりと云云。此處より老蘇森へ二十四五町あり。【太平記】天正本に曰。新將軍經久々目路、赴于近江國武佐寺。主上追武將の跡臨幸于江州長光寺云云。【太平記】に云文和二年正月十二日將軍供奉於主上赴于江州武佐寺、毛利家・天正本十二月二十四日爲得【歷代皇記】【皇年代略記】文和三年十二月廿四日後光嚴帝臨幸江州武佐寺（〇一本の頭註に曰く、【敏滿寺行幸記】云文和二年七月十九日巳一點御出今日着御長光寺云云、これは濃州より京都へ還幸のをり也）

〇長光寺山古城址　長光寺村の東北の山にあり。元龜元年庚午五月九日信長暇を義昭に告て京を出、柴田勝家をして長光寺の城を守らしむと。諸家の記に見へたり。

〇法性寺　長光寺村にあり。

〇野田村　長光寺村の西にあり。

〇金田庄

〇金剛寺村　金剛寺は六角佐々木崇永の謚なり。此地に古昔寺あつて、いまなし。村の名とす。

〇長田村　野田村の西にあり。

〇九里村　長田村の南東にあり。九里三郎左衞門高雄此所の領主。代々爰に在城。すなはち城跡あり。岡山公方御在世の時分、高賴公より永原・高木・木村・九里、御警固に付置給ひ。御薨去の後城番に高雄在し故に、岡山居城の如くに諸人申せども、居城は當所なり。父美作守も爰にあり。一族采女正關東上杉憲政公に行て屬し出頭す。【舊記】に出、九里勝藏加州に出【舊記】に出たり。

〇杉森村　九里村の西にあり。

〇鷹飼村　杉森村の南にあり。

〇栗郷村　鷹飼村の東にあり。

〇上田村　栗郷村の北東にあり。

〇西宿村　上田村の東北にあり。長光寺の東南にして、中山道の大路なり。

〇篠田郷

〇馬淵莊　所謂馬淵西村・千僧供村・岩藏村。長福寺村をいふ。土俗相傳。天武天皇大友皇子と戰ひ勞れ、馬も亦はなはだ疲勞す。此地に來り給ひ、一の淵にて馬に飲ひ馬の氣力快然たり。天皇急に退く事を得たり。故に此地を號して、馬淵の庄と號すといふ。

【夫木集】　爲相

日も暮ぬ渡せ其馬淵もなき、此人かはゝせふみせすとも

〇西村　西宿村の東南にあり。

〇眞光寺　馬淵村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺也

〇木村長門守屋敷跡　今の庄屋が宅地なりといふ。【難波戰記】【冬夏實錄】等に曰。木村長門守重成は、關白秀次

の家老木村常陸介の子なり。秀次公生害の時、木村常陸介も妙心寺にて切腹す。于時常陸介の妾重成を孕て、故郷江州馬淵に下り隱れ居、後平產す。江州の大守六角宰相義郷秀次とは竹馬の友なり。常陸の好を思ひ、重成五歳の時に此人の元に呼玉ひ。深くこれを秘藏せらるゝこと實子の如し。軍學劍術弓馬の道六藝十能殘る所なく、十五年の間修練して後、大坂に籠城す。七萬石餘の支配城中の下萬四天王の第二と稱す。十九歳にして討死す。井伊掃部頭小性安藤長三郎討取云云。臣按ずるに、佐々木宰相義郷といふ者なし。佐々木義賢の子義治國を失て後、秀次のもとに客たり。その後京師加茂にて病死す。義治の子定治秀頼の左右に奉仕して、近江國にあらず。重成を養育すべき事なし。只常陸の妾の故郷ゆへに、此處へ來り出產せしなるべし。

○妙感寺　馬淵にあり。法華宗。具足山妙感寺と號す。日像上人の開基なり。

○千僧供村　馬淵の中央にある村なり。土俗云。惟喬親王を此地に葬。千僧供養をなせし故名とすと。或は云。空也上人此地にて千僧供養をなす故の名なりといふ。

○曼多羅堂跡　千僧供村の西のはづれにあり。相傳ふ。往昔大伽藍にして、吉祥院・勸學院など號する僧房多し。

（吉祥院）（勸學院）

人皇五十三代淳和天皇の御草創、さしも佛法繁昌の靈場なりしに、元龜の兵火にかゝつて、一時の焦土となりぬ。尙其舊跡とて、寛文年中まで小き艸堂あつて、傳教大師作の千手十一面觀音、四天皇の像ありしに、滿菴和尙村老に請もとめて、冷泉寺の佛とす。

○馬氣大明神社　同村の東南にあり。土俗云。天武天皇を勸請し奉る所なり。嘗天皇大友の皇子とたゝかひ勞れ、此地に來る。馬もまた疲勞す。たま〳〵一の淵を見て、馬に飲かひしより、馬氣力壯健にして、天皇遁れ玉ふ事を得たり。かるがゆへに地を馬淵と號し。天皇を祝ひ祭り、馬の氣力壯健になりし緣をとつて、馬氣大明神と號すといふ。信用し難き說なり。

○冷泉寺　馬氣神社の傍にあり。禪宗なり。大岩山冷泉寺と號す。寛文年中滿菴和尙の開基なり。かつて滿菴行脚の日此地に來たり。曼多羅堂の舊跡を見、程なく廢せん事を知つて、村老に請求、傳教作の千手十一面四天王の像等をいまの地に移し、堂宇を建立す。禪宗の寺とす。今の冷泉寺これなり。

○十禪師社　同村にあり。是古の曼多羅堂の鎭守なりといふ。

○供養塚　同村曼多羅堂跡の南の傍にある大成塚是なり。土俗云。惟喬親王の墓なり。惟喬親王を此地にほふむり奉りて千僧を請じ、曼多羅堂にて供養す。夫より村を名づけ千僧供村と云。村老の云。此墓の中大なる石櫃あり。其中に黃金の二鷄ありと。寛文年中福富平左衞門此地を領するの日。此事を聞て土民をして供養塚をひらかしむるに、土をのくる事二三日にして、果して石櫃あり。蓋をひらいて內を見れば、四方皆自然石を以疊み上、その透間を朱を以てつめたり。其中に煤灰のごとき物堆くあり。これをとりのけ見るに、白骨あり。傍に古き鏡一面太刀一振、數珠粒の如くなる水晶多くこれありて、餘物なし。いまその半ほり毀たる跡高さ二丈餘もあらんか。地盤は十三間四方もあるべし。四方みな田地にて、墓も闕損して一樣にはなく、堀毀ちたる跡ゆへ、高低ありて見苦しと云。臣按ずるに疑ひもなき貴人の墓なるべし。惜哉姓名のしれざることを。昔寇讎の墓を發て屍に恥をあたへしさへ、君子論あつてよきことゝはせず。況何故もなく高貴の墓を發く。其積惡のがる處なく、福富が家斷絕せる事理り成かな。

○御僧塚　是供養塚より三町許東北の方にある大なる塚なり。いにしへ土御門院の御宇、法然上人弟子住蓮坊安樂坊誅罰せらるゝ死骸を埋の塚なり。元祿二年の比、村老一ッの墓を建。嘗て法然念佛專修の法を興行す。國制あつてこれを誡。住蓮、安樂身命を抛て修す。つゐに此所において二僧を誅す。土俗或云。後代二僧の爲に一寺を草創し、安樂寺と號し。蓮池を設て住蓮池と呼。蓋し二僧の勸業の厚をしたふとなり。一千の衆僧の供養し法事を修する事七日七夜、其後此所を號して千僧供村といふなりと。正慶年中回祿の難にかゝつて、寺焦土となりぬと云云。今村老に問に、安樂寺、住蓮池の跡を知るものなし。住蓮坊姓は源頼親が苗裔實遍が子なり。今按ずるに、當村は比叡山千僧供料なり。

○岩藏村　千僧供村の北なり。

○福壽寺　岩藏村にあり。岩藏山福壽寺と號す。禪宗。梅嶺和尙の開基なり。

○岩倉山

○長福寺村　千僧供村の西にある村なり。岩倉山の半腹にあり。家數三十許。高四百石許の村なり。村民岩倉山の石をとつて、石工をなすもの多し。

○横關村　馬淵の東南にある村なり。

○横關川　源三。ひとつは日野川なり。一は左久良川なり。一は甲賀郡岩根山より出、北流曲折して東河村の北に至つて、一流となり、西横關・東横關の中間を歷、南に轉じ、

（惟喬親王墓）

（安樂寺）（住蓮池）

西に流れて、仁保川となつて湖に入なり。

○西横關村　東横關村の東南にあり。

○善光寺川　小き砂川なり。

○長者石臼　善光寺川の東の堤の下にあり。大さ一圍七尺許。土際より上に至て二尺餘。狛長者の石臼なりといふ。善光寺川と號するは、この臼の上に、善光寺の佛を置たる故なりといふ。臣按ずるに、豐臣秀吉公の時、善光寺の本尊を洛陽にうつし、亦かへし給ふことあり。此時此邊にて、奇特の事あり。幸石臼の樣なるものもあれは、旁附會して云なるべし。長者の石臼心得がたし。臣も巡覽のつるで此石臼を見るに、實にも臼には、似たれども、きはめて臼といふべきにはあらず。底の土に入て甚ふかきは、若古來の石の鳥居の柱などの、自然と土中に埋れしにや、いぶかし。臣がしれる人これをほり取て、手水鉢とせんと、あまたの人夫をかけてこれをほれども、其底をしらず。かるがゆへにやむ。

近江國輿地志略卷之六十　終

近江國輿地志略卷之六十一

臣　寒川辰清編輯

蒲生郡第八

○火鑽庄　古老云。鏡山の邊を指て云爾と。其疆界をつまびらかにせず。【江家次第】に曰。御齒固の具有餅鏡用近江火切云云。【花鳥餘情】に云。此餅は近江火切の餅を專可用、是によりて、やがて其國の鏡山の歌を詠ずるなり。俊頼歌に

我をのみ世にももちゐるのかゝみ草、ささきかへたるかけそうかへる

○鏡村　西横關村の南東にあり。中山道の往還大路なり。今は驛次にはあらざれども、昔は殊に繁昌の地にて、鏡の宿とのみよべり。淫肆もあり、遊女もありけるにや、此所の傀儡がみやこに來つて、俊頼が「世の中はうき身にそへる數なれや、おもひすつれどはなれざりけり」の歌を諺ひかなでけるを俊頼きゝ給ひて、悅び玉ひしといふ事

（鏡の宿）

【無名抄】に見へたり。【無名抄】に傀儡を遊女の事とせり。俗間印行の【下學集】にも、呼遊女傀儡と記せり。【撰集】にも、寄傀儡とあるは遊女に寄歌なり。その誤をつたふる事久し。傀儡は漢の高祖平城の圍を解し陳平が謀より出たり。木偶人をからくりにてつかふことなり。【詩學大成】傀儡の部に見へたり。今人形をまはすものを傀儡師と云。是なり。【朝野群載】傀儡記に、男は木偶人をまはし、女は淫を賣のおもむき見へたり。【太平記】云、觀應二年八月十八日源尊氏卿高倉入道追討の宣旨を賜り下着近江國、陣鏡宿云云。天正本の【太平記】云。八月二十九日將軍打立鏡宿。【平治物語】に、京師本曰遮那王十六と申。承安四年三月三日の曉、鞍馬寺を出けり。世の中に怖れて、上にこそ惡む由なれ、内々同宿の兒など名殘を惜みけり。其日近江の鏡宿に着て、夜半ばかりに髪をわれと剃上、ひごろ懷に持ける刀をさし、常にざれてさしけり。烏帽子のほこり押拭ひ着たり。翌朝出けるに、陵介御元服候、御烏帽子親は誰候ぞ、同御名如何、源九郎義經なりと云云。

（龍王の社）

○鏡山　鏡村の南東にあり。高さ一町半許あり。山頂に龍王の社あり、西の方よりこれを見れば、宛も鏡に對するが如し、鏡山の名も宜なり。【名所方角抄】に、京より北なり。守山より東北なり。篠原は此山のふもとなりといふ。野洲・蒲生二郡の界なり。篠原は野洲郡也。【類字名所集】には、野洲の郡とす。非なり。【國名風土記】に曰、壬申の亂に天武天皇美濃路より近江に責入、大友皇子の兵と戰ふ。天武の將鏡大君戰死す。此地に葬る。後塚を築て鏡山と云と云云。臣按ずるに、うたがふらくは、千僧供村のくろ塚、鏡の大君をほうむりし所ならんか。此山上龍王の社といふ者も、彼大君の靈を祭りし故に、山もまた鏡山と號するにあらずや。西の方より見るところの山形鏡に似たればいふにや。かゝる異說をもらさずして後考にそなふ。後の君子願はくは訂正せば幸甚なり。

【家集】　家持

我妹子かかゝみの山の紅葉は、うつる時にそものはかなしき

【同】　源順

名にしをへはくもらさりけり鏡山、むべこそ夏の影は見へけれ

【同】　兼盛

古へも見すやありけん鏡山、行末遠き豐のあかりは

【同】　元輔

雪ふかみ鏡の山はくもるとも、おほつかなくて歸

るへきかな

【六百番歌合】　經　家

鏡山君に心やうつるらん、いそきたゝれぬたひ衣かな

【建保百首】　順　德　院

行年をかゝみの山の冬の月、見る影さへにくもりなき哉

【堀川百首】　師　時

人影もせぬもの故に呼子鳥、何と鏡の山になくらん

【拾玉集】　慈　鎭

春と見る霞なりけり鏡山、こしに波うつ志賀の曉

【現在六帖】

雪ふれはしらぬ翁の鏡山、松もさなから面かはりせり

【古今集】　大伴黑主

か、見山いさ立よりて見てゆかん、年經ぬる身は老やしぬると

臣按ずるに、此歌【古今著聞集】には散位敦頼が歌也とあり。これは七叟尙齒會の時、敦頼が詠吟したるゆへなり。元來黑主がよめる古歌なり。

【同】

あふみのや鏡の山を立たれは、かねてそ見ゆる君か千とせは

【河内守親行記】に、大嘗會の時、近江のかゞ見山の形を作る。それを日尾山といふ。【古今集】に近江のやかゞみの山を立たれはとよめるも、是なりといふ。

（日尾山）

【後撰集】　素性法師

鏡山やまかきくもりしくるれと、絶あかくそ秋は見へける

【拾遺集】　坂上是則

花の色を移しとゝめて鏡山、春より後の影や見ゆると

【詞花集】　覺助親王

鏡山見ても物うき雪霜の、かさなるまゝにくるゝとしかな

【新勅撰集】　慈鎭和尙

大嵩の峯ふく風に霧はれて、鏡の山に月もくもらぬ

【夫木集】　衣笠内大臣

あらし吹山の麓のかゝみ川、岩瀨みなきり行紅蕖かな

【長秋詠藻】　俊　成

うれしくも鏡の山を立置て、曇りなき世の影を見る哉

【拾遺集】　定　家

鏡山よりたる月もみかゝれて、明れは氷る志賀の浦なみ

【壬二集】　家　隆

鏡山あき見し月の面影も、時雨にくもる冬は來にけり

常　德　院

けふはかりくもれ近江の鏡山、老のやつれの影も見ゆるに

裝點新粧京洛邊、對湖歡笑對山阡、旅愁悉解掩明鏡、昨日白頭今少年

○仙人石　鏡山にあり。仙客の圍碁形に似れり。かるがゆへに名づくといふ。

○星が崎古城址　あるひは此古城野洲郡にかゝるといへ共不然。鏡氏は佐々木十代屋形二男定重元祖なり。承久亂に尾張にて打死せし、鏡右衞門尉久綱二代目なり。愛智郡日夏氏もこの庶流と云云。鏡は代々屋形の簇頭にて、星が崎に在城なり。鏡陸奥守高規息兵庫頭、定頼公・承禎公に忠功有之、永祿始永原一族淺井に賴れ、逆意をおこし、南郡騷動す。承禎公星が崎に宿陣なされて、永原一族を追伏す。其節高規忠功あり。兵庫頭は信長公に仕、現に留。其後行衞不知。

○桐原郷　安養寺村・東村・古川村・森尻村・中小森村・池田村・竹川村以上七村を云。（○一本の頭註に曰く、日吉神領注進、蒲生郡桐原友貞保拾町保元元年八月廿四日御寄進）

（安養淨土寺）

○安養寺村　鏡村の西南にあり。高六百石許の村なり。相傳。往古は安養淨土寺と號せる、大伽藍の地にて、當村悉其界内なりといふ。今石佛石塔等散在す。其遺事なり。

○上野社　安養寺村のつゞき上野山にあり。祭る所の神牛頭天王。桐原七村の產土神也。土俗云。木曾の妾巴山吹を祭る所なりと。此說採用にたらず。甚僞りなり。五月朔日祭禮競馬あり。同三日御走とて、神子二人神事當人等參會、小森氏上座也、神子急に御旅所へ走行。社僧廣林山神護寺と號す。天台宗。比叡山正覺院の末寺なり。社司西德官と號せるもの安養寺村に住居す。每年正月元日に此もの務之。

（廣林山神護寺）

○御車墳　右山の内北にあり。事跡いまだ不分明。

○東村　安養寺村の西にあり。

○古川村
○森尻村
○中小森村　東村の北にあり。端村あり。赤尾村・日吉野村・細工村なり。細工村は穢多村なり。土俗愛護若を助し、細工小次郎といふものは、此處の穢多なりといふ。あとかたもなき虚説なり。愛護若の事は志賀郡に詳にしるす。
○池田村　端村を荻原村・大橋村・西村と云。西村は穢多村なり。
○竹村　中小森村の北にあり。
○鵜川村　須惠村の東に有。鵜川經之介は智仁勇の士にて、屋形の近臣補佐の老臣といふ。しかるに美濃侍持誓法師に謀計せられ、不慮にうたれけり。
○光住寺　鵜川村に有。一向專修の念佛宗也。
○天神社　同所にあり。
○鵜川經塔　同所にあり。所傳なし。今按ずるに、そふ川の傍なれば、昔し鵜をつかひ涉獵せし、罪障さんげのため建る處か。
○下鵜川村
○七里村　鵜川村の西にあり。
○磯部大明神社（神名式蒲生郡石部神社）　七里村に有。祭る神不詳。石部神社を遷し齋奉るか、石部磯部訓同ければ是にや。

（石部神社）

○藥師村　七里村の東にあり。小口村より六七町北なり。昔は藥師寺とて、大寺これ有、坊も六坊これありといふ。今わづかに一坊を存す。
○藥師寺　藥師村に有。わづかの舊跡のみなり。
○山中村　藥師村の南西にあり。
○岡屋村　山中村の東にあり。小口村の五六町南なり。
○勝手大明神社　岡屋村に有。祭禮毎年四月二の寅の日。祭る神子守勝手明神也。
○吉祥菴　同村にあり。淨土宗。安土淨嚴院の末寺也。
○西善寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末寺也。
○吉祥寺　同村にあり。淨土宗。京知恩院の末寺也。
○善正寺　同村にあり。淨土宗。安土淨嚴院末寺也。
○光壽寺　同村にあり。同斷。
○綾戸村　小口村の六町東にあり。
○苗村大明神社　綾戸村に有。社記に曰。當社擁護の由來を考奉るに、人皇六十三代冷泉院御宇安和二己巳年、同郡河守村安吉山雪野寺の御佛。今新卷村領内嚴馬寺の本尊毘沙門天王の寶前に來臨ましく〳〵てのたまはく。我進では萬民の罪惡を滅せしめ、退ては貧窮無福の輩に、財寶を授けんがために、卑劣の片境にきたれり。しかりといへども身を休べき神社もなし。足を留べき瑞籬もなし。天王よろしく計ひ給へと示し給ひければ、多門天答てのたまはく。我は鞍馬寺の鑰取として、としひさしく此所に住せり。今はからざるに明神此境に跡を垂給んこと、尤以我望所なり。御鎭座に就て思案をめぐらするに、爰に綾の尼といふ古老の富有のもの侍り。それに尋ね玉はゞかならず其しるしましますべしと、告給ひるによつて、明神彼尼を御尋ありけるに。今の綾戸の里に一人の禪尼あり。此旨を仰付られけるに、尼は答て申さく。我この在所の田代を知行せり。この内八反を以て君に讓奉るべし。御すがたを見奉るに、直人にましまさず。此所にましまさんとおほしめさは、一の新なる不思議を現じ給へと望けるにより、明神さらば汝がためとて、苗を植をかしめ給ふ。夜あけて見るに、その苗こと〳〵く大なる杉林と變じて、誠に森々たり。爰に尼は奇異の思ひをなし。やがて出現の林をおさめて、社壇の嚴扉を排らきしより以來、年序相うつり、星霜おし積りて、今八百年來におよべり。是によつて苗村大明神と號し奉りけるとなり。三節の祭今に絶ず。殊更三十三年に一度の大祭禮有。此祭りに當れは、豐年のよしにて、鄕内よろこび申のよし、誠に不思議の神靈にてましますよし申傳るなり。其外子細これありといへども、餘は神秘なればこれを略すと云云。
○專稱寺　同村にあり。一向宗。
○小口村　岡屋村の北にあり。
○觀音寺（牟禮山觀音寺）　小口村にあり。禪宗。京北妙心寺の末寺なり。相傳。此寺むかしは牟禮山の上にありて、牟禮山觀音寺と號すと。本尊十一面觀音。聖德太子の御作なり。
○東江先生碑　觀音寺後の山にあり。淺見宏正書之。
○そぶ川　源二つ。ひとつの水上は甲賀郡岩根山より出。一つは甲賀下田の東より出。岡屋村の南にて合し、小口村、藥師村の中間を直に北へ流れ、安吉野寺川の末と合し、西に折て、仁保川となり、湖に入なり。
○島村　綾戸村の北にあり。
○正福寺　島村にあり。一向宗。
○虛空藏堂　同村にあり。
○橋本村　島村の北にあり。臣按ずるに、【今昔物語】にいへる處の安義の橋本なるべきか。安義は安吉と訓おなじき故、かけるなるべし。此地安吉の鄕にして、橋本村の前に川あり。是横關川の水流なり。うたがふらくは、此川の橋を安義のはしといふ。其橋の本故にぞ、橋本村とはいふなるべし。
○牛頭天皇社　橋本村にあり。

○三尊寺　同村にあり。一向宗。
○新高寺　同村にあり。一向宗。
○藥師堂　同村にあり。
○地藏堂　同村にあり。
○川上村　信濃村の南西に有。
○若宮八幡　川上村に有。
○光明寺　同村にあり。淨土宗。
○地藏堂　同村にあり。
○安吉郷　順【和名抄】に出たり。倉橋部村・上畠村・弓削村・東川村・信濃村・須惠村・西川村、以上七村をいふなり。
(小門村)
○倉橋部村　上畠村の東にあり。端村を小門(コヂ)村といふ。
○西養寺　倉橋部村にあり。一向宗。
○安行寺　同村にあり。同宗。
○安吉大明神社　倉橋部村に有。正一位安吉五社大明神と云。祭神未だ詳ならず。毎年五月五日祭禮。本地千手觀音なりといふ。藏王・十禪師・宇佐八幡・天神宮・安吉明神以上五社なり。今は礎のみにて、二社殘り有之。
○安吉川　日野川筋なり。源は金剛峯より出、藏王村川宮平川寺尾村の西にて落合、日野川となり。葛卷村の東にて、騎田川と落合、安吉川と號す。下にては野寺川といふ。直に北に流れ、庄村上畠村の中間にて、西に折て、そぶ川と合し、是を仁保川と呼。又下にては、横關川と合す。此村の中にては、安吉川といふ。橋あり。安吉橋といふ。此橋往古は檜の橋なりといふ。今は石橋也。【今昔物語】にいへる安義橋は是なり。長さ貳十間ばかり。
○上畠村　淨土寺村の西にあり。
○天滿天神社　上畠村に有。祭る神菅公の靈なり。
○光瑞寺　同村に在。一向宗。東本願寺の末寺なり。
○大安寺　禪宗。
(新村)
○弓削村　川上村の西北に有。端村を新村といふ。
○山王社　弓削村に有。祭る神日吉の神なり。
○八幡社　同村に有。
○阿彌陀寺　同村に有。淨土宗。
○正福寺　同村にあり。
○善休寺　同村にあり。
○東河村　上畠村の西に有。横關川の傍なり。
○若宮八幡社　東河村に有。
○玉養寺　同村に有。信樂飯道寺の末寺なり。
○萬願寺　同村に有。坂本西教寺の末寺なり。
○常住寺　同村に有。一向宗。
○信濃村　庄村の南にあり。
○藥師堂　信濃村にあり。

○稻荷明神社　同村にあり。
○須惠村　鵜川村の北にあり。
○永照寺　須惠村に有。一向宗。
○善通寺　同村に有。同宗。
○下須惠村　須惠村の東に有。
○觀音堂
○八幡社
○西川村　西横關村の東南に有。西川、東川兩村は蒲生川の端なり。西川備前守在住す。【應仁亂日記】に出。屋形の物頭なり。其後義輝將軍御他界の節、西川新右衞門尉同小次郎父子戰死す。
○淨土寺村　倉橋部村の西南に有。
○竹林寺　淨土寺村にあり。卷尾山竹林寺と號す。本尊釋迦。禪宗なり。相傳、雪野寺千坊の古跡なりといふ。
(雪野寺千坊の古跡)
○岡松　竹林寺にあり。
○天神宮　竹林寺の鎭守也。淨土寺村、庄村、林村の鎭守也。
○竹連寺　同村にあり。禪宗。
○歌坂道　淨土寺村より野寺へ登山道なり。相傳。古昔和泉式部此ところを通るとて、雪野寺の鐘を聞て、「暮にきと告るそ誠降はるゝ、雪野の寺の入相のかね。」是より歌坂と號すといふ。
○女坂　土俗言。龍女小野時兼に離緣して、玉手箱を殘し、此道より平木の澤へかへる。故に女坂といふといへり。古は野寺繁昌の時の陰坂なるべし。大手搦手表門裏門といふの類にて、男坂女坂の名はある事なり。今も江戸の愛宕、湯島、神田などにも此名あり。雪野寺繁昌の時の女坂なるを、はや名によつて、附會の說をなせり。
(陰坂)
○川守村　林村の南東にあり。
○鐘ヶ嶽　川守村にあり。
○龍王寺　鐘ヶ嶽にあり。安吉山龍王寺と號す。和歌によめる野寺これなり。本尊藥師。行基の作なり。【緣起略】に曰、持統天皇の御宇、行基建立する所なり。元明天皇の御宇、和銅三年九月廿八日再建あり。安吉山雪野寺と號す。光仁天皇の寶龜八年之比、當山の麓川守村に一人の美男あり。小野時兼と名づく。大和國吉野郡のものなり。或日一人の美女忽然と來たり、夫婦の契をなす事三年にして後、女の云。われ誠は人間にあらず。前世の宿因によつて、妹脊のかたらひをなせり。われは平木の澤の主なり。此を形見とし玉へとて玉の箱をのこし置けり。時兼戀慕の情に不堪。平木の澤に行て歎くに、彼女姿を現はすを見るに、長十丈許
(雪野寺)

の大蛇なり。時兼魂を消し、かけかへつて、彼箱をひらき見るに鐘あり。則當寺に寄進す。かの澤より龍燈今に上るなり。靈驗あらたなるによつて、一條院御勅額を龍壽鐘殿と下し賜る。雪野寺をあらため、龍王寺と號を玉へり。承暦二年十月下旬此かねを叡山へ持行、山徒これを撞ども鳴ず。山徒怒て谷へなげ落す。鐘破きずつけり。或ひと野寺におくれり。鐘自然ときずいえ合。そのあと今にあり。年旱則土民雨を此鐘にいのる、かならずしるしあり。文明六年九月上旬濃州の士石丸丹波守といふもの、此鐘を奪んとて來りけれども、俄に雷電してとり得す。此鐘の釣たるところの、目釘をぬきけれども、これを不知。二年あまりつりてあり。其外奇特おゝし。將軍義政、義晴、佐々木定頼、細川晴元、佐々木義賢、土岐頼藝等の證文數通ありと云云。宗旨むかしは天台。今は天台の律院なり。平木澤といふは、當寺の山のうしろにあり。臣按ずるに、碎たる鐘の自然と愈合事、愚俗の不思議とする處。志賀郡三井寺の鐘も、かくのごとくなるの奇妙ありといふ。龍神の出て、つぎたるにもあらず。蛇ねぶり合せしにもあらず。かねも谷より落なば、碎も破もする筈の事なり。かくかねの性元來年月を經は、おのれとわれめいえ合ものなり。不思議にあらず。怪異にあらず。【日本記略】に曰、延暦十五年十一月辛丑、始用新錢、奉伊勢加茂松尾社、施七大寺及野寺云云、【同】曰天長五年丁丑、屬清行之僧三十人於野寺、轉讀大般若經、防水害也云云、

【新古今集】　慈鎮

有明の月のゆくゑを詠てそ、野寺の鐘はきくへかりける

暮にきと告るそまこと降晴る、ゆきの野寺の入相の鐘　和泉式部

きのふ見し花のあたりに夜は明て、野寺の鐘の聲そ聞ゆる　定家

一もとの野寺の花はちり過て、ふりたる池に蛙なくなり　家隆

○天神社　鐘か嶽にあり。岩井川守村の產土神也。

○吉田出雲守重賢居宅跡　同村に有。是は聞る射術の巧者なり。事詳に人物門に出す。安藝守定雄此山の内に城あり。吉田は元來愛智郡にて、冠者嚴秀嫡孫なりといふ。

○小野時兼屋敷跡　同村にあり。此時兼は何れの代の人

といふ事知れず。

○西光寺　同村にあり。佛光寺派。

○東光寺　同村にあり。一向宗。

○庄村　淨土寺村の南西、小川を隔てあり。

○願成寺　庄村にあり。

○林村　川上村の東南にあり。

○緣塔寺　林村にあり。木尊阿彌陀。行基の作。座像貳尺五寸ばかり。相傳。蒲生三堂の其一なりといふ。三堂とは所謂蒲生堂村の蒲生堂、藥師村の大堂、此堂なりといふ。

○正行寺　同村にあり。錦織寺派。

○圓通寺　同村にあり。

○常專寺　同村にあり。一向宗。

○古城址　同村にあり。赤座隼人城地なりといふ。

（蒲生三堂）

近江國輿地志略卷之六十一　終

近江國輿地志略卷之六十二

臣　寒川辰清編輯

蒲生郡第九

○岩井村　川守村の東南にあり。

○安樂寺　岩井村にあり。禪宗。本尊地藏菩薩。相傳。雪野寺千坊の古跡なりと云。

○善明寺　同村にあり。一向宗。錦織寺の末寺なり。

○葛卷村（カツラマキ）　岩井村の東にあり。

○安樂寺　葛卷村にあり。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。本尊阿彌陀。惠心の作なり。

○古城跡　同村に有。葛卷隼人正城跡なり。葛卷源八郎重氏後吉田印西といふ。弓法の達人なり。事は人物門に出す。

○宮井村　葛卷村の東にあり。

○慶岸寺　宮井村にあり。淨土宗。本尊阿彌陀。惠心の作なり。

○若宮八幡社　同村にあり。
○外原村　宮井村の南西にあり。
○正養寺　外原村にあり。
○八幡宮　同村にあり。
○蒲生堂村　外原村の南東にあり【石塔寺の記】に曰。朝廷阿育王の塔のことを聞召。則勅使あり。其時御旅館なければ。俄に館を作る。其後凡俗の居るべきならねば、只堂とのみいひなせり。今の蒲生堂村これなりと云云。
○光明寺　蒲生堂村に有。淨土宗。安土淨厳院の末寺也。
○觀音堂　光明寺の界内にあり。正觀音立像。長貳尺。聖德太子の作。古昔安吉寺の本尊なりと云。
○宮川村　蒲生堂村の西にあり。
○山上村　宮川村の西にあり。
○田中村　岩井村の西にあり。
○毘沙門天堂　田中村にあり。
○藥師堂　田村にあり。
○川森村　田中村の北西にあり。
○鶯輿丁村　川守村の北にあり。
鶯輿丁は輿を舁下部なり。今は御鳳輦を舁者を鶯輿丁といふ。丁はよほろとて、壯男の下部の事なり。ことは淺井郡丁村（ヨボロ）の條下に出す。此村よりも、古昔鶯輿丁を出せしなるべし。
○若宮八幡社　鶯輿丁村にあり。禪宗。
○東照寺　同村にあり。
○地藏堂　同村にあり。本尊地藏菩薩。聖德太子の作なり。
○石井山慶立寺跡　同村にあり。
○榊原源藏塚　同村にあり。如何なるものといふ事をしらず。
○上羽田村　淨土寺村の東北にあり。上野牢人新田三郎兵衞當庄を屋形より賜り。新田新五郎といふ。先祖義重より二十二代刑部少輔義幸の嫡男といふ。秀吉の家人に、羽田長門守正親といふ士あり。此地所產の士なり。
○中羽田村　上羽田村の東にあり。
○下羽田村　中羽田村の東北にあり。
○新牧村（ヲウマキ）　中羽田村の南に有。或はあら卷につくる。
○岸波寺地藏堂　新牧村にあり。本尊地藏の石佛也。相傳。此寺雪野寺の千坊の古跡として、其名のみ殘りしに、享保十三の春、山の崩よりほり出し、新に堂を建る。
○山王權現　新牧村にあり。
○上平木村　上羽田村の北にあり。
○光明寺　上平木村にあり。此寺の舊跡也。毎夜龍燈上る由なり。
○龍池　此池を御池といふ。光明寺の龍燈も是より上り。野寺の龍鐘も此澤より出ると土俗はいへり。
○柏木村　上平木村の北にあり。
○正壽寺　柏木村に有。禪宗。妙心寺の末派。
○飛鳥井殿石塔　同村にあり。正應年中のよし。柏木衞門之丞飛鳥井殿夫婦の緣類にて。烏帽子直衣等有之。これは小幡に是ありといふ。甲賀郡柏木にも、飛鳥井業雅卿の舊跡あり。
○下平木村　柏木村の北にあり。
○皮田村　下平木村の東にあり。
○糟塚村　皮田村の北にあり。
○内野村　糟塚村の北にあり。
○今里村　糟塚村の東にあり。
○大脇庄　佐々木七代の屋形經方此庄に在城なり。續光寺殿と號す。源秀義公の祖父なり。嫡は八代の屋形季定公二男木村行定、三男亘野、四男豐浦・伊庭等の先祖。行實五男愛智・山崎等祖、家行六男は乾の元祖、季定公もはじめは爰に在住にて、後觀音寺に移り玉ふよし也。此庄の領主大脇傳介。後信長公の時、宗論を企切腹す。
○脇村　今里村の東にあり。
○成願寺村　脇村の北東にあり。村に成願寺あるが故に名づくるなり。
○成願寺　則成願寺村にあり。赤神山成願寺と號す。其記に曰。夫當山は人皇五十代桓武天皇延曆十八己卯年傳敎大師草創の伽藍にして、本尊藥師如來十二神將。御自作也。鎭守は熊野權現なり。往古は五十餘坊あり。今漸二坊を存す。行萬坊・石垣坊是なり。峰は金剛胎藏の曼荼羅。中央は不動明王の垂迹惡魔降伏の太郎坊、此處に十丈許の妙岩二行に立。是則ゑ乙の二字を表すと云云。杉谷善住坊五十三家の侍なり。娘を屋形義賢公へ出し妾となる。此腹に端三郎といふ子出生。是によつて善住坊無二の忠を盡し。成願寺の峰に楯籠、忍て信長公をねらへども、幸なければむなしく過る折節、千草越を尾張へ下り玉ふと聞。かの山中にしのび、鐵砲を以て打。信長運つよくはづる。杉谷ふかくかくれしが、高島にて磯野丹波守高島小川へ所替の節、堀川阿彌陀寺にて生捕れ生害す。
○宿村　脇村の東に有。宿村產所村とて、國々の内所々にある事なり。然れども後世におよんで、村名を付故るゆへ今つまびらかならず。漸に存じて、宿村產所村を稱するものあり。宿村といふは、一村各別の村にて、遊女を置き、諸方へも出し、また宿をもさせる故に、專宿村といふ。

神國の風にて、經水などある女、または忌服あるもの皆此村に行て宿するゆへ、人はなはだいやしむ。今も其村穢多に非ずして、人の殊の外きらひいやしむ村あるは、皆此宿村產所村の末なり。產所村の事は高島郡に記す。

○辻村　宿村の東南にあり。
○金屋村　辻村の東にあり。
○中野村　金屋村の西南にあり。
○今在家村　中野村の南にあり。
○今堀村　今在家村の南にあり。
○北今在家村　中野村の西にあり。
○東破塚村　北今在家村の西南にあり。
○西破塚村　東破塚村の西南にあり、
○蛇溝村　西破塚村の東にあり。
○布施村　蛇溝村の南にあり。布施村のことは、坂田郡にしるす。此地も同じ事なり。
○布施淵　湖のごとき溜池あり。布引山の谷合の水流積り自然の淵なり。これを布施の湖ともいふ。
○稲虫村　布施村の南にあり。
○三屋村　西破塚村の南にあり。
○蒲生野　此近邊を惣て蒲生野といふ。往古は以上の民村なく、荒々たる原野なりといふ。或六本野、莉萩野、遺邇野、紫野、しめ野、うね野、或說に上下の谷峯、うねのごとき故、うね野といふともいへり。みな蒲生野の事なり。

【日本紀】天智天皇紀曰。天皇幸蒲生郡遺邇野而觀宮地、又紀曰、天皇七年夏五月五日縱獵於蒲生野云云、

【萬葉集】第一曰、天皇遊獵蒲生野時額田王作歌一首、于貶天皇弟諸王內臣及群臣皆悉從焉、

茜草指、武良前野逝、標野行、野守者不見哉、君之袖布流云云、【萬葉拾穗抄】曰、紫野・標野【八雲抄】皆近江也、祇曰紫野しめ野蒲生野にあり。あかねさすといふ發句は、古語のよそへことなりと云云。【松葉集】に萬葉の歌を山城のことゝす、非なり【日本紀略】曰、延曆二十二年閏十月戊申朔遣參議左兵衛督兼造東大寺長官、紀朝臣勝長於近江國蒲生野、造行宮云云、【類聚國史】八十三曰、二十二年癸亥行幸近江國蒲生野、甲戌詔曰云云、栗太、甲賀、蒲生三郡、乃今年田租免賜不云云、【日本紀略】曰、詔曰云云、近江行宮所乎御覽爾、山河毛麗久、野母平之氐、御意毛於太比爾志氐、御座之、故是以御座世留　栗太、甲賀、蒲生三郡乃今年田租免賜比、又勤仕國郡司爾官冠上賜不　又介掾等有賞、【天武紀】曰、元年三月天皇還于伊賀中山、而當國郡司等率數百衆歸焉、會明至莉萩野、暫停駕而進食、到積殖山口、高市皇子自鹿深越以遇之云云、同云元年秋七月命多臣品治、率三千衆屯莉萩野云云。

【拾遺集】　讀人不知

かまふ野の玉の緒山に住鶴の、千歳は君か御代のかすなり

【崑玉集】　讀人不知

幾秋かつれなき妻をうねの野に、近江路しらて鹿の鳴らん

【古今集】

近江より朝立くれはうねの野に、田鶴ぞ鳴なるあけぬこのよは　好忠

【續後拾遺集】

きのふまで冬籠せし蒲生野に、蕨のとくも生いつるかな　家隆

【玉吟集】

田鶴の鳴冬の荒田のうねの野に、一村すゝきひとよやとかせ

【新葉集】　讀人不知

うねの野にたつの一聲鳴別る、またもあふみと賴めてそ行　匡房

【名寄】

かもふの、若紫の藤はかま、千代の秋まて匂へと千衆皿莉萩野云云。

【拾遺集】　讀人不知

かまふ野の玉の緒山に住鶴の、千歳は君か御代のかすなり

【崑玉集】　讀人不知

幾秋かつれなき妻をうねの野に、近江路しらて鹿の鳴らん

【古今集】

近江より朝立くれはうねの野に、田鶴ぞ鳴なるあけぬこのよは　好忠

【續後拾遺集】

きのふまで冬籠せし蒲生野に、蕨のとくも生いつるかな　家隆

【玉吟集】

田鶴の鳴冬の荒田のうねの野に、一村すゝきひとよやとかせ

【新葉集】　讀人不知

うねの野にたつの一聲鳴別る、またもあふみと賴めてそ行　匡房

【名寄】

かもふの、若紫の藤はかま、千代の秋まて匂へとそおもふ

【夫木集】　光俊

今そ見る玉の小山の麓にて、みちしかまふの野への螢は

○狛長者屋敷跡　蒲生野にあり。方四五町四方許。今是を長者屋敷といふ。豪富の者を稱して長者といふ。此狛の長者何れの代の人といふことをしらず。然れ共金勝寺の記を以てかんがふる時は、嵯峨天皇の時代の人歟。長者の石臼といふもの、善光寺川の北の川はたにあり。

○芝原村　今堀村の東南にあり、
○南村　芝原村の東にあり。
○二俣村　南村の東にあり。
○尻無村　二俣村の東にあり。
○下大森村　尻無村の東にあり。
○上大森村　下大森村の東にあり。
○土器村　上大森村の南にあり。
○瓜生津村　上大森村の東にあり。
○石谷村　瓜生津村の東にあり。
○一式村　石谷村の南にあり。

近江國輿地志略卷之六十二　終

近江國輿地志略卷之六十三

臣　寒川辰清編輯

蒲生郡第十

○市原野村　一式村の東にあり。
○高木村　市原野村の東に有。
○二保村（ニホ）　高木村の北東にあり。
○池脇村　二保村の東南にあり。
○甲津畑村（カウヅハタ）　池脇村の東南にあり。佐々木家に、甲津畑勘六左衞門秀政といふものあり。此處の領主なり。佐々本高盛の次男なり。
○猫田川　源水晶嶽より出、盤曲し西に流、北に轉じ、甲津畑村の東を過。神崎郡山上村の東を過て、愛智郡高野村の南に至て、和南川と合し、愛智川となつて湖に入るなり。
○千草越　【織田軍記】に曰、六角入道承禎愛智郡愈江の城に籠り、其外淺井が徒四方におこり、當國日野の城主蒲生賢秀父子幷甲津畑勘六左衞門、布施藤九郎を案内として、千草越と云山路を、事なく退き玉ふ路にて、鐵砲二つ信長公の御袖に中る。是は山徒善住坊といふ鐵砲の上手、承禎に賴まれ、信長公をねらひしが、打損じたるなりと云云。
○水晶嶽　當郡の東極、伊勢の國界の山にして、高山なり。往古は此山中より水晶出しゆへ、名付るなるべし。古歌に、蒲生野の玉の緒山と讀るは是なり。（玉の緒山）
○原村　甲津畑村の正南にあり。
○河原村　原村の北西にあり。
○庄村　河原村の南にあり。
○林村　庄村の北にあり。
○佐久良庄　土俗或は佐久良の谷といふ。以下十三村をいふ。（佐久良の谷）
○奥師村　林村の北西に有。中郷村の竝、南東二三丁に有。
○大佐久良村　奥師村の南にあり。
○中明寺　大佐久良村にあり。禪宗。神護山中明寺と號す。小倉中將實澄公開基なり。
○普光寺　同村にあり。一向宗。西本願寺の末派也。
○五社大明神社　同村にあり。祭神詳ならず。
○佐久良川　源二つ。一つは小野村山間に出て、乾に流れ、佐久良村の南を經、野出村・大塚村の北を經、横山村の南を過て、日野川に合して横關川となり、仁保川となつて、湖に入。一つは、原村の山間より出。河原村・林村の南を經て、佐久良村の南に到て一流となる。

○中郷村　佐久良村の東南にあり。川を隔二三町南なり。日野より一里餘北なり。
○安乘寺　中郷村にあり。一向宗。東本願寺の末派也。
○古城址　同村にあり。蒲生飛驒寺氏郷在城の跡なり。氏郷の傳、人物門に詳なり。
○長束大藏正家塚　同村にあり。相傳。水口落城の後、孫兵衞と號す、百姓の家に來て切腹する。今の塚是なり。正家の傳、人物門に詳なり。
○古野村　中郷村の東十丁許にあり。谷間を登行なり。
○石子山（イシコ）　古野村に在。土民石を切て業とす。
○布引山　同村にあり。長さ四里許つゞく。なだらかなる山なり。故に此名を稱す。【名寄】に長明嵐吹雲のはたてのぬきを薄、村消わたる布引のやま
此野原、昔より廣大にして、近江にも幷なき野山なり。草木だに生ぜず。此野の谷間に、長谷の地藏とて、靈佛あり。里離れ遠き所に堂あり。難産を祈るに奇妙なりと云。昔（長谷の地藏）蒲生長者の作り置れたりとて、山水の風景あり。池あり。此埜の内に松の異木あり。世に稀の松といふ。（稀の松）
○安部井村　中在寺村の、三丁許東にあり。則佐久良川の東の傍なり。安部井伊豆守は、佐々木家の物頭也。應仁亂甲賀陣に記に出づ。
○天滿天神社　安部井村川向の、丸山の峰頂にあり。
○香川大明神社　同村北東川向七八丁にあり。
○念法寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末寺也。
○藥師堂　同村にあり。
○中在寺村（ナカザイジ）　安部井村の西にあり。蓮花寺村の東四丁許にあり。
○迎參寺　中在寺村にあり。
○北脇村　中在寺村の北四五丁許にあり。佐久良川の北の傍なり。
○野矢屋敷　北脇村にあり。相傳。野矢光盛といふもの、屋敷跡なりと。今は竹林となれり。野矢光盛は當地の領主なり。勅使に從ひ山中に入て、石塔を尋出せしものなり。石塔寺の條下に詳に記す。光盛後光延と云。石塔寺は當村より東の方半里はかりにあり。
○法光寺　北脇村にあり。佛德山法光寺と號す。禪宗。本尊藥師如來。聖德太子の作なり。

○高德寺　同村に有。一向宗。西本願寺の末寺也。
○長安寺　同村にあり。一向宗。同斷。
○寶來大明神社　同村にあり。
○蓮花寺村　北脇村の西にあり。西の方石塔村へ七八町あり。相傳。往古は蓮華寺と云寺在と。今は其跡だになし。
○野出村　蓮花寺村の西南五六町にあり。佐久良川の南の傍なり。
○佗念寺　野出村にあり。一向宗。東本願寺の末寺也。
○綺田村（カバ）　野出村の西北に在。佐久良川の北の傍なり。檜物の里のかば櫻ありしより、此邊を櫻の庄ともいふ。此綺田村の名もあり。佐久良村、佐久良川の名も有といふ。（櫻の庄）
○平林村　綺田村の北にあり。
○石塔村　平林村の西に有。石塔寺ある故名付也。小倉源氏林田四郎泰範の子石塔大夫慶秀石塔氏の元祖なり。
○石塔寺　石塔村にあり。村家より寺へ三町餘。寺より塔ある處まで一町餘有。阿育王山石塔寺正壽院と號す。天台宗。比叡山の末寺なり。開基中興行賢阿闍梨なり。寺記曰、大聖世尊入滅後、阿育大王造營八萬四千之佛舍利、以神通力散置三千大千刹界、震旦國十九處、日本二箇處、一箇處湖水澳白石、一箇處今石塔寺是也、雖然往昔未知其塔之所在、人皇六十六代一條院御宇、釋寂照、俗名大江定基、參州刺史諫議大夫齊光一子也、泥塗冠纓投源信之室、爲求法入大宗國、源信作天台問目二十七條、付照寄南湖知禮、照愛姑蘇山水奇秀、止吳門寺、一朝遊清涼山拜文殊大士、向山中之蓮池、諸比丘誦經瞻禮、照問曰、臨池而作禮是何爲乎、一僧答曰、汝不知乎、日本近州蒲生縣有阿育王所造之舍利塔、每到齋日、現瑞光於此池、示神異於此方、因照乃瞻禮、寶石塔婆映水中、舍利光明耀眼頭、照歡喜無量、仍此事雖欲傳于本朝、遊方未窮、望念願未遂、歸帆難期、於是細記此事、封以膠漆、而投海上、祈曰、請汝龍神能護持奏達于日本皇帝、已而亦寬弘三丙午年二月佛涅槃尊忌、播州明石浦漁人見海上有光、告益井寺僧侶、僧侶兩三輩寄船而得一笈、朱書曰、奏于日本皇帝、卽僧等奏九重、天皇叡感卽遣勅使於蒲生縣、尋覓其寶塔、更無知者、遊獵之士野矢光盛者、常所率白犬、逸然而繞一塚、三反吠兩三聲、因爲奇異之思、則穿之、四角三重寶塔巍然顯出、高三丈六尺周弧又三丈六尺也、勅使達天聽、草創伽藍、號阿育王山石塔寺、然後數罹兵火、一寺院斷絕矣、中興慈眼大師謂弟子行賢曰、汝應再興、於石塔寺、行賢勤力建立一宇、安置本尊觀音大士之像、大猷院殿寺領十八石御寄附、有御朱印也云云、石塔寺の住侶覺淵阿闍梨【寺記】幷【石塔寺物語】と云書を臣におくれり。阿闍梨の云。此書は野矢氏の者書記して寺におくれり。考合のためにおくるとす。書甚長し。其大概をとつて是を書して曰、抑當寺の濫觴を尋ぬるに、往昔聖德太子四十八箇寺を建立あり。石塔寺は乃四十八にあたり、其願の成就したるを以て、諸本山本願成就寺と名付らる。夫より年移りて郊原となりぬ。今阿育王山石塔寺と改りたる事は、比叡山に寂蓮法師とて、尊き聖あり。俗名は大江定基と云。渡唐の願を起し、長保五年（西紀）八月入唐して、清涼山の清涼池に到るに、一僧池に向て禮拜す。寂蓮是を問に、僧の云。佛滅百歲の後、阿育大王と申鐵輪王あり。故ありて八萬四千の女を殺し、其とがを報謝せんとて、八萬四千の石塔を造り、其數多きを以て。鬼神に令して所々に建。日本に二ヶ所。一所は今の石塔寺の塔是なり。一處は湖の澳の白石なり。鬼神あやまつて逆に建。此寶塔の影朝日に映じて池中にうつる故に、禮拜すと。寂蓮奇異の思ひをなし、委く記して日本におくる。（其と寺記のことし。）天皇叡覽ある處、阿育王所造の寶塔を、近江國蒲生郡渡會山にありと書記せられたり。則勅使をつかはさる。勅使は鎭守府將軍源成頼公なり。其頃同郡佐久良の谷、北脇の領主野矢光延といふ者を召して、石塔の事を尋玉ふ。率所の犬奇異ある事をいふ。（其こと寺記のこと也。）則ほらせて見玉ふに、三丈六尺の石塔光を放て出現せり。今の石塔寺の寶塔是なり。委は石塔寺の緣起に是あるべしと云云。阿育王此塔を造ること、此趣則【諸經要集】の第三に出たり。相傳。當寺に額下馬札あり。ともに張卽之筆なりしに、織田信長下馬札を安土城に引取、額は火災にて燒滅す。臣按ずるに、【盛衰記】及【三國傳記】に大江定基三河守に任して彼國にありける頃、赤坂の遊女か壽といふものに、なれそめしに、か壽死しければ、其別を悲、出家し、入唐して清涼池を拜する僧に逢、阿育王の塔のことをきゝ、日本にいひおくりし事、寺記の如くに書載たり。此定基は平城天皇の末葉にて大江の齊光が子なり、出家して寂照法師と云。後に圓通大師と號す。【膾餘雜錄】定基携寵妾赴三河、妾死、不堪悲痛、祝髮爲僧、改名寂照云云、【皇朝類苑】四十三日本僧の條下に、寂照がと詳に見えたり。然れども阿育王塔の清涼池に映りしを見て、日本にいひ送りしといふ事見へず。【法苑珠林】五十一曰、倭國在此洲外大海中、距會稽萬餘里、隋大業初、彼國官人會丞、來此學問、內外博知、至唐貞觀五年與本國道俗七人方還倭國、未去之時、京內大德每問彼國佛法之事、因問阿育王、依經所說、佛入涅槃一百年後出世、取佛八國舍利、使諸鬼神、一億家爲一佛塔、造八萬四千塔、徧閻浮洲、彼國佛法晚至、未知已前有阿育王塔不、會丞答曰、彼國文字不說、無所承據、

然驗其靈迹、則有所歸、故彼土人開發土地、往々得古塔靈盤、佛諸儀相數放神光、種々奇瑞、詳此嘉應故知先有也云云、松下見林【日本異稱傳】曰、本朝之學生無會丞、恐福因之訛、福因之事見于【日本書紀】云云、【宋史】曰、西河離石人劉薩河、於丹陽城禮阿育王塔、見放光明、集衆堀得鐵函、々中又有銀函、盛舍利及佛爪髮云云、寂照が阿育王塔の事見へず。彼物語に本願成就寺也といふ事如何にや。上宮四十八箇寺を建立の志願あつて、四十八ヶ目相當し、故に願成就寺と號せしは、八幡日杉山にあり。殊に渡會山といふは、八幡山の傍なり。今に渡來の橋八幡にあり。この願成就寺始渡會山にあつて、後日杉山に移せり。事は願成就寺の條下に記す。石塔寺は石塔寺にして、別寺なり。開基も聖德太子にはあるべからず。一條院の御宇なるべし。比叡山の寂蓮法師と云事訛なり。大江定基赤坂の遊女か壽に別れ、出家入道して寂照法師と號す。是也。此阿育王塔近き湖水には映ぜずして、遙に遠き唐の清涼池に影をうつせる事、如何ぞや。勅使鎭守府將軍成頼といふ事いぶかし、成頼は佐々木氏の始祖なり。勅使にあるべからず。別人なるべし。諸書に是を本朝の五奇異とのす【拾芥抄】に曰近江蒲生石塔普阿育王諸鬼神をして、八萬四千の塔を作らしむ。是其一なり。毎年大蜂群集して、此塔に行道すと云云。臣此事を寺僧に尋るに、僧の曰。かつてなし蜂は多くありといふ。蜂已が巢を作らん爲に、石塔の邊をめぐりしなるべし。誠に外より是をみれば、石塔を行道するやうにも見へたるべし。殊勝の事なり。性空が眼を塞げば、普賢菩薩の十想、無漏の大海、五塵六欲の風はふかねども、隨緣眞如の波の立ぬ日はなしとの玉ひ、眼をひらけば空の遊女がすはのみたらしに、さゝら波たつと歌てぞありけるとかや。蜂の行道も此ごとくなるべし。阿育王姓は孔雀氏王位につきし日、轉輪の威德を得て、閻浮提を統領す。あまつさへ諸の鬼神を從へり。正法を以て天下をおさめ、佛理に通じて三寶を崇む。八萬四千の塔を立て舍利を安置すと【神皇正統記】に見へたり。

○阿育王石塔　詳に前に記す、

○野矢氏墓　石塔寺界内にあり。野矢光盛が墓なり。事詳に前にしるす。

○犬墓　同斷。光盛が犬なり。事は石塔寺緣起條下にしるす。

○寺村　石塔村の南にあり。

○上小房村　寺村の西北にして、石塔村の西にあり。

○下小房村　上小房村の西にあり。

○河合村　下小房村の南西にあり。河井左馬允康明に、代々屋形の物頭なり。康明が子新左衛門甲賀に隨逐して、忠義を勵みし人也。

○大寶天王社　河合村にあり。

○願成寺　同村にあり。玉尾山願成寺と號す。上宮太子の開闢なり。本尊觀音は、上宮皇子の彫刻なり、嘗て皇子觀音の像十八を作り。近江十八處に安置す。此像をおはりとす。皇子所願のなるを以て、寺の名とし。六坊存す。其後荒廢して一草堂のみなり。正保の初再興し、禪宗となる。爾來曹洞宗なり。

○古城址　河合村にあり。河合右近大夫在居の跡なり。

○木村　河合村の西にあり。木村は經方の二男を始て此地の領主とし、木村左衛門尉行定其子兵部少輔定道こゝに在住す。佐々木家の命によつて、定道佐々木社の神官職となりて、佐々木の莊にうつる。定道が庶子此所に殘り、木村を稱す。木村源五重章此後胤なり。重章が子源五重長頼朝卿より本領を賜る。

○横山村　木村の西南にあり。蒲生川の端也。横山喜内蒲生家に仕、後將監と云勇將なり。關原役織田河内守と戰て討死。横山太郎左衛門は屋形物頭にて、應仁の初御陣甲賀山の記に出、横山喜内は此太郎左衛門か孫なりといふ。(○一本の頭註に曰く、日吉神領注進、蒲生横山鄕王子宮領)

○山王社　横山村にあり。

○永福寺　横山村にあり。

○支那土山　舊跡靈地と云云。古昔の伽藍跡なりといふ。又皷石、鐘石、天狗石とて三所にあり。皷石は皷の音を出し。鐘石は鐘の聲を出すといふ。

近江國輿地志略卷之六十三　蒲生郡　木村　横山村

近江國輿地志略卷之六十三　終

近江國輿地志略卷之六十四

臣　寒川辰清編輯

蒲生郡第十一

○西生郷

○東生郷　東生西生(ヒシ)の郷名順【和名抄】に出たり。今土俗上郡下郡といふ。其境界詳ならず。然れどもまづ日野仁正寺等の邊は、東生の郷なるべし。岡本・鑄物師・鈴村・森田・三十坪の邊は、西生郷なるべし。佗日の改正を待のみ。

○市子莊　境界審ならず。市子村の近邊なるべし。

○新生(ニフ)村　横山村の東南にあり。

○市子(イチコ)村　新生村の東にあり。

○板井清水　市子村にあり。日野より二里許西也。

【續古今集】　入道前太政大臣

手にむすぶ板井の清水底すみて、影も濁らぬ夏の夜の月

土俗云。清水の水源は、石塔寺の堺内にありと。彼石塔寺へ勅使の詠とて

あふみなる板井の清水來て見れば、月のやとらぬ水草もなし

○車坂　同處にあり。是石塔寺へ、勅使の車より、おり玉ひし所と云。

○大塚村　市子村の東にあり。大塚因幡守佐々木家の物頭なり。【應仁亂記】に出、大塚十兵衛尉、永正天文の比、佐々木近習の記に出。其後大塚彌三、同又市、信長公に仕、本能寺にて討死。

○田井村　大塚村の南にあり、

○名村　田井村の西にあり。

○岡本村　田井村の東にあり。

○圓通寺　岡本村にあり。淨土宗。

○梵釋寺　同村にあり。禪宗。桓武天皇建立の舊跡なり。

○正一位高木大明神社　同村にあり。祭神詳ならず。

○廐生村　田井村の南にあり。

○赤人寺　廐生村にあり。養老山赤人寺と號す。今は土俗ことむづかしとて、唯下の堂とのみ號せり。本尊觀世音は、山邊赤人の作なり。土俗云。此地山邊赤人出生の地なりと云。臣按ずるに、【作者部類】に曰、山邊赤人は、聖武天皇の御代、上總國山邊郡出生の人なり。養老神龜兩代の臣下也と云云。【姓氏錄】に曰、山邊宿禰赤人、垂仁天皇の後なり。正六位上山邊大老人と云云。【百人一首深秘抄】に曰、大和國忠常歳と云所あり。赤人は彼山のふもと山邊といふ所の人なり。和歌を詠ずるによつて、召出さる。歌道のこと御尋ありければ「和歌の浦の鹽の滿干のみをつくし、深き淺きは君やしらなみと」云云。是等を以てみれば、此地の出生にあらざる事明なり。蓋赤人、人丸のことは深秘の傳あり。

○朝日山　土俗云。赤人寺の邊にありと。今何れの所をさして云といふことをしらず。日野に堀井氏といふ茶商あり。辱も後水尾院朝日山といふ、茶の銘を下し賜る。是近邊に朝日山ある故なり。

【金葉集】　敦光朝臣

くもりなき豐のあかりに近江なる、朝日の里は光さしそふ

朝日山麓をかけしゆふたゝみ、明くれ神をいのるへきかは

○鑄物師村　岡本村の南にあり。

○涌泉寺　鑄物師村にあり。禪宗。京北妙心寺の末寺なり。（佐柳山と號す。金堂のあとありといふ。）

○西誓寺　同村にあり。淨土宗。

○蓮行寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末派なり。

○竹田大明神社　同村にあり。祭神詳ならず。

○金(カナ)堂　土俗相傳。往古當村に金堂とて、伽藍ありしに、いづれの日にか退轉して、今は其跡だに知る人なし。

○石原村　鑄物師村の南にあり。

○雙德寺　石原村にあり。淨土宗。

○武田明神社　同村にあり。祭神詳ならず。鑄物師村の竹田明神と、同神なるべし。

○小谷村　石原村の南に在。爰に陰陽師及山伏等寄集り居て、札を配り、禮物を受る。佐々木定賴の時、諸國治亂盛衰安危をきかん爲に、此山伏を分遣す。彼山伏には、國中の郡庄を分。夫より是迄は彼、此界より此界までは夫と、分置。札を配り、布施物を取事を命ず。其頃は山伏千餘人も居集る。民俗是を小谷賈僧(小谷賈僧)といふ。今は小谷一所に限らず。所々に多く居住也。小谷三郎は蒲生氏郷三男なり。代々相續。後小谷氏越中氏郷に隨ひ、中野城を居住せし也。

○武田明神社　小谷村有。石原村より勸請す。

○西方寺　小谷村にあり。一向宗。西本願寺の末派。日野正崇寺の末寺なり。

○宗福寺　同村にあり。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。

○圓林寺　同村にあり。西向山圓林寺と號す。天台宗。土

（寺山）俗は是を山寺とのみいへり。叡山惣持坊の末寺なり。
○増田村　小谷村の西にあり、
○森田村　増田村の西にあり。
○鈴村　森田村の西北にあり。六角崇永時代白簇一揆の内にて、所々の記に出。後永祿崩て勢州に行。鈴村主馬介天正の末に名を擧、終に討死す。
○三十坪村　小谷村の南にあり。
○中山村　三十坪村の西北にあり。小谷村より十四五町南にあり。
○金剛定寺　中山村にあり。西中山金剛定寺と號す。厩戸皇子の開闢にして、木尊十一面觀音の像は、則太子の彫刻せる所なり。昔日、堂塔甍を竝べ、寺領二千石。甚繁榮の地たりしに、元龜の兵亂にかゝり、皆烏有となり、今纔に其形のみ存せり、諸堂、三重、大日の塔、仁王門等の跡礎のみあり。僧院三十八坊の跡田畠民家となりて、古名を存するもまゝあり。
○熊野三所權現社　金剛定寺の堺内にあり。應永七年當寺の僧淨行阿闍梨了俊、熊野へ三十三度參詣して後勸請す。
○鐘池　金剛定寺の西南四町許に當て、田畝の中にあり。方五尺許の方池なり。其深き事知るべからず。歳旱する時は、金剛定寺の寶物、南無佛の舍利分身を以て、小器に入此水に浮るときは、必雨降と云。
○山王社　中山村に有。
○護法善神社　同所にあり。
○双六村
○小御門村　三十坪村の東にあり。
○大蓮寺　小御門村に有。禪宗。
○常恭寺　同村にあり。淨土宗。
○内池村　小御門村の南にあり。
○鈴體大明神社　内池村にあり。祭神詳ならず。
○攝取院　同村にあり。淨土宗。攝取院は蒲生高郷の名なり。高郷は小次郎左衞門大夫法名攝取院眞晴と號す。貞秀の二男なり。高郷のために當院を建立す。
○照光寺　同村にあり。日野より十八町西也。一向宗。東本願寺の末派也。最明寺時頼微行の時、當寺に止宿して、和歌を詠ず「近江なるひもの、里のふし左久良、ちらぬはかみのふしき也けり」時頼所持の扇とて、今に什物とす。
○猫田村　内池村の南にあり。
○圓滿寺　猫田村に有。一向宗。西本願寺の末派也。
○猫田川　源水晶嶽より出、盤曲して西に流れ、北に轉じ、甲津畑村の東を過、神崎郡山上村の東を經て、愛智郡高野村の南に到て和南川と合し、愛智川となりて湖に入。
○十禪師村　猫田村の東に有、日野より六丁許あり。
○久野權現社　十禪師村にあり。
○空禪寺　同村に有。一向宗。東本願寺の末派なり。
○西圓寺　同村にあり。
○野田村　内池村の東に有。
○本誓寺　野田村に有。一向宗。東本願寺の末派也。
○野部村　三十坪村の内也。
○野口村
○八幡社　野口村に有。
○上野田村　小御門村の東にあり。
○三本木　上野田村にあり。松樹なり。相傳、綿向大明神鎭座の神木なりと云。
○林村
○山本村　上野田村の北にあり。
○日野庄　岡本村より一里餘あり。村井村・大窪村・松尾村を日野町といふ。村井は高千石餘。大窪は高八百石餘。松尾は高六百石餘。大凡竈數千五百許あり。是を日野町と云事は、豊臣秀吉公名付玉ひ。諸役免許す。東照神君御朱印あり。日野町は松尾町、石原町、大窪町、愛智川町、新町、本町、麻生町、岡本町、野瀬町、南大窪町、堅地町、銀町、上鍛冶町、長得町、吳服町、横町、今町、下鍛冶町、杉野神町、紺屋町、仕出町、大將軍町、野田町、内池町、塗師町、上段町、川原田町、清會町、御舍利町、玉屋町、北町、西宮町、北今町大凡三十四町許なり。臣按ずるに、此邊より東南甲賀郡の疆界までは、悉檜物の庄なるべし。檜物の庄は、本遺邇野とかけり。【日本紀】に見へたり。文字を後に書改しなるべし。日野とひものと訓相近し。疑らくはひもの、もの字を略せるなるべし。檜物の事は末にしるす。或いふ。朝日山の邊なれば、日野といふ事まわり遠きに似たり。蒲生氏此地に居住して、村井、大窪、松尾、等城下となつて、繁昌せし故、わけて日野といふなるべし。日野は遺邇野のことにて、檜物上の庄の分は、悉日野なるべし。今土俗日野牧といふものあり。彌以往古は荒野にして、牧などもありし故なるべし。土俗の云處に從ひ、暫く日野庄と記す。【日本紀】を按ずるに、天智天皇の七年近江國に多く牧を置く。馬を放と云ことあれば、此日野牧と云も是なるべし。（日野牧）
○綿向大明神社　村井村にあり。祭る所の神天穗日命なり。社記に曰。人皇三十代欽明天皇六年夏四月綿向の峰に鎭座あり。勅使を立られ今の地に勸請し。社を建立嚴重なり。承元己巳春火災す。松波左衞門尉光兼松波勘解由左

衛門尉綱政大願主として、沼邊山西明寺聖源阿闍梨大勸進となり、社頭再興す。大永壬午秋兵火にかゝつて、又社燒滅す。此時位記勅額神寶等悉焦土となんぬ。天文己酉の年、中野城主蒲生下野守藤原定秀造營し、社領十石寄附し奉る。蒲生家斷絶して、寄附も又絶たり。東照神君社領十石寄附し玉ひしより、今に御代々の御朱印ありと云云。祭禮毎年四月初の亥の日、三つある時は、中の亥なり。三の神輿は、十六町西林村の西野へ渡御。西野は御旅所あり。山鉾二其外ねりもの等繁昌也。ねり物とは、土人種々の形粧をして、神輿に從もの也。日野中の祭禮なり。神輿三は、天穗日命、村井御前、八幡宮なり。神主釆負記歳信と云者也。

○村井御前社　錦向本殿の傍に有。祭神詳ならず。

○八幡宮　右同斷。

○川原社　日野本町にあり。祭神祇園、牛頭天王なり。

○西宮　日野西宮町にあり。

○瀧宮　同所にあり。

○正崇寺　同大窪町にあり。一向宗。西本願寺の末派なり。親鸞上人・蓮如上人一幅二像の掛物あり。蓮如の筆なり。正崇寺と云額も、蓮如の筆なり。蓮如しばらく此地に住す。古は近江一國に於て一宗の觸頭と云。

○本誓寺　同松尾町にあり。同斷。

○大聖寺　同大窪町にあり。淨土宗。瑞雲山大聖寺と號す。本尊阿彌陀。惠心の作也。瑞雲山大聖寺といふ六字の額は、後水尾院皇女普明院光子の宮の御筆也。

○山王社

○大將軍社　俱に大窪町に有。

○興仙寺　同所に有。一向宗。西本願寺の末派なり。

○西園寺　同町に有。同斷。

○遠久寺　同町に有。同斷。

○清明寺　同北の今町に有。一向宗。東本願寺の末派なり。

○知報寺　同塗師町にあり。一向宗。東本願寺の末派なり。

○願證寺　同長得町にあり。一向宗。東本願寺の末派なり。

○信樂院　同吳服町にあり。淨土宗。佛智山信樂院と號す。京知恩院の末寺なり。蒲生智閑の開基なり。事詳に【蒲生記】に見へたり。信樂院は蒲生貞秀が事也。貞秀入道して智閑と號す。定秀が祖父也。

○蒲生定秀墓　同村井町の傍にあり。蒲生下野守定秀が墓なり。定秀は賢秀が父なり。始藤十郎といふ。左京大夫と號し、下野守と云。五十歳にして、入道し快幹と號し。南禪寺鐵叟和尚の法弟たり。永正五戊辰生天正七年己卯三月十七日七十二歳にして卒す。定秀院宗智と號す。

○永福寺　同大窪町にあり。一向宗。後花園院、永福寺と云三字の勅額を賜る。古昔遊行派にて、比丘尼住職たりしが、何れの日か一向宗となる。今西本願寺の末寺なり。

○仁正寺村（ニシヤウジ）　日野の東にあり。日野と仁正寺の界に土橋あり。古蒲生在城の時は、中野と號せり。今は仁正寺といふ。市橋氏在領す。町三通あり。長さ十八町あり。

○興敬寺　仁正寺村にあり。一向宗。東本願寺の末派なり。蓮如上人興敬寺の額を書すと云。

○教仙寺　同村にあり。同宗。

○聖財寺　同村にあり。同宗。

○光圓寺　同村にあり。同宗。

○法言寺　同村に有。淨土宗。

○清源寺　同村に有。禪宗。市橋氏の菩提所なり。

○古城址　同村南の山にあり。中野の城と號し。蒲生定秀在城せし跡なり。蒲生氏は田原藤太藤原の秀郷朝臣の後胤、下野國小山判官朝氏なり。其子當國に來り。蒲生秀朝と號す。夫より連綿して在住す。元亨建武の比は、蒲生將監高秀あり。應仁の比は、兵衛大夫といふ者あり。永正大永の比より、蒲生下野守定秀・同左兵衛大夫賢・秀同息忠三郎氏郷後信長に隨ひ、本能寺崩の時安土城にあり。後飛驒守と號し、秀吉公へ仕へ、九州島津合戰に、豐前國香春か嶽にて、先蒐大功有、秀吉公御感あつて、伊勢國松ヶ島を松坂と改、十八萬石を領す。其後小田原陣奥州陣大功あつて、奥州百萬石を賜る。後賢秀十八萬石となり、又歸國にて六十萬石となつて、中務大輔の病死後家絶ゆる。

○大谷村　日野の北にあり。

（中野）　（城の野中）

近江國輿地志略卷之六十四　終

近江國輿地志略卷之六十五

臣　寒川辰清編輯

蒲生郡第十二

○松尾山村　大谷村の東にあり。日野より十八町北なり。

○正明寺　松尾山村にあり。法輪山正明寺と號す。寺記曰、寺乃聖德太子開闢道場也、後係天台末派、境內有支院九十三、其後及信長公之時、令台宗寺院僧糧悉還於官、當山又遇其變、殿堂荒廢、支院皆爲民居、唯本堂觀音・左右不動・毘沙門天及大日如來儼然、安置於一草坊之中、松尾山頓宮氏某奉香花多年、移尊像於今地、請永源一絲和尙、預約爲退休地、時當寬永之末、後水尾法皇在世、因一絲和尙入內之次語及觀音之事、先是上夢中感靈應、由是正保元年甲申六月十八日、勅差代參献白銀二百枚、頓宮氏謁岩倉大納言、芝山中納言兩傳奏致謝、次年勅兩傳奏移淸涼殿爲本堂、（縱五間、橫七間）承詔造營之、其功未竣、一絲和尙示寂、妙心派下僧交看守、開溪住持鑄大鐘、南禪派下獨和相次住持與諸檀越相議登檗山、請龍溪西堂爲中興開山、同七年夏四月賜正明寺額、勅筆也云云、法華塔普明院宮より御寄附あり開山龍溪靈屋の額は、普明院の宮の御筆なり。後水尾天皇の尊像是又普明院宮より御寄附なり。

○河原村　松尾山の南にして、仁正寺の北西にあり。日野より五町許あり。

○常光寺　河原村にあり。禪宗。

○二本木村　仁正寺村の東五町許にあり。

○綿向明神社　二本木村にあり。

○直入寺　二本木村にあり。一向宗。東本願寺の末派なり。

○常福寺　同村にあり。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。

○八幡社　同村にあり。

○音羽村　二本木村の二三町東にあり。日野より一里許東にあり。

○藥師堂　音羽村にあり。

○本宮大明神社　同村にあり。

○雲迎寺　同村にあり。淨土宗。京獅子谷法然院の末寺なり。

○信光寺　同村にあり。淨土宗。

○養泉寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末派。神崎郡金堂村弘誓寺の末寺なり。

○御骨堂　同村に在。土俗云、仁賢天皇の父市邊押磐皇子の御骨堂也。或云。蒲生智閑が骨堂也と云。臣按に、押磐皇子の御骨堂なる事明けし。【日本紀】【舊事紀】等曰、顯宗天皇元年春二月詔曰、先王遭離多難殞命荒郊、朕在幼年亡逃自匿、猥遇求迎、外寮大業廣求御骨、莫能知者、詔畢、與皇太子億計泣哭憤惋、不能自勝、是月召聚耆宿、帝親歷問、有一老嫗進曰、置目（近江國狹々城山君祖倭帝宿禰之妹也）知御骨埋處、請以奉示、於是帝與皇子億計、將老嫗幸于近江來田綿蚊屋野中、堀出而見果如婦語、臨穴哀號、言深更慟、自古以來莫如斯酷、仲子之尸（皇子帳內佐伯部賣輪更名仲子）交橫御骨莫能別者、爰有磐坂皇子乳母、奏曰、仲子者上齒隨落、以斯可別、於是雖由乳母相別髑髏、而竟難別四支諸骨、由是仍於蚊屋野中造起雙陵、相似如一、葬儀無異云云、是其遺跡なるべし。何ぞ智閑が骨堂に御の字を添んや。土俗云。界內に牛馬誤て入ときは死すと。理りなる哉。【蒲生拾遺記】に曰。蒲生智閑が城を澤藏責來るとき蒲生家より狂歌して云、「澤藏がかけたるこやはやきかりに、御骨の堂へ死骨こめたりと」云云。やきかりといふ處は、音羽村の界二本木村の田の字にあり。こゝを以て智閑が骨堂にあらざる事明らけし。智閑菩提所は、則日野の信樂院なり。信樂院條下にしるす。

○古城址　音羽村の南の山なり。蒲生智閑居城なり。今に庭石樹木井水礎等あり。土俗相傳。美濃住士土岐太郎といふもの、此城を攻し時城中より矢文を射出せり。一首の歌なり

解はてし糊けもたゝぬ四幅袴、三幅（土岐）やれはてゝ一幅也鳧

土岐是を見て、軍を解て美濃（美濃）へかへるに、果してをのれが居城を他人に責とらると云。

【蒲生集】　宗祇

永正二年十二月廿五日音羽山の城にてよめり

此山は跡もまたれすいくえとも、しられぬ雪のまたくもりきて

蒲生智閑

此山は跡もまたれすいくえとも、猶かきくもるゆきのあけほの

○新宮　音羽村にあり。藏王村に本宮あり。熊野村に那智權現あり。惣て紀伊國の三熊野をうつせり。熊野三所は、伊弉册尊、事解男神、速玉男神なり。三熊野の事詳に【南紀名勝志】に見へたり。

○藏王村　音羽村のつゞき、日野より一里半東也。藏王權現有を以てなり。南北の藏王村あり。川を隔てゝあり。

○日野川　源二。一は伊勢國千草山間より出、平子村の西を經、藏王村の北を通、小井口・寺尻の南を經、中山蒲生堂村の北を過て、佐久良川と合し、横關川となり湖に入。一は西明寺村の山間に出、北藏王村を過て、一流となる。此日野川を玉造川とも、水並川とも云也とぞ。

○藏王權現社　藏王村にあり。村老傳云。往古大和國吉野の藏王權現此地に鎭座あり。故に是を祭といふ。

○蒲櫻　藏王社の傍にあり。神木なりといふ。こゝのみにかきらず　鑄物師村にも。古歌によみし、蒲櫻の跡なりと云處あり。甲賀郡東寺にも、蒲櫻の古跡あり。皆各、ひものゝ里のかば櫻は是なりと云。臣按ずるに、近江なるひものゝ里のかば櫻とよめり。蒲生郡鑄物師村の邊より東南は、悉檜物庄なるべし。檜物は本遺邇野なり、後世檜物の字に書かへたり。遺邇野は【日本記】に出たり。是蒲生野の名なり。故に鑄物師村にもひものゝ櫻なしといふべからず。甲賀郡に檜物庄六村あり。檜物下の庄といふ。ゆへにかば櫻の古跡を、もふけたるものなり。古歌によみしひものゝかば櫻は、此地也。藏王權現芳野にましまして、櫻花を愛し給ふ。權現此地に鎭座有しゆへ、櫻亦神木となれり。かば櫻は花色薄紅にて、殊更艶色ある花なり。和名に朱櫻とかけり。【古今集】物の名には、かは櫻とあり。

【新撰六帖】　光俊朝臣

あふみなるひものゝ里のかは櫻、花をはわきてをる人もなし

○聞空寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末派。神崎郡金堂村弘誓寺の末寺なり。

○寂照寺　同村にあり。禪宗。愛智郡高野永源寺の末寺なり。

○熊野本宮　同村にあり。事前に詳なり。

○北畑村　藏王村の八町ばかり北にあり。日野より一里半ばかり東なり。【日本紀】【舊事記】に來田綿に作り。【古事記】には久多綿に作れり。今誤て北畑に作る。かきくけこの通音にて、くたをきたと誤れり。雄略天皇來田綿の蚊屋野に市邊の皇子を射ころすことあり。射殺し玉ひし地は、鎌掛村なれば、鎌掛村の條下にしるす。此地も其時遊獵の址なり。鎌掛村の條下及地圖を考ふるときは明なり。

○弘教寺　北畑村にあり。一向宗。東本願寺の末派なり。

○八幡社　同村にあり。

○綿向山　蒲生・甲賀の界にあり。當國にて伊吹、靈山、比良、綿向とて四箇の高山なり。東の麓には甲賀、北の尾崎は神崎、西南は蒲生なり。日野より山下まで二里あり。麓より絶頂まで七十餘町あり。絶頂に綿向大明神の社あり。貳拾一年にして、造營す。明神初顯の地なり。綿向大明神は、天穗日命なり。人皇三十代欽明天皇六年夏四月此地に鎭座し玉ふ。後日野の村井に、うつし奉る。每年四月朔日社人氏子此地に參拜す。これを迎へ參と云。山の半腹に笠掛馬場と云處あり。此所より上は笠を着てのぼり難し。其亦上に山伏居場と云所あり。清泉あり。相傳。古昔は近江一國の山伏大峰入になぞらへ、此山に登りしよし。山伏居場は山伏休息の場也といふ。

○御幸野　綿向山の山下なり。雄略天皇御幸ありし故の名なり。今は誤てみつぎ野と云。

○熊野村　北畑村の東にあり。日野より二里東なり。平子村より十二三町あり。熊野權現ましますを以て、名づくるなり。

○熊野權現社　熊野村にあり。これ紀伊三熊野の那智山を摸す。藏王村に本宮あり。音羽村に新宮あり。或は云ふ本宮新宮ともに熊野村にうつせり。本宮新宮をわけしは、後の事なり。古は三熊野ともに、熊野村にうつせりと。故に熊野村に本宮新宮といふ所あり。相傳ふ。昔は紀伊の熊野に異ならず。諸皇子群臣等登山ありと。月輪兼實公も、參詣ありし由にて、月輪殿下の御手跡村の民家にありと云ふ。

○權現瀧　同所にあり。民家より十三町許東にあり。高きこと五丈許。那智の瀧になぞらへ甚大觀也。此瀧則日野川の水源なり。每年七月七日より八月八日までの間、頭痛狂亂の類の者の來て、瀧にうたる。驗有と。

○西明寺村　北畑村の北にあり。二里餘東なり。村に西明寺あり。故に名づくるなり。

○西明寺　西明寺村にあり。大慈山西明禪寺と號す。古は天台宗なり。【略緣起】に曰。夫當寺は三十二代用明天皇の皇子聖德太子建立の地にして、堂宇佛像莊麗たり。其後七十代後冷泉院天喜元年比叡山正行坊阿闍梨聖源居所を求めん爲に、白鷺を作て虛空に放、其鷺此山の沼池に飛來。故に山を飛來峰と名付。或は沼邊山と號す。彼沼池は、是より東にあたりてあり。其比天下大に旱す。聖源則八大龍王を勸請し、請雨の法を行に、天下大に雨ふる。夫より龍王山ともよべり。又觀音靈應の地なるによつて大慈山とも名づく。則今の山號是なり。木尊十一面觀音。長三尺。聖德太子の作なり。初比叡山楞嚴院にありしを、聖源夢の告あるによつて、則當寺にうつす。脇立は不動明王、毘沙門天俱に太子の作なり。當寺の額は法性寺入道殿下の筆跡なり。其後七十七代後白河法皇勅して、敎

長をして額を書しめ、當寺に賜はり、永く法皇の御祈願所たるべき旨院宣あり。八十八代後深草院御宇一條關白實經卿額を書してをくる。然して後星霜推しうつり、寺院悉く破損し、唯本尊のみを存す。寛永年中永源空子和尚此地に來り、堂宇を再興し、佛像を修復し、始て禪院となす。中興開山なり。延寶五年の春近衛右大臣基熙公西明禪寺の四字の額を贈らるると云云。

○八町野村

○本道寺　八町野村にあり。一向宗。本願寺の末派なり。

○平子村　熊野村の南西にあり。日野より一里半東なり。當村の山よりいはきを出す。上品なり。鎌掛村よりも出せとも、下品なり。事は土産門に詳にしるす。

○木津村　日野より五六町南にあり。

○法光寺　木津村にあり。一向宗。東本願寺の末派なり。

○東應寺　同村にあり。一向宗。西本願寺の末寺なり。

○押口村

○八幡社　押口村にあり。

○寺尻村　日野の七八町南に在。

○光臨寺　寺尻村にあり。一向宗。東本願寺の末派なり。

○五反田村　寺尻村の南にあり。日野より二十五町許南なり。

○門光寺　五反田村にあり。一向宗。西本願寺の末派なり。

○鎌掛村　日野より一里南にあり。仁正寺より二十町ばかり山越の道あり。此地來田綿の蚊屋野也。【日本紀】雄略紀曰、三年冬十月癸未朔、天皇恨穴穂天皇、曾欲以市邊押磐皇子傳國、而遙囑後事、乃使人於市邊押磐皇子、陽期狡獵、勸遊郊野曰、近江狹々城山君韓帒言、今於近江來田綿蚊屋野猪鹿多申時願與皇子、孟冬作陰之月、寒風肅然之晨、將逍遙於郊野以馳射、市邊押磐皇子乃馳獵、於是大泊瀨天皇彎弓驟馬、而陽呼曰、猪有、卽射殺市邊押磐皇子云云、此地より音羽村の御骨堂へ、道程三十町許也。此地にて彼市邊の皇子の御骨を拾ひ玉ひし所なり。此處より十四五町許東に、甲賀郡蒲生郡の界あり。此郡界に石の印あり。佐々木義弼要害をかまへ、觀音寺落去以來は、此所に在城して、伊賀甲賀の味方の虎口となる。

○鎌掛川　源は鎌掛村の山間より出、盤曲して五反田村の北に至て、日野川と合す。

○藤兵衛池　鎌掛村にあり。蒲生藤兵衛秀紀は刑部少輔秀行の男なり。嘗叔父の高郷と隙あり。高郷秀紀が地をかすめんと欲するの故なり、秀紀城に籠て高郷を拒。高郷責れども城固して拔ず。是に於て和睦を成。高郷則善知客といふものをして秀紀に毒をかはしむ。秀紀のみ畢て後是を知り、刀を拔て善知客を得んとするに得ず。秀紀自殺して、堀に飛入て死す。つゐに池となる。藤兵衛が池とは是なり。詳に【蒲生軍記】にみへたり。

○古城址　同所にあり。則藤兵衛居城の跡なり。

○姉淵妹淵　鎌掛村にあり。取古の池なりと云。取古の池の歌は【夫木集】に出たり　季　經

いつかたへ立はなるとも見へぬ哉、とりこの池に
すたく芦鴨

然れども、とりこの池は鳥籠の文字にて、鳥籠の山の邊也ともいへり。先こゝに出す。

○やふそ瀧谷　瀧谷は藤兵衛池の水流なり。谷川也。島筋の大石是有。甚奇觀也。一里も奥には泉の岩とて、長さ一間餘の石、貳尺四方の箱のごとくにほれ有。

○清慶寺　鎌掛村にあり。一向宗。東本願寺の末派なり。

○專明寺　同村にあり。一向宗。西本願寺の末派なり。

○光明寺　同村にあり。同斷

○正法寺　同村にあり。後光山正法寺と號す。本尊十一面觀音。長五尺八寸。行基作。則行基開基の地なり。禪宗。京北妙心寺の末寺なり。

○清水脇村　日野より廿四五町南にあり。五反田村の西にあり。

○光延寺　清水脇村に有。一向宗。西本願寺の末寺也。

○別所村　清水脇村の西にあり。

○成願寺　別所村に有。一向宗。東本願寺の末派也。

○下迫村　別所村の南西にあり、日野より山合一里ばかりにあり。

○法泉寺　下迫村に有。一向宗。東本願寺の末派也。

○觀音堂　同村にあり。

○上迫村　下迫村の並にあり。日野より南山合一里にあり。

○眞龍寺　上迫村に有。一向宗。東本願寺の末派也。

○深山口村　上迫村の東にあり。

○寂林寺　深山口村にあり。禪宗。

○下駒月村　深山口村の南にあり。

○大輪寺　下駒月村にあり。禪宗。

○上駒月村　下駒月村の東にあり。

○佛號寺　上駒月村にあり。一向宗東本願寺の末派也。

近江國輿地志略卷之六十五　終

近江國輿地志略卷之六十六

臣　寒川辰清編輯

野洲郡第一

夫以野洲郡の文字【日本紀】には、益須に作る。【釋日本紀】に、益須は今の野洲郡なりといふ。【古事記】曰、美知能宇斯王之弟水穗眞若王者、近淡海之安直祖、又曰、近淡海之安國造之祖、意富多牟和氣云云、安の國は安の郡なり。郡を國といひしためし古に多し。郡の音をくにともよむ。たとへば錢をせに、繭をらにといふが如く、此郡の地勢乾と巽とは長して廣し。艮坤とは短して挾し。此郡界南と坤とは、粟太郡なり。北面と乾とは湖にして、東と艮とは蒲生郡に交る。甲賀郡の界に接れり。

○三上莊

○北櫻村　南櫻村の北にある村なり。三上神事の節、此山より扇鉾を出す。

○あま山　北櫻村の東にあり。往古百姓山上に住居せしかども、中世しからず。

○南櫻村　北櫻村の南にある村なり。此村は當郡の南東の極なり。

【夫木集】　匡房

やす川の渡りの櫻はへ〳〵に、見れともあかす垣こしにして

○櫻山

【名寄】　匡房

寛治元年大嘗會悠紀方の歌

三上なる櫻の山は花盛、ちるてふことはあらしとそ思ふ

政宣

櫻やま花咲にほふかひありて、旅行人もたちとまりけり

定家

大方のまかはぬ雲とかほるらん、櫻のやまの春のあけほの

【夫木集】　上東門院兵衞

櫻山梢の雲のきへぬるは、折たかへぬる花かとそ見る

【長秋詠藻】　仁安大嘗會　俊成

松かえに枝さしかはす櫻山、花もちとせにはるや匂はん

○櫻生村（ハサヤ）　北櫻村の東にある村なり。

○古城址　櫻生村にあり。相傳。澤村彈正少弼が城址也と云。古き石塔あり。其地を土俗彈正の人切場（彈正の人切場）といふ。

○福林寺跡　同村にあり。相傳。福林寺といふ寺有し地なりと。何宗の寺にして、何れの時代といふことをしらず。九輪の石塔あり。土俗は是を陵（經石）といふ。經石とて小石に文字ある石多し。

○兜鍪山　同村にあり。高サ十間許。往還大路の傍なり。其形けにも兜鍪を置るが如く、鉢鐵の形ちと能形容せり。土俗の名づくるも宜なり。土俗これを齋藤實盛が討死の日、かぶとを脫て其所に置しかば、後世此ごとく山となれりと云。甚非なり。

○三上村　惣名にて七ヶ村あり。所謂山出村、東林寺村、大中小路村、稻端村、前田村、小中小路村、妙光寺村なり。三上より辻村へ十三町（三ヶ）あり。

○三上山　【歌枕】三神山に作る。俗呼て近江の富士と云。山勢略富士山に似たり。然ども富峰に比すれば萬分が一なり。此山西南より望はよく、北東よりは恰好あしく、【堯孝道の紀】に云

おもひ立富士の根遠き面影を、近く三上の山の端の雲

土俗又曰、孝靈帝の御宇一夜に近江の地折て、湖水となり。其土駿河の富士山となる。土少しのこれるゆへに、三上山となすと云。信用するにたらざること也。かゝる妄言兒女子をまよはす。【前代舊事本紀】曰、神功皇后三年庚子淡海國言、不知足彦者女、不知好媛君、產一丸石、形如鷄卵子、大如鷄卵、十一夜間成犬、日日長成山、人名此山曰產神山云云、【舊事本紀】は僞書なるを以、今絕板す。その說論辯に及ばずして明也。此山其高さ、大略麓より頂上まで山路六丁あり。頂上に石佛の地藏あり。土俗是を龍王（龍王）といふ。毎年五月十八日龍王祭とて、行合村より忌火の供物御酒等を備ふるなり。山の八分に洞穴（穴蛇誤）あり。甚深して底見へず。土俗是を蜈蚣穴と云。是往古崑山（山蛇誤）を七卷半纏ふ大蜈蚣ありて、首を此洞穴へ入に、夜々湖上を歷て勢多橋下の大蛇をくるしむ。大蛇藤太秀鄕をたのむ。秀鄕橋上より立て、蜈蚣の來るを窺ひ、矢を發して中。蜈蚣死す。故に此山を蜈蚣山と云。今尺餘の蜈蚣多しと云。臣此地に來て窺ひ、亦やまにのぼり見るに、かつて寸餘の蜈蚣だにも見ず。三上故老にしれる人ありて。此事を問にかつて無と云。

【夫木集】　爲顯
手向する梢にあける三上山、つゝりの袖をあはれとも見よ

【同】　長雅
朝ほらけ空に三上の山みへて、芦立渡るせたの長橋

【千載集】　季經
ときはなる三上の山の杉村や。やをよろつ代のしるし成らん

【新勅撰集】　後京極
遙なる三上の嵩をめにかけて、幾瀬渡りぬやすの川浪

【夫木集】　西行
しの原や三上の嵩を見渡せは、一夜のほとに雪の積れる

【同】
鏡かとさやかに見へてさゝ波や、三上の山をいつる月影

【鵞峰詩集】
經過三上一山阿、百足馬蜈會作魔、不被夔憐無笑鼈、勢多橋下欲喰蛇

古歌
都人富士とやいはん近江なる、三上の嶽の雲のあけほの

○三上神社　往古は甚大地のよし、樓門拜殿今にあり。樓門養老年中に建立ありし由にて、殊勝なる體也。祭禮は毎年正月二の申の日九月十四日は地主若宮の相撲なり。神主一人、社家二人、社僧一人、神子一人、宮仕一人あり。祭所の神伊弉諾尊天照大神なり。【延喜式】に所謂御上神社是也【古事記】曰、娶近淡海國之御上祝以伊都玖天御影神之女息長水依比賣云云、【社家相承】曰、伊弉諾尊與天照大神之兩座也、仍稱天御影日御影社神社、考曰、【舊記】曰、三上明神者元正天皇養老年中臣按養老元年也自天降於此處、名曰日本第二忌火、或問當宮齋宮、食于陶器炊于瓦釜、又忌草服火奴之類、稱天下第二之忌火也、奈何、云皆疾機巧之智、欲早計之故也、蓋神貴乎淳朴賤機巧、且古人祭服多以草造之、本朝疾皮草之屬、竊惟古人用之不忘其本也、朝人疾之避其流云云、【三代實錄】曰、貞觀元年正月二十七日甲申奉授近江國三上神從五位上【類聚國史】曰、貞觀十七年三月二十九日授近江國三上神從三位云云、【靡裘記】に云、麓の森に神住三上明神と名つけたり。此神と申は第四十四代の御門元正天皇の御宇、養老年中天降、日本第二の忌火にて、此所にそ住給ふ。能宣といひし者この社に詣て、

千早振三上の山の榊葉は、さかへそまさる末の代までも

【拾芥抄】に三十神名の内廿七日としるされたり。

○西林寺　淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。

○宗泉寺　妙光寺村にあり。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。

○東光寺　妙光寺村にあり。緣起に曰、抑江州野洲郡三上庄妙光寺村日陽山東光寺は、慈覺大師の開基なり。醫王善逝安座の靈地なり。往昔傳教大師七難卽滅七福卽生の爲に、一刀三禮の七佛御誓作の其一佛にて、御長三尺五寸座像の尊容。慈覺大師常寺に安置し給ふ處なり。貞觀の帝祈願所と仰ぎ、毎年三度勅使を立て玉ひしとて、勅使道今に殘れり。四の谷に百有餘の坊舍甍をならべ、征夷將軍源頼朝建久元年庚戌冬十月上洛のつゐで、此道を通玉ふ所に、遙に藥師如來の大光明拜ませ玉ふ。大に御信仰あり、則三上庄一千石を寄進し。幷に慈覺大師將來の金胎兩部の曼荼羅、同唐の鏡鉢等を寄附し玉ひ、今に傳へ來れり。爰に信長公淺井備前守合戰の時、兵火の爲に燒失しけるより、彼尊像を同莊妙光寺村の草菴にうつし、百有餘年の雨露をしのぎけると云云。（○一本の頭註に曰く、【以文會筆記】宗泉寺境内に、往古の本尊藥師如來の堂あり、其石階の下に、下乘の碑幷石燈籠一基あり、銘云、建久五甲寅年六月日施主源定綱○○。）

○三上天神社　妙光寺村の北西に在村なり。

○中畑村　妙光寺村にあり。相傳、天台宗の寺地也と。

○極樂寺古跡　中畑村の北にある村なり。天正年中の出村なり。今の行合村唯心寺の本尊は、此極樂寺の本尊なり。何れの日か寺退轉せしゆへ、本尊を件の寺へうつしたるもの也。今に當村に、大納言の末孫と云ものあり。是古極樂寺繁昌の時分、大納言の阿闍梨なんど呼れしもの、後還俗してまふけたる子孫なるべし。大納言は呼名にして、官名の大納言にあらざるべし。

○今川殿塚　中畑村の東塚越と云處にあり。妙光寺村との堺にあり。土俗云。今川殿の塚にして、三上外記の作れる處なりと云。中畑村より、妙光寺に行路の左傍にあり。大ひなる苦むせし石二三あり。巡に小松をうへたり。臣巡覽の日、庄屋にあつて此とをとへどもしらず。

○行合村　中畑村の北にある村なり。天正年中の出村なり。古の地は古里と號して、村の南にあり。天正年中今の地に民家を遷して、中山道の往還大路となれり。

○子安地藏菩薩　行合村にあり。石佛の二像なり。土俗

（長くらべの地藏）

是を長くらべの地藏と云。行合村野洲村の方より、篠原へ行には、中畑村に出るなり。最妙光寺村への路也。此石像も年歴と見へて、彫刻體殊勝なり。大小の立像二體あれば、土俗のふと長くらべとはいひなせるなるべし。相傳。二尊供に弘法大師の作なりと云。賴朝公上洛の時、妙光寺むら東光寺より、此處へ大光明さす事は妙光寺村東光寺條下考ふべし。故、賴朝公東光寺より此二像を此地に移す。痔疾諸病を祈り靈驗あらずと云ことなし。他國にては、專尊敬して安產をいのる故に、子安の地藏と云。或は土俗云。此尊像あるを以て、一村火災なしと。天正以來かつて火災のうれひなし。

○正一位行事大明神　行合村にあり。勸請の年記詳ならず。古老云。九百年許以前のことなりと。此神使、馬及蜈蚣なりといへり。祭禮毎年四月二の亥の日、相撲毎年九月二十日なり。

○唯心寺　同村にあり。不遠山禮敬院唯心寺と號す。淨土宗。京智恩院末派。寺町專念寺の預りなり。行合某の女唯心尼の開基なり。因以て寺號とす。行合某は比叡山の坊官當村の地頭職なり。寺僧云。六百餘年以前に草創す。天台宗なりしに二百七十年以前より淨土宗となれり。百三十年以前兵火にかゝつて。本尊及寺の記錄悉烏有となる。今の本尊は則中畑村極樂寺の本尊なりしを、當寺にうつす。阿彌陀佛、增長の作なり。釋迦如來肉付の舍利當寺の什物なり。

○蓮照寺　同村にあり。一向宗。西本願寺派。木部村錦織寺の末寺なり。往古は天台宗なり。寺僧云、六百年前より是ある寺也と。

○四家村　行合村の南にあり。家續なり。四家・行合村の界は、八幡社の傍の小溝なり。相傳。往古は此邊郊原田畑にて、纔に往還の道のみありし時、此處に民家唯四軒あつて、旅人に茶をうれり。よつて四家と號すと云。まことにこのごときの類多し。勢多の三軒茶屋は、今家數七八軒もあれとも、やはり三間茶やと呼。大阪の八軒家は、十七八軒もあれども、今に八軒家の名あり。山科澁谷の三軒茶屋、桑名の七つ屋敷の類かぞへがたし。

○八幡社　四家村にあり。鳩を神使とす。祭禮毎年四月十五日、相撲九月十五日。

○愛宕權現　八幡社の前にあり。

○顯了寺　四家村にあり。一向宗。西本願寺の末派なり。

○野洲村　四家村の西にあり。野洲市場といふ。益須と往古はいへり。此村始は此地にあらず。天正年中今の地に民家をうつす。舊地は今荒島と云處なり。

（野洲市場）

○正一位新川大明神社　野洲村にあり。土俗云。立入村十禪師の分身なり。祭禮毎年四月二亥日、相撲九月十二日也。猪を神使とす。今の鳥居の額は、妙法院堯倫親王の御筆也。【三代實錄】曰、貞觀十一年十二月二十五日戊申、授近江國從五位上新川神正五位下云云、又曰、仁和元年九月廿一日壬寅近江國正五位下新川上神授正五位上、

○光福寺　同所にあり。新川大明神の社僧なり。臨濟派。禪宗。黃檗の派。京北嵯峨の直指菴の末寺なり。

○秀峰寺　野洲村にあり。黃檗派。直指菴の末寺也。

○十輪院　同村にあり。入口なり。開基德元居士。本尊地藏菩薩。每夜高燈をあぐ。是往還の旅人、闇夜野洲川の渡に迷ひ、路を失者あるが爲にもふくる所也。此堂野洲川の岸にあり。此燈の功大成といひつべし。道をかへて人を渡す、地藏の化導又貴し。

○淨光寺　同村にあり。淨土律宗。京寺町安養寺の末寺なり。

○淨滿寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末派也。此地の名山中と號すること、本新川大明神の界内也。比叡山正光坊此地にあつて一寺を建て、天台宗の寺とし。比叡山の末派なり。新川社も件の寺鎭守也などゝ呼り。寛文年中より故あつて、社地と寺地と分る。正光坊そのかみ、當寺地を蓮如上人へ永授與す。因て蓮如開基して、淨滿寺を建立せし也。代々一向宗にして、東本願寺の末派とはなれり。源尊氏十四代足利義榮の近臣川端左近といふもの、南都に蟄居す。其子左衞門を以て淨滿寺の名跡とす。件の左衞門南都より傳來し、當村にも布晒を業となす。蓋是野洲晒布の權輿なり。慶長年中關ヶ原の役本願寺敎如上人宣旨を承て、密に東照大神君の御陣に赴拜謁おはりて、歸京の路、石田が逆徒是をとらへて放ざること三十餘日、織田有樂事をあつかふによりて、漸のがれて淨滿寺に來る。逆徒追來て淨滿寺をかこみ火を放、敎如甚危く、淨滿寺父子ちからを盡して防戰す。其隙に敎如遁れて、品浦より乘船し、山中越を經て歸京す。此時淨滿寺灰燼となつて、本尊什物記錄等悉く烏有となる。

○野洲川　【江家次第】伊勢勅使進發條下云、到野洲河秡云云、【日本紀】天武紀元年秋七月壬寅男依等戰于安河濱云云、源二ツ。一ッは横田川なり。一は山上川なり。吉永村の北に至て、二流合して一となる。是野洲川也。乾に流、河田村の北に至て別れて、吉河となる。野洲川は河田村の西より轉じて、富田水保村の南を歴、木の濱の北を過て湖に入。此川はゞ一町乃至二町許の所もあり。辻村の邊にては、川はゞ二百間ばかりあり。甲賀郡正福寺菩提

寺村の邊にては、川はゞ四五丁許あり。小石交の川にて水早く。常は川十分に水なく、川原となつて其間に幾瀬もあり。常に水ある所は深く、岸突きたつ、南は淺く岸なめらかなり。渡瀬は出庭村の墓所の前より櫻村を目あてにして、わたるがよし。水川はゞの六七分に至る時は、渡る者なし。往還の大路中山道には橋あり。橋なき時は舟わたしあり。

【玉葉集】　四條

旅人も皆諸ともに朝立て、駒うち渡すやすの川霧

【夫木集】　爲家

朝ほらけやなせの波の音はして、渡やいつこやすの川霧

【名寄】　隆房

さえ渡るやすの河原の明方に霜にあと蹈友千鳥哉

【夫木集】　西行

近江のや野路の旅人いそかなん、やす川原とて遠からぬかは

【草菴集】　頓阿

守山の下葉のこらす成ぬらし、やすの川波音むせふなり

【萬葉集】　光俊

吾妹兒爾、又毛相海之安河、安寢无不宿爾、戀渡鴨

○立入村　野洲川の南、吉身村の東にある村なり。

【夫木集】

うつろはて立入の村の白菊は、扨いく秋の露霜かへん

○岡村　立入村の西にある村なり。

○西隆寺　岡村にあり。岡塚山西隆寺と號す。天台宗。坂本西教寺の末寺なり。臣一日東近江を巡覽するの日、守山驛において偶西隆寺の住僧にあへり。僧云、古昔厩戸皇子守屋大臣と戰敗して、岡村にのがれ來れり。一岩窟にかくれて、幸に免るゝことを得たり。然して後一寺を建。今の西隆寺是なり。太子の隱れ玉ひし岩窟一二年以前までも存せり。其岩窟の中方十間許、常人の家宅のごとし。一日叡山の僧徒此岩窟を頹て、延曆寺の用とすといへり。臣按ずるに、疑らくは是往古穴居の遺跡。中世豪富の避亂岩窟にして、皇子隱の地にはあらざるべし。田上の山中所々岩窟あり。其中皆廣し。又坂本にも數箇の岩窟あり。

近江國輿地志略卷之六十六　終

近江國輿地志略卷之六十七

臣　寒川辰清編輯

野洲郡第二

○田中莊　守山、吉身、播磨田、市三宅、金森以上五ヶ村を云。

○守山村　岡村の西にある村にて、中山道の驛次なり。天正年中より以前のこと分明ならず。栗太郡今宿村當郡吉身村當驛皆家續なり。守山と今宿の界はよし川と云小川をへだつ。守山と吉身村の界は水戸津川を界とす。水戸津川もよし川も、皆野洲川の水を村の用水にとり入る水筋にて小川なり。【保元物語】を按ずるに、賴朝は馬眠しておくれつる、只一騎森山の宿に入玉ふ。源内兵衞眞弘賴朝を抱きおろし奉らんとす。賴朝目を覺し髭切を以て眞向二に打わり、安の河原へ出玉ふ。當驛繁昌の地にて、富家多し。毎年七月七日、十二日、十二月廿二日、廿七日市あり。これを守山市といふ。近郷より種々の品物を持來て商。守山と號することは、往古陸奥國守山の民此地に來り、田畑を開き民居とするによつて名付といへど、當驛を元七家在家と名付と、東門院の記錄に見へたり。【著聞集】に曰、右大將賴朝もり山にて狩せられける供に、北條四郎時政候しけるが、いちごのさかり成を見て時政連歌しける。「守山のいちごさかしく成にけり」、大將とりあへず。「むはらかいかにうれしかるらん。」

（市山守）

（七家在家）

【古今集】　紀貫之

白露も時雨もいたくもる山は、下葉のこらす色付ぞけり

【千載集】

皇を八百萬代の神もみな、ときはにまもる山の名そこれ

【壬生忠見家集】

たか爲に民の事經てもる山に、よをへて松の生そはるらん

【中務家集】

ひと目のみ守山に鳴く呼子鳥、忍ひに誰をなくねなるらん

○東門院　守山にあり。東門院守山寺と號す。比叡山延曆寺の末寺なり。開山傳敎大師とす。緣起曰、延曆四年乙

丑傳教大師開闢叡山而四境各構門、當江東守山村建東門云云、（臣按東門院名是歟）向有一人異工、來彫刻二王像、不日而卽成、語人曰、我是密迹金剛也、言訖不見、其地至今曰二王町、移安東門、里人傳言、當寺二王具千人力、蓋以執金剛自造乎、十四年乙亥田村將軍東夷征伐之時、路過此地祈冥助於仁王、速討賊而旋陣、依此俗曰門出仁王、其後將軍於此地建伽藍、（本堂七間四面檜皮葺）安千手大悲像、（清水寺觀音同木延鎭作也）桓武天皇勅賜守山寺東門院號、竝納吉見金森播磨田三箇莊以充寺供修造之費、嵯峨天皇弘仁元年庚寅三月湖水夜々有一道光明、從水底出及七日、湖上人民大惟於放光之處、投網引之得十一面觀音尊像、諸人無不驚歎、刺史達于天聽、詔使安法華院爲鎭國之道場、中古依當院廢壞並本尊千手尊像安置之云云、寺僧云、守山寺と號するとは、桓武天皇叡山御建立の節、當寺へも御幸あつて、我山を守護し奉る所なればとて、地を守山といひ寺を守山寺と號す。守山驛の名此時に始る。傳教大師當寺開基の始、七人の家臣を召しつれ來り給ふ。七人の家士此處に留て、茶店を構へ、往還の旅人の助力を乞て、守山寺の破壞を補はんとす。其時纔に家七軒あり。故に七家在家と號せりと云。又云。延鎭法師青柳の古瀧に傍て、千手觀音の靈場とせんと欲すれども、故あつて妄を去、洛東清水寺を建立す。故に千手の像一軀を當寺に殘。青柳の古瀧も今は其跡だにもなし。纔に青柳の水の跡とて、當寺の門前にあり。當院の緣起は青蓮院尊澄親王の御筆なり。又別卷中興山門本住院の筆なり。

○仁王門　此仁王門の事前に見へたり。古俗相傳。賴朝公の童御所五郎丸此仁王に祈て、力量の名を得たりと云。東門院と云額は、往古淸和天皇の勅額なりし。信長の兵火にか、つて失せり。故近世照光院道晃親王これを筆す。今の額是なり。

○本堂　千手觀音の像。延鎭の作。脇士勝軍地藏像、毘沙門天像あり。俱に傳教大師の作なり。十一面觀音像湖底より出る處なり。

○護摩堂　本尊不動明王。脇士釋迦、俱に覺鍐上人作也

○桓武天皇陵　九重の石塔なり。

○法華塔　石の塔あり。傳教大師一石に一字を書して是を納。

○天滿天神社　鎭守なり。祭所菅丞相の靈なり。相傳。菅丞相在世の日、勅使に來り給ふ事あり。因て祭奉ると云。守山中の產土神なり。外に三社あり。天照大神宮、山王權現、大將軍なり。

○庚申堂

○將軍塔　田村丸が塚なり。

○大將軍社　杉松にて舊跡あり。地主なりといふ。小社を建と云。

○法華院跡

○眞教坊跡　此二坊當寺の塔中なりしに、信長の兵火にか、つて後、寺廢壞して今跡のみあり。以上は皆守山寺の界內にあり。

○靑柳水　或云。靑柳井と云。是守山寺の門外にある水是なり。源賴朝公上洛の日、此水にて馬に飲と云。

○二王町　守山にあり。今田の字なり。往古密迹金剛降來し地なればとて、二王町といへり。事は東門院守山寺の條下に見ゆ。

○藥師堂跡　同村にあり。今は其跡のみ。往古は伽藍地なりと云。

○大日堂　同村にあり。民家の東にあり。則往還の路端なり。本尊大日如來は弘法大師の像なりと云。

○大光寺　同村にあり。佛日山大光寺と號す。曹洞宗の禪寺なり。開山天德和尙は能登國總持寺通幻禪師十哲の其隨一なり。寺記曰、持統天皇七年癸巳十一月、近州益須郡醴泉出、刺史奏之、勅法員善住眞義等、試嘗法員爲靈區、創寺號醴泉寺、相續法相宗僧居焉、其後台宗祐元法印住持、元平日屢蒙天德和尙示誨、依此捨寺爲禪居、請師爲開山鼻祖、師入院開堂演法、夜庭上有大光明從地涌出、寺內燒赫、近鄰民家以爲失火也、奔聚寺、凌晨堀發光之處、則有扁額佛日山之三字現然、因改醴泉號大光寺、醴泉之蹤至今在寺門南、俗呼曰甘香池、師住山後征夷大將軍尊氏公、暇日請師問禪要、且聞件々事增加恭敬、延元元年丙申、將軍重建堂宇、佛殿方丈厨裡山門鐘樓全備矣、至天文年中諸堂悉炎上、前右府信長公再興、本尊釋迦如來傳教大師作、脇士文殊普賢運慶作、寶丘鎭守辨財天智證大師作、塔司布金菴本尊地藏菩薩、脇士掌善掌惡、小野篁作也、桂昌院、吉祥院、頂月院（日イ）、東昌院、宗祐軒、靑春菴以上六坊、中古廢壞而今其蹤而已也云云、

○守善寺　守山にあり。法輪山守善寺と號す。時宗。京四條金蓮寺の末派なり。本尊阿彌陀佛。脇士觀音勢至俱に立像。聖德太子の安置佛なりと云。開山聖德太子。中興惠心僧都なり。康永元壬午年時宗の祖一遍上人の眞弟重阿上人此寺に參り、一遍念佛を修す。然して後つゐに時宗とはなれり。凡重阿上人より以來康永元年より享保十三申の年に至三百八十六年なり。鎭守一宇、稻荷大明神辨財天女なり。惠心筆の曼荼羅一幅、當寺の什物なり。

○阿彌陀寺　同村にあり。時宗。守善寺の末寺也。

○稱名寺　同村にあり。一向宗。西本願寺の末寺也。釋一

智、明應三甲寅年建立なり。

○圓光寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末寺也。開基勝林坊。永正十六乙卯年建立なり。

○常行寺　同村にあり。一向宗。西本願寺の末派也。開基釋善西。明應七午年建立なり。

○淨土寺　同村にあり。淨土宗鎭西派、京知恩院の末寺なり。開山東譽。明應元壬子年建立。本尊阿彌陀佛。脇士觀音勢至。安阿彌の作なり。毘沙門天像は運慶の作なり。鎭守宇賀神は、弘法大師の作なり。

○光明寺　同村にあり。眞言律宗。開山春阿上人。應安年中の建立。始は時宗なりしに、天和寅の年より、河内國丹南郡野中寺の比丘義高の再興にして、夫より眞言律の寺とはなれり。

○善慶寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末寺なり。釋了乘寛正三壬子年建立なり。

○常念寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末寺。釋善祐開基。寛正三壬子年建立なり。

○本像寺跡　同村にあり。今寺は今宿村に有。

○正福寺跡　同村にあり。相傳。往古は法相宗の寺なりし、今は田地の名となれり。

○養源菴（菴ノ）跡　同村にあり。相傳。往古禪寺なりと。今其名のみのこれり。

○甘香池　同村大光寺の南數歩にあり。是所謂野洲郡都賀山の醴泉なり。周廻一町許の池なり。醴池に作る。都賀山の遺址三宅村にあり。是を以て思ふに、都賀山は往古大山にて、此邊迄も尾つゞきにてもありしと見へたり。【日本紀】曰持統天皇七年十一月己亥、遣沙門法員善住眞義等、試飲近江國益須郡醴泉、八年正月巳亥詔曰、粤以七年歲次癸巳醴泉涌於近江國益須郡都賀山、諸疾病停宿益須寺療差者衆云云、【類聚國史】三十三卷にも見へたり。七年十一月己亥を七年十一月十四日己亥に作る。八年正月己亥詔を八年春三月十六日詔に作る。涌の字の下の於の字を于の字に作る。病停の間に者の字あり。寺の字の下に飲之癒の三字あり。療差の二字なり。【釋日本紀引】【日本私記】云、益須郡今野洲郡也、

○守山古城址　今此所在詳ならす、然れども稻葉伊豫入道一哲同右京亮貞通を、信長よりさし置れし事【舊記】に見へたり。

○守山川　是横田川の末流なり。源二、一は松尾村山上村の山間より出て、朝國村里夏見村の北を經て、横田川と合て、直に西流して、三上村立入村の邊に至る。一は乾に流、野洲川と成、一は北折して西に流、守山村今濱村の中間より過、横江村芦浦村の北を經て、湖に入。蓋此川下守山驛を經、故に名付と云。

○吉身村　守山のつゞきにある村なり。守山の北東なり。守山と吉身との間水戸津川と云を界とす。水戸津川の上は、木香池なり。是より又一町許南にあり。

俊　成

君か代はよしみの村の民もみな、春を待とやいそき立らん

○慈眼寺　同村にあり。住吉山慈眼寺と號す。世に所謂帆柱觀音是れり。本尊十一面觀音立像長三尺。脇士持國天多門天立像長二尺。俱に傳教大師の作なり。緣起に曰。夫當寺十一面觀音帆柱の尊像は、傳教大師の御作、往古人皇五十代桓武天皇の御宇延曆年中の比、大師入唐したまひ、一乘圓頓の德を禀承し畢て、歸帆の御時卒に風はげしく吹、浪あしくたつて、船數多くつがへり、或は漂墜しぬ。大師の御船も帆柱を吹折揖くだけて、あやうかりし時、師則隨意三昧に入り、國淸寺の遂和尙に所傳し給ふ處の、十界一念の本尊十一面觀音を祈念し給へば、忽に身軀海上に現れ給ふ、故に風波平にして難をまぬかれ、所傳の法來朝恙なく、師歸朝の後、末世の渡海安穩の結緣として、彼帆柱のをれを以て、海上にあらはれ玉ふ處の、尊像并脇士の二尊を自彫刻せりと、よつて帆柱の觀音と號す。像なつて後一宇の精舍を建立し、慈眼視衆生福壽海無量の巨善によつて、寺を慈眼寺と號し、尊像を安置す。然して後、嵯峨天皇の御宇弘仁年中觀音の瑞夢によつて、重て造營あり。本尊の靈驗あらた成こと本傳に委あり。就中海上の難をすくひ給ふゆへに、所々に船玉の明神と號するは、當寺の本尊なりといふ。寺僧傳て云、弘仁年中精舍を造營し、數多の莊園を寄附し、坊舍甍を並しに、山門滅亡の節、俱に兵火の爲に灰燼となりぬ。其古跡は村より巽の方三町許にあり。今に古瓦等土中より出る。其後明神の告によりて、林中より此尊像を得て、今の地に草堂を再建す。

○藥師堂　同境内にあり。本尊藥師如來座像、長四尺。脇士日光月光立像、長八尺。十二神將の中子の神一體、長五尺俱に佛工春日作なり。

○如意輪堂　本尊長四尺、座像なり。

○地藏堂　本尊立像、長四尺。

○甲屋屋敷跡　土俗云、守山村の中にありと。今其地審ならずと云。臣按ずるに、猿樂者流の望月といふ謠に、守山甲屋の亭主元は信濃國安田庄司友治が家士、小澤（北）刑部友房と云者なりし。主人安田は信濃國住人望月の何某に

（帆柱觀音）

（天王の森）

うたれしゆへ、彼甲屋の亭主友房主の敵を打たる事をのせたり。謠は元來あとかたもなき事を作りなしたる事多し。暫好事の者の爲にしるすのみ。【日本武士鑑】にもしるせり。亦土俗甲の字をかぶと、訓し來れり。甚誤なり。甲の字はよろひと云字なり。冑の字こそかぶと、訓すべきとなり。かゝる舊誤多し。

○田中大明神社　吉身村にあり。村の北街道の傍林の中にあり。其森を天王の森と云。祭所神大巳貴命正一位田中大明神と號す。祭禮毎年四月二の戌の日。土俗云。白犬を神使とすと云。神明社、住吉社、八幡社等末社あり。土俗相傳。往古當社は吉身・守山・播磨田・市三宅四村の產土神にて、嚴重の祭禮ありしに、中古祭事の節鬪諍あつて、三ヶ村は離散す。然れども守山は其遺風にて、毎年正月元三には氏人必當社に詣す。

○神輿塚　同村森の傍、田の中にあり。往古祭禮鬪諍の時神輿を破却し、此處に埋と云。今少にても此塚を損する事あれば、必す祟ありといへり。

○山王社　同村街道の傍、田の中にあり。

○浮貝藤助塚　同村街道の傍、田の中にあり。土俗相傳。浮貝藤助は慶長年中伏見籠城の士なり。然るは竊に石田三成に通じ、城陷るによつて、關ヶ原の擒となつて後誅戮せらる。東照神君此地にて、藤助が首を實檢し捨させ給ひしを、土人塚に築といふ。【關ヶ原記】曰、此時甲賀の者手引すとあり、誤れり。江州野洲郡の御代官深尾氏手引すといひ傳たり。關ヶ原役畢て後、其徒黨十三人磔刑に行はる。浮貝も其與黨なるべし。

○願立寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末寺也。開基釋道玄。

○明覺寺　同村にあり。同宗。同末寺なり。開基詳ならず。

○金森村　守山吉身等の西にあり。

○金大明神社　金森村に在。

○山王社跡　同村にあり。中古廢絕す。土俗躍場と云地是なり。

○仁願寺跡

○興滿寺跡　同村にあり。土俗相傳。往古は天台宗の寺にて、山門附屬の地なりしよし、何れの日か寺も廢して、今田畑の名となれり。

○金森御堂　同村にあり。東本願寺なり。蓮如の開基なり。中古善龍寺、因宗寺、法安寺より寺役を勤。然るに法安寺退轉ののち、二ヶ寺よりつとむ。毎年二月二十八日京東の御堂にて、若菜のあつものにて齋を供す。舊例なり。善龍寺因宗寺尤其事にあづかる。

○善龍寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末寺なり。往古は天台宗なり。寛文二年一向宗となる。開基釋西善。或は云。寛正四年の開基なりといふ。川那邊彌七入道道西。或は云。從善と云。其後慶聞坊龍玄住職の時、蓮如上人より善龍寺と寺號を賜はる。是從善の善の字と、龍玄の龍の字を採用と云。

○因宗寺　同村にあり。同宗也。事前に見へたり。

○法安寺跡　同村に在。一向宗の寺なりしに、退轉して、今は其跡のみ殘れり。

○古石塔　同村の東の端にあり。大にして其形佳なり。何れの人の墓と云事をしらず。

○古城址　同村にあり。今は百姓の家地となれり。土俗相傳。元川那邊彌七入道道西が城にて、川那邊藤左衛門秀政城主なり。秀政山門に與力して信長を拒、信長則佐久間信盛をして是と戰しむ。其時佐久間方より矢文を書おくれり。秋風に落葉ちらつく金ヶ森藤左衛門方より返し矢文に、田面にすめる月のさむしさ。其後落城。織田信長とり立て、本願寺の蓮如上人暫く居住す。叡山より是を責。此時堅田衆・赤野井衆働ことあり。委は【堅田日記】に見へたり。其後顯如上人大坂籠城の時、此地にかりに城をかまへ。信長をさゝゆ。土俗の傳ふる處しかり。

○庭塚

○堂塚　俱に同村田の中に在。何と云事をしらず。

○橘寺　同村にあり。小き社の形有。土俗橘寺の宮と云。神體阿彌陀如來なりと云。笑べし。

○播磨田村　金森村の西北に有村なり。播磨田米は名產也。荒見村、市村は當村の枝鄕なり。

○八大天王社　播磨田村に有。祭神大巳貴命。

○吉祥天女社　同村にあり。

○辨財天女社　同村にあり。

○大井池　同所にあり。

○けこんなんの池　同村にあり。

○おきのとの池　同村にあり。

○すんけん池　同村にあり。

○かい田淵　同村に在。相傳。かい田何某屋敷跡也と云。

○圓命寺　同村にあり。開基詳ならず。一向宗。西本願寺の末派なり。

○圓立寺　同村にあり。元は圓命寺なりしを、五十年程以前寺をわかち、圓立寺と號す。開山親鸞上人。自筆の十字名號、蓮如上人二尊佛等あり。圓命寺圓立寺交代是を預る。

○西蓮寺　同村にあり。一向宗。木部村錦織寺の末寺な

り。

○田中庄司屋鋪　同村にあり。一町四方許なり。今民家十四五軒となれり。相傳。中世田中庄司と號せる、佐々木家の士居住せしに、此土守山、吉身、播磨田、金森、市三宅を領せりと。

○市三宅村　吉身村の北にあり。

○王子大明神社　市三宅村にあり。正一位王子大明神と號す。吉身村田中大明神の分身則大已貴命なりと云。祭禮毎年正月二戌日、鳥居の額は、大聖寺俊嚴秀宮御筆なり。人皇百三代太上天皇の皇女。

○古城址　同村にあり。三宅出雲守孝房城跡なり。孝房は佐々木六代經方四男永原家行に十代後胤永原大炊頭實高が二男大學助賢宗が長男也。觀音城没落の節同時に亡滅す。

○安樂寺　同村にあり。淨土宗安土淨嚴院の末寺なり。相傳。往古天台宗也。天文年中建立して、淨土宗とす。此開基安土淨嚴院六代仙譽殊慶上人なり。願生山安樂寺と號す。額あり。寶鏡寺の宮の御筆なり。本尊阿彌陀、惠心の作。不動毘沙門の像は、雲慶の作也。三宅出雲守大檀那なりと云。

○三宅出雲守墓　同村西雲菴にあり。

○西雲菴　同村にあり。淨土宗。京專念寺の末寺なり。

近江國輿地志略卷之六十七　終

近江國輿地志略卷之六十八

臣　寒川辰清編輯

野洲郡第三

○湯生莊　大林・欲賀・三宅・大門・横江の五ヶ村をいふなり。大門村・横江村は栗太郡なり。事は栗太郡に載す。この庄は野洲栗太二郡にかゝれる庄なり。【河海抄】に云く、近江國湯次の庄云云。湯次は悠紀主基の轉訛なり。悠紀主基の事は、栗太郡由伎代神社の條下に記す

○三宅村　播磨田村の西にある村なり。これ往古の屯倉の跡なり。【續日本記】に屯倉とは、天子の御米を納め置倉なり。諸國に三宅といふ處あるは、皆この屯倉の跡なり。【日本紀】に、推古天皇十五年毎國屯倉を置とあるはこれなり。【安閑天皇紀】にいはく、二年五月丙午朔甲寅置近江國葦浦屯倉云云、今地勢を見るに、この處なること明らけし。農作稅貢の米穀、古へは什一の法を行ふ。いまは六分が一を取て、村里の間に屯倉を建て、秋は調庸租稅をおさめ、春は百姓農興の時に種子の沙汰あり。水旱の憂なく、豐饒の頌を唱ふ、是古への政理なり。租稅六分の一を取て、其國々の村邑に屯倉を建て納置は、是乃ち官倉に利を求る所以にあらず。荒災に備るを以て本とす。周禮に倉人掌あつて、粟入の事を司るといふ是なり。【大學衍義補】丘瓊山曰、周禮十二、荒政是國家遇凶荒之時、救濟之法也、遺人所掌是國家常時、收諸委積以待凶荒、施濟之法也、稟人所掌是國家毎歲計其豐凶、以爲嗣歲移就之法也、蓋其未荒也、預有以待之將荒也、先有以計之既荒也、大有以救之、此三代之民、所以遇災而無患也與矣、日本の屯倉も此意なり。

○蓮生寺　三宅村に在。一向宗。西本願寺の末寺なり。本尊阿彌陀佛、安阿彌の作なり。開基不審。相傳。人皇四十一代持統天皇七年癸巳十一月下旬湯生す。この時一丈の藥師如來を造立し、一寺を建立して、都賀山冷泉院湯生寺と號す。一の梵鐘あり、不撞して響出。因以改名して長閑と名づく、天台の寺なりしが、然後一向宗門に歸依し、本願寺の末派となれり。すなはち蓮如上人より蓮生寺の號をおくるといふ。臣按ずるに、都賀山に醴泉涌出の事は正史に出て、守山驛下に論辨せり。この地とは方疆甚變はれり。疑らくはこの寺はじめは守山邊にあつて、後

こゝにうつすか詳ならず。

○都賀山　同村東の入口にある小山なり。この山むかしはよほどの山と見へ、守山驛の邊までも此山の尾續たりと見へたり。近江國野洲郡都賀山の醴泉の事【日本紀】【類聚國史】等に見へたり。その醴泉は今の守山の醴が池是なり。是を以て考るに、都賀山彼地の近くまでも、山の尾先にてありしにや、いまは都賀の山といへども知る人さへまれなり。よろづに古昔の事はかくのみなりゆけば、後々は何事も皆々となへ失ひ、其ことだにいふ人もなかるべし。猶詳らかに醴が池の條下にしるす。

○照養寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末派なり。はじめ天台宗の寺にて、照林寺と號す。相傳。新羅三郎義光十六代、青木下野守法名祐淸、應仁三年三月建立すと。青木下野守は義尙將軍に奉仕すと云。

○坊屋敷　同村にあり。古への三宅眞乘坊居住せしよし。

○熊野權現社　同村にあり。延文五庚子の年造營。祭禮毎年八月廿四日。

○藥師堂　同村にあり。開基詳ならず。

○大林村　三宅村の西にある村なり。

○覺明寺　大林村にあり、一向宗西本願寺の末派也。

○欲賀村　大林村の北にある村なり。

○護法善神社　欲賀村にあり。

○二宮大明神社　同所にあり。俱に祭禮毎年四月初午日。

○齋宮社　同村にあり。

○淨光寺　同村にあり。一向宗。西本願寺の末派也。開基釋專通。正保三丙戌年建立。この寺の傍に寺田秀伯といふ目醫師あり。

○淨念寺　同村にあり。永正六己巳年釋了念開基なり。

○明樂寺　同村にあり。同宗。永正七庚午年釋了念開基なり。

○本間屋敷　同村にあり。一町半に三町許の屋敷也。如何なる人といふ事をしらず。

○河原森村　大林村の西にある村なり。枝村を森村といふ。

○慶蓮寺　河原森村にあり。天台律宗。

○西方寺　同村に在。一向宗。西本願寺の末派なり。

○明光寺　同村の枝村森村にあり。一向宗。西本願寺の末寺なり。

○山賀村　河原森村の西に在。湖邊の村なり。

○教專寺　山賀村に在。西本願寺の末派なり。

○正樂寺　同村にあり。眞言宗。

○杉江村　山賀村の北にある村なり。

○小津大明神社　杉江村にあり。玉津正一位小津大明神と號す。石の鳥居額に此十字を二行に書す。祭神三座、宇賀魂神、素盞嗚尊、大市姫なり。【山家要略記】にいはく。口決に云玉津明神は、允恭天皇の后衣通姫也云云。この地の神とは同名異神なり。玉津は玉出の義にて、假名書といふものなり。

○矢島村　杉江村の北東にある村なり。

○少林寺　矢島村にあり。禪宗なり。一休和尙の開基。南都薪酬恩菴の末寺なり。初は紫野大德寺の末寺なりしが、爭論の事によつて、今酬恩庵の末寺とはなれり。一休和尙の木像あり。和尙存生の毛髮を、件の木像につく。臣巡覽の日住僧太山に會して、委しく聞けり。一休の墨跡最多くあり。

○眞光寺　同村に在。一向宗。東本願寺の末寺なり。

○西照寺　同村に在。一向宗。西本願寺の末寺なり。

○義昭將軍屋鋪跡　則今の少林寺に蟄居す。義晴公の男なり。はじめは南都一乘院の門主法名覺慶。永祿八年五月義輝生害の時、一乘院を出て春日山をこへ。江州にはしり、細川藤孝と示し合せ、佐々木をたのみ此所に居す。【赤松記】【三好記】【重編應仁記】【細川分流記】等を按ずるに、一乘院一向藤孝を御たのみありて、病と稱して閑所に籠居あり、醫師を招る。藤孝内々米田壹岐守宗賢といふ俗醫師の剛者と謀り置、宗賢難なく盜出し奉り、江州甲賀郡の山路を經て、藤孝米田二人御供して江州矢島に來り、和田和泉守秀盛が館へ入らせ玉ふ。秀盛深く賴まれ申、則御還俗あつて、義秋と名のり給ふ。又昭の字に改らる。一まづ若州へ御開ありて、越前朝倉を御賴みあるべきとて、永祿九年八月十五日御供纔十人ばかりにて、矢島の御所を御立ありて、若州へ御動座ある。當國山田の浦より御船にめされ、終に落させ給ふ。御供の人の中にて一首の和歌あり

よるへなき身となりぬれは鹽ならぬ、海の面にも
うきめ見る哉

おりふし名月淸明なりしかば、新公方家御詩作あり

落魄江湖暗結愁、孤舟一夜思悠々、天公亦慰吾生否、月白芦華淺水秋、云云

【織田軍記】には、和田和泉守秀盛を和田伊賀守惟政に作れり。

○赤野井村　杉江村の東にある村なり。

○東本願寺御堂　赤野井村にあり。本尊阿彌陀、安阿彌の作なり。御堂あづかりの寺を、專念寺といふ。

○西本願寺御堂　同村にあり。本尊阿彌陀、惠心の作なり。蓮如上人の開基なり。

○常照寺　同村にあり。一向宗。西本願寺派河内國顯證寺の末派なり。永正年中に開基す。
○福生(正イ)寺　西本願寺の末寺なり。
○釋迦堂　同村にあり。本尊釋迦佛、慈覺大師の作なり。
○木濱村　矢島村の西南にある村なり。木の葉浦といへるも。この地の事なり。土俗相傳。往古栗太郡の栗の樹を切倒し、その木の葉を此所へよせしゆへ名づくと云。
【爲尹千首】に
　山風はおよはぬ方のさゝ波に、木の葉の浦の名をちらすらん
【扶桑拾葉集】に仁和寺僧正尊海　天文二年　十月關東下向の記行に
　さゝ波や立ん木の葉の沖津ふね
江州木の葉の沖にて詠せる連歌なり。
○蓮光院　木濱村にあり。天台宗。
○福林寺　同村にあり。本尊觀音。傳教大師の作なり。比えい山の末寺なり。
○光林寺　同村に在。一向宗。佛光寺派なり。
○光照寺　同村に在。東本願寺の末派なり。
○眞照寺　同村にあり。同斷。
○了緣寺　同斷。

(木の葉浦)

○古城址　【明智軍記】に云。進藤山城守秀成・後藤喜三郎賴基は箕作承禎を背て、木の濱の城に籠ると云云。
○八幡社
○稻荷大明神　俱に木濱村に在。祭禮毎年四月中の亥日。
○木の濱の渡し舟　木の濱より西堅田へ渡る。湖上十八町、一人にかりきり三十錢。
○八崎　野村・安治・須原・堤・吉川・小濱・幸津川・今濱、の出崎と云ふ。
○開發村　矢島の北東にある村なり。木濱よりは南東なり。或は貝發の文字に作。諸說あれ共採用にたらず。
○若王寺社　開發村に在。祭禮毎年四月上の申の日。
○蓮光寺　同村に在。一向宗。本願寺の末派。
○淨秀寺　同村にあり。佛光寺派なり。
○法泉寺　同村にあり。佛光寺派なり。
○德成寺　同村にあり。同宗。
○藥師堂　同村に在。本尊藥師。傳教大師の作也。
○正一位御前社　同村大曲にあり。祭禮毎年四月上の中の日。
○圓正寺　同所にあり。一向宗。東本願寺派。
○正休寺　同所にあり。同宗。西本願寺派。
○笠原村　開發村の東にある村なり。

○螺江大明神社　笠原村にあり。土俗云。たにしの靈を祭るといふ。
○中村　笠原村の南東にあり。
○若宮大明神社　中村にあり。
○榮正寺　同村にあり。西本願寺の末派なり。
○教信寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末派なり。
○道場　同村にあり。錦織寺派。
○石田村　中村の南にあり。則欲賀村の東也。
○十二里村　石田村の西にある村なり。則欲賀村の北、赤野井村の東にある村なり。東赤野井村の出村なり。
○小島村　中村の東南にして、播磨田村の北にある村なり。端村を阿比留村といふ。土俗相傳。佐々木の支流兒島備後三郎領知せる所なり。故に名づくといへり。臣按ずるに、兒島備後三郎は佐々木の支流にあらず。【參考太平記】には、和田備後守範長が子號三宅備後三郎、亦稱今木、新羅王子天日槍が後也。鎌倉將軍家の時分、三宅氏無嗣にして斷絕せんとす。故に佐々木三郎盛綱が嫡孫重範聟養子となりて、其家を相續す。重範が四世範長なり。範長が子高德元弘建武に忠戰あり。官軍敗走の後入道して、義淸といふ。近江伊勢の間に沈淪して、晩年三州賀茂郡に移住せり。然れ共此邊三宅小島村あり。高德等の謂にあらずといふべからず。尙後考をまつのみ。
○天滿天神社　小島村にあり。祭所菅丞相の靈なり。祭禮毎年四月十日。
○重願寺　同村にあり。一向宗。東本願寺末派なり。
○道榮寺　同村にあり。同宗也。
○源福(福イ)寺　同村あり。淨土宗。
○八田大明神社　同端村阿比留村にあり。祭禮毎年四月十日。
○西方寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末派なり。
○河田村　小島村の東にある村也。或は川田村に作る。
○天滿天神社　川田村にあり。祭禮毎年四月十一日。
○神宮寺　同所にあり。醫王山神宮寺と號す。天滿社の社僧寺なり。本尊藥師如來。傳教大師の作なり。天文十四乙巳川田伊豆守開基。曹洞宗守山大光寺の末寺なり。
○淨雲寺　同村にあり。一向宗。木部錦織寺の末寺也。
○正福寺　同村に在。一向宗。西本願寺の末寺なり。
○西福寺　同村にあり。天台宗。立入村西立寺の末寺なり。
○十王堂　同村にあり。閻魔大王の像なり。
○比江(ヒヱウ)村　河田村の東にある村なり。
○長澤大明神社　比江村に在。祭禮毎年四月十三日。

○長澤藤　同所長澤明神社の界内にあり。此藤花咲とも實ならず。

○長澤池

【長秋詠藻】　俊成

長澤の池のあやめを尋てそ、千代のためしにひくへかりける

【夫木集】　俊光

君か代の長きためしに長澤の、池のあやめはけふそひかる、

【類聚名所集】　顯昭

としことに絶す引なりあやめ草、ねも長澤の池を尋て

○星宮　同村にあり。

○大將軍社　同村にあり。

○蓮乘寺　同村にあり。天台宗。文龜二乙丑年盛全上人の開基なり。今は坂本西教寺の末寺なり。

○多門水　同蓮乘寺の境内にあり。或は毘沙門の水ともいふ。一堂あり。毘沙門堂と號す。則弘法大師の作の毘沙門天を安置す。此堂の下より涌出の池太甚清冷の水なり。

（毘沙門水）

○西願寺　同村にあり。一向宗。佛光寺末派なり。

○佛眼寺　同村にあり。同宗也。

○正蓮寺　同村に在。一向宗。木部錦織寺の末寺也。

○千增寺　同村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺なり。

○久野邊村　市三宅村の東、則野洲村の北にある村なり。

○圓光寺　久野邊村にあり。觀音山長福院圓光寺と號す。坂本西教寺の末寺なり。長福院といふ時は叡山の支配なり。相傳ふ。本堂は飛驒の工が建る所なりといふ。本尊正觀音。傳教大師一刀三禮の作佛なり。人皇八十八代後深草院康元丙申の年建立。當享保十三戊申の年迄四百八十一年になれり。

○富波庄（トバ）　澤村・新町・五野里村といふ。

○五里村　久野邊村の北にある村なり。或は五野里村に作る。

○藥師堂　五野里村にあり。本尊藥師如來座像。長二尺ばかり。脇士觀音勢至長六尺許。ともに傳教大師の作なり。相傳ふ。往古は大寺にて、五里村惣高五百石餘。此寺領なりと云。

○淨圓寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末寺也。

○澤村　五里村の東にある村なり。この村を古富波といふ。相傳ふ。澤彈正少弼一圓に知行の地なりといふ。

○生和大明神社　澤村にあり。祭神春日大明神なり。正一位生和大明神と號す。祭禮毎年四月初の巳の日、三の巳これある時は中の巳の日を用ゆ。祭禮の日は魚肉を獻ず。土俗いふ。神記は栗太郡草津田中氏の者が家にありと。臣因て田中氏のものを尋ね問に、かつて不知よしをいへり。往古は大社と見へて、いまに神樂田、護摩田、湯料田など號する田の名あり。

（波富古）

○石地藏　生和社の西にあり。靈驗あらたなり。

○龜塚　生和社の西北にあたつてあり。その形龜に似たり。或は云。いにしへ龜といへる女を葬せし塚なり共云り。

○光圓寺　澤村に在。一向宗。西本願寺の末寺なり。

○遍照寺　同村にあり。同宗。

○光德寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末寺なり。

○圓住寺　同村に在。木部錦織寺の末寺なり。

○新町村　澤村の北東にあり。

○野々宮　新町村にあり。澤村生和社の御旅所なり。境内に若宮といふ地、中古は社ありしに、何の日か社廢して、今は石を敷注連ばかりをひけり。

○八幡社　同村にあり。土俗云。富波庄八八幡四十八塚といふ往古ありしと。今は八幡宮はこの一社のみにて、殘り七八幡は何處にありといふ事をしらず。又四十八塚も、今二十許は所々に散在すれども、のこりは何地にありしや詳ならず。

○祐林寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末寺なり。

○佛願寺　同村にあり。同宗。佛光寺の末寺なり。

○西念寺　同村にあり。淨土宗。

○小篠原村　新町の南にある村なり。

○稻荷大明神社　小篠原村にあり。祭禮毎年四月二ノ卯の日、九月九日相撲なり。

○養專寺　同村にあり。一向宗。西本願寺の末寺也。土俗篠原の御堂といふはこれなり。

○古墓　小篠原村の北に小山あり。今土とり場となる。土を大半とりたるに、大なる岩穴あり。内に甲冑太刀薙刀鎧等其外武具多くこれあり。然れども武具は朽腐て、金銀の錺金札等いまにあり。朱砂等もあり。いづれの人の墳墓といふ事をしらず。

（篠原の御堂）

○山脇村　小篠原村の南にある村なり。

○九山八海石　山脇村の入口の山中にあり。その高五尺許、一圍一丈八尺許、その形凸凹ありて、或は山の如き所九あり、又海の如き所八あり。土俗相つたふ。古昔東山義政公假山の石なり。而してのちこゝに置といふ。ある時一小兒槌を以凸處を打くだく。一夜にして又元の如くに

なれりと。臣按ずるに、【瑯琊代醉】にのする所の、天津橋上奇石の類なるべし。出羽の國中島村子持石といふ者あり。文祿年中或其小石を拾ひとり秘藏せしに、八十餘年に至て、圍一拱許の石となり。小石を産こと數千といふ。其たぐひなるべし。【重編應仁紀】に云。九山八海といふ石は、むかし慈照院殿の御時、花の御所に建置し、名石なるを取よせて、みな御庭に建らるゝと云云。【宗長日記】に云。醍醐に北山兵庫助招請誘引せられ、菩提院に九山八海といふ石淺茅の中にあり。聞しよりは見るにまされりといふべし。宗長師道の宰相とて、御院に宮仕へせし人なり。常に物語せしにかはらずといふ。寺僧云。九山八海石今は三寶院門主の前庭にあり。門主假山を造らるゝ時、引用ひらるゝ池の西緣の前にある海石是なりといふ。松永彈正久秀大和國志貴城にて亡命の折から、珍奇の物を燒捨る中にも、九山八海といふ奇石あり。

○將軍地藏　同村山の中途にあり。石佛なり。土俗相傳ふ。源頼朝建立する所なりと。今建久の文字かすかに石面にのこれり。

○辻町村　小篠原村の東にある村なり。

○春日大明神　辻町村にあり。祭禮毎年四月上巳日。

○西德寺　同村にあり。淨土宗。

○篠原神社　同村にあり。

○相原庄　小堤村・大篠原村・入町村・紺屋町村・長島村・高木村・十王町村以上七ヶ村をいふと、いまだ詳ならず。

○小堤村　辻町村の北東にある村なり。

○大篠原村　小堤村の北東にある村なり。（一本の頭註に曰く、日吉神領注進篠原三百歳號御神樂田）

○午頭天皇社　大篠原村に在。祭禮毎年六月十三日十四日。

○念佛寺　同村にあり。淨土宗。安土淨厳院の末寺なり。

○岩倉藥師堂　同村に在。藥師像は傳教大師の作なり。

○古城跡　同村にあり。是永原越前守が城跡なり。この山を田中山といふ。

○不歸池（カヘラズ）　同村島橋の東にあり。横一町半許、長二町許の池なり。西東へ長く、東を夕日の岡といふ。西を朝日の岡といふ。土俗これを齋藤實盛が首洗池と云者は大に非なり。是平宗盛が首洗池と云をとなへ誤たるなるべし。其主の神日毎に三度づゝ、此池へ影向し給ふて、歸り給ふを見ず。故にかへらずの池といふと。或は云。神池にして、蛙不住。故に蛙不入の池ともいふ。

○朝日岡　不歸池の西の方をいふ。

○夕日岡　不歸池の東の方を云。入日の岡と云はこれなりといふ。【名所和歌集】には、入日岳は未勘とあり。然れどもこの夕日の岡の事なりといふ。【續古今集】に、

土御門

箸鷹のすゝの篠原狩くれて、入日の岡に雉子なくなり

冬基

【玉葉集】に

時雨つるほとよりも猶色こきは、移る入日の岡のもみち葉

【盛衰記】に云、元暦二年六月廿一日近江國篠原にて、大臣殿父子をきる。【保暦間記】に云、六月九日大臣殿を相具して義經上洛しけり、本三位中將も此度同上らる。同廿日近江國篠原に着。同廿一日の朝より右衛門督を別所に居たてまつりけり。今を限りと互におもわれけり。此十七年が程片時はなれざりつるものをとて、歎き給ふぞ悲き。判官さる人にて大原の聖人を請じて、善智識とし、目出度敎化申されければ、思ひ取て宗盛念佛して切れたまひけり。右衛門督清宗もおなじくきられ給ひぬ。

○平宗盛塚　同清宗の塚　不歸の池のうへ街道の傍田畔にあり。

○入町村　大篠原村の北にあり。

○長島村　入町村の北西にある村なり。

○高木村（玉造莊）　長島村の北西にあり。この高木村北南村この邊を玉造庄といふといへり。其分限詳ならず。

○十王町村　高木村の北西にあり。

○紺屋町村　長島村の南西にあり。

○屋棟川（ヤムネ）　源は蒲生郡山中村の山間に出て、西に流れ辻町村の北を經、南に折り小堤村の西を遶り、流て北に轉じ、新町の西を過、又西に流れ蛭田野田の北を歴て、湖水に入るなり。

近江國輿地志略卷之六十八　終

近江國輿地志略卷之六十九

臣　寒川辰清編輯

野洲郡第四

○江部庄　永原村・北村・中北村の三村を云なり。

○永原村　紺屋町の西にある村也。水戸安積覺翁【列祖成績】曰、慶長五年九月十七日神祖移陣於永原云云、【創業記】【關原記大全】等にもしるせり。

○天滿天神社　永原村にあり。祭神菅相丞の靈なり。江部庄の產土神なり。社領御朱印八石四升三合。祭禮每年四月初の午の日。三の午有時は中の午の日を用ゆ。勸請の年月詳ならず。或は曰。右大將源頼朝是を勸請すと。然れども慥なる證なし。延文五年庚子十一月十六日修覆再興の棟札あり。當享保十四酉年まで三百七十年になれり。亦二百三十二年以前明應七年卯月十四日修覆棟札あり。願主永原越前守重秀山門末別當實光坊とあり。それより以來段々と再興の棟札あり。本殿は檜皮葺樓門拜殿等あり。攝社には八幡宮、惠比須宮、夜刄神の宮等あり。且當村に於て往古より、天下安全の爲に每年正月連歌十梅の發句にて十句興行あり、古例として守護地頭或は御代官より發句を出さるゝ。或は云右大將頼朝公の時代より此事ありと。每年廿五日月竝の連歌百韻是あり。

○大井大明神社　同所にあり。是江部庄の地主神なり。神事天神宮と同じ。八石四升三合の御朱印の內なり。

○福泉寺　同村にあり。淨土宗。京百萬遍知恩寺の末寺なり。祥雲山福泉寺と號す。本尊阿彌陀如來、安阿彌の作なり。應永二十八年草創。征夷大將軍源義持公の建立なり。最七堂伽藍の地なりといへり。星霜推移て衰微に及の上、あまつさへ石田三成が兵火に罹て、悉烏有となりぬ。今わづかの小寺を建立して、其跡のみを殘す。

○淨方寺　同村にあり。淨土宗。

○藥師寺　同村にあり。

○光念寺　同村にあり。一向宗。錦織寺派なり。

○常念寺　同村にあり。淨土宗。安土淨嚴院の末なり。淨嚴院末寺の內東坂の阿彌陀寺と當寺を以て席の頭とす。本尊阿彌陀佛は、佛工春日が作なり。相傳。當寺は永原越前守の菩提所にして、永原大炊助老母是を建立す。常念佛の道場とす　故に寺號とす。往古は天台宗なり。淨土の開基眞嚴和尙應永十八辛卯年四月十八日、享保十四酉年迄三百年になれり。眞嚴は則然蓮社道譽獨阿大和尙の事なり。相傳。往古の常念寺は織田信長公の時、本末の爭是あるによつて、常樂寺村へ引遷す。今彼地に常念寺屋鋪と云は其あとなり。後五野里村の藥師堂を今の寺へ移す。本堂門及石垣等は、五野里村の藥師堂の堂門石垣なり。塔頭二院あり。喜見院、淨法院と號す。

○觀音堂　同寺界內にあり。本尊觀音は惠心の作なり。

○永原越前守墓　同寺界內にあり。永原前越州大守金峰松林としるす。是永原越前守重虎事なり。

○境堂　同村にあり。本尊藥師如來。福泉寺七堂のその一なりといふ。この堂ある地の名をてごりと云ふ。每年正・五・九月天下安全の護摩を執行す。寛文年中寄附の狀あり。その詞に曰、永原村てごり四石三斗、境堂藥師如來御供燈明料令寄附者也、天下安全御祈禱可抽丹精、仍寄附狀如件、寛文丙午年觀音寺豐舜判、今新檢五石八升になれり。

○十王堂　同村にあり。閻魔王及俱生神十界の圖等あり。

○順德寺　同村にあり。一向宗東本願寺の末派なり。往古は天台宗なりといふ。

○妓王堂　同村に在。妓王妓女佛御前刀自の四女の墓あり。四女の木像あり。妓王は平相國淸盛公の寵愛の女なり。妓王妓女は姉妹にして刀自がむすめ。江部の庄則當村出生の者なり。淸盛寵の餘りに妓王に謂、何にても所望はなきや志にしたがわんと、二女子が曰、常に君寵にあづかる故身貴く家富り。又何をも謂わゝ　然共今仰によつて思に、妾が出生の地は近江國野洲郡江部庄といふ所なり。此地用水なく甚旱魃をくるしむ。あわれ御威光を以て用水をたくわへ申さば、後世までの力行是に過たる願望なしと。平相國是を聞て、それやすき事なりとて、地利者に問に、いはく。一里上に野洲川と云大河ありと。是によつて江部庄より野洲川表を上一里半湖水へ下げ、一里半に三里の間川幅で長二丈深さ二丈に卯辰の二時にほり立、一町に一所宛水口を指向、妓王井と名づけらる。是によつて江部の庄旱魃の患をまぬかる。故に村民等深く妓王が事を感じ、妓王死後此所に墓を立、小堂をいとなみ木像を作りて、厚く歿後を吊ふ。今の妓王堂是なり。土俗云。妓王は江部庄の地主神大安大明神の化現也。江部庄の旱損を救はん爲に、妓王とあらわれ、淸盛の心をとつて如此と云。妓王妓女ともに江部氏の者の二女なりと云。江部氏の者城跡は今の御殿跡是なりと云。臣按ずるに。祇王祇女の事【盛衰記】にのせたれども、當地

の者なりといふ事も見へず。必彼井水のことも載せず。

【盛衰記】全文長し、考訂の爲いさゝか其要をとつて出す。

【盛衰記】に曰、其比京中第一の白拍子姉祇王妹を祇女と號す。紅顏色鮮にして白粉の媚を造れり。容貌品々まめやかにして、蘭麝の匂なつかし。清盛入道舞歌へと宣ひければ、蓬萊山には千歳ふる萬歳千秋重れり。松の枝には鶴巢ひ、巖の上には龜遊と。同音にうたひ澄したりければ、入道興に入姉祇王を殿中に召置て、最愛せり。寵愛の餘親はいかなる者ぞと問れければ、母も元は遊女にて、閉と申けるが、年闌齢傾きて六條堀川なる所に侍と申。さてはいと惜のことやとて、筑後守家貞に仰て、衣裳絹布の類をおくり遣はすのみにあらず。毎月二時料雜事を運入る。かゝりければ家内大きに榮へて、從類昇族集り來る。色立るものいかでか程の幸あるべきと。祇一祇二祇三などなつくものもありけり。爰に佛御前といふ者あり。六波羅の亭へ推參す。清盛罷出よとて入る。祇王祇女吾も經し道なりとて進むるによつて佛を呼入。祇王が計なり。清盛佛が朗詠歌舞を見聞て感に堪、入道座を立、判官を使にて祇王を追出す。祇王ちからなく入道の常に見給ひける障子に

萠出るも枯るも同しのへの草、いつれか秋にあはて有へき

と書捨てこそ出にけり。其後佛慰に來て、舞かなでよと責られ、母がいさめに力なく亦六波羅に來り歌舞す。宿所にかへりて母にいひけるは、浮世にあればこそかゝる憂目も見れ。はかなき此世と知りながら何をたのみに住ん。蜻蛉のあるかなきかの身を持て、朝露の置は消ける命なりとて、僧を請じ髪の髪をそり落し、墨の袖にかへて廿一と申に實の道にぞ入にける。妹祇女も十九にて出家す。母刀自も元より尼となつて、嵯峨の奥往生院と云處に柴の庵をむすびつゝ、三人菩提を祈ける。佛御前も是を聞六原を忍出、往生院へ尋來つゝともに墨染の袖となり、浮世のはかなきを思ひとり、四人頭を指つとへあけくれ念佛し行業功重りければ、遲速こそ有けれども本意に任せ心を亂れず終けり。辱も後白河法皇此由聞し召、哀れ貴き事なりとて、六條長講堂の過去帳に入られて、比丘尼祇王廿一、祇女十九、閉四十七、佛十七としるさせ給ふと云。

○永原御殿跡　永原村四五町西の北村の内に有。然れども永原御殿と云故此處にのす、本は江部氏の者居宅の跡といへり。江部氏は妓王妓女が父といへば、壽永の比の者にや、其名詳ならず。元應元年庚午五月信長の下知として、佐久間信盛此城にあり。天正年中永原越前守重虎在住す。其後大閤秀吉公の時代、深尾清十郎居住す。此深尾は元甲賀士也。其後東照神君御上京料として、東海道所々にて高壹萬石與へ給ふ。此一萬石の内野洲郡にも千石あり。よつて止宿の爲に御殿を再興す。近江地士四十八人を召出さる。鷹飼の爲とて指置給ふなり。御殿とは呼ながら城なり。本丸二の丸三の丸等是あり。矢倉四あり。御本丸の多門二は伏見の城より引移す所なり。本丸より二の丸へ廊下橋あり。大凡園貳町四方許の城なり。道中第二の御殿とす。第一は水口なり。然るに此地の御殿台命あつて、四十四五年以前たゝみとつて、今城石垣大手許其形とて殘れり。又土俗云。此御殿跡に古狐あり。數百歳を歴ると云。毎月朔日廿八日扶持す。女此食をたきかしぎなどする時は狐食はずと云。

○永原後家屋敷跡　同村にあり。是永原右近と云者の後家にて。大閤秀吉公の上臈頭也。本名篠原氏。

○中島後家屋鋪　同村に有。秀吉公の上臈頭表使なり。

○平左衞門後家屋敷跡　同村にあり。石田治部少輔三成が家士内池平左衞門忠近屋敷のあとなり。平左衞門は三成が此邊の知行の代官なり。關ヶ原役の比此地に住す。

○手島大明神社　同村にあり。

○篠原大明神社　同村にあり。別當を福壽院と云。効驗靈符神泰澄大師の作なり。此餘甲冑不動願定天神等あり。

○北村　永原村の北南にある村なり。北村季吟出生の地なり。季吟が事詳に人物門に出す。

○中村　北村の西南にある村なり。

○小南村　北村の南にある村なり。

○仁保莊　仁保村・小田村・江頭村を云。

○江頭村　十王町村の西にある村なり。

○仁保村

○六社明神社　仁保村にあり。祭禮毎年四月中酉日。

○正林寺　同村にあり。一向宗本願寺の末寺也。本尊阿彌陀佛、長一尺貳寸。惠心作なり。額有寶鏡寺宮の御筆なり。

○小田村　江頭村の南にある村なり。

○野村　江頭村の西にある村にて湖邊也。

○兵主郷（ヒヤウスノガウ）　十八村を兵主郷と云。所謂十八村は五條村・六條村・野田村・安治村・堤村・井ノ口村・吉川村・小篠村・津田村・服部村・乙窪村・小比江村・西河原・木部村・三夫村・吉地村・比留田村・重高村なり兵主郷の名は、兵主大神宮の名によれり。

○仁保川　源二。一は横關川なり。一は山中村の出間よ

り出、北に流、乾に轉じて、鏡村の北を經て一流となり、安養寺村高木村の北を過盤曲して湖に入。川幅或は五十間及六十間なり。神崎氏【近江筆記】に云。玉造川は仁保川を云なり。但玉造の庄に、常に鏡山邊の山川の流溜り濁れり川有。此川を云といへり。

○小比江村　比江村の西にあり。

○正一位矢取大明神社　小比江村にあり。

○願正寺　同村にあり。西本願寺の末派也。

○大見寺　同村に在。木部錦織寺の末。

○八夫村　小比江村の東にあり。

○木部村　八夫村の北西にある村なり。

○錦織寺　淨土眞宗。木部村にあり。緣起に云。抑當寺本尊は、開山親鸞聖人常陸國霞の浦にて感得の如來也。其由來をあかすに、人皇八十五代後堀川院安貞元丁亥聖人五十五歳常州笠間郡稻田の鄕にまします時、同國霞の浦の海底に大なる光あり。海邊の漁人不思儀の思ひをなす。聖人是を聞て曰、定て是佛像ならん。昔日かくの如き例證ありとて、浦人と心を合せ大網を水底におろし、聖人自網をとり給ふに、忽ち一尺八寸の彌陀像宛然としてあみの上にあがらせたまふ。聖人感謝斜ならず。時に諸人群をなし如來を拜し、草の風になびく如く男女一同に歸するもの多し。中略　聖人御歳六十餘に及び、御歸洛の御志ましく〳〵本尊を笈の上に安置し、常陸の國を出花洛の道に赴き給ふ。然るに或日晚陰に及て、駿河國阿部川に至り給ふ折節、洪水にして往還の旅人渡る事を得ず聖人も川のほとりに躊躇し給ふ。然るに笈の上の本尊忽見へ給はず。愕然として驚き給ふ所にうしろより一僧來り、我よく此川の淺瀨をしれり。我にしたがひ渡るべしと、則聖人の手をとり川に入、陸地を歩が如く容易く向の岸に着給ふ。笈の上の如來忽又あらわれ給ふ。正しく今の一僧は本尊の化現なりしと、身の毛は卓立落淚袂をうるほし憶念稱名いさみ給へり。中略　此の如く所々巡行の間四十餘日を經給ふ。玆に或夜感ずる事あるが故に、人王八十六代四條院聖曆嘉禎元乙未年四月中旬の時、尋て此地に入給ふに一の堂あり。天安年中慈覺大師草創の故に、天安堂と名づく【毘沙門記】の如し。孤松庭にはびこれり。則笈をおろして松の枝にかけ、此松は天安二年八月三日の夜長八尺有餘に出生の靈木今の笈掛松是なり。堂に入本尊を見給ふに、多門天の像を安置す。よつて禮をなし此堂に宿し給ふ。其夜夢見て、天王恍惚として告て曰、此地に彌陀を安置し專修念佛を弘通し給はゞ、我よく守護すべしと。夢さめて思惟し給つゝ、夫毘沙門天王は佛法擁護の主たり。豈掲焉の靈告ならざらんやと云て、中略　玆に因て彌陀を本壇に安置し、眞宗念佛の道場となりぬ。中略　玆に人皇八十六代四條院の御宇曆仁元年七月六日の夜寅の時、虛空に樂の音あり、異光耀き異香四方に薫ず。內陣に二人の童子あり。絲を繰、天女亦機を織。聖人明旦に內陣に入見給へば、横三尺竪一丈五尺の紫香の錦佛前にあり。諸人群集をなし奇異の思ひをなすこと云ばかりなし。則四條帝に奏達し、叡覽に備へ奉る。帝叡感のあまり同年八月五日勅使を下し勅額を賜ふ。勅使權中納言賴資。其額に曰、天神護法錦織之寺云云。下略

○毘沙門堂　同寺にあり。毘沙門天王緣起に云。抑當寺毘沙門天王は、比叡山傳敎大師の御作なり。其濫觴を尋るに、護法の鎭主を作らんと、山中を巡り御尊木を尋給ふに、松の尾明神現し給ひて、東塔北谷に自然の靈木ある事を告給ふ。大師行て見給ふに、此木晝は紫雲覆ひ、夜は光あつて青黑の二鬼是を守護す。大師この木を乞給ふに、鬼神の曰、此異木は昔日釋迦如來最澄に渡すべしとの佛勅なり、今渡し申といひて虛空へ飛去。故に大師此靈木を得て、多門天の像二體を彫刻し、一山二所に安置し給ふ。然して後に慈覺大師或夜の瑞夢に、天王告て曰、江州野洲郡に一夜に松出生せん。是我有緣の地なりと。覺大師夢さめて弟子圓智に命ず。しかるに天安二戊寅年八月三日夜當所において長八尺有餘の松出生せり。諸人群集をなす處に、圓智此事を見聞して山に歸り、覺大師に白す。瑞夢にまかせ天王を當所にうつし、梵閣を建立して天安堂と號す。其後三百七十九年を經て、嘉禎元年此天王の靈告によつて、聖人此地へ尋入給ひ、淨土眞宗興行なる事、此天王本より開山聖人敎化利益の大なる事をしろしめす、ゆへに時を得て聖人を請じ、念佛繁昌の道場となる。これ天王守護たるものかと云云。

○笈掛松　同寺內にあり。事前に詳なり。錦織寺は五門徒の其一寺にして、繁昌の地なり。今の堂は常憲院殿の御母堂桂昌院殿の、金銀等を賜て建立する處なり。

○西河原村　木部村の西にある村なり。

○二宮大明神社　西川原村にあり。

○惡王子社　同村にあり。

○養圓寺　同村にあり。一向宗。西本願寺の末派也。

○西福寺　同村にあり。一向宗。木部錦織寺の末派也。

○乙窪村　西川原村の西南にある村也。或乙久保に作る。

○佛性寺　乙窪村にあり。靈鷲山佛性寺と號す。本尊丈六の阿彌陀佛座像。惠心僧都の作なり。寺僧曰。當寺開基の事詳ならず。延曆年中ともいひ、亦或源信の建立とも

いへり。江東三ケ寺の其一員として、七堂伽藍の寺地なりしかども、衰微して今其形のみ殘れり。今坂本西教寺の末寺なり。殘る二ケ寺は跡だにもなし。

○辨慶堂　同村にあり。佛性寺より艮の方一町許にあり。相傳。昔西塔の武藏坊辨慶佛性寺に往來する事あつて、此地に小庵を建て寓居す。故に名づく。小庵も何れの年か廢してあとかたもなし。其地に其名を名づくるのみなり。今其跡に小社あり。八王子の神なりといへども、村老或曰、辨慶が靈を祭る社なりと云ふ。

○鷹部屋跡　同村にあり。相傳ふ。東照神君東海道にて一萬石初て御手に入る節、近江士四十八人召出され、御鷹の鳥屋飼仰付られ、當村に鷹部屋建、大猷院殿の御代江戸にうつさる、當憲院殿御代鷹飼の輩江戸へ引越諸御番に入。

○吉地村（ヨシヂ）　木部村の西にある村なり。

○井口村　吉地村の西にある村なり。

○比留田村　吉地村の東北にある村なり。

○秩父妙見明神社　比留田村にあり。

○蓮頂寺　同村にあり。一向宗。西本願寺の末寺也。

○常樂寺　同村にあり。一向宗。木部錦織寺の末寺也。

○善明寺　同村にあり。同斷。

○西德寺　同村にあり。天台宗。

○興福寺　同村にあり。本尊觀音。

○蓮花寺　同村にあり。本尊藥師。

○重高村　是比留田村の内にて、東の方を比留田村といひ、西の方を重高といふ。

○五條村　比留田村の西南にある村なり。土俗此邊に五條六條など云處あるを以て、天智天皇の大津の都の時の五條六條なりと云。亦或は天智天皇の御宇都を此地にうつさんとて、地割などありしかども、土地狹きが故にやめらるなどいへり。ともに非なるべし。都をうつすは大事なり。とくと始土地の廣狹を幾度も考檢して、後にぞ地割はすべきものなり。亦大津の都の時の五條六條と云こと、方角違にて尙以非なり。此五條六條など號せしは、其いにしへ五條六條家などの領地なる故、呼來れるにや。但自然との村名にして、何の子細なきこともあるべし。

○兵主大神社　五條村にあり。祭所の神大己貴命なり。當社は人皇四十四代元正天皇の御宇養老二戊午年御草創。樓門の額は佐理が筆蹟なりと云。正一位勳八等兵主大神宮の十一字を二行に書す。相傳。源義朝の沒落の時、賴朝も隨て落ち行に不歸池の邊にて、馬進まず。土民云、不歸池へは日毎夜毎に三度づゝ兵主大神宮影向あり。今

其時にやと。賴朝下馬して社の有る方を問、禮拜して武運をいのる。然して後天下一統の日文治二年神殿及末社等まで悉造立し、三千餘石の神領を寄附す。今兵主郷と中は是故なり。多の武具を神獻して、武運長遠をいのる。文永の兵火に罹て社も炎上し神領も失しを、足利尊氏先例に准して社を再興し、神領を本の如く寄附あり。然るに其後數度の兵火相つゞき、殊に織田信長佐々木退治の時に至て、神領悉沒取せられ、纔に八木五石を社領とす。慶安二年大將軍家光公大猷院殿より九石五斗餘の御朱印を下さる。當社は上七社中七社下七社惣じて二十一社と云。是等さだめて往古は兵主郷中の諸村に、散在してありしなるべし。今は社地何れの處といふ事をしらず。祭禮每年四月二の酉の日五月五日なり。當神主井口宰相武藝部宿禰矩氏と云者、このおもむきを書おくれり。神記かつてなしと云。臣按ずるに、【神祇正宗】曰、欽明天皇の御宇鎭座なり云云。此說是なるべし。社は養老二年の草創なるべし。七社といへるは大己貴命の七名をとれるなるべし。大己貴命の七名は、大國主神、大物主神、國作大己貴神、葦原醜男、八千矛神、大國玉神、顯國玉神、以上七名なり。【三代實錄】曰、貞觀七年六月十四日癸亥授近江國正五位下勳八等兵主神從四位上、又曰、貞觀八年十二月廿六日丁酉授近江國從四位上勳八等兵主神正四位下、貞觀九年二月廿七日丁酉授近江國正四位下勳八等兵主神正四位上、貞觀十六年八月四日庚申授近江國正四位上兵主神從三位、

○六條村　五條村の南東にあり。

○堤村　六條村の南にあり。

○野田村　五條村の西にあり、

○屋棟川　源蒲生郡山中村の山間より出て、西に流辻町村の北を經南に折、小堤村を遶て西に流れ、北に轉じて新町の西を過、又西に流れ、比留田・野田村の北を經て湖に入。

○安治村　野田村の南にあり

○小濱村　堤村の南西にあり

○天神社　小濱村にあり。祭禮每年四月十一日。菅公の靈也。

○稱名院　同村にあり。淨土宗。

○西照寺　同村に在。一向宗。西本願寺の末寺なり。

○吉河村　小濱村の西にあり。

○箭放大明神社　吉河村にあり。緣起に曰、箭放大明神、兵主上七社の第一なり。祭所の神天若彦命なり。神代の昔此葦原國に神軍ありし時、弓箭を帶して大己貴命に隨

順し、荒振邪神を矢放平け給ふ。故に箭放大明神と申也。毎年正月十二種の供物を箱に入堅く封じて備へ奉る。餅蜜柑串柿等の類の物なり。山の供物神慮に叶ふ時は、翌年正月までのこらず其儘に是あり。若神慮に違ときは其中の二三種も形を變ず。玆に因て其年の善惡を知ると云。

○正堅寺　同村にあり。一向宗。西本願寺の末寺。

○西念寺　同斷。東本願寺の末寺なり。

○善久寺　同斷。

○正福寺　同斷淨土宗。

○正善庵　同斷。一向宗。錦織寺の末派也。

○德本寺　同斷。

○淨照寺　同斷。

○光林寺　同斷。天台宗。

○服部村　小濱村の東にあり。

○津田村　服部村の內なり。

○最光寺　津田村にあり。一向宗。西本願寺の派。本尊阿彌陀、長一尺二寸。安阿彌の作。

○正光寺　同斷。

○眞念寺　東本願寺末。山にかゝりて寺あり。

○傳光院　錦織寺の末派。本尊品の四十八體佛。

○聞藏寺　佛光寺の末派。

○觀音堂　本尊長四尺。傳敎大師の作。

○つし原村　是服部村の內なり。

○法泉寺　つし原村にあり。一向宗。東本願寺の末派也。

○須原村　安治村の南にあり。

○虫生(ムシフ)村　木部村の北東にあり。

○虫生大明神社　虫生村の內にあり。祭禮毎年四月初の午日。

○稱名寺　同村にあり。一向宗。錦織寺の末寺なり。

○新莊村　服部村の東西にある村なり。

○八幡社　新莊村の內にあり。祭禮毎年四月十七日。

○西光寺　同村にあり。一向宗。佛光寺の末寺也。

○佛願寺　同村にあり。一向宗。西本願寺の末寺也。

○川邊村　新莊村の端村なり。

○淨寶寺　川邊村にあり。錦織寺の末派なり。

○橘村　新莊村の西南にあり。

○鹿島大明神社　橘村の內に有。祭禮毎年四月上の辰日。

○西方寺　同村にあり。天台宗。

○眞願寺　同村にあり。一向宗。西本願寺の末派也。

○誓願寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末派也。

○富田村　橘村の西南にある村なり。

○新宮大明神社　富田村の內にあり。祭禮毎年四月上の申の日。

○立光寺　同村にあり。一向宗。西本願寺の末寺なり。

○圓光寺　同村にあり。同斷。

○萬緣寺　同村にあり。淨土宗。本尊藥師。

○圓福寺　同村にあり。本尊觀音。

○三寶寺　同村にあり。本尊地藏。

○水保(ミホ)村　富田村の西にある村なり。

○十禪師社　水保村の內にあり。祭禮毎年四月上の申の日。

○正光(ヒカリ)寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末派也。

○立增寺　同村にあり。法華宗。

○觀音寺　同村にあり。坂本西敎寺の末寺也。

○竹蓮寺　此寺に藤あり。相傳。賴朝此藤を以て、鷹の鞭を作るといふ。

○中野村　是水保村の端村なり。

○壽福寺　中野村にあり。天台宗。

○今濱村　水保村の西にあり。

○法花寺　今濱村にあり。

○日像上人塚　今濱にあり。

○妙泉寺　同村にあり。法花宗。

○法圓寺　同村にあり。一向宗。東本願寺の末派也。

○願立寺　同村にあり。一向宗。西本願寺の末派也。

○幸津川村　今濱村の北にあり。

○正一位下新川大明神　幸津川村にあり。祭禮毎年四月上の辰の日。此神社古昔よりある社と見へて、【三代實錄】に、仁和元年に新河上の社としるし給ふを見れば、野洲村の上の社と俱に、其時代よりありしと見へたり。

○東光寺　同村にあり。天台宗。

○淨宗寺　同村にあり。一向宗。西本願寺末派也。

○淨念寺　同村にあり。同斷。

○專正寺　同村にあり。同斷。

○八崎　野村、安治、須原、堤、吉川、小濱、幸津川、今濱、出崎を云といへり。

近江國輿地志略卷之六十九　終

近江國輿地志略卷之七十

臣　寒川辰清編輯

神崎郡第一

夫神崎郡の名は、郡中に神崎村あるによつて名とす。たとへば志賀郡中に志賀あつて郡名とするがごとし。神崎村と云は、神社あるの湖岸なるゆへに名づく。神崎村今は甲崎村といふ。【日本紀】の天智紀に、神前の文字に作る。當郡西は湖水東は愛智郡なり。巽は伊勢の國界釋迦嶽に隣、南と坤とは蒲生郡に接し、又地略鯨魚の形に似たり。西の方伊庭山福堂川南神崎邊南北廣し、今代山上池田の邊漸細して帶のごとし、釋迦嶽の邊に至て亦少く廣し、江戸街道より西を下出といふ。下の郡と號す。江戸街道より東を上出といふ上の郡と號す。

○愛智川（エヂ）　驛は愛智郡にあれども、川は神崎郡に屬す。大河にて急雨に滿水の時は越がたく、愛智川の驛より三里川下に川の北に新海村あり。南に福堂村あり。湖水にかゝりて船渡にて越なり。往還の大路よりは三里の損あれども越に利あり。福堂村へは小幡より三里あるなり。此川源は和南川なり。和田村の北に於て中村川と合し、本庄村田付村の南を經て、福堂村新海村の中間を過て湖に入なり。

○稻葉莊　甲崎村・西河村・田原村・出路村・普光寺村・稻葉村・三屋村・小川村を言。其中小川村半は栗見の莊にかゝれり。

○甲崎村　神崎郡極西北の隅湖邊にして、犬上郡の界なり。甲崎もとは神崎なり。當村あるを以て郡の名をも神崎郡とはいふなり。神の字かむとよみ、かうとも訓す。むとうと横音にて、うくすつぬふむゆるう、むとうとは通ぜり。故にかうといふ。たとへば山城に神無杜神南神足等あるがごとし。後世訓を取て文字を誤、神崎村を甲崎村に作る。寛永年中以來の事なり。寛永以前迄の記錄皆神崎村に作る。さて又此村を神崎と號するいはれは、此村愛智川尻の洲崎なり。其崎に神社ましますを以て、神崎村といふ。今はその神社も何れの地へかうつして、しるものなし。恨べきの甚しきものなり。崎は本碕の字の轉訛せるなり。俗專碕を崎に作る。順【和名抄】に神崎の鄕名をのす。今詳ならず。

【藻鹽草】

神崎の荒磯も見えず波立ぬ、いつこよりゆかんよき道はなし

○和南川（ワナミ）　源四。一つは菅尾の瀧より流れ來、佐目村の北に至て杜葉尾川及君畑川に合して、和南川となる。一は水晶嶽より出、盤曲して西に流れ、和南村飯高山の北に至て三流一に合して西に流るゝなり。亦一は猫田川の末流なり。山上村の東に至て悉く一流となり。西に流れ川（カハ）合寺村堺村北村の北を過き、北に折、西に轉じ愛智川となつて湖に入なり。

○杜葉尾川　源三。一は蒲生郡水晶嶽より出づ、北に轉じ西に流て、杜葉尾村の東に至る。一は釋迦嶽に出て、西にながれ杜葉尾村の東に至る。一は御池嶽に出て、曲折南にながれ杜葉尾村の東に至て三流一となり、杜葉尾村の北を過君畑川と合して和南川となり、愛智川となつて湖入なり。

○西河村　甲崎村の東にある村なり。此村の中愛智郡神崎郡の界にして、則割郡の時二村となり。一村は愛智郡に屬してあり。

○金泉坊屋敷跡　西河村にあり。土俗相傳。金泉坊は山徒二十八坊の其一員にて、此地に居住し。亦高島郡にも屋鋪所領ありしといふ。因て按ずるに、伊黑法泉坊のことにや。法泉坊の事は高島郡の條下にしるす。

○田原村　西河村の東にある村なり。

○子安地藏堂　田原村にあり。其開基詳ならずといへども年久く、古昔より婦女難產に及び、亦は常に祈るに、必安產ならしめ一人もあやまちあることなし。故に子安の地藏菩薩と稱し。甚靈驗あらたなり。

○出路村　田原村の東南にある村なり。この村の中に、郡界あり。今はわかれて二村となり、一村は愛智郡に屬す。

○稻葉村　出路村の東南にある村なり。此村稻葉莊の莊の本なり、

○壽福寺遺址　稻葉村にあり。古昔は大伽藍なりといへども、今はそれともだにもなし。此寺の開山の僧の像なりとて傳來す。木像にして後に文字あれども、年舊墨痕もきゑてたしかに見えず。何の時代といふこと分明ならず。

○稻葉大明神社　同村にあり。祭神詳ならず。或は猿田彦の神にして、白髭大明神の分神なりといふ。

○小川村　甲崎村の南東にある村なり。此村半は栗見の莊にかゝれり。或は小河の文字につくる。下河邊庄司行平が末葉此地に住して。小川左京進と號し。永和の頃公方

家に奉仕す。

○弘誓寺　近江七弘誓寺の一也、西本願寺の末寺。

○三屋村　小川村の南東にある村なり。

○栗見北莊　栗見莊廣し、故に自南北に分ち、北の方を栗見の北莊といひ、南方を栗見の南莊とはいふなり。栗見北莊は本莊村・田付村・新海村を云なり。

○本莊村　稻葉村の西にある村なり。此地本栗見の本莊なり。故に本莊の名有。建武の比本莊次郎左衞門藤原滿宗功士也。代々此地に住す。子孫武勇有。事は人物門に出す。

○二宮權現社

○十禪師社　俱に本庄村にあり。所謂栗見大社五社の內にして、祭神日吉二宮權現十禪師の神なり。

○經堂

○觀音堂　同處にあり。本尊觀世音なり。

○田付村　本庄村の西にある村なり。土俗相傳。此村田村と號す。後田付村に改む。永祿年中の舊記既に田村と記すといふ。世に云、鐵砲の達人田付兵庫介景澄といふは、此地の產士なり。事は詳に人物門に出す。

○若宮八幡社　田付村にあり。栗見五社の第二座也。祭所の神應神天皇仁德天皇なり。

○士葬司　同村にあり。土俗相傳。淳和天皇の皇子房明親王の廟所なりと云。仁明天皇の承和十二年の秋親王事に罪せられて、薩摩に遠流せらるべき、公卿僉議あり。然れども天皇の御意忍びざるの事あり。薩摩の名變改なりがたきを以て、當國愛智郡薩摩村に流さる。親王則當村に來り、若宮八幡宮の祠官となり給ふ。歸泉以後葬奉る處を土葬司といふ。此地に限らず親王の御廟を土葬司といふ。當國高島郡饗庭親王の御廟をも土葬司といふといへり。此說信用なしがたし。然れども先こゝにしるす。

○新開村　或は新海村の文字にも作れり。田付村の西にして、則愛智川の末なり。相傳。古昔河尻に深淵あり。屋龍すむ。弘安年中佐々木泰綱の時黑井氏覺懷此地に來り、右の屋龍を亡し、淵を埋田地となし、新開村と號す。此折にひらける村なるを以てなり。則自も新開氏と稱す。永正の比、こゝも村家となり繁昌す。新開氏の事人物門に出す。

○栗見南莊　是栗見の莊南の方なり。栗見南の莊と云は、栗見新田村・福堂村・乙女濱村・新村・阿彌陀堂村・小川村・宮西村なり。此內小川村半は稻葉莊に屬せり。

○栗見新田村　是近年の新開の地なれば、新田村と號す。古昔栗見大宮神領の地なり。往古天神此濱に始て鎭座ます。則此地を浦の御前と云。今の社の舊地あり。中世民家となる。夫故新田村の名なり。

○福堂村　乙女濱村の北にある村なり。

○野島が崎　福堂村にあり。古歌によめる處の、野島が崎是なり。山にあらず。山續の島にもあらず。野原の濱にして洲崎なり。【萬葉集】に玉藻刈乙女を過て夏草の、とよめる此地の事なりと云。則乙女濱村福堂村の南にある村なれば、此のごとくよめるなるべし。

【六百番歌合】　顯昭

夏草の野島か崎の朝露を、分てそきつる萩の花より

【玉吟集】　俊成

波にあらふから錦とも見ゆる哉、野島か崎のあき萩の花

【建保百首】　行家

白妙の波の花こそ亂れつる、野島か崎の秋のころも手

【夫木集】　知家

小萩咲野しまか崎に風こえて、ゆふ散なみにのこる月影

【千載集】　源雅光

哀なる野島か崎の菴かな、露おくそてに波もかけゝり

【新古今集】　七條大納言

こととはん野島か崎の海士衣、波と月とにいかゝしほるゝ

【續拾遺集】　順德院

乙女子か衣のすそやしほるらん、野島かさきの秋の夕露

【玉葉集】　人丸

近江路や野島か崎の濱かせに、妹か結びしひも吹かえす

【風雅集】　顯輔

近江路や野島か崎の濱風に、夕波ちとり立さわぐなり

○栗見大宮　同村にあり。祭所天滿大自在天神なり。栗見の天神とも號し。長濱の天神とも云。或は上山の天神ともいふ。相傳。天慶年中高島比良山の邊より、金光ありて湖上を東へ渡り、勝堂の岩窟に飛入一夜の內松樹梢を竝繁茂す。一條院の御宇神詫によつて社を建立すといふ祭禮每年四月寅卯の日なり。

○乙女濱村　福堂村の南にある村。乙女濱村の事【萬葉集】に出て、福堂村の條下に載。

○新村　乙女濱村の東南にある村なり。或は志村に作る。
○河南村　阿彌陀堂村の東にあり。
○阿彌陀堂村　新村の北東にある村にて。愛智川の端也。
○垣見莊　此莊は林寺村・體光寺村・猪子村・垣見村・佐野村・今村・種村・長勝寺村・河曲村・簗瀬村・中村・小幡村・和田村・神田村・服部村をいふ。或は佐野の莊とも此莊をいへり。順【和名抄】に垣見の鄉を載。
○林寺村　體光寺村の南にある村なり。
○體光寺村　林寺村の北にある村なり。
○猪子村　林寺村の南西にある村なり。
○天滿天神社　猪子村にあり。土俗猪子の天神といふ。祭神菅丞相の靈なり。當莊の產土神なり。德永法印壽昌勸請し奉る所なり。
○垣見村　體光寺村の東北にある村なり。土俗或はいふ。垣見村は垣見莊の中の村なり。此垣見村是則古歌に詠する處の花垣の里なりといへり。

（花垣の里）

【新續古今集】　俊光朝臣

白妙のゆふ取して、神祭る、卯月に匂ふ花垣のさと

○佐野村　垣見村の南東にある村なり。或は此村の邊を八條の莊と善勝寺の緣起にあり。今古昔の所傳に從ひ、垣見の莊の內に記す。然れども順【和名抄】に垣見の鄉を載れば、八條の莊なることもしるべからず。【萬葉集】に師名立都久麻左野方といへるは、此左野のことなり。
○善勝寺　佐野村にあり。禪宗。曹洞派能登國惣持寺の塔頭芳春院の末寺なり。其始聖德太子草創の靈場にして、良正上人の開基なり。相傳。古昔此地石窟の中に彌勒の靈像を得て、太子彫刻の觀音と、もに兩本尊とし、釋善寺と號す。田村麿東夷征伐以後此地に來り寺を再興し、千石餘の寺領を寄附し、東夷によく勝たるの由緣を以て釋善寺を改て、繖山善勝寺と號す。其始良正上人開基の時は天台宗なり。遙に後曹洞派の禪宗となる。開山日辰文現大和尙なり。相傳。往古は大伽藍にして堂舍軒をならべ、七十餘の坊舍繁榮せしとかや。今も大門先へ橫幅三間に五十間餘石垣の殘二町餘あり。是往古の大門通ありといふ。其外に橋あり、四橋と號す。是も往古よりの橋なりと云。此のごとく結構なりしに、織田信長の兵火にかゝりて、悉烏有となる。今存在する處は
○本堂　三間半に五間。本尊は彌勒菩薩像、長二尺七寸。
○觀音堂　二間四面、本尊十一面觀音、長三尺九寸。聖德太子の作也。

○鐘樓　一丈四方。
○庫裏　二間に四間半。
○浴室　六尺に二間。　○門　六尺に二間。
當時山林除地南北山高百六間、東西下通り百十六間、平地東西十八間南北十二間。
○佐生村　佐野村の東にあり。
○古城址　佐生村西の嶺にあり。四至の石垣障池等今に存在す。新日吉と佐生山の間にあるものは、古城址に非ず。後藤氏の下屋敷なり。此地は後藤但馬守賢豐居城の跡なり。後藤氏の始末人物門に載。
○淨土寺　東本願寺末。
○今村　種村の西にある村なり。
○地藏堂　今村にあり。本尊地藏菩薩。
○種村　今村の東にあり。土俗相傳。此村始て五穀の種を生ず。故に村の名とすといふ。神崎郡新海村の鄉士木村源太郎が郡分の書に曰。按ずるに、天智天皇三年江州栗太に始て穀の種生ずると記に出。此里を郡と誤たるなるべし。當國には外に種村と云村これなし。此地靈境なりとて伽藍を建立し、種子山善敎寺と云としるせり。臣按ずるに、此郡分の書十二卷あり。松居親且が跋ある書なり。實錄にあらず。信疑半せる書なり。五穀の種天智の朝始て此地に生ぜる故に、種村といふの說信用しがたし。【神代卷】曰、軻遇突智娶埴山姬生稚產靈、此神頭上生蠶與桑、臍中生五穀云云、是我邦の五穀の種神代よりあるの證なり。此地を種村と云は五穀の種始て出たるにはあるべからず。何その種を始て此地に蒔播せしなるべし。五穀の種天智の朝に始てあらば、天智の朝より以前の人如何して命性をつなくべけんや。附會の說にくむべし。
○善敎寺　種村にあり。初種山善敎寺と號す。妙心寺派の禪寺なり。寺記曰、初種山善敎寺者、扶桑開土地、初下五穀之種正始于此地、故如此山號等也、天平年間行基菩薩開闢七堂伽藍地也、昔日有寺領、山門派下也、數度兵火爲烏有僅今有其跡、蓋本尊觀世音者行基作也云云、
○長勝寺村　種村の南東にあり。相傳、此一村悉く長勝寺の界內なり。故に今村の名とすと云。
○長勝寺　長勝寺村にあり。如意山長勝寺と號す。臨濟派の禪寺なり。寺記略曰、神崎郡長勝寺山を如意と號する事は、昔帝王志願ありて、藥師の像を禱る。其願卽如意なり、故に如意山と號す。勅して此山を開く。本尊藥師如來の像、慈覺大師の作にして、長二笏餘、山の西北の麓に宇賀の社あり。寺社併せて五百石の寺領にして、其繁昌の台宗の寺院なりしに、天正文祿の間數度の兵火にかゝ

つて、悉烏有となる。承應の初妙心派下の僧桂香山禪師此山を再興し、大に淳陀正宗の風を唱。桂香山禪師は瓦屋寺中興の祖師也。

○河曲村　長勝寺村の南東にあり。

○簗瀬村　河曲村の東にあり。

○中村　簗瀬村の南にあり。

○小幡村　中村の東南にあり。中仙道の宮路也。土俗相傳。小幡村は元莊の名にして、種村の邊まで皆小幡の莊なりと。順【和名抄】に小幡の鄕名を載たり。時世の沿革にて、今は莊の名にもあらず。鄕の名にてもなし。

○小幡大明神社　小幡村にあり。祭神南都春日社と同體也。

○春日靈水　春日神社の界内にあり。甚以清潔の水なり。

○蠭橋舊蹟　小幡村の内にありといへども、その舊蹟詳ならず。

【堀川百首】　兼昌

わきもこに近江なりせはさりと我、ふみも見てましとゝろきの橋

【夫木集】　覺盛

旅人も立川霧に音はかり、聞わたるかなとゝろきのはし

讀人不知

古歌に

あられ降玉のうすへてみるはかり、しはしな踏そ蠭の橋

○和田村　簗瀬村の北東にあり。

○傘松　和田村にあり。古蹟なり。古歌に

秋風の吹來る峯の村雨に、さして宿かる和田のかさ松

○和田山　和田村にあり。

【新六帖】

和田山の尾上つゝきの高萱に、伏猪ありやと人とよむなり

○古城址　和田山にあり。山城なり。和田山の城と云是なり。六角政頼三男和田出雲守高成、是神崎郡和田氏の元祖也。永祿の亂に馬淵山城守家綱・同兵部少輔建綱・同右衞門太夫賢久・同定房・家盛・松原彌兵衞賢治・木村筑後守重孝・宮木右兵衞太夫賢祐・和田嘉助・同新助等籠城し甚防戰す。然るに箕作の城没落によつて、佐々木義弱の下知によつて、和田山の城を開く。甲賀に參陣す。永祿十一年九月なり。

○神鄕村　和田村の西北にあり。土俗相傳。宇賀大明神鎭座ある故神鄕の名ありといひ。或は神鄕村にて神崎村と號せる故もあり。

○宇賀大明神社　神鄕村にあり。長勝寺村の西北の山麓なり。則森村・斗村・長勝寺村・佐生村の産土神なり。祭神宇賀御魂命。【延喜式】神名帳に所謂乎加の神社是なり。土俗相傳。中世太丸といふ者あり。大和國泊瀨の人なり。此地に來川勝氏の女を娶男子を生。家殊に貧し。毎に宇賀の神を祈る。或夜夢みらく、宇賀の神我家に來ると。覺て後日々家富榮へ、太丸長者と稱す。太丸こゝにおいて神祠を建といふ。

○服部村　神鄕村の北にある村なり。愛智川筋の向ふ、稻葉村の東也。今多く八鳥村に作る。

○本專寺　東本願寺派。金堂弘誓寺の末あり。

近江國輿地志略卷之七十一

臣　寒川辰清編輯

神崎郡第二

○伊庭莊　伊庭村・能登川村・安樂寺村・須田村・以上四村を云ふ【參考保元物語】に爲義に伊庭莊を賜ふ事見えたり。其後子孫の領たり。

○伊庭村　安土山の北東にあり。射術稽古のために的を射る。其的をかくる釣皮の代りに土を築く。是を堋といふ。安土の義にも通ひ、あつめ土の中略とも云。南に此安土ある故に此地を伊庭といふと。射場と伊庭と通る故に名づくるなりと。この說信用しがたし。

○御殿跡　伊庭村にあり。相傳。古昔東照神君及台德君御上洛の爲に、この地に旅館を建置しめたまふ。其後御殿をひかせ給ひ、今は其跡のみなり。廣さ六十間に二十五間許り、山よせ封疆表通り高さ六尺許の石垣今にあり。

終

○伊庭氏古城址　同村にあり。伊庭氏は佐々木七代の屋形經方四男豐浦冠者行實子孫代々居城の跡也。後伊庭信濃守賴隆代にいたつて滅亡す。

○伊庭山　伊庭莊内の山なり。たかさ八町ばかり、桑峯とは少しく切れ山連續せず。

○八王子神社　伊庭山峯頭にあり。祭る所の神日吉八王子の神と同體なり。

○牛頭天王社　伊庭山の麓七八町にあり。祭る所の神素盞烏尊。山城國祇園牛頭天王と同體なり。則伊庭莊中の產上神なり。

○多武大明神社　伊庭山麓にあり。

○能登川村

○安樂寺村　伊庭村の北に在。安樂寺ある故に名とす。

○安樂寺　安樂寺村にあり。繖山無量院安樂寺と號す。聖德太子開基の靈地なり。比叡山横川楞嚴院惠心院の末寺なり。本尊千手十一面觀音の像。聖德太子作あり。寺記にいはく、古昔聖德太子近江國において四十八ヶ寺院を建。其中當寺を以て最初とし給ふといへり。

○大德寺　同村にあり。長福山大德寺と號す。寺記にいはく。三百餘年以前大方源閑禪師草創の地なり。始洛東東福寺の末派なり。應永年中將軍義持衆僧の齋粮をあたふ。佐々木の族伊庭の莊主修理太夫和幸大檀那たり。開闢以來世替り時うつりて、寺產悉壞れ僧侶居せず。封境の間多田疇となる。但殘る所のもの大將軍の書一通、祖師眞相一幅、當寺の清規一部儼然として存す。其餘の佛像他所に散失す。延寶年間印密雲再興す。密雲は法を瓦屋桂香山禪師より嗣がるゝが故に、今妙心寺の派下となる。大祖大方和尙の傳記は【扶桑僧寶傳】に見えたりと云云。

○五十餘士松　豐浦伊庭の界にして、則蒲生神崎二郡の界にあり。相傳。中世伊庭莊内須田村にて、界目を爭論し鬪戰におよび、双方五十餘士戰死す。こゝにおいて兩郡の界に埋み、しるしの松をうへて、五十餘士の松と云。

○須田村　安樂寺村の南にあり。

○山前五箇莊　川並村・金堂村・市田村・北莊村・七里村・石馬寺村・位田村・石川村・五位田村・下日吉村・町屋村・以上十一村をいふ。相傳。五ヶの庄と號する事は、始川並・金堂・市田・北莊・七里の五村觀音寺山の前に並べる村故、自ら山の前五ヶの莊と呼り。繖山の前の五ヶ村といふことなり。繖山は觀音寺山のことなり。石馬寺村以下後に六村を加へて、今は十一村となれり。

○河並村　五ヶ莊の中にして、南面に有村なり。

○堂葬司廟　河並村の中塚本村にあり。塚本と號する事、此堂葬司の廟有故なりと云。土俗云。堂葬司とは親王の御廟のことなりといへども、信用しがたし。虛說なるべし。有馬王子の廟なりと云。結松と號し松一株有れとも、心得がたし。有馬王子結松は、紀伊の國岩代の事にて、こゝの事にはあらず。牽合附會なり。

○大部明神社　同村にあり。祭る所有馬王子の靈也といふ。いまだ詳ならず。或は有馬王子は川島王子の事也。川島王子始高島郡に住給ひ、後此地に來り給ふといふ。正しき證なければ信用しかたし。

○乾德寺　同村にあり。淨光山乾德禪寺と號す。妙心寺の末寺なり。聖德太子の建立。推古天皇二甲寅の年なり。本尊十一面、千手千眼の觀音。行基菩薩の作なり。則繖山觀音正寺の山麓なり。

○金堂村　河並村の北東にあり。相傳。聖德太子當村に金堂を御建立あり。依て村の名とすといふ。

○淨榮寺　金堂村にあり。清光山淨榮寺と號す。寺記に云。聖德太子此地に憩息し玉ふ。不動坊といふ僧、はなはだ尊敬し、太子に遇する殊によし。相與にはかり計て寺院を建立し玉ふ。始に金堂を建玉ふ。依て村の名とす。不動坊、堂成就の後曾て行方しらず。太子こゝにおいて不動明王の化現なる事を知つて、不動院を建立し給ふ。星霜うつりかはつて、堂舍佛閣烏有となる。中興寶治元年淨榮法師なり。是より淨土宗となる。金堂清光山淨榮寺と號す。

○大宮天神社　金堂村にあり。祭所の神、菅原相の靈なり。觀音寺の城より艮隅にあたる。依て守護神として祭り奉る。土俗は艮堂といふ。中世あやまり附會して金堂は聖德太子の建立の地なりと牽合せり。三月初の午の日より二の午まで大祭禮なり。今は中絕す、五月流鏑馬八月十五日相撲あり。

○市田村　金堂村の東北にあり。

○北庄村　金堂村の北にあり。

○七里村　金堂村の西にあり。九の里・五の里・十二里村等とおなし事は、初卷鄕村保里のところに載す。

○位田村　北庄村の東西にあり。

○石馬寺村　市田村の南にあり。村中に石馬寺有。以て村の名とす。

○石馬寺　石馬寺村にあり。繖山石馬禪寺と號す。寺記にいはく、推古天皇二甲寅の年聖德太子近江國の靈場を撰て伽藍を草創し給ふ。古に所謂良馬は地道に靈なるものなりと。是に於て、駿馬に乘りかれが行に任せ玉ふに、果してこの地に止る。太子此地の靈なるを見て、一寺を草創し、繖山石馬寺と號し給ふ。蓋し太子の乘たまふ所

の駿馬石となる。因て寺號となす。其石なを存して、今樓門池中にあり。當寺本尊丈六の阿彌陀、惠心の作也。十一面觀音大士の兩尊は聖德太子の作也。各長六尺、大威德明王四天大王各七尺餘、鳥佛師の作。千手千眼大士、聖德太子の作、長一尺餘。小野篁作閻羅大王の像山麓に安置す。はなはだ結構華美の精舍なりしに、星霜年つもりて、おの〳〵廢壞す。正保元年雲居師中興す。東照神君鈞命あつて、山林界内諸役免許なさしめ給ふと云云。塔中慈王院・東光院・地藏院なり。臣按ずるに、馬の石となること理において有べからず。彼望夫石と同日の談なり。尚かゝる辯論別卷にしるせば今こゝに略す。

○雨明神社　石馬寺の後峰にあり。年旱する時は雨を祈る。しるしあらずといふ事なし。

○石川村

○五位田村

○下日吉村　七里村の北にあり。舊き證文には、新日吉とあり。今は專ら下日吉といふ。

○正瑞寺　下日吉村にあり。古昔は天台宗。今は禪寺となる。中興黃檗派梅嶺和尚なり。

○忠善寺　同村にあり。

○町屋村

○建部荘　新堂村・三股村・山本村・野村・奥村・木流村・平坂村・中村・南村・北村・上日吉村・瓦屋寺村・濱野村・堺村・八日市場村、以上十五村を云。是昔建部神社の神領也。故に今に建部荘と號すと云。

○新堂村　市田村の東南にあり。

○三股村　新堂村の北にあり。

○山本村　新堂村の南にあり。

○野村

○奥村　下野村の北にあり。

○木流村　新堂村の東にあり。

○法蓮寺　木流村にあり。開基眞盛上人なり。

○建部傳内屋敷跡　木流村にあり。建部傳内賢文は、佐々木の族にして能筆なり。今に傳内流と稱するものは、此人の下流なり。其傳詳に人物門に載す。

○下野村　木流村の北にあり。

○弘誓寺　下野村にあり。報身山弘誓寺と號す。淨土宗。建部家代々の菩提所也。

○平坂村　山本村の東にあり。

○小松寺　平坂村にあり。本尊觀世音。相傳。小松重盛公の建立也と云。曾て重盛公天下に六十六ケ寺を建立して、平家の追福を祈る。當寺も其一員なりといふ。重盛公

性質美なりといへども、教なきゆへ育王山へ黃金を贈り、國の費用をいとはず。多の寺を建。惜むべきのみ【日本史】にこれをそしれり。

○中村　平坂村の南にあり。

○南村　瓦屋寺村の東にあり。

○北村　伊野邊村の東にあり。

○伊野邊村　北村の西にあり。

○建部大明神社　伊野邊村にあり。祭る所栗太郡建部の神と同體なり。土人專ら新宮と號し奉る。

○上日吉村　伊野邊村のに南あり。日吉社有に依て名とす。猿樂者流の日吉太夫と號するもの本此地の產也。今に屋敷跡等あり。

○日吉山王權現社　上日吉村に有。祭神志賀郡坂本日吉山王權現と同體なり。

○瓦屋寺村　上日吉村の南にあり。山上に寺有。依て名とす。

○瓦屋寺　瓦屋寺村の山上に寺あり。聖德太子建立の舊跡なり。太子始攝津國天王寺を建立し給ふ時、此山の土を取て瓦を造り給ふ。其土をとりし地を濱野澤といふ。此山の麓也。其地に寺を建立し、瓦屋寺と號し玉ふは此故なりと云。尤其時の瓦を土中に埋給ふといふ。本尊觀世音。疱瘡を守り玉ふとて、土俗芋を串に貫きて佛前に献ず。當時禪宗。妙心寺の末寺なり。

○濱野村　瓦屋寺の南の山麓にあり。是古昔聖德太子瓦土を取玉ふ地なりといふ。

○堺村　北村の南東にあり。

○八日市場村　濱野村の南にあり。蒲生郡よりの路筋にて、毎月八日に商賈群集して市をなす。故に村の名とす。甚繁昌の處なり。此市も聖德太子の始玉ふ所なりと云。治承年中佐々木四郎高綱洛東白川より鎌倉へ下向の時、八日市の市に出る喜助といふもの、馬を奪ひ取、彼喜助を殺して其馬に乘り、鎌倉へ下りしといふこと、【異本盛衰記】に見へたり。然れば其比より專ら此市ありしと見えたり。

○柿御園荘　土俗相傳。淸和天皇の兄惟喬親王當國君が畑にまし〳〵けるとき、此邊に柿を植て御園となし玉ふ。故に柿御園鄕とも、柿の御園荘ともいふと云。（一本の頭註【日吉神領文書】江州三園荘三旬御供とあり）

臣按ずるに、柿の御園は文字の轉誤にて、垣の御園なるべし。親王皇子の御座所の四至を御垣といふ事、珍らしからざる義なり。君が畑に親王御座あらば、いかにも垣の御園とも、御垣の園ともいふべき事なり。今も志賀郡

三井寺の邊に垣の内村といふ所あり。山城宇治の平等院の傍にも垣の内と號する地あり。皆御垣の名の殘れるなるべし。三井寺にも平等院にも、古昔は親王門跡おはしますの故なり。柿御園郷上の郷六村、中の郷六村、下の郷六村、合て十八村といへども、當時新田等出來て二十一ケ村となれり。愛智川の端に添て、伊勢の國界迄此庄内なり。

○川合寺村　堺村の南東にあり。

○神田村（シンデン）　川合寺村の東南にあり。往古は神田とて、一ケ國に二三ケ所の御田有て、大神宮へ初穂の稲を献ず。疑らくはこの遺名なるべし。

○御川邊神社　川合寺村・神田村の中間にあり。祭神大己貴命なり。相傳。神田ある處には必大己貴命を祭り奉る。是五穀を守る神なればと云り。御川邊の御名は土俗言也上人の首流れ止る故、御首と號し神に祭るといへるは、例の僻説荒唐也。此社の邊は愛智川の水上にして、和南川の邊なり。此川の北東の源は則君が畑なり。彼親王皇居ありしゆへに、此邊を惣して御園と號するゆへ、川の名も御川と云。其御川の邊にまします御社故に、御川邊の神社と號し奉る事明らけし。

○若松社　同所にあり。祭る神天滿天神也。

○若松杜（モリ）　若松社の邊を云。

【堀川百首】　顯仲

聞にさへすゝしくなりぬ若松の、杜の梢の風のしらべに

【千載集】　永範

すへらきのすへ榮ふへきしるしには、木高くぞなる若松の杜

【夫木集】　匡房

二葉なる若松の杜年を經て、神さひんまて君はましませ

○外ノ村　川合寺村の東にあり。

○上野村　川合寺村の南にあり。

○廣間村

○妙法寺村　上野村の東南にあり。古昔妙法寺ありしと見えたり。此邊を高屋の郷といへる歟、順【和名抄】に高屋の郷名をしるせり。【源氏物語】常夏の卷に曰、妙法寺の別當大德と云云。同【湖月抄】及首書曰、妙法寺は近江國神崎東の郡高屋の郷にあり。此寺邊を以て妙法寺村と號す。本尊觀世音なりと云云。

（高屋の郷）

○下り松　妙法寺村山中へ入の長路の傍にあり。古へより俗稱するところ名木なり。

○高麗寺村　【日本紀】天智紀曰、四年春三月以百濟百姓男女四百餘人、居近江國神前郡、三月癸卯是月給神前郡百濟人田云云、是等を以て見れば、百濟人寺を建立せし故、自高麗寺といひし成べし。其跡村となれるなるべし。

○中小路村　神田村の南にあり。

○如來村　五智の如來あり。因て以て村の名とす。近江源氏繁昌の時より、祈願所として繁榮。今に昔にかはらず。

○上村（カミ）　中小路村の東南にあり。

○林田村　上村の北東にあり。

○岡田村　寺村の南にあり。

○寺村　岡田村の北にあり。

○金代村（コンダイ）　寺村の東にあり。

○藥師寺　金代村にあり。

○池田村　金代村にあり。

○善光寺舊跡　池田村如來町にあり。此地に善光寺如來分身佛像あり。今念佛寺にあり。

○念佛寺　池田村にあり。淨土宗。本尊は阿彌陀如來。善光寺分身の如來なり。始如來町にあり、後當寺に移す。

○山上村　池田村の北に當れる村なり。是より東を畑の内と云。

（畑の内）

○年苗大明神社　山上村にあり。祭神詳ならず。

○山田八幡社　山上村にあり。

○相谷村（アイダニ）　山上村より遙東に當りてあり。愛智郡の界にして、無類の景地なり。愛智郡永源寺を絶景といふも、全く此相谷によれり。相谷或は藍谷につくる。熊原村も此村の内なり。

（藍谷）

○新宮大明神社　相谷村にあり。

○寶珠庵　同村にあり。

○臨濟庵　同村にあり。此庵に寂室和尚の座禪石あり。

○和南村　相谷村の南にあり。

○左目村　相谷村の東にあり。逆眞上人の左の眼、ながれ止る處なりといふ説は、虛妄の論、辯ずるに足らず。

○若宮神社　左目村にあり。

○雨明神社　同村にあり。御鉦の社とも云。相傳。空也上人所持の敲鉦なりと云。歳旱する時は此敲鉦を出して必ず祈る。雨ふらずといふ事なし、故に土俗雨の明神と云。

○姫ケ瀧　左目村より三里奥塔の尾にあり。

○萱尾村（カヤヲ）　左目村の東にあたれり。

○萱尾瀧　萱尾山中にあり。愛智川の源なり。巖石大石の疊なせる體絶景なり。

○瀧宮　瀧の傍にあり。大瀧大明神と云。祭神詳ならず。

○四所權現社　同所にあり。

○不動堂　同所にあり。別當本覺寺。
○龍女社　瀧の上にあり。岩の間一町餘り、瀧落るところ五段なり。鮎瀧、中の瀧、なめり瀧、かゝと瀧、とき落し瀧以上五段なり。俚歌に
　岩間より落る瀧津の水けふり、萱尾の里の賑ひにけり
○蓼畑村（タバタ）　萱尾村の東に當りてあり。中畑の南即ち川より南なり。
○杜葉尾村（ユツリヲ）　蓼畑村の東北にあたりてあり。
○千江瀧　杜葉尾村にあり。
○神明社　同村片瀬廻り道、八風の峠にあり。蓋伊勢近江兩國の界なり。
○釋迦嶽　神崎郡の東極にあり。

近江國輿地志略卷之七十一　終

近江國輿地志略卷之七十二

臣　寒川辰清編輯

愛智郡第一

夫以れは愛智の郡名既に舊く【三正史】【六國史】或は依智・惠智の文字に作る。今專ら愛智の字を用ゆ。愛にゑの訓あり、因て然り。尾張にも同く郡名あり。是はあいちと訓す。當郡西南と巽の隅は、神崎郡の界に交り。乾の隅は湖水なり。北と艮隅とは犬上郡の界に接り。東は伊勢の國界初田山に續けり。此郡は巽と乾とはながふして、艮と坤とは短し。いぬいは野良田・中下林村の邊にして、地形甚狹し。清水・西出の間に至りては、漸く廣し。鯰江・斧磨の間に及んでは大に廣く。蛭谷・木畑の間のごときは尤も狹きなり。

○日夏莊　當郡の西極、犬上・神崎の中間にある莊なり。此莊大莊にして、愛智・犬上の二郡にかゝれり。莊の義は初卷にしるせるごとく、郡限に有ことにもあらず。他國には兩國へ跨れる莊もあるなり。其とは詳に鄕莊保の條に載す。さて此日夏莊といへるは、上岡部村・下岡部村・上平流村・下平流村・野部村・塚村・金田村・出路村・西川村・石寺村・南町村・以上愛智郡なり。北町村・島村・寺村・中澤村・妙樂寺村・泉村・筒井村・安田村・三屋村・五增田村・須越村以上は犬上郡なり。合て二十二村を日夏の莊と云、犬上の村々は犬上郡の條下に記す。

○出路村　神崎郡の界にあり。神崎郡にも出路村あり。兩郡へ分れたるなるべし。

○高藤明神社　出路村にあり。或は河田の神社なりと。木村源四郎【郡分】の書には、河田の文字を用ひたり。高藤河田訓ちかければ誤たるにや、或は元河田といへるを、たちつてとの相通なれば、田をとゝ唱、又一轉して高藤の文字に作るにや。祭神詳ならず。此邊を河田の杜、河田の原なんど古歌にあれば、河田明神の義よろしと見へたり。土俗は專高藤の神社と云。祭る神多賀日向の神社と同體なり。日夏といへる庄號も、日向の御名によると云り、此事は貞治應安の記に出たり。

○河田社　高藤神社の邊をいふ。

【夫木集】　兼仲
　久かたの長閑きそらを今朝見れは、河田の杜は霞來にけり

○河田原　同所をいふ。

【夫木集】　俊成
　賤の女か河田の原につむ芹も、誰かためにと袖ぬらすらん

○西河村　出路村の西に有。

○下岡部村　西河村の北西にあり。

○上岡部村　下岡部村の東北にあり。

○塚村　上岡部村の北にあり。或は山塚村とも云。土俗相傳。天慶三年二月廿三日將門骸倒れしを、則收めて塚に築くともいへり。虛僞の說なり。採用にたらず。

○下平流村　塚村の東にあり。

○上平流村　下平流村の東北にあり。

○荒神山　上平流村・下平流村の中間に有。土俗相傳。古昔三寶荒神清水村に在り。其後此山に移す故に荒神山といふ。また土俗の說に此山を、平流山と云は、將門が首を埋み將軍塚と云、此將門の骸宇會川を平かに流れ來るの故、村を平流村と云。此山をも平流山といふ。俱に附會荒唐の說なり。中世當國四所の秘殿と云は、南三郡は韓崎、西二郡は白髭社、北三郡は木の本、中四郡はこの荒神山なりと云。【淡海錄】に叡山法師此山にて密法を修し、後還俗して中村氏某と名乘、二代目に秀吉生るといふ。例

の僞書採用にたらず。

○平流山奥山寺　荒神山にあり。寺記曰、行基菩薩御老年に至て、犬上郡四十九院の宿より始て、此所までに四十九の伽藍を建立し。奥山寺を奥の院とす。かるがゆへに、奥山寺の名あり。此山は天竺靈鷲山の一岳佛法東漸するによつて、大蛇脊に載て月氏國より日本に化來し、蛇は岩石に化し此山を戴き東に向、毎朝三度口を開き日光を呑。尾は西の洞にあり。峰に巖窟あり、鷲とび來つて蛇の勞を助ると云云。【三國傳記】にも此事あり。本尊大日如來。左右に文殊・不動を安置す。奥山寺とも假殿寺ともいふ。寺院四坊あり。千手寺・念佛寺・勝正院滿藏院也。

○大谷光明寺

○延壽寺　俱に荒神山にあり。西三ケの伽藍なり。

○石寺村　塚村の西北にあり。相傳。古昔石寺と號する寺ありしと云。今詳ならず。荒神山の西洞石寺の領に岩窟有。岩窟の中に殊勝の石佛有。古昔石寺の佛像なるにや。

○野部村　上平流村の南にあり。

○稻荷大明神社　野部村に有。祭神詳ならず。

○金田村　野部村の南にあり。

○内裏屋敷　金田村にあり。元正天皇御幸ありし行宮のあと有と云。

○彦富村　金田村の南にあり。

○南町村　上平流村の東にあり。

○林村　南町村の東にあり。

○海瀬村　林村の東北にあり。宇曾川の北岸なり。

○宇曾川　或は鷺川の文字に作る。源四ツ。一ッは斧磨山より出、南にながれ岩倉村を遶り、東出村の西を過で、吉田村の北を經て一流となり。一ッは觀音山を出、香庄中村の北を歴て一流となる。一ッは大覺寺山より出て、乾に流れ今在家村島川村を過て一流となる。一ッは矢守の邊に出て、河田村の東に至て四流悉一となつて、肥田村土橋村の北を歴て、海瀬村の南を遶り、林村の北を過、島村・南村の南を經て、湖水に入なり。

○中下村　林村の南にあり。

○野良田村　中下村の南にあり。

○河原村　野良田村の東にあり。

○長野莊　土俗專ら長野莊と云。順【和名抄】に長野郷を載たり。(一本の頭註に日吉神領注進愛智郡四箇郷長野小大國吉田小八木)

○中村　河原村の東南にあり。

○大領社　長野大領堂と號す。土俗は熊野權現と云。一說には天智天皇の皇子大伴の邪須羅麿を近江大領と云。

此靈を祭るにや詳ならずといへり。臣按ずるに、夜須羅麿は名は村主、都堵牟麿の子なり。志賀郡司といふ。長壽の人にて年一百十九歳なりと云。

○大門村　中村の東にあり。

○肥田村　大門村の北にあり。

○古城址　肥田村にあり。高野瀨備中守在城の址なり。大永年中地頭山の合戰に死す。其子備前守秀澄永祿の始淺井に與力す。佐々木承禎・義弼、巡り五十八町横十三間に堤を築き、宇曾川愛智川の水をせき入永祿三年四月三日より水攻にす。然るに五月廿八日大洪水にて、不慮に堤崩れ水忽に落て運を開く。其後永祿崩以後、蜂屋出羽守在城す。其後長谷川藤九郎在城す。

○三村　肥田村の北にあり。宇曾川の北岸なり。土俗或は三ッ村を以て、安食の庄とすれども非なり。長野の莊たり。

○高野瀨村　三ッ村の北東にあり。

○輕野神社　高野瀨村にあり。祭神詳ならず。或は天稚彦なりと。天稚彦は往昔八町四方宮地と云傳ふれども、今は一町四方ばかり。瑞驗威德の御神なり。しかれども【日本紀】神代卷に云、箕野岡簸の川上に御座すとあれば、其後此地に鎮座ありしか未決。一說に云、天若御子神と云是なりと。然れども【三代實錄】貞觀十三年一月十六日壬辰授近江國正六位上天若御子神從五位下云云、又一說に元山王權現の地にうつし給ふ、故に毎年三月上酉の日祭るといへども、朔日にあたれば前に申なし、次の酉の日祭日、故に先夜宮に山王を祭る說の由あり。さして書たるものもなし。

○帝釋寺　高野瀨村茂嘉山にあり。本尊帝釋天皇。相傳。古昔大伽藍にして佐々木定賴上坂鳥本合戰の時も、此寺に宿陣すといへり。帝釋天の像は殊に靈佛なりとぞいふ。

○澤村　三村の東にあり。

○枝村　澤村の東にあり。古昔は千枝村と云。今は略して枝村とのみよべり。相傳。古昔此地に藤あり。愛智の千枝藤といふは是なり。

【玉葉集】　俊光

うすくこく千枝に咲る藤浪の、さかり久しき萬代のはる

【續古今集】　定衡

榊葉の千枝の村にゆふしてゝ、豐のあかりの手向にそする

○中宿村　大門村の東にあり。

○沓掛村　中宿村の北にあり。

○石部神社　沓掛村にあり。磯部・土橋二村の產土神なり。【延喜式】神名帳に所謂石部神社是なり。往昔は祭事夥敷由申傳るといへども、今更慥に殘りたる書記なし。漸壹町四方の宮地にて小き宮殿あり。東に當りて纔三十歩許續く森あり。此中にも寶殿あり。俗云て小森といふ。毎年三月初酉の日神事とて、磯部村、土橋村にまつる。磯部村も昔は石部か。いまは磯部と通用す。土橋村も往古は土端か今は土橋と通用す。

○豐滿村　中宿村の南東にあり。

○豐滿大明神社　豐滿村にあり。十七村の產土神なり。祭神詳ならず。或は云。祭神は豐幡武尊と云。大社なり。界內廣く、神主禰宜多し。今は大破に及ぶといへども、樓門等今に存す。軍用の籤指物の竿必此神地の竹を用ゆ。いかなるゆへと云事をしらず。今愛智川驛に有所の寶滿寺は、元豐滿寺と云。當社の社僧なり。後に愛智川の驛へ引うつすといふ。

○野間津の池　愛智川往來より十四五町上に入、東圓堂村豐滿村の領境に小池有り。今のますの池とて用水の清水あり。是にてはなきの由。所の四夫の磨臼うたにも。愛智川とよのまずの池の水をのみ候死のすものも土俗云。平親王將門此處にて御身の穢を洗ひ、天照大神へ御暇申請、自ほろびたりし池なれば、か樣に申傳といへり。臣按ずるに非なり。將門身の穢を洗ひ、天照大神を敬する意少しもあらば、いづくんぞ朝廷を蔑如にして、叛臣とならんや。況相馬に朝を建、僞朝をなさんや。決していつはりの說なり。今將門が設し官名を、東百官と云自稱するもの多し。甚しき誤なり。僞朝の官名さへも中々けがれあり。忠直を存する者、尤忌恐るべき事なり。扨不飲水といふことは、地脉の然らしむる所なれば、毒あるもしるべからず。必忘れて飲べからす。紀伊國高野山の奥、玉川の水の類なるべし。弘法大師彼玉川の水の傍に碑を立て、わすれても汲やしぬらん旅人の、高野の奥の玉川の水。誠に弘法大師の賢德仰ぎ慕べし。この不飲の池にもかゝる碑たてまほしき事なり。

○東圓堂村　豐滿村の南にあり。

○愛智川村　中山道の驛なり。東圓堂村の西北にあり。

○北清水村　東圓堂村の東にあり。

○南清水村　北清水村の東南にあり。

○圓壽院　南清水村にあり淨土宗。安土淨嚴院の末寺也。

○常福寺　同村に有。淨土宗。安土淨嚴院の末寺也。

○中村　南清水村の東南にあり。清水中村と號す。荒神山の荒神もとこの地に有と云。

○長村　中村の東南に有。此村鑄物師多き村也。土俗相傳。豐滿明神高野より御うつりの時、此地の米を献上。夫より十符の菅薦二つに切り下さるゝ故、今に鑄物師五符のこもに包むと云ふ。

○小田刈村　長村の東南に有。

○大國莊　是又土俗大國の莊とはいへども、順【和名抄】には、大國の鄕の名を載。

○畑田村　南清水村の北にあり。

○光照寺　畑田村にあり。淨土宗。蒲生郡安土淨嚴院の末寺なり。

○平居村　畑田村の北にあり。

○苅間村　平居村の西にあり。

○矢守村　苅間村の北にあり。

○市村　矢守村の西にあり。

○磯部村　市村の北にあり。古昔は石部の文字。今はあらたむと云。

○河久保村　磯部村の北にあり。

○土橋　河久保村の西にあり。

○歌詰橋　宇曾川にかゝれる橋なり。

○目賀田村　川久保村の北東にあり。

○吉田村　目賀田村の東南にあり。

【詠藻集】　俊成

せく水も吉田の里にうゆる田は、かねて年へん陰に見へける

【名寄】　匡房

時雨せぬ吉田の村の秋おさめ、苅ほす稻のはかりなきかな

○島河村　矢守村の東北にあり。

○栗田村　島河村の東にあり。

○押達莊　土俗或は押達の鄕と云。然れども順【和名抄】に押達の鄕なし。

○勝堂村　平居村の東に有。或は庄堂の文字に作る。

○岩窟　勝堂村にあり。大石を以て岩窟を作る。四十八ヶ所あり。山々谷々にはかゝる岩窟ありといへども。平地にはまれなり。是も自然と上古の穴居の遺事なるべし。年々土民等こほちとれり。

○北菩提寺村　勝堂村の南にあり。

○押達明神社　北菩提寺村にあり。祭神白山權現なりと云。山林多く、大社なり。此神飛來り給ふ時、駒の足跡、森の北より流るゝ川の底に現存すと云。神道を知らざるの云なり。神主がもとに神記とてあれども、牽合附會採用

にたらざる物なり。文屋の綿麿より神主相續すと云。今の神主文屋大内藏と號し、下一色村に住居す。

○本持村　勝堂村の北東にあり。

○今在家村　本持村の東にあり。

○僧坊村　今在家村の東に在。

○平松村　今在家村の南に有。

○下一色村　本持村の南に有。

○中一色村　下一色村の南に有。

○西菩提寺村　北菩提寺村の南に有。

○抄子の池　西菩提寺村にあり。土俗相傳。旱魃の時此池へ抄子を入水をかき濁すときは、雨降と云。信用しがたし。

○南菩提寺村　西菩提寺村の南東に在。

○小池村　南菩提寺村の東南にあり。

○横溝村　小池村の北東にあり。

○蚊野荘　蚊野郷の名順【和名抄】に出る。今は蚊野荘といふ。

○香荘村　本持村の北にあり。

○仲村　香荘村の西にあり。

○南八木村　香荘村の東にあり。順【和名抄】に八木の郷名をしるせり。南北の八木村あれば、此邊にや。今未詳。

○宮後村　仲村の北にあり。

○北八木村　宮後村の西北にあり。

○安孫子村　北八木村の北にあり。

○安孫子大明神社　安孫子村にあり。

○西出村　安孫子村の北にあり。

○東出村　西出村の東にあり。

○東出明神社　東出村にあり。

○圓城寺村　東出村の北にあり。

○常安寺村　圓城寺村の東にあり。常安寺有故に村の名とす。

○常安寺　常安寺村に有。禪宗。高野永源寺の末寺也。

○竹原谷村　常安寺村の南にあり。

○岩倉村　竹原谷村の南にあり。

○北蚊野村　岩倉村の南にあり。

○南蚊野村　北蚊野村の南にあり。

○蚊野外村　北蚊野村の東南にあり。

○上蚊野村　蚊野外村にあり。

○松尾村　上蚊野村の東北にあり。

○金剛輪寺　松尾村にあり。土俗松尾寺といふもの是なり。寺記曰、近江國愛智郡松峰山金剛輪寺者、聖武天皇勅願所、天平九年丁丑行基菩薩開基、慈覺大師登山已來三密瑜伽道場、天下安全御祈禱所、開基後無炎燒、元和四年乙午已來今年迄百拾五年無開帳、本堂本尊聖觀音、行基菩薩一刀三禮御作。脇士四天王、傳敎大師御作、堂九尺間七間四面也、護摩堂不動明王、智證大師御作、三重塔大日如來慈覺大師御作、三間四面也、文殊堂本尊運慶作、三間四面、鎭守三所權現社加賀白山・熊野本宮・日吉十禪師三間四面、樓門二天運慶作、二間四面、鐘樓堂二間四面、坊數十八軒内一軒衆徒十七軒寺中外減罪所一軒、御朱印高三拾石、天台宗山城國一乘寺曼珠院御門跡御末寺也云云、

○斧磨村　松尾村の北に在。

近江國輿地志略卷之七十三

臣　寒川辰清編輯

愛智郡第二

○岸本荘

○上岸本村　鯰江村の西にある村なり。

○中岸本村　上岸本村の西にある村なり。

○下岸本村　中岸本村の西にあり。

○鯰江村　上岸本村の東にあり。或は森村と云。

○古城址　鯰江の城と云是なり。佐々木承禎籠れる城なり。

○中戸村　鯰江村の東にある村なり。

○妹村　中戸村の東南にある村なり。

○曾根村　妹村の東にある村なり。

○青山村　曾根村の北にある村なり。

○池尻村　中戸村の北にある村なり。

○池荘村　池尻村の南にある村なり。

○西福寺　池庄村にあり。淨土宗。蒲生郡安土淨嚴院の末寺なり。

○南花澤村　池尻村の東北にあり。

○花の樹　南花澤村にあり。北花澤村にも一株有。異樹なり。古昔より其名をいはず。唯花澤の花の木といふ。春秋の彼岸に花咲。夏梢にて秋葉落。相傳。上宮太子百濟寺を建立し、自誓て曰。吾建立する所の百濟寺、益繁榮相續して退轉せずんは、此異樹茂榮して、春秋二季の彼岸に花咲べしとて、供御の箸を二本南北二村花澤に壹本づゝ突さし給ふに、斯の如く繁茂すと云。今見に。古昔の樹中へ折入皮卷て木立出す。一圍二丈餘の大木なり。花は春咲て赤き花なり。山梨などに似よりたる木なり。秋は紅葉し佳觀なり。實生にも生せず。繼木にも生せず。奇木なり。

○北花澤村　南花澤村の北にあり。

○花樹　北花澤村にあり。事は、南花澤村花の木の條下に記す。

○蛙ヶ瀧　是も花澤村の領分にあり。近き比まで少し跡有。今は田の水落の樣にて名ばかり殘る。是も聖德太子の故事あるよし。

○下里村　北花澤村の北に有村なり。

○中里村　北花澤村の東に有村なり。

○讀合堂村　中里村の東にある村なり。百濟寺村の下山本村より八九丁有。堀田出羽守領知なり。

○湯屋村　讀合堂村の北にあり。百濟寺下坂の下まで、百濟寺より廿壹丁ばかりあり。相傳。古昔百濟寺繁昌の時、寺の境内にて、浴室の跡なりといふ。

○平柳村　湯屋村の北にあり。

○百濟寺村　平柳村、湯屋村の東にあり。百濟寺門前なれば呼り。惣高千七百石の村なり。惣名百濟寺といへども小名あり。上山本村、下山本村、北坂本村といふ、大萩村は此高の外にて、五十石あり。百濟寺の東門前なり。千七百石の内百石は百濟寺領、千六百五十石は彦根領なり。

○百濟寺　百濟寺村有。釋迦山百濟寺と號す。緣起曰、推古天皇十五年丁卯聖德太子御草創、百濟國僧惠聰、道欣、觀勒等、依太子命初住、因以寺號百濟、爲世之勅願所、本尊十一面觀音大士卽太子御彫刻、長八尺以生木不裁切彫刻、相傳杉樹也、古昔七堂伽藍也、學生又謂東座內陣之坐也、近世是謂衆徒三百坊、山都監職號政所、堂衆又謂西坐、外陣之坐也、近世是謂寺中、又滿燈尙三百坊、此數中御門宣秀卿明應七年之一通見、明應七年戊午八月九日諸堂悉炎上、其時堂內有之記錄等迄燒失、因玆唯本尊奉取出、幷三百坊舍一宇不殘、後土御門院明應七年八月十六日本尊修補、伽藍再興綸旨左中辨在判、佐々木氏綱下知永正元年甲子閏三月二十七日、四至牓示證文書替、伊達出羽守氏豐判物同義實定賴兩裏判、永正十八年辛巳七月二日牓示八方搦同義秀義賢兩下知、永祿四年辛酉九月廿三日四至牓示目賀多相模守賢廣判物、三井豐前守定武判物、右四至之內凡東西二里南北一里田畠今方高千七百五十斛餘者山林也、永祿十一年戊辰九月二十二日如前々知行分幷山林境內免許織田彈正忠信長公御證印世是謂御朱印、同御下知中川八郎右衞門尉重政判物、天正元年癸酉四月十五日有故爲信長公當寺滅亡以上、再興以前之傳來如右、天正三年乙亥當寺再興小堂建立、雖然慶長七年壬寅迄二十八年之間無寺領、天正年中無寺領之間當所地頭佐和山主堀久太郎秀政判物與、後號羽柴左衞門督、同十二年甲申從羽柴左衞門督豐臣秀政本堂重建立、間七間棟札在于今、天正十三年乙酉十一月十八日神崎郡御園野村住田中久兵衞吉政寄附狀幷板札、久兵衞後號兵部少輔、慶長七年壬寅當知行分寺家內屋敷高四十六石五斗、北畠五十石、不動前五十石、合百四十六石五斗從此年可所務之旨、家康公仰米津淸右衞門親勝判物二通、右寺領幷山林境內如前々就拜受、同十七壬子年五月三日被爲出之、但此御朱印表者右之屋敷高相除、高百石之御證文也、東照神君御朱印從是御代々都六通有之、同依仰、慶長中圓光寺判物一通、慶長中一通、寬永十一年甲戌八月十七日一通、慈眼大師天海御書出、明正院帝寬永十四年丁丑五月二十六日當本堂重建綸旨、右大辨在判、右之古記本堂寶藏有之、此外佛繪經論等之類甚多具不書記、今現坊二有之龍花院、喜見院、龍花院者山科兼帶之、現住喜見院也、號百濟寺政所喜見院、自坊府庫故坐主宮御判物、足利家御判物、佐々木淺井等判物、其外敕筆台輪惣古筆類多云云、臣按ずるに、以上の緣起の中疑しきもの二あり。佐々木義實・定賴と兩判有といひ、又義秀・義賢兩下知といふ事なり。誤なるべし。佐々木氏に義秀・義實といふものなし。則澤田生が妄談【江源武鑑】三十卷の【諸家大系圖】等に出たる僞名にて、其人はなし。臣此事を室鳩巢先生及水戶の安積覺翁に聞り。猶又佐々木家の嫡流たる佐々木定明に再三是を正し、日光山東照神廟に納る所の、佐々木家系の寫を以訂正するにかつて以て佐々木に義實・義秀といふものなし。僞なること明けし。佐々木定明は松平加賀宰相君の老臣にして、臣が友なり。

○本堂　堂間五間面、開基以來の木尊十一面觀音。是を安置して慶安三年庚寅造立なり。

○鐘樓

○仁王門
○熊野三所權現　相殿なり。
○辨財天堂
○御供所　倶に本堂の傍にあり。
○藥師堂　東谷に在。
○阿彌陀堂　南谷にあり。
○閻魔堂　同谷にあり。
○阿彌陀堂　西谷にあり。
○地藏堂　北谷にあり。
○日吉十禪師社　西門前にあり。但客人八王子相殿社脇に小禪師社劍宮社等あり。
○天神社　上山本村にあり。
○大行事社　北坂本村にあり。
○蛭子社　同村にあり。夷山と號す。
○岩神社　北小屋村にあり。
○八幡白髭白山相殿　東門前大萩村にあり。
○奥院不動堂　東門前大萩村西の岸にあり。
○引攝寺
○小野道風筆下乘　十禪師社前にあり。
○井伊靱屓佐眞滋墓　堺内夷母が谷にあり。
○薗村　上中野村と下中野村の東に有。古歌に讀る木綿園は此村なり。

【千載集】　宮内卿永範

神受る豐のあかりに木綿園の、日影かつらにはへ增りけり

【玉葉集】　俊成

木綿園の日かけのかつらかさしもて、樂しくも有春の曙

○大覺寺村　薗村の東にある村なり。
○大覺寺　大覺寺村觀音山にあり。行基菩薩開基。天台宗也。往古は大寺なりと見之て、山の内谷々に古跡の坊跡殘れるもの多し。今本尊觀音堂幷に觀音坊・松壽坊二軒存す。近江三十三所順禮の十七番なり。
○小倉莊　或は小椋の庄に作、土俗は又小倉の鄕といへども、順【和名抄】に載す。【愛智深山の記】に云、近江國愛智郡の内岸本愛智川境八風峠迄、伊勢境峯ふり分、犬上郡境峯ふり分、筒井堅木坂迄、百濟寺境峯ふり分。大覺寺門前まで、是より愛智小椋の鄕仍如件云云。
○小倉村　青山村の東に有。神崎郡の境なり。
○外村　小倉村の北にあり。
○千壽河原　外村にあり。土俗相傳。惟喬親王の愛童千壽の死したるの地なりと云。傍に松樹あり。惟喬親王遺愛の松なりと云。非なり。惟喬親王の事は君が畑の條下に是を辯ず。
○平尾村　外村の北に當りてある村なり。
○東光寺　平尾村白鹿脊山にあり。則白鹿脊山東光寺と號す。淨土宗大寺なり。小倉の藥師佛此寺に安置す。向譽上人の開基なり。
○高野村　外村の東にあり。

【新勅撰集】　匡房

我君の千代の數かも五月雨の、高野の村の槇の雫

は

○古城址　高野村にあり。美濃土岐範賴は佐々木定賴の聟なれば、國を齋藤道三に奪はれて後、當國に來住す。小倉左近太夫良親女を信長へ出し。其腹に男子出生。信長滅後、彼女男子を伴ひ小倉に歸り居るを、秀吉詳に知りて、彼男子は信長の子なれば。小倉莊近邊二萬石賜り、羽柴武藏守と號し、此高野に城を築き、小倉三河守良秀同左近太夫良親父子後見にて在城。其後慶長の亂に石田治郎少輔に與し亡。
○永源寺　高野村にあり。瑞石山永源寺と號す。臨濟一派の本寺なり。開山寂室禪師。釋迦唐佛雨の文殊舍利塔有。含空院と號するは、輪藏にて經堂也。識廬菴龍門の瀧退耕菴等あり。當寺の緣起に曰、夫當山は禪宗濟家一派の本寺にして、代々勅願所なり。開山は寂室大和尚諱は元光と申傳り。後小松院の御宇圓應禪師の謚號を賜。俗生は小野宮左大臣實賴公の孫なり。伏見天皇の御宇正應三年庚寅五月中の五日に生れ給ふ。時に光明空を照。此兒凡人に非ずと、人みなことぶきをなせり。則弘法大師の再來たる事詳に在別記。當寺の門前を高野といへり。彼南山の高野におのづから其名相同じ。開山十五の年家を出て、佛燈國師を師として仕へ。十八の年國師の一掌の下にて大悟し給ふ。國師に見ゆるの前夜諸聖降現して光明山河を照すと、國師の夢見給ふ。夫よりして元光と名づけ玉へり。後醍醐天皇の御宇元應二年庚申開山三十一の年入唐し、中峯古林等の諸大知識に見へ、名山靈地をめぐり、七年を經て歸朝し給ふ。年久しく西國に假菴して閑居せり。或時江州へ來り給ひぬ。國の守佐々木六角判官源氏賴崇永居士厚く信仰す。今の寺院幷仁王門の前熊原を寺領に寄附す。伽藍建立す。開山年七十一。後光嚴院御宇康安元年辛丑正月十八日入寺し給ふ。道德四方に聞へ、天下の名僧も多く集、衆僧二千人に及べり。長勝寺天龍寺建長寺住持職の事綸旨公帖をなし下し給ふ。鹿苑院義滿公寺領幷に御祈願所の公帖を賜。後光嚴院帝宸

翰を染させ玉ひ、再三法要を叡聞し給ふ。則法語一篇を奉玉へば、淺からず叡感し給ふ。其外貴賤僧侶其德を仰事語錄等に詳に書せり。初當山を飯高と言侍しを、後に瑞石と改られし事は、寺の東の峯に夜な〳〵光明の輝處ありけるに、開山御覽し、又門前に住める老人も靈夢を蒙り、諸共に其處を尋させ玉ふに、大石の上に一寸八分の觀音大士立給へり。夜な〳〵の光明は此ならんと感歎し玉ひ、則寺へ携へ玉ひ、觀音大士の御首の内へ造籠させ玉ふとて、彼大石を門前の人々に告て寺内へ引せ玉ふに、其石百千の人とて引べきにあらざるを、僅十七八人して引に、石輕げに自行が如くにして寺に至。故を以て瑞石と名づけ侍りぬ。其石今まのあたり寺にあり。開山傳法弟子松嶺・靈仲・彌天・越溪といふ四人也。稱光院の御宇各謚號を給ふ。本寺の左右に伽藍を建立あり。永安興源曹源退藏これを當寺の四派といひ侍るなり。昔は境内東西すべて三十七八町、その間寺院相連れり。寺の前の三村を、高野熊原山上といひて、古來の證文等にも載ぬ。それにより山上派ともいへり。貞治六年丁未九月朔日開山七十餘八の年遷化し玉ふ。塔を大寂といひ、塔院を含空と名づけぬ。四人の弟子次第に住持せり。松嶺の時勝定院從一位義持公常に御崇敬淺からず。依て都より來らせ給ひ、法要を問せ玉ふ。其時勢州守忠莊を寺領に增加し玉ふ、かへらせ玉ひて後、松嶺の壽像を畫がゝせ、身を放たずとこしなへに恭敬をなし玉ふ。後土御門院黃衣の永宣旨、後奈良院紫衣の永宣旨をなし下し玉ふ。代々出世を執行すること年久し。永祿七年の兵火にかゝり、寺院多く灰燼になる。暫時おとろへたる處に、寛永二十年秋八月後水尾院の命によりて、佛頂國師一絲入寺。それより法燈ふたゝび此地を輝せり。後水尾院より唐作の釋迦迦葉阿難の二尊幷に宸翰の釋迦の名號を御寄附し給ふ。東福門院御仰有て伽藍再び造營あり。又馬郎婦の觀音を金燗にて、御手自造らせ玉ひ、其外佛前の御戸帳等當寺相續の御願として、品々御寄附し給ふ。圓照寺の宮よりも、佛祖の舍利寶塔に納め御寄附あり。後水尾院東福門院御歸依ことに淺からず。開山三百年忌又は唐本大藏經を納る時も數々の金をめぐみ玉ふ。當寺無緣所の事常に御心を惱まし給ひ。前井伊掃部頭直澄卿へ御奉書を下し給ひて、外護すべきよし仰ごと有。紫衣出世の法式暫中絕しぬ。嚴有院殿の御代延寶三年住持南嶺叅府いたし願ひ奉るに、古の由緒正しきを召聽し給ひて、則紫衣の御奉書を賜り。御前近く召せ給ふ。帝よりも行末長く勅願寺たるべき仰有て、年ごとに參内院參等勤來れり。當寺常に衆僧百人許集居て、夏冬二時の結制禪林の規式をこたりなく修行をはけまし、日々に天下御安全國家御長久を祈奉りぬ。寔に當地の世に勝れたる山の景、水の流何の畫師にも筆を抛うたし。靈佛靈寶伽藍等の一々の名こゝに閣して載侍らず。山名修理大夫義理入道當寺に住す。永祿七年五月廿三日小倉等同軍士に放火。元龜二年十二月廿八日信長放火す。後水尾院の皇女二宮尼にならせ玉ひし時、御硯を當寺に納玉ふとて

硯のいのちは世をもてかぞへしるとかや、さしも人の世の短きにかえまほしき事よ。

故院の常に御手にふれしものをとおもへば、崩御の後は座の右におきて、朝夕もてならしつゝ、いつしかはたとせ餘り七年になりぬ。今はとて永源の住持にゆづりあたへて、彼寺の具となさしむ。おのづから經陀羅尼の功をつまば、などか結緣なからざらんやとてなん。

海はあれと君か御影のみるめなき、硯の水のあはれかなしき

我後は硯の箱のふたよまて、取つたへてしかたみとも見よ

○瑞石　一圍五六尺ばかり。事後に見えたり。

○勝山權現社　同所にあり。尾張守氏頼は當寺の大壇那なり。應安三庚戌年六月七日死、臨終に誓て曰、吾戒律の守護神となるべし。故に滿高其の遺誓にまかせ其靈を祭り勝山權現と號す。當寺代々六角家菩提所也。

○世續觀音　當寺の境内にあり。緣起に曰、夫世續觀音大士は、三百四十餘年以前、開山勅謚圓應禪師寂室大和尚唐の悟都管といひしものをまねきて、唐の靈地の土にて作らしめ給ふ尊像也。此より前に寺の東の岸に夜な〳〵光明の輝く處ありけるを、開山御覽有しに、又門前に住る老人も靈夢を蒙りければ、諸共に其處を尋させ玉ふに、大石の上に一寸八分の觀音のぎゞとして、立玉へり。夜な〳〵の光明は是ならんとて、感歎し玉ひ、則寺へ向へさせ給ふ。其觀音を此尊像の御首の中へ作込させ給ふ。定印の座像にて、御長二尺二寸。開山默眼安座の法語あり。實に本朝一體の靈佛にてまします。諸人の祈りに應じて智惠福德を得、病苦災難を除き惠を受。殊に世續を祈りて其靈驗を蒙る人あけて數へがたし。世繼の觀音大士といひ觸しは、昔佐々木六角判官入道崇永の嫡備中守滿高子なきをかなしみ、夫婦此觀音にいさましくも誠の心さしをなげうつて、二六時中經陀羅尼普門品など讀誦し侍れば、二七日に

滿る夜の丑の刻、年の比二十許のいと優なる女の來りて、夫婦信心のふかきことを感じ來れり。我は飯高のほとりに住るものなりとて、小き氷の如くなる劒を、口の内へ投入て呑ましむと夢見して夢覺ぬ。夫婦歡喜をなし猶深く彼觀音の力を念じ歸りて、懷姙して滿經を生り。夫より世繼の觀音と時の人云り。くはしくしるすにいとまあらず。又文祿年中に當寺門前にすめる。九里氏の某。年積るまで世を繼る子なし。其妻も是を歎き此尊像へ百日詣て一向に祈りければ、程なく男子二人女子一人を得て悅ぬ。はらからともに觀音の申子なれば、すこやかに生たち智福人にすぐれ命長して共に八十に餘れり。又公家の公達年來ものやみして、齡のほどもはかりがたきに、世繼なふしてその家の風に吹絕なん事をおもひわづらひ。はやく世繼子息を得ん事を願ひ、此尊像にいのり、常に信仰をなし給ひければ、靈夢を蒙り、かしこくも世繼の男子二人生れ出て、後皆その位その職にすゝめり。又或國の守に子數多生しかども、みなむなしくなり玉へば、歎いやましにして、此尊像の靈驗あらたなるを仰て、家臣二人山へのぼりて、貞享三年丙寅五月廿三日より六月十五日まで、尊像の御前にして一切經眞讀及施餓鬼放生會等の大法會を執行して、一向に祈り玉ふに納受速にして、幾程なく數多の男子を得玉ふに、皆さかしくも生立て、弓馬の道にそなはれり。古より世繼の觀音といひ傳へし實哉聞傳ふるに僞なし。男子を願へば男子を得、女子を願へば女子を得さしめ給ふ。普門品、設欲求男禮拜供養觀世音菩薩、便生福德智惠之男、設欲求女便生端正有相之女と說給ふ經文誰かうたがはんや。其外いづれの願とても、邪疑の氷とけ、信心の水澄す人は、みな靈驗無二の月を得て、現當二世の望叶はずといふ事なし。開山寂室大和尙八十八の年佛燈國師に見へて悟をひらき、自由三昧を得給ふ。則弘法大師の再來たる事詳に別記に有。三十一の年入唐し玉ひ、在唐七年歸朝の時、海上にて俄に風烈敷潮水逆涌たつて千船百舟まのあたり海底にしづめり。開山の乘給ふ船もすでに危ふくなりぬれば、同船の人々色をうしなひなげきしに、開山心動なく、安座して海中をあふぎ玉へば、白衣の觀音草忽出現し給ふ。ほどなく風やみ波なぎて。海路難なく此國の岸に着玉ふ。初當山を飯高と號せしに、彼石の奇瑞あるを以て瑞石とあらため玉ふ。其石今に寺にあり。緣起の趣いさゝかつゞり侍りぬ。

○九居瀨村　高野村の東に有村なり。

○藤川村　九居瀨村の東にあり。

○高懸山窟　藤川山の西にあり。大なる岩窟なり。土俗は酒呑童子暫く住といふ。酒呑童子が事は兒女子の戲にて、論辯にたらず。上古穴居の遺跡なるべし。

○政所畑村　九居瀨村の北東にある村なり。銀山あり。今は出ず。此所を政所と號する事は、小椋太政大臣實秀居住の地故此名ありと。信用にたらず。此百濟寺政所の畑なり。放に政所畑と云ふ。今も百濟寺喜見院を政所といふ。喜見院は臣が方外の友にて直に是を聞り。三井寺にも叡山にも政所あり。

○若宮　政所畑村にあり。

○木畑村　政所畑村の南に有村也。黃和田の文字に作る。

○大善寺　木畑村に在。淨土宗。安土淨嚴院の末寺也。

○箕川村　木畑村の北にあり。政所畑村の西なり。

○蛭谷村　箕川村の北東にあり。日野より六里にあり。

○筒井正八幡神社　蛭谷村にあり。土俗相傳、惟喬親王の靈を祀る所なりと。日本國中ろくろ師の元祖なり。天下のろくろ師悉當社に詣ふで祈り、當社より免許を出す。近江江戸のろくろ師より石の鳥居を建たり。柱に日本ろくろ師惟喬親王と彫刻せり。臣ひそかに按に、決して僞なるべし。【愛智深山記】といへるものに惟喬親王此地及び君が畑にましまし、大木の多く有を御覽ありて、木地ろくろを挽事を工夫し玉ひ、渡世とし給ふとのせたり。【深山の記】は虛妄の書なればいふにたらず。惟喬親王は辱も文德天皇の第一皇子にして、淸和天皇の庶兄なれば、天下においての高貴なり。其上上野大守に任じ玉ふ。上野一國のみにあらず。神崎郡の内數村愛智郡の内數村を領し玉ふ。今の垣の御園の庄小椋庄等是なり。斯くの如く領地の租稅ある上ろくろを挽て、何ぞ渡世となし給はん哉。凡下すら能親族あるは其財をわかつ。況や親王は天子の庶兄なるをや。上をあなどるの罪のがるべからず。然ども上古の神聖皆鄙事をも敎させ給ひしも知るべからず。斯は有共親王を以て轆轤師とは過言の至り、僭上の無禮と云べし。殊に親王を以て正八幡宮と稱し奉るべき所以なし。八幡宮は人皇十六代應神天皇の尊號なり。土俗一說に此八幡宮は惟喬親王の勸請也と。此說穩當なり。

○蛭瀧　蛭谷村にあり。

○谷堂　同村にあり。

○君畑川　源君畑に出て、南に流箕川村をめぐり、曲折して立畑村の西に出て、由津理保川と合して和南川となり、愛智川となつて湖水に入る。

(師ろくろ)

（八風越）

○君畑村　蛭谷村の北東にあり。伊勢境に近し。此奥に八風峠あり。北伊勢八田越の路筋。當國にては八風越の路と云。天文の初より此山白銀を穿出す。佐々木六角家の支配にて、坂田兵内奉行す。今は白銀もいでず。此北に犬上郡大君が畑あり。惟喬の王子住給ふ所といふ。土俗相傳。君が畑と號する事は、惟喬親王御座有しより名付と云。親王崩御の御跡にて、大皇大明神と祝ひ奉り。或は筒井大明神とも云。菅皇子蒲生郡武佐の長光寺觀音へ御祈願も有、又は御位に卽玉はずして、都の内に住せ給ひては御慣も深かるべし、田舍の深山に住せ給はんと思召、當國へ御越愛智郡岸本の庄城が橋に御車をとゞめ、三日三夜御旅宿在て、同小倉の庄に入たまひ、年月住せ給ひ、尙も閑居を好せ給ひ、深山高峯に分け入、此地に住せ給ひ、公卿雲客少々家造し住給ふ故に君が畑と云。元慶三年壬申御齡五十三、君が畑に皇居十五年にして崩じ給ふ。大皇大明神と祭り奉る。惟喬親王當國に來らせ給ふは貞觀元年三月也。惟喬親王の御詠に、「深山邊の池の汀に松たてゝ、都にもにぬ住居とそ思ふ」。又「世をいとふ愛智の深山の呼子鳥、深きこゝろを誰かしるらん」。大納言雅仲も「今はとて爪木とるへき宿の松、千代を見んとも猶いのるかな」。太政大臣實秀皇子に順隨して小倉に住し給ふ、故に小椋の大臣と云。「東路の深山の奥の君か畑、はこふあゆみはけふの宮人」。「堀川中納言是も小椋に住して、「さゝ波の御池に木々の枝たれて、今猶君に相生の松」。臣按ずるに、以上の說【愛智深山の記】に見へたり。【深山の記】何人の作といふことをしらず。僞書なり。採用にたらず。惟喬親王は文德天皇の第一の皇子なり。惟仁は第四の皇子なり。【三代實錄】に嘉祥三年三月廿五日惟仁誕生十二月廿五日立て太子とすと見へたり。此時惟仁纔に八歲になり玉ふといへども、母尊く帝の正妃染殿の后明子の腹なれば、帝位に卽玉ふ事理の當然なり。惟喬は先に生るゝといへども、妾腹なれば、兄なれども庶兄なりといへり。庶子に准するの義なり。染殿の后は天下の攝政太政大臣藤原良房忠仁公の女也。かゝる故なれば惟喬親王憤をふくみ給ふいわれなし。亦角力の勝負を以て位を爭ひ玉ふの僞といふ事は、臣が友井澤長秀（肥後國主細川家家武臣）確論有り。載て【俗說辨】にあり。今贅せず。惟喬親王此地に淒止し給ひ、此處にて薨じ給ふの事、諸實錄に於ていまだ見あたらず。信用しがたし。惟喬親王は上野守に任じ玉へり、一男を兼覽王と云、次は女子にて三國町と號す。二人ともに【古今集】の作者の中にあり。親王は貞觀十四年落飾有て法名を素覺と號す。洛北小野に閑居まし〳〵、其翌年二月廿日小野

にて薨じ玉ふ。御年二十六歲。一說には寬平九年二月廿日薨去。御年五十四歲ともいへり。洛北大原上野村の東の山の麓に葬奉る。五輪の塔今にあり。夫より南の方に住せ玉ひし舊蹟有。御所の内と名づけ、今纔に田の字に殘れり。小野といへるは其邊の莊號にして、別て小野と云所はなし。夫より又乾のかた四里許去て、岩屋の北にも小野といふ所あり。是は庄の名なり。此處にも惟喬の墓あり。亦惟喬の社もあり。然れば【伊勢物語】に比叡山の麓と有は、大原其所なるべし。此親王を小野の宮殿とも云り。旁此君か畑にて薨去あるべき子細なし。思ふに此邊は惟喬親王の領地にして、其御子兼覽王は母に從ひて、當國小椋の庄に生給ふ。小椋とは小倉の文字に作る。此兼覽王式部大輔宮内卿神祇の伯山城守等を經給ひ、正四位下上野守に任じ給ふ。（親王上野守に任じ玉ひ、他人任ずる事なれば天長三年よりはじむる歟【案三代格】に見えたり。）兼覽王此地に生れ給ひ、此地また惟喬親王の領地なれば、君畑に父惟喬親王の靈を祭り給ふもしるべからず。小倉の庄に栖せ給ひしといへるからは、兼覽王に疑なし。惟喬親王貞觀元年に此處へ來らせ給ひ、十九年まし〳〵元慶三年壬申薨去といへる事いぶかし。貞觀元年より元慶三年まで十九年の間にはあらず。二十一年なり。其上元慶三年は壬申の年にてはなし、己亥の年なり。附會の說なり。採用にたらず。卿相雲客親王に隨從して、此地に來るべき子細なし。卿相雲客は朝廷の臣下なり。如何ぞ朝を退く親王に從はんや。若事實ならば叛臣と罪を同ふすべし。殊に太政大臣たる人の、朝政を疎にして、如何ぞこゝに來るべけんや。應仁文明の比は、王化行れず天下亂世となりて、卿相雲客といへ共各か樣〳〵に、諸國にさすらへ玉ひし事、載て【國史】にあれども、此時より貞觀元年の比朝廷の政萬邦に及び、王化に服せずといふ事なきの時なり。爰を以て其妄說を知るべし。又其所の有樣を歌に詠する事珍しからず。歌人居ながら其風景情致を思ひやり、諷詠ずる事珍しからず。業平朝臣の隅田川都鳥の歌、能因法師秋風を吹白川の關と詠せしも、其身閑居して此行はなしとかや。此詠もなしとはいひがたし。然れども十に八九は後人の擬作なるべし。【古今集】に惟喬の御子の歌有。「白雲のたへすたな引嶺にたに、住はすまるゝ世にも有ける」。此詠君此地にての詠かと考れども、是もやはり比叡山の麓小野にての詠なり。【前々太平記】には貞觀十四年壬辰七月四日小野におゐて惟喬親王落飾なり。御年廿六法諱を永延と號す。眞如僧都先達にて畿内の名山靈地巡見せずんば有べからずとて、先程近き南都のかたへ赴きけるとしるせり。【前々太平記】虛僞の

書なれども、考據の爲にしるせり。惣じて此邊を、政所畑・君畑・王子畑・垣御園など號せる地有。故に種々の妄說起れりと見えたり。今も何某氏の持たる畑は、何某氏の畑といふの類にて、大君の御畑は自大君畑と號し、政所畑は元より、政所畑といふにて、理聞へたり。大君といへるは定て惟喬の御子兼覽王の事なるべし。大君を、おちといへるは王子の儀歟。民百姓尊重して君の畑と稱せしならん。惟喬の御子兼覽王は小倉の庄にて生れ給ひ、京都に奉仕し給ふ迄は、此地に寓居なり。小倉野呂等の氏を稱するものは兼覽王より出たり。事は詳に人物門にのす。此邊の民弦箱とて飯器とす。兼覽王より傳來する所なりと云ふ。

○大皇大明神　君畑村にあり。惟喬親王の靈を祭る所なり。兼覽王の祭れるなるべし。

○惟喬親王墓　同村にあり。兼覽王の建る所にや。後人の所爲にや詳ならず。

○金龍寺　同村にあり。

○茨茶屋村　君畑村より一里半東北にあり。伊勢の國境なり。古昔君畑の銀山と言しは、是茨茶屋の山なりと云。

近江國輿地志略卷之七十三　終

近江國輿地志略卷之七十四

臣　寒川辰清編輯

犬上郡第一

夫以犬上の郡名、舊く【日本紀】景行天皇紀に犬上君の名を載す。茨田親王も犬上の朝臣犬上の縣主の義を【姓氏錄】にしるし玉へり。【萬葉集】には狗上の文字に作れり。此郡南は愛智郡なり。西と乾の隅とは琵琶湖なり。北と艮の隅は坂田郡界、中靈山篠尾山作和等に交り、東は美濃の國界五僧山に接し、巽の隅は伊勢の國界三國嶽鈴ヶ嶽御池嶽に至る。凡此郡南北短ふして、東西長し。

○日夏莊　此莊は愛智・犬上二郡に跨れる莊なり。事は詳に愛智郡の條下に記す。當郡にては北町村・島村・寺村・中澤村・妙樂寺村・泉村・筒井村・安田村・三屋村・五僧田村・須越村以上十一村を云。

○北町村　當郡の西南の隅に有。

○宇曾川　愛智郡の條下に出す。

○島村　北町村の北に有。中に宇曾川を隔たり、北町村は宇曾川の南。島村は宇曾川の北なり。其中間を宇曾川流るゝなり。

○寺村　島村の北に在。俗相傳。古昔妙樂寺村に寺院ありし時、此村も界内なり。依て今に名とすといへり。

○妙樂寺村　寺村の西に有。相傳。往昔天台の佛閣ありて、妙樂寺と號す。行基菩薩建立する處の四十九院の一員なりと云。今纔に村の名に存するのみなり。

○中澤村　島村の東に有。

○泉村　寺村の東にあり。

○筒井村　泉村の西北にあり。此邊に清水村あり。泉村あり。亦此地は筒井村と云。古昔所以有なるべし。いま人知らず惜べし。

○安田村　筒井村の西にあり。

○五僧田村　安田村の北にあり。

○三屋村　妙樂寺村の西にあたれる村なり。土俗相傳。古昔松木三屋と號し、千々の松原より此地迄松林にして、纔に此處に家三軒有。因て名とすといふ。

○須越村　三屋村の西北に有村なり。

（清水莊　順【和名抄】に清水の鄕を載たり。

○大山崎村　中澤村の南に有。

○小山崎村　大山崎村の東にあり。

○清水村　小山崎村の北にあり。

○蓮臺寺村　清水村の北に有。土俗相傳。是も行基菩薩四十九院の一員有し舊地なりと云。今は村の名となれり。

○辻堂村　蓮臺寺村の東北に有村なり。此も往昔は堂有といふ。今はなし。

○極樂寺村　辻堂村の東南にあり。

○極樂寺　則極樂寺村に有。昔は行基の一院にして、甚繁昌の寺なりと。今は纔に藥師堂一宇、本尊藥師佛。昔の古跡として殘れり。往古は天台宗也。今は眞言宗なり。

○安食莊　順【和名抄】に安食の鄕名を載たり。今安食莊といふ。妙福寺村・中村・西村・南村・楡村・太堂村を云。

○妙福寺村　小山崎村の東にあり。是も古昔は寺院在て、行基菩薩建立の四十九院の一員たりといふ。今はなし。村の名のみ殘れり。

○中村　安食中村と云。妙福寺村の南東に在。

○太堂村　中村の南に在。

○楡村　中村の東に在。

○西村　安食西村と云。楡村の北に有。

○安食大明神社　安食西村に在。【延喜式】神名帳に、所謂阿自岐神社是なり。安食莊の產土神なり。

○南村　安食南村と云。西村の東に在。
○川瀨庄
○南川瀨村　安食西村の西に在。
○川桁神社　川瀨村に在。【延喜式】神名帳に、所謂川桁神社是なり。
○北川瀨村　南川瀨村の北に有。
○野口村　北川瀨村の東北に在。
○松寺村　野口村の北に有。
○森堂村　松寺村の西に在。
○金剛寺村　森堂村の北西に有。
○普賢寺村　松寺村の北に有。
○國府君社　普賢寺村に有。多賀の末社なり。多賀本社より戌の方一里五丁程あり。南向社、拜殿鳥居なし。社表行貳尺七寸、裏行四尺八寸。祭神大巳貴神・事代主の神なり。
○堀村　金剛寺村の西北に有。
○法士村　普賢寺村の東に有。
○葛籠町村　法士村の南に有。
○若宮大明神社　葛籠町村に有。祭神詳ならず。
○地福寺地藏堂　同所に有。葛籠町の柏原地藏と言者是なり。相傳。行基菩薩の開基にして、往昔柏原驛に有て、大伽藍なりと。何れの日か此地に移す。今纔に一小堂に安置す。臣一日巡覽の時、舊跡の存せるを悅び、馬を停て暫く憩息す。馬前に卒鄙歌を唱て言、關の地藏に柏原地藏、またもござるよ木の本地藏といふ。臣村老を呼て問へば柏原といふは此なりと云。

（柏原地藏）

○四十九院村　葛籠町村の南にあり。
○石畠村　四十九院村の南にあり。
○八町村　石畠村の東南にあり。
○八目村　八町村の南にあり。
○川原莊　順【和名抄】に甲良鄕あり。甲良かはらと訓す。今川原の文字に改るにや。【園太暦】曰、觀應元年南朝正平五年石塔中務少輔爲大將江州高良莊邊所々放火云云、是亦此邊なるべし。高良又かはらと訓す。
○法養寺村　西隆野村の東北に有。
○下鄕村　法養寺村の南西に有。
○長寺村　法養寺村の東南に有。
○横關村　法養寺村の東北に有。
○在士村（ザイシ）　横關村の北西にあり。
○八幡宮　在士村に有。祭神應神天皇なり。祭禮毎年三月十六日。伊勢阿濃津の城主藤堂氏より五十石寄附の社領在。界内に藤あり。開花の時神職のもの此花を取て伊勢の藤堂家に獻ず。相傳、藤堂高虎は此地の產士なり。故に然りと。臣按るに、藤堂氏は佐々木家の世臣にて、藤堂九郎左衞門政良六角家の物頭なり。高虎は政良が子孫なり。藤堂氏を稱するも此地の藤による故なり。

（池の寺）

○尼子村　在士村の北西にあり。
○北落村　横關村の東にあり。
○金谷村　北落村の南東に有。
○池寺村　金谷村の南東に有。
○西明寺　池寺村に有。往昔は大伽藍なりとぞ。今二坊あり。此西明寺を世に池の寺といふ。亦山號を龍應山と云。緣起に曰、近江國犬上郡池寺村龍應山西明寺は、開基人皇五十四世仁明天皇の勅願に依て、承和元年の御草創也。本尊藥師瑠璃光如來、御長五尺八寸餘、立像なり。日光月光御長五尺、金色。慈覺大師の御作。十二神將御長三尺、運慶の作。梵釋四王同作なり。本堂西向大さ七間四面、軒通十三間半四方なり。三重塔、本尊大日如來座像なり。貳尺八寸、金色、慈覺大師の御作。塔の高さ十一間五尺餘。鐘撞堂樓門東西四間半、南北六間半、二天王御長七尺餘、運慶の作なり。右西明寺と號する事は、開山三修阿闍梨、當國の西濱に遊往有し時、東濱辰巳の方より紫雲靉靆渡りして、五色の瑞光三修上人の袈裟に移り留りし故、如何樣此光りの至る所佛閣の靈場有らんと、其光に隨ひ此地に至り見給ふに、今の本堂の後なる池の內より、光明赫々として涌出す。三修池の西を三拜して曰、我光輝に應じ遙の山海難路をいとはず尋來りし事、常に衆生の越しがたき苦海を渡さんと存る事のみなり。願はくは生佛の眞形を現し玉へと祈念有しに、忽池の中より雲霞大に立のぼり、其內に藥師如來日光月光十二神將諸眷屬圍繞化現ましく、き。如來の光明にて山林の土石皆金色となりし故、三修信感肝に銘し、願くは暫時とゞまらせ給へ、御影をうつし末世の衆生を利益なさしめ奉らんとの給ひしかば、傍なる朽木に光明さし移りし故、其木をもて今本尊を作らせ玉ふなり。則此感應の旨趣を具に奏聞有しかば、天皇叡信をかたむけさせ給ひて、大伽藍を建立し玉ふ。されば當山より西濱に光明を輝し玉ふ故、西明寺と勅號是あり、又字を池寺と唱る事は、池より如來眞貌を現し給ふ故也。偖當堂供養承和三年丙辰三月十二日に天皇御幸ましく、て、自法燈をかゝげさせ給ひしより以來は、不斷常燈なり。則御宸筆を染玉ひ西明寺と額を賜。今存在す。都て別所諸堂十七ケ所の神社十二神惣坊合三百舍。寺領二千石并下行錢一千八百貫文附授寺納す。然る處天正年中信長公山門滅亡の砌、佐々木氏と共に當

寺も燒。仁王門より下、堂社院中悉く炎上す。纔に境内ばかり除地となり、伽藍も日を追て大破す。慶長七年寅の九月に三十石の地面御朱印をなし下さると云云。

○正樂寺村　池寺村に北東にあり。

○正樂寺　正樂寺村に有。禪宗。五山派。佐々木氏代々の菩提所なり、東福雲海和尚の開基なり。曆應四年正月廿三日佐々木道譽足利尊氏に寵遇の餘り、華奢甚し。因て上總國山邊莊に配流せらる。則配所に死す。道譽子高秀當寺を草創し正樂寺と號す。則正樂寺德翁和尚大居士と云ふは道譽の諡なり。道譽の像此寺に有。道譽始高氏と號し後宗綱といふ。佐々木佐渡判官と稱す。佐々木宗氏の子なり。

○楢崎村　正樂寺村の東南に有。

○高源寺　楢崎村にあり。禪宗。開基詳ならず。相傳、初一向宗なり。後改といふ。

○藤瀨村　楢崎村の東にある村なり。

○八尾山　藤瀨村にあり。彦根城主井伊氏の持林也。

○一瀨村　藤瀨村の東に有村なり。

○古城址　一瀨山に有。

○佛が後村　一瀨村の南東にある村なり。

○植田村　佛が後村の東南にあり。

○菅原村　植田村の南にある村なり。

○大杉村　植田村の南にある村なり。

○大日堂　大杉村にあり。本尊大日如來。

○河相村　一瀨村の北西にあり。

○小原村　河相村の北にある村なり。

○霜原村　小原村の北にある村なり。

○後谷村　霜原村の東北に有村なり。

○佐目村　霜原村の東にある村なり。明智十左衞門生國美濃を立退、土岐氏をそむき、此地に來り居住す。佐々木六角高賴扶助し置り。十左衞門子十兵衞光秀越前へ立越朝倉に隨順し、後信長に仕へ立身し、終に逆意を企て主君信長を弑し、秀吉に殺さる。事は志賀郡坂本西教寺の條下に記す。

○大君畑村　佐目村の東にある村なり。

○大君畑越

○猿木村　法士村の東に有。犬上川の北岸にあり。

○土田村　猿木村の東にあり。

○中河原村　土田村の北東にあり。

○月木村　中河原村の東にあり。

○山田社　月木村の傍に有。多賀の未社也。多賀大社より丑の方十八町に在なり。月木村の領にして、山は多賀の支配なり。社南向表行一間貳尺九寸、裏行二間貳尺九寸五分。祭神猿田彦大神なり。

○拜殿　山田社前に有。桁行二間半、梁行一間半。

○神樂所　桁行三間、梁行二間。

○護摩堂　同所に有。桁行三間、梁行三間。

○棟門　間七尺、山田社惣構練塀なり。

近江國輿地志略卷之七十四　終

近江國輿地志略卷之七十五

臣　寒川辰清編輯

犬上郡第二

○多賀莊　順【和名抄】に田可の鄕を載す。今の多賀の莊なり。

○敏滿寺村　北落村の東北に有。

○胡宮　敏滿寺村にあり。多賀の末社なり。多賀本社より午の方十四町許に有。社南向。社表行三間五尺九寸五分、裏行壹間五尺壹寸。祭る神國勝事勝長狹命なり。祭禮毎年四月二の巳の日。禰宜久德左京、別當は福壽院なり。土俗當社を以て、命乞の社と云ひ。壽命の神と云。南都俊乘坊重源齡を延、命をのぶるといふ。

○拜殿　胡宮本社の前に有。桁行四間四尺貳寸、梁行三間六寸。

○石鳥居　同壹丈參尺。

○大日堂　桁行三間、梁行三間。

（社の乞命）

○下乘　小野道風筆なり。此處古昔の山門の跡也といふ。

○敏滿寺　同村に有。天台宗。相傳。古昔は大伽藍にして、繁昌の寺院なりと。今福壽院と云一院あり。清涼山敏滿寺と號す。相傳。伊吹山飛行上人の弟子敏滿童子開山にて、飛行上人草創といふ。亦一說には、敏達天皇多賀に行幸ましましけるに、御車に毘沙門天現し玉ひしより、敏滿の名有といふ。然共前說まさまされり。本尊は大日如來といふ。永祿年中迄百坊餘有よし。久德左近兵衞實時を淺井長政責るの節、當時の坊頭豐一坊、池坊、神宮新開某八百餘人を引率し實時に加勢す。されば共長政八千餘兵を以久德を破却し、歸りに當寺を放火、山僧を責殺す。其後衰敗に至、古の坊中般若坊には那須の與市が願書ありしと云。

○富尾村　敏滿寺村の東にある村なり。

○大瀧山　富尾村にあり。

【藻鹽神】　皇后宮太夫俊成

布さらす麓の里の數そひて、卯の花さける大瀧のやま

○瀧宮　富尾村に有。多賀末社なり。多賀本社より巳の方一里餘あり。南向。社表行一間三尺六寸、裏行一間三尺五寸。鳥居なし。祭神高寵神なり。神主は藤田氏大瀧氏等なり。

○拜殿　桁行二間半、梁行二間半。

○雷神社

○大山祇社　相殿なり。瀧宮の末社にして、社表行五尺壹寸、裏行五尺。

○犬上神社　瀧宮の末社也。社表行二尺八寸、裏行三尺七寸。祭神詳ならず。社家秘事と云ていはず。何ぞ秘るといふ事かあらん、しらざるを以てなり。詳ならずといふ事は、臣大神主河瀨氏に會して聞けり。相傳此邊に狩人あり。常に犬を飼り。千鳥が岡鳥籠の山に遊て狩をなす。或時大樹の下に憩息するに、犬の主に吠かゝる事甚し、主眠らんとすれば益伏て飛かゝらんとする、衣服を喰て引がごとし、其主甚怒にたへず劍をぬいて犬の首を斬る。其くび飛上つて樹上の大蛇の喉を嚙て大蛇と共に死す。主此において驚。始より大蛇樹上に有て狩人を呑んとす。犬是を知て己か主を助んとして斯のごとし、狩人犬が忠死を感じ、社を立て神に祭り犬神と號す。其地をもまた犬神郡といふ。今は犬上の文字に改。人の俗說にもいひ又【三國傳記】にはこの說を載たり。【三國傳記】は實錄にあらざれば、

もとより採用にたらず。土俗の說は猶以然り。しかれども犬の主君を知ること深く感ずべし。【日本紀】にしるし給ふ處の、守屋の連が盜人捕鳥部葛が犬など、能主恩を知れるものなり。人として主恩をわすれ忠義を知らざるものは、犬に劣れり。恥ざるべけんや。暖に着飽まで食ひ、平日忠義の顏をせざるものはなし。然れども難に望み節に死するもの少し。犬神の說話は僞といへども、若不忠不義の微志を懷くものあらば、深く慙愧し犬にだも劣らざる樣に心をみがくべし。人君もまた忠臣佞臣の信實を見知玉ふべき事なり。君臣の禮義を存し聊もおこたらず、篤實なる人は必忠臣なるべし。扨犬上明神を狩人の犬を祭ると爲說は誤なり。犬上明神は稻依別王を祭る處か、或は日本武尊を祭り奉る歟なるべし。【日本紀】景行天皇紀に曰、稻依別王は是犬上君武部君二の族の始祖なりと云云。【古事記】にもまた是と同じ。茨田親王の【新撰姓氏錄】に曰、犬上朝臣出自景行皇子日本武尊云云。是等を以て見る時は、二說の中必是なるべし。【同書】に曰、犬上縣主天津彦根命之後也云云、天津彦根命降臨の地、故に彦根の名あり。郡を犬上といふものは、因て來る所あり。

○地藏堂　富尾地藏と云。源賴朝祈願有て感應忽にあらはれ、寺領を寄附あり。其時の御教書亦北條時政梶原景時添狀等此堂に在。

○西林寺　富尾村に有。禪宗開山。桂岩和尙。

○大尼子村　敏滿寺村の北東にあり。

○多賀山　高宮驛の一里に有。直立百間許。

○多賀村　大尼子村の北東にあり。多賀町と云。多賀町も三分一は彦根領地。順【和名抄】に田可の文字に作り、或は陀我の文字に作。

○多賀神社　多賀にあり。多賀大社と號す。【延喜式】神名帳に所謂多何の神社是なり。本社大さ表貳間五尺八寸、裏行貳間參寸。御拜殿表壹間貳尺參寸五分、奧行貳間貳尺五寸。南向の社也。本社惣構南北五十間許、東西百十間許り。本社前玉垣平唐門間七尺五寸。本殿の床下三方。競馬の繪有、狩野大學が筆なり。祭神伊弉諾尊。神代の鎭座なり。日少宮と號す。臣按ずるに。【日本紀】曰、伊弉諾尊功既至德又大矣、於是登天報命、仍留宅於日之少宮云云、【日本紀纂疏】曰、天日隅宮謂出雲國杵築宮也、離爲日在南方、而夏至之日出於寅入於戌故近江國多賀宮在艮名曰日少宮、杵築宮在乾名曰日隅宮、乾爲天又在西北隅云云【釋日本紀】曰、日少宮是東北方之地也、是則少陽之宮也、日者盛在東方也、若少北則少陰之地也、即艮方、案易曰、艮爲